

京都府遺跡調査概報

第 96 冊

1. 橋木林遺跡
2. 稲葉遺跡第 6 次
3. 森垣外遺跡第 4・5 次
4. 大島遺跡第 4・5 次

2 0 0 1

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版



(1)森垣外遺跡調査区遠景（南から）



(2)出土遺物

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がある、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成11・12年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団・西日本旅客鉄道株式会社(JR西日本)・京都府土木建築部・国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて行った橋木林遺跡・稲葉遺跡第6次・森垣外遺跡第4・5次・大島遺跡第4・5次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会・京田辺市教育委員会・精華町教育委員会・木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口隆康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 橋木林遺跡
 2. 稲葉遺跡第6次
 3. 森垣外遺跡第4・5次
 4. 大島遺跡第4・5次
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	橋木林遺跡	舞鶴市大字多聞院 小字橋木林	平12. 5. 16～7. 28	日本道路公団	中島史子
2.	稲葉遺跡第6次	京田辺市田辺久戸	平12. 4. 18～8. 4	西日本旅客鉄道株式会社	森島康雄
3.	森垣外遺跡第4・5次	相楽郡精華町大字 南稲八妻小字森垣外	平11. 5. 10～平12. 1. 14 平12. 6. 2～8. 11	京都府土木建築部	小池 寛
4.	大島遺跡第4・5次	相楽郡木津町相楽 岸間堂	平12. 1. 24～3. 7 平12. 4. 27～6. 29	国土交通省近畿地方 整備局	村田和弘 伊賀高弘

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 橋木林遺跡発掘調査概要-----	1
2. 稲葉遺跡第6次発掘調査概要-----	11
3. 森垣外遺跡第4・5次発掘調査概要-----	19
4. 大島遺跡第4・5次発掘調査概要-----	79

挿図目次

1. 橋木林遺跡

第1図 調査地および周辺遺跡分布図-----	1
第2図 トレンチ配置図(上)・遺構配置図：A地区(下)-----	2
第3図 遺構配置図C地区(上)、B地区(下)-----	3
第4図 S D04・05・06土層断面図-----	4
第5図 S X01実測図-----	5
第6図 S X02実測図-----	6
第7図 S X03実測図-----	6
第8図 出土遺物実測図(1)-----	7
第9図 出土遺物実測図(2)-----	8

2. 稲葉遺跡第6次

第10図 調査地位置図-----	11
第11図 調査区配置図-----	11
第12図 1区平面図-----	12
第13図 1区西壁断面図-----	13
第14図 1区S K 9平面図・断面図-----	13
第15図 2・4区平面図-----	14
第16図 4区S K 4・5・6平面図・断面図-----	14
第17図 2区北壁断面図-----	15
第18図 4区西壁断面図-----	15
第19図 3区平面図-----	16

第20図	3区西壁断面図-----	16
第21図	3区SD1、SP2・4断面図、SK3・12平面図・断面図-----	17
第22図	3区SK12遺物出土状況平面図・立面図-----	17
第23図	1区出土遺物実測図-----	17
第24図	3・4区出土遺物実測図-----	18

3. 森垣外遺跡第4・5次

第25図	森垣外遺跡位置図-----	20
第26図	地区設定図-----	21
第27図	土層断面図-----	22
第28図	A3地区遺構実測図-----	23
第29図	大壁住居跡143実測図-----	24
第30図	大壁住居跡585実測図-----	25
第31図	A3地区掘立柱建物跡分布図-----	26
第32図	掘立柱建物跡100～105実測図-----	27
第33図	掘立柱建物跡106～110実測図-----	28
第34図	掘立柱建物跡111～113実測図-----	30
第35図	竪穴式住居跡396実測図-----	31
第36図	竪穴式住居跡396竈実測図-----	31
第37図	礫充填土坑11実測図-----	32
第38図	方形周溝140実測図-----	32
第39図	土坑395実測図-----	33
第40図	井戸31実測図-----	33
第41図	池沼21実測図-----	34
第42図	古道復元想定図-----	35
第43図	方形木組土坑27実測図-----	36
第44図	出土遺物実測図-----	36
第45図	出土遺物実測図-----	37
第46図	出土遺物実測図-----	38
第47図	緑色凝灰岩原石実測図-----	39
第48図	緑色凝灰岩原石実測図-----	40
第49図	出土遺物実測図-----	41
第50図	出土遺物実測図-----	42
第51図	出土遺物実測図-----	44
第52図	出土遺物実測図-----	45
第53図	出土遺物実測図-----	46

第54図	出土遺物実測図-----	47
第55図	B 2 - 1 地区東壁土層断面図-----	47
第56図	B 2・3 地区遺構実測図-----	48
第57図	B 2・3 地区掘立柱建物跡分布図-----	49
第58図	掘立柱建物跡114・115実測図-----	50
第59図	掘立柱建物跡115・116実測図-----	51
第60図	掘立柱建物跡118実測図-----	52
第61図	柱穴 7 実測図-----	52
第62図	方形区画溝979土層断面図-----	53
第63図	貯木施設286実測図-----	54
第64図	焼土坑182実測図-----	55
第65図	土坑 1 実測図-----	55
第66図	井戸 2 実測図-----	56
第67図	古道側溝363・481実測図-----	57
第68図	出土遺物実測図-----	58
第69図	出土遺物実測図-----	59
第70図	白玉・滑石片実測図-----	60
第71図	出土遺物実測図-----	61
第72図	出土遺物実測図-----	62
第73図	出土遺物実測図-----	63
第74図	出土遺物実測図-----	64
第75図	出土遺物実測図-----	65
第76図	石器・鉄滓実測図-----	66
第77図	石製品実測図-----	67
第78図	石器・鉄器・白玉実測図-----	68
第79図	滑石原石実測図-----	69
第80図	サヌカイト実測図-----	70
第81図	出土遺物実測図-----	71
第82図	出土遺物実測図-----	71
第83図	出土土器変遷図-----	72
第84図	出土土器変遷図-----	73
第85図	掘立柱建物跡分布図-----	74
第86図	A - 1 地区遺構実測図-----	75
第87図	B 1 地区遺構実測図-----	76
第88図	C 地区遺構実測図-----	77

4. 大島遺跡第4・5次

第89図	調査地位置図・周辺遺跡配置図	79
第90図	調査区配置図	81
第91図	第4次調査トレンチ遺構配置図	82
第92図	柵SA01柱穴平・断面実測図	83
第93図	溝SD70南側壁面土層断面図	83
第94図	出土遺物実測図(1)	85
第95図	溝SD128出土石器実測図	86
第96図	第5次調査トレンチ遺構配置図	88
第97図	土器棺SX211実測図	91
第98図	土器棺SX63実測図	91
第99図	出土遺物実測図(2)	93
第100図	出土遺物実測図(3)	95
第101図	出土遺物実測図(4)	96
第102図	出土石器実測図	97

付 表 目 次

1. 橋木林遺跡

第1表	出土銭貨一覧表	7
-----	---------	---

図 版 目 次

1. 橋木林遺跡

図版第1	(1)調査地遠景(東から)	
	(2)調査地遠景(西から)	
図版第2	(1)調査地東部(東から)	(2)調査地中央部(西から)

- (3) 調査地西部(東から)
- 図版第3 (1) 丘陵頂部付近(東から) (2) S X01検出状況(南から)
 (3) S X01須恵器埋納状況(東から)
- 図版第4 (1) S X02(東から) (2) S X03(西から)
 (3) S D04(北から) (4) S D04断面(南から)
 (5) 調査地西端(S K07周辺、東から) (6) S K07完掘状況(西から)
- 図版第5 出土遺物
- 図版第6 (1) S X01出土遺物
 (2) S X01・03出土銭貨

2. 稲葉遺跡第6次

- 図版第7 (1) 1区全景(北北西から) (2) 1区全景(南南東から)
 (3) 1区S D 6全景(南から)
- 図版第8 (1) 1区S D 1全景(東から) (2) 1区S D 1北肩断面(東から)
 (3) 1区S K 9全景(南から)
- 図版第9 (1) 2区全景(北北西から) (2) 2区全景(南南東から)
 (3) 2区北半部(南南東から)
- 図版第10 (1) 3区全景(北北西から) (2) 3区北部全景(東北東から)
 (3) 3区土層堆積状況(北東から)
- 図版第11 (1) 3区上層遺構全景(北北西から) (2) 3区S K12断面(南西から)
 (3) 3区S K12遺物出土状況(東から)
- 図版第12 (1) 3区S K12全景(北東から) (2) 3区S D 3遺物出土状況(北から)
 (3) 4区全景(北北西から)
- 図版第13 (1) 4区北部全景(東から) (2) 4区S K 3・4・5全景(東北東から)
 (3) 4区S K 5全景(西南西から)
- 図版第14 出土遺物

3. 森垣外遺跡第4・5次

- 図版第15 (1) A 3・B 2地区遠景(北から)
 (2) A 3・B 2地区遠景(南から)
- 図版第16 (1) A 3・B 2地区遠景(東から)
 (2) B 2地区全景(右方が北)
- 図版第17 (1) B 2・A 3地区全景(右方が北)
 (2) A 3地区全景(右方が北)
 (3) A 3地区全景(北から)
- 図版第18 (1) 大壁住居跡143遠景(北から)
 (2) 大壁住居跡143南東面溝内柱穴検出状況(北東から)

- (3) 大壁住居跡143南東面溝内断面(北東から)
- 図版第19 (1) A 3 地区掘立柱建物跡全景(北から)
 (2) A 3 地区掘立柱建物跡全景(北から)
 (3) A 3 地区掘立柱建物跡全景(北から)
- 図版第20 (1) A 3 地区大壁住居跡585竪穴式住居跡396検出状況(南から)
 (2) A 3 地区竪穴式住居跡396北東辺拡張部検出状況(南西から)
 (3) A 3 地区竪穴式住居跡396北東辺拡張部竈検出状況(南西から)
- 図版第21 (1) A 3 地区竪穴式住居跡396北東辺拡張部竈検出状況(南西から)
 (2) A 3 地区竪穴式住居跡396北東辺拡張部竈検出状況(南西から)
 (3) A 3 地区区画溝132以南遺構検出状況(北西から)
- 図版第22 (1) A 3 地区区画溝132完掘状況(北西から)
 (2) A 3 地区区画溝132須恵器杯10出土状況(北西から)
 (3) A 3 地区方形周溝140完掘状況(北東から)
- 図版第23 (1) A 3 地区土坑395遺物出土状況(東から)
 (2) A 3 地区土坑395遺物出土状況(西から)
 (3) A 3 地区井戸31完掘状況(南から)
- 図版第24 (1) A 3 地区古道側溝 7 土馬出土状況(南から)
 (2) A 3 地区礫充填土坑11(南から)
 (3) A 3 地区方形木組土坑27検出状況(南東から)
- 図版第25 (1) A 3 地区ピット63遺物出土状況(南から)
 (2) A 3 地区柱穴23遺物出土状況(南から)
 (3) A 3 地区池沼20遺物出土状況(俯瞰)
- 図版第26 (1) B 1 地区全景(東から)
 (2) B 1 地区全景(北から)
- 図版第27 (1) B 2 地区全景(北東から)
 (2) B 2 地区北半全景(東から)
 (3) B 1 地区全景(北から)
- 図版第28 (1) B 1 地区全景(左方が北)
 (2) B 2 地区全景(左方が北)
 (3) B 3 地区全景(北から)
- 図版第29 (1) B 1 地区井戸 2 土層堆積状況(南西から)
 (2) B 3 地区 S X 389土層堆積状況(南西から)
 (3) B 3 地区北端部遺構検出状況(北から)
- 図版第30 (1) B 2 地区南壁古道側溝 7・543検出状況(北から)
 (2) B 2 地区西壁土馬出土状況(東から)

- (3) B 2 地区土坑285遺物出土状況(東から)
- 図版第31 (1) B 3 地区掘立柱建物跡全景(南から)
(2) B 3 地区掘立柱建物跡114～117検出状況(北から)
(3) B 3 地区掘立柱建物跡114検出状況(南から)
- 図版第32 (1) B 3 地区掘立柱建物跡114検出状況(東から)
(2) B 3 地区掘立柱建物跡118検出状況(北西から)
(3) B 3 地区掘立柱建物跡118検出状況(西から)
- 図版第33 (1) B 1 地区柱穴7須恵器高杯206出土状況(下方が北)
(2) A 3 地区柱穴51柱根検出状況(東から)
(3) B 2 地区焼土坑182検出状況(北から)
- 図版第34 (1) B 3 地区方形区画溝979土層堆積状況(東から)
(2) B 3 地区方形区画溝979完掘状況(東から)
(3) B 2 地区土坑222遺物出土状況(東から)
- 図版第35 (1) B 2 地区貯木施設286完掘状況(南西から)
(2) B 2 地区貯木施設286完掘状況(北西から)
(3) B 3 地区土坑362土層堆積状況(北から)
- 図版第36 (1) B 3 地区土坑361土層堆積および遺物出土状況(東から)
(2) B 3 地区古道側溝363・481完掘状況(東から)
(3) B 3 地区古道側溝363・481完掘状況(東から)
- 図版第37 (1) B 2 地区第4層上面石鏃出土状況(俯瞰)
(2) B 2 地区土坑284遺物出土状況(南西から)
(3) B 2 地区土坑389内偶蹄類目足跡検出状況(俯瞰)
- 図版第38 (1) 第2次A1地区全景(上方が東)
(2) 第2次A1地区遺構検出立体視画
- 図版第39 (1) 第3次A2地区遠景(東から)
(2) 第3次A2地区全景(右方が北)
- 図版第40 (1) 第3次B1-1・2地区全景(西から)
(2) 第3次B1-1・2地区全景(左方が北)
- 図版第41 (1) 第3次B1-3地区全景(下方が北)
(2) 第3次B1-3地区区画溝878完掘状況(南西から)
- 図版第42 (1) 第3次B1-3・C地区遠景(南から)
(2) 第3次C地区全景(右方が北)
- 図版第43 (1) 第3次C地区溝52・土坑79付近遺構検出状況(上方が東)
(2) 第3次C地区流路4・5、溝52付近遺構検出状況(上方が東)
- 図版第44 A・B・C地区合成写真(上方が北)

- 図版第45 出土遺物(1)
- 図版第46 出土遺物(2)
- 図版第47 出土遺物(3)
- 図版第48 出土遺物(4)
- 図版第49 出土遺物(5)
- 図版第50 出土遺物(6)
- 図版第51 出土遺物(7)
- 図版第52 出土遺物(8)
- 図版第53 出土遺物(9)
- 図版第54 出土遺物(10)

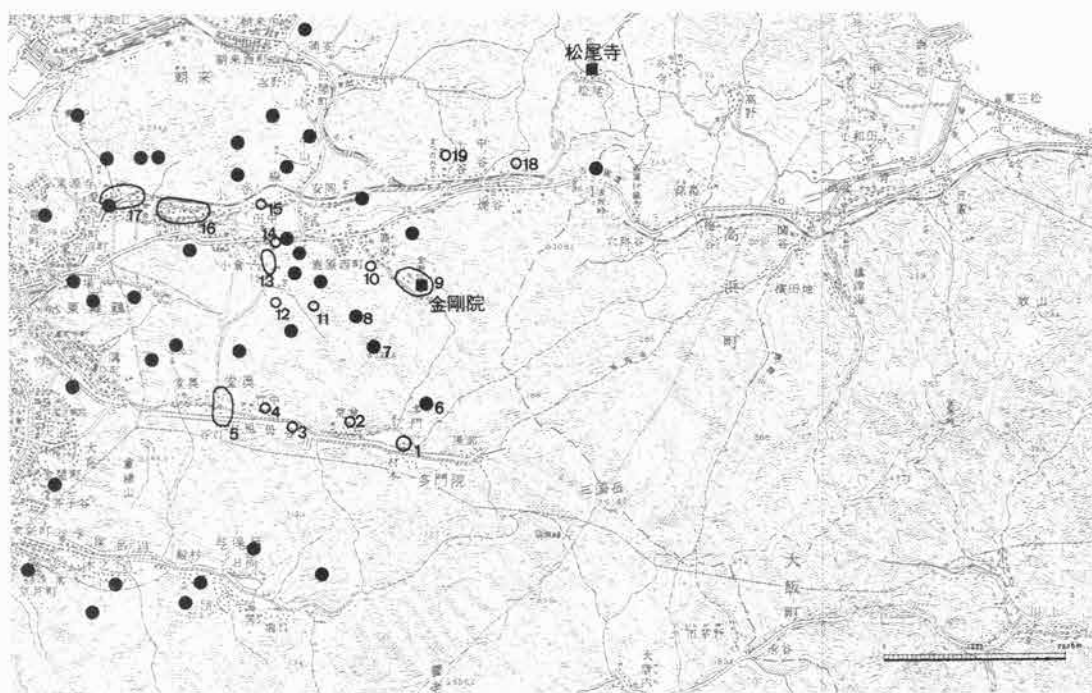
4. 大島遺跡第4・5次

- 図版第55 (1)調査トレンチ西半部(東から) (2)調査トレンチ東半部(西から)
(3) S K 15完掘状況(南から)
- 図版第56 (1) S A 01検出状況(南東から) (2)下層遺構検出状況(西から)
(3)関係者説明会風景(西から)
- 図版第57 (1)調査地遠景(北東から) (2)5次調査区全景(南東から)
(3)5次調査区全景(垂直写真、上が北東)
- 図版第58 (1)5次調査区1区全景(北西端拡張前、北西から)
(2)5次調査区1区南東半部遺構検出状況(南東から)
(3)5次調査区2区全景(周溝墓北東隅部拡張前、南東から)
- 図版第59 (1)5次調査区1区 S D 38・S D 40検出状況(北東から)
(2)5次調査区 S D 81・S R 214検出状況(南東から)
(3)5次調査区1区 S D 81遺物出土状況(北東から)
- 図版第60 (1)5次調査区2区 S X 01(方形周溝墓)検出状況(東から)
(2)5次調査区4区全景(上層遺構検出面、南東から)
(3)5次調査区4区北西半部遺構検出状況(南東から)
- 図版第61 (1)5次調査区4区 S X 211(土器棺)検出状況(南から)
(2)5次調査区4区 S X 211(土器棺)検出状況(原位置を失う破片を取り除いた段階、南から)
(3)5次調査区2区柱穴検出状況(S B 11北西隅柱、南東から)
- 図版第62 4次調査出土遺物
- 図版第63 5次調査出土遺物 1
- 図版第64 5次調査出土遺物 2

1. 橋木林遺跡発掘調査概要

1. はじめに

橋木林遺跡は、舞鶴市大字多門院小字橋木林に所在する遺跡で、南東には丹後・丹波・若狭三国の国境になる三国岳が鎮座する。調査地は、その三国岳に源を発する祖母谷川上流に位置する独立丘陵上にある。丘陵は全長約200mの東西にのびるやせ尾根で、標高は最高所で約113mである。丘陵を横切る形で2本の堀切状の溝があることから、中世の山城と推定されていた。東舞鶴には中世の山城が多く、これらは戦国期における若狭の武田氏と丹後の一色氏の緊張関係を背景に築造されたと考えられている。^(注1) そのほか、祖母谷川沿いの谷筋には縄文土器が出土した荒倉遺跡や堂奥古墳、奈良時代の竹中遺跡・堂奥遺跡があり、古くから人々が生活していたようである。集落内にある興禅寺はもとは真言宗寺院で、末寺11か寺を有していたようであるが、中世末期には衰退した。現在、毘沙門堂の通称を持ち、堂内には国の重要文化財に指定されている毘沙門天立像が安置されている。^(注2) また、山を挟んで北側には三島由紀夫の『金閣寺』の舞台にもなった金剛院が、さらに北東の青葉山南西麓には山岳寺院(観音霊場)として有名な松尾寺がある。松尾寺



第1図 調査地および周辺遺跡分布図(●は中世の山城跡)

- | | | | | | |
|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 橋木林遺跡 | 2. 荒倉遺跡 | 3. 竹中遺跡 | 4. 村中遺跡 | 5. 堂奥遺跡 | 6. 多門院城跡 |
| 7. 小倉城跡 | 8. 小倉奥城跡 | 9. 金剛院遺跡 | 10. 円成寺遺跡 | 11. 小倉奥遺跡 | 12. スガ谷窯跡 |
| 13. 小倉遺跡 | 14. 小倉窯跡 | 15. 田中遺跡 | 16. 田中西遺跡 | 17. 泉源寺遺跡 | 18. 西願寺跡 |
| 19. 吉坂経塚 | | | | | |



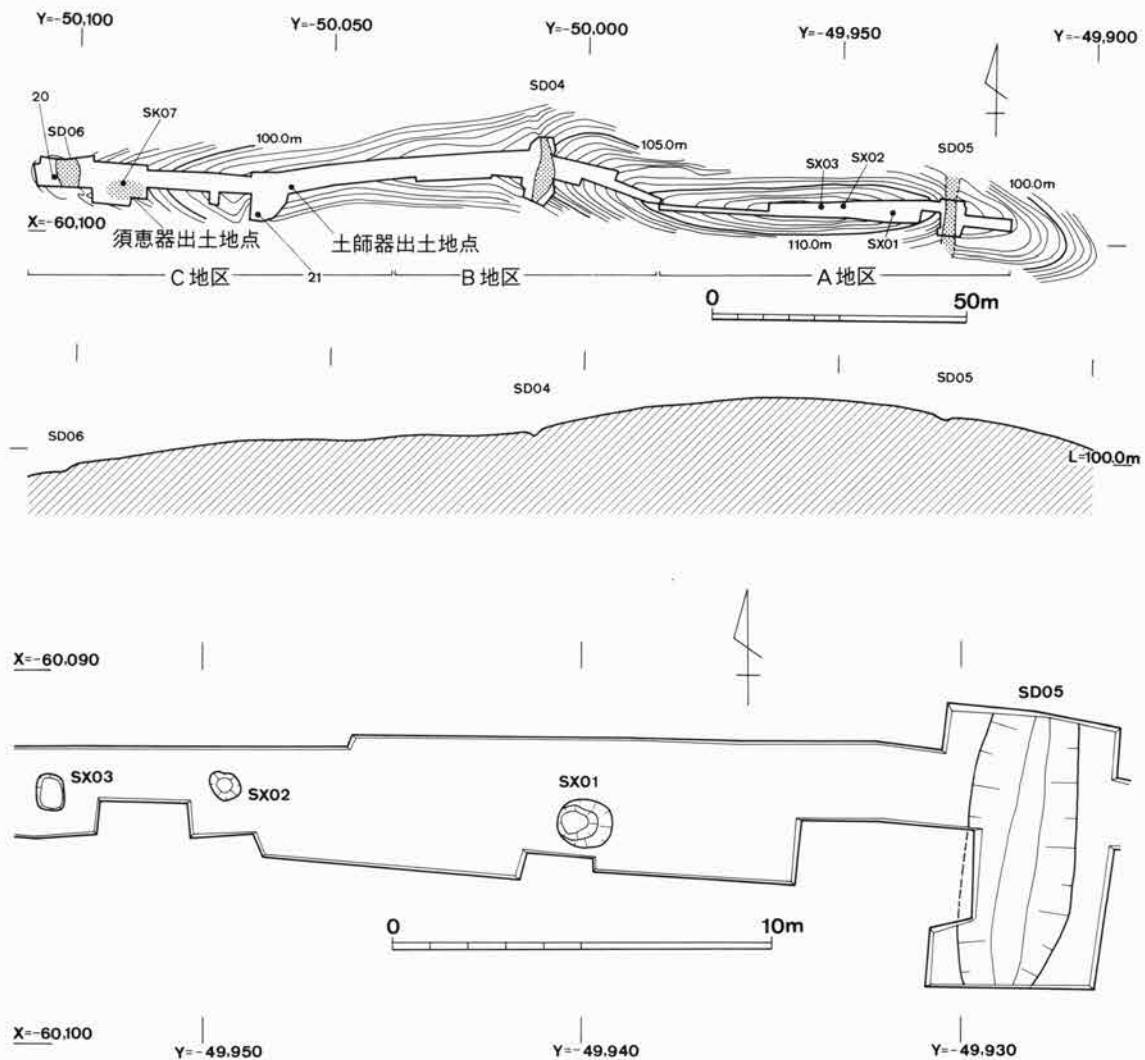
写真1 南方上空から見た橋木林遺跡

は平安末期にはすでに西国33か所巡礼の
霊場の一つとなっている。^(注3)

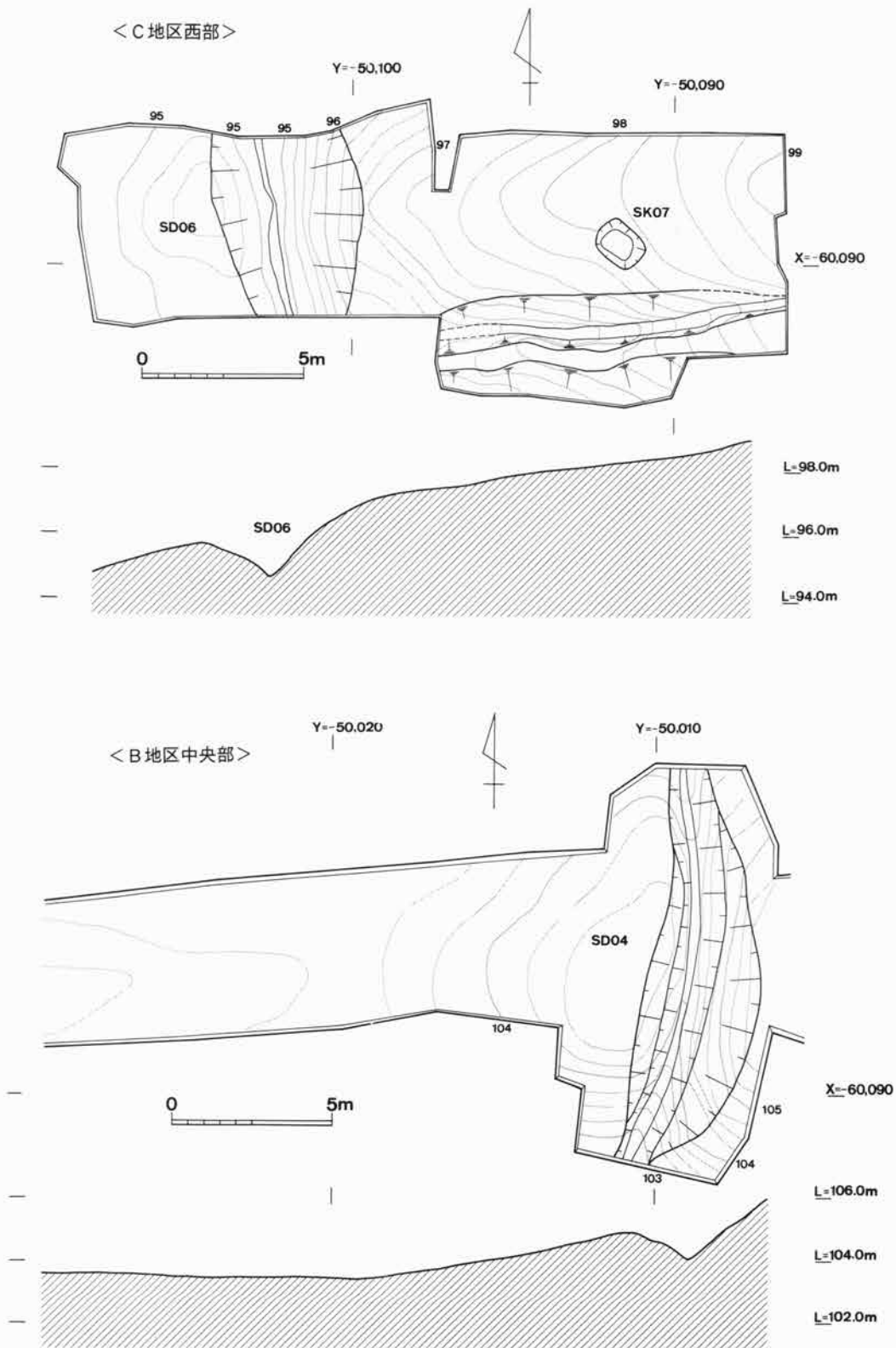
今回の調査は、近畿自動車道敦賀線の
建設工事に伴う土取り工事に先立ち、日
本道路公団の委託を受けて実施した。調
査期間は平成12年5月16日から7月28日
で、調査面積は約700㎡である。平成12年
6月23日に現地説明会を実施したところ地
元の方々を中心に約80名の参加を得た。
現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査

第4係長奥村清一郎、同調査員中島史子が担当した。また、現地作業では、酷暑の中、多くの地
元の方々に参加していただいた。記して感謝したい。^(注4)

なお、調査に係る経費は、全額、日本道路公団が負担した。



第2図 トレンチ配置図(上)・遺構配置図：A地区(下)

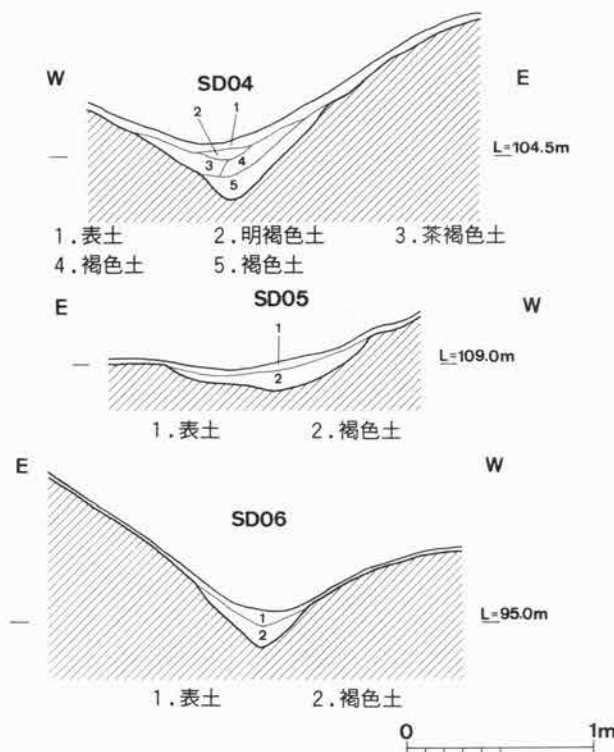


第3図 遺構配置図C地区(上)、B地区(下)

また、遺跡の名称については遺跡地図では梯木林遺跡となっているが、登記簿上で字名が橋木林となっていることから、舞鶴市教育委員会と協議の上、橋木林遺跡と改めた。

2. 調査概要

調査を実施するにあたっては、尾根筋にそって発掘区を設定して行った。東からA・B・C地区とする。発掘区内は表土直下で赤褐色または黄褐色の地山となり、遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山は風化のため締まりがなく、場所によっては、表土下で岩盤にあたる場所もあった。



第4図 SD04・05・06土層断面図



写真2 S X 01の石組と須恵器

(1) 検出遺構

調査の結果、A地区では丘陵東部の最高所付近で経塚3基(S X 01~03)を、丘陵の東西端と中央の3か所では山城の堀切(S D 04~06)を確認したほか、C地区では土坑を1基検出した。以下遺構ごとに説明する。

A. 古代の遺構

S K 07 C地区中央部で確認した隅丸方形の土坑で、長径約1.5m・短径約1.1m・深さ約0.6mである。土坑内および周辺の南側斜面から炭化物とともに須恵器杯が遺物整理箱半箱分出土した。須恵器杯は口縁端部が外反するタイプしか出土しておらず、灯明皿が含まれ、炭化物と混じって出土していることから、何らかの儀礼に伴うものと考えられる。

B. 中世の遺構

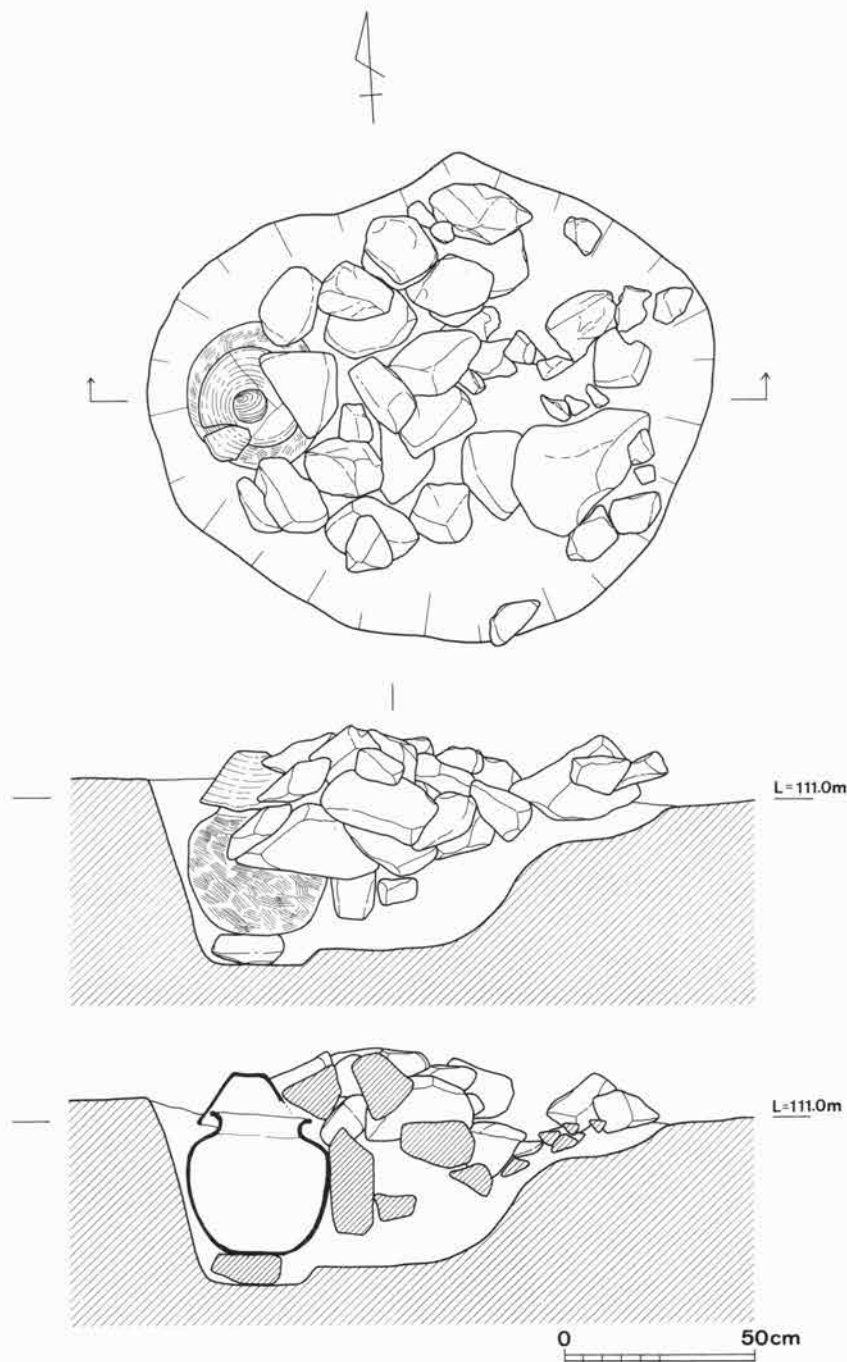
S D 04 B地区中央部で確認した断面「V」字形の溝である。地山を削り出して掘削されている。幅約3.5m、深さは低い方の肩から約0.5mである。西側からの攻撃に備えたものと考えられる。溝からの出土遺物はなかった。

S D 05 A地区東部で確認した堀切

状の溝で、地山を削り出して掘削されている。溝底の断面形は浅い「U」字形で、西側の立ち上がりきつく、東側からの攻撃に備えている。溝の幅は約3m、深さは低い方の肩から約15cmである。溝の低い側に土塁状の構築物は確認できなかった。流出した可能性もある。溝からの出土遺物はなかった。

S D 06 C地区西端で確認した堀切状の溝で、地山を掘り込んで造られている。断面形は「V」字形を呈し、丘陵の西側からの攻撃に備えている。溝からの出土遺物はない。

S X 01 長辺1.4m・短辺1.3m・深さ0.5mの楕円形の石積み土坑である。土坑の西端の底には約20cm四方の石を平坦な面を上

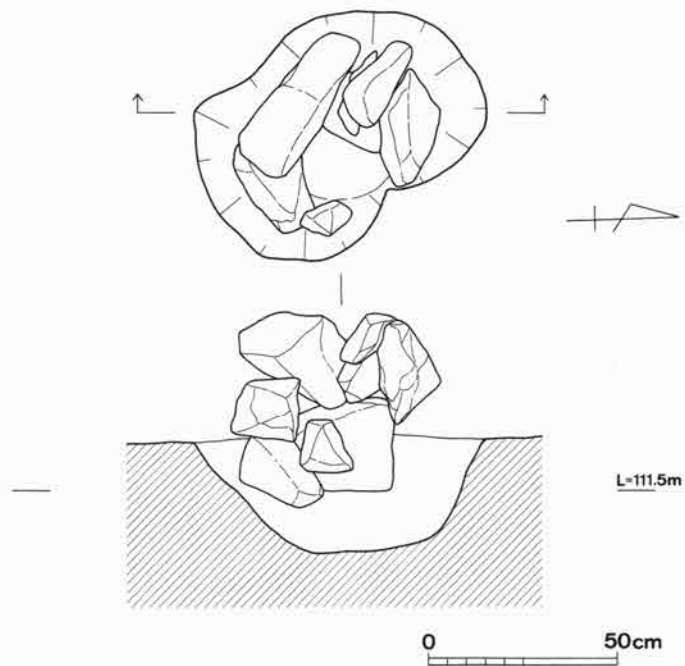


第5図 SX01実測図

にして置き、その上に東播系須恵器の甕を据えて、同じく東播系須恵器の捏ね鉢で蓋をする。さらにその周囲を大きめの平石で囲った後、土坑内を人頭大の石で埋める。石材はふもとの祖母谷川から運ばれたものである。埋土は柔らかく、締まっていない。甕の中から土師器皿が1点、甕の北側を押さえる石の下から「宣和通寶」が1枚出土した。甕・捏ね鉢はいずれも13世紀初頭前後の資料である。土師器皿は底部外面を上にして割れた状態で出土した。また、土坑の南東に炭化物の集中する地点があったが、焚き火程度のものである。

S X 02 長辺0.8m・短辺0.55m・深さ0.3mの楕円形掘形内に平面「U」字形に石組をした遺

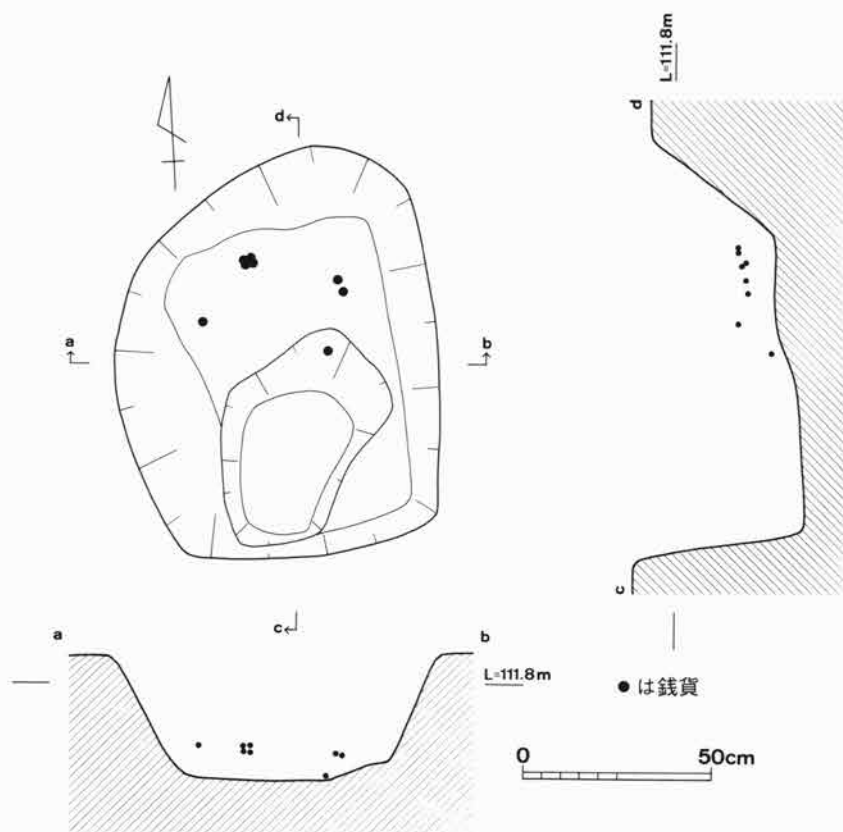
構である。石組の内法は直径約0.2mあり、高さ4段分約0.5m分が残る。石材はS X01と同じく祖母谷川から運ばれたものである。埋土は柔らかく締まっていない。土坑および石組内から遺物は出土しなかったが、石に囲まれた空間の規模から経筒または経巻が納められたと考えたい。



第6図 S X02実測図

S X03 長辺1.1m・短辺0.85m・深さ0.45mの隅丸方形の土坑である。S X01やS X02でみられた石組はない。土坑の底付近で、銭貨8枚と13世紀前半の土師器皿がまとまって出土したほか、埋土からは東播系須恵器甕が破片で出土した。経塚3基の中で一番丘陵の最高所に近いところに築造されており、残り具合が最も悪いことから山城築城の際に破壊されたと考えられる。周辺に石組に使用されたと考えられる石材はみられなかった。

また、B地区のS D04西側からC地区にかけてゆるやかに傾斜する平坦面があるが、



第7図 S X03実測図

黒色土器が1点出土したのみで建物等に関する遺構はなく、郭とは判断し得なかった。遺構に伴うものではないが、丘陵中央部西端で土師器がまとまって出土した。その他S D04の西側・丘陵西部の土師器出土地点の切株の根元に細かい炭化物を含む土抗状の土色変化があったが、輪郭が不鮮明で、遺物がないこと、土抗の底が不安定であることから風倒木痕と

判断した。

(2) 出土遺物

土師器・須恵器・黒色土器・銭貨等が合計遺物整理箱3箱分出土した。東播系須恵器と銭貨、土師器の一部は経塚状遺構から出土した。

A. 古代の遺物

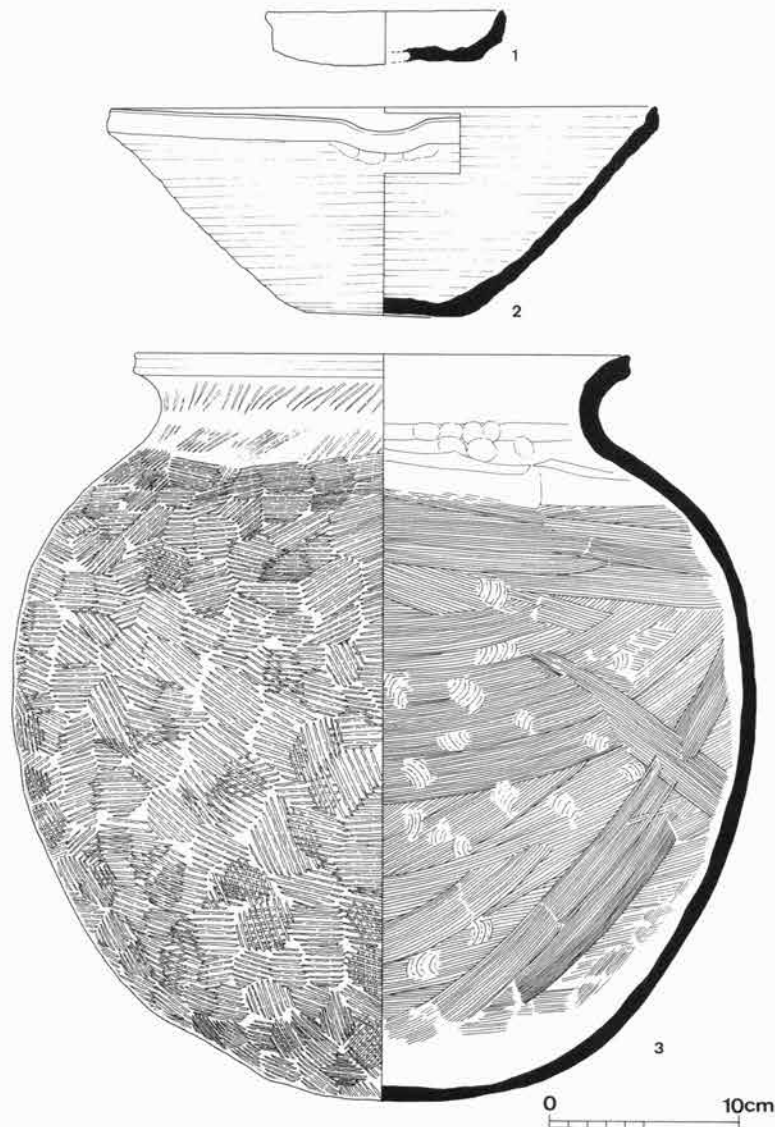
土師器 C地区東部でまとまって出土した。杯類がほとんどであるが、実測できるものは少なかった。

須恵器 蓋の口縁部1点以外はすべて杯である。口径8cm前後と11~14cm前後の大小2タイプがある。いずれも口縁端部は外反する^(注5)。口縁部に油煙痕がみられるものもあり、灯明皿として使用されたと考えられる。20はS D06西側より出土した。平安時代の資料と考えられる。

B. 中世の遺物

土師器 1・16・17は皿である。16・17はS X03から出土した。口径13cm・器高3cmである。口縁部を強く1段ナデし、内面にはハケ目が明瞭に残る。13世紀前半の資料である。1はS X01の甕(3)内より出土した。風化が激しく、調整などは不明である。

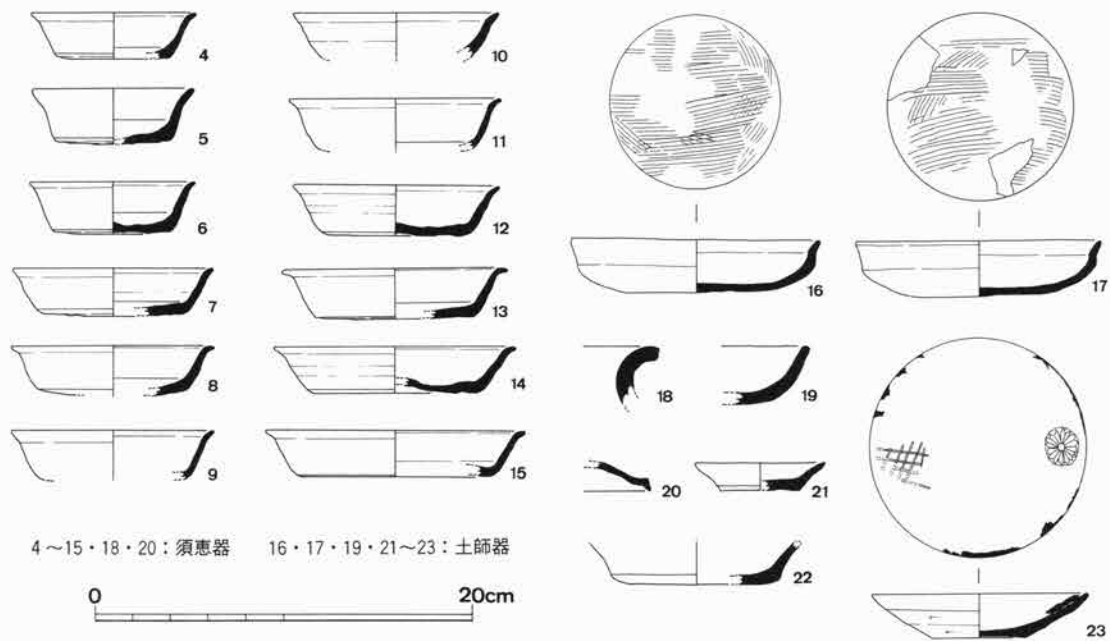
東播系須恵器 3・18は甕で、2は捏ね鉢である。2・3はS X01より、18はS X03より出土した。2は



第8図 出土遺物実測図(1)

第1表 出土銭貨一覧表

	銭貨名	初鑄年	出土遺構	出土点数	写真図版番号
1	至道元寶	995	SX03	1	a
2	宋通寶	(1038)	SX03	1	i
3	嘉祐通寶	1056	SX03	1	b
4	熙寧元寶	1068	SX03	2	c, d
5	元豊通寶	1078	SX03	1	e
6	元祐通寶	1086	SX03	1	f
7	紹聖元寶	1094	SX03	1	g
8	宣和通寶	1119	SX01	1	h



第9図 出土遺物実測図(2)

口径28.5cm・器高11cmで色調は灰色、焼成は硬緻である。口縁部の形態より12世紀末から13世紀前半の資料と考えられる。3は口径26cm・器高39.6cmである。体部外面は平行タタキで調整し、内面は同心円文のタタキの後ハケ目調整する。色調が灰白色で、焼きが悪く軟質であることから、神出・魚住窯の製品を模倣して地元付近で作られた可能性が高い。^(注6)18は復原率が悪く、全体を図化するのは困難であった。2と同様の甕である。色調は灰色で、焼成は硬緻である。いずれも口縁部等の形態より12世紀末から13世紀前半の資料と考えられる。

銭貨 北宋銭が合計9枚出土した。残りが悪く、拓本を取ることができなかったため写真のみ掲載した。銭種および出土地点は表1のとおりである。^(注7)

C. その他の出土遺物

須恵器出土地点から近世の京焼き系陶器が1点出土した。胎土は土師質で、内面に淡緑色の釉薬がかかっている。内面には菊花形の型抜き紋が貼り付けられており、その反対側には格子目状の線刻が施される。口縁端部に油煙痕があることから灯明皿と考えられる。格子目状の線刻は灯明芯の滑り止めではないかという説があるが、油煙痕からは考えにくい。^(注8)その他、C地区東部攪乱からも土師器灯明皿(21)が出土しているが時期は不明である。

3. まとめ

今回の調査では、当初、山城の確認を目的としたが、山城の堀切3本のほか、新たに経塚と考えられる遺構3基と土坑を確認することができた。

経塚状遺構は埋納されていた甕および捏ね鉢の年代から13世紀前半に構築されたと考えられる。3基のうち一番残りの良かったのはS X01で、その構造は森島分類のAタイプに近い。^(注9)甕を土坑の端に寄せてはいるが、横穴状に掘り込んでいたかどうかは不明である。また、経筒および

経巻が出土していないことから経塚と断定しにくい面があるが、火葬骨が出土していないことやこの時期にはまだ火葬が一般的でないことから経塚と判断した。同様の遺構には福知山市の大道寺廃寺があり、ここからは木製の経筒3本が、甕の中から見つかっている。このことからSX01を経塚と考えることは可能である。経巻および経筒は腐ってなくなったのであろう。甕内から出土した土師器皿は出土状況から経筒の蓋として利用された可能性がある。SX02は石組のみしか残存していなかったが、SX01と同じ石材を用いて何かを囲っていた状況であることからSX01と同様のものとする。SX03については石組に用いた石材等がみられず構造上他の2基と同じ遺構と捉えて良いか疑問が残るが、遺物の内容がSX01と共通することから同様の遺構と考える。また、3基とも盛土塚の存在は確認できなかった。丘陵頂部にもっとも近いSX03が一番残りが悪かったことから、後世に山城を築城した時に破壊されたと考えられる。

この時期の経塚は、一般的に天台・真言系の僧によって広められた末法思想の影響の下に造営されたと考えられている。末法思想は、院政期には天台・真言系の僧を中心に荘民レベルまで広められており、多数の人々が結縁していたという。集落内にある興禅寺は平安時代後期創建の伝承をもち、創建当初の宗旨は真言宗であったといわれ、集落北の小倉山をはさんで反対側にある金剛院は真言宗東寺派の寺院で、12世紀には美福門院の御願所であった。当時、多門院一帯は倉橋荘に属していたと考えられ、荘園の領家は平頼盛(清盛の異母弟)で、倉橋荘を含め、付近の荘園の領家は平氏などの院の側近であった。このように、調査地周辺では院政期には真言系の寺院があり、荘園開発も行われているようである。橋木林遺跡の経塚は、このような社会情勢を背景に構築されたものと思われる。真言系寺院と末法思想と荘園支配とがどのような関連をもっていたのか、ここでは明らかにできないが、今回の成果は、この地域における荘園支配の様相を知る手がかりの一つになるのではないかと考える。

山城については、堀切等から遺物が出土していないため時期は不明である。SD04西側の平坦面で建物などの構築物が確認できなかったこと、経塚出土遺物以外には中世の遺物がないことから、人が常駐していたというよりも臨時的に機能した防衛施設であったのではないかと考えられる。したがって、城の本体はすぐ北側の山頂に存在する小倉城や、多門院城あたりではないかと想定される。江戸時代の絵図(天保11年)によると多門院からは若狭に通じる峠道が2か所あり、昭和の頃まで使われていたようである。本遺跡が立地する丘陵は、丁度道が合流する地点に当たり、若狭・丹後両国の国境地域にあることから、緊張関係にあるときは見張りを置き、道を抑える必要性があったのであろう。冒頭でも述べたが、戦国時代には丹後の一色氏と若狭の武田氏の間で緊張関係が絶えなかったようで、しばしば侵攻されている。東舞鶴に山城が多いのはこのためだと考えられており、今回確認した堀切も一連の城に伴うものと考えてよいであろう。

また、丘陵西部のSK07およびその周辺で須恵器がまとまって出土しており、しかも器形が1種類しかないというのは興味深い。周辺に当該期の遺跡が存在すると考えられ、今後の調査成果が期待される。

(中島史子)

- 注1 『舞鶴市史・通史編(上)』 舞鶴市史編纂委員会 1993
『舞鶴のあゆみ』 舞鶴市郷土資料館 1988
- 注2 『京都府の地名』 平凡社 1981
『角川日本地名大辞典』26・27 京都府上・下巻 角川書店 1982
『舞鶴のあゆみ』 舞鶴市郷土資料館 1988
- 注3 「寺門高僧記」巻第4・6(『統群書類聚』)
- 注4 現地調査および整理作業にあたっては、以下の方々のご協力を頂いた。(順不同・敬称略)
浅尾やよい・石川ちさと・一瀬清美・一瀬芳子・一瀬貞成・上野敏江・岩田十四子・榎 与一・岡
義道・片山敏子・材木久子・材木靖雄・嶋田寿栄子・新谷綾子・新谷美津恵・高橋秀雄・竹中
一・中川房子・美濃利江・安永節子・中村ひろみ・谷口成美・吉岡 譲・古賀友香子・寺尾貴美
子・吉岡博之・松本達也・一瀬康男
- 注5 兵庫県多紀郡に所在する大山荘のベラキ谷窯に類例が見られ、9世紀代の資料と考えられる(『大山
荘内埋蔵文化財調査概要報告書』(西紀・丹南町教育委員会) 1992)。
- 注6 当調査研究センター伊野近富の教示による。
- 注7 『日本出土銭貨総覧』(兵庫県埋蔵銭調査会 1996)を参考にした。
- 注8 梅川光隆「江戸時代の灯火器について」(『京都工芸繊維大学構内遺跡発掘調査報告書』 京都工芸
繊維大学吉田団地遺跡調査委員会) 1993
- 注9 森島康雄「京都府における銭貨を伴う経塚」(『出土銭貨』第6号 出土銭貨研究会) 1996
- 注10 経塚と墳墓は構造や出土遺物に共通点が多いため、区別がつきにくい。京都府北部の経塚と墳墓に
ついては、杉原和雄氏の論考がある。
杉原和雄「経塚遺構と古墓」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究セ
ンター) 1987
- 注11 狭川真一「墓制—南北朝期の様相—」(『第19回 中世土器研究会報告資料』 日本中世土器研究
会) 2000
- 注12 竹原一彦「大道寺廃寺跡の調査」(『京都府遺跡調査報告書』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研
究センター)1983
- 注13 速水 佑「院政期仏教と末法思想」(『院政期の仏教』) 1998
- 注14 『鎌倉遺文』第7332, 31208号・『日本荘園データ』2(国立歴史民俗博物館博物館資料報告書6 国
立歴史民俗博物館 1995)
- 注15 注14に同じ。
- 注16 柴田家蔵「丹後国大絵図」天保11年庚子2月(『舞鶴市史・通史編(上)』 舞鶴市史編纂委員会
1993に掲載の図を参考にした。)

2. 稲葉遺跡第6次発掘調査概要

1. はじめに

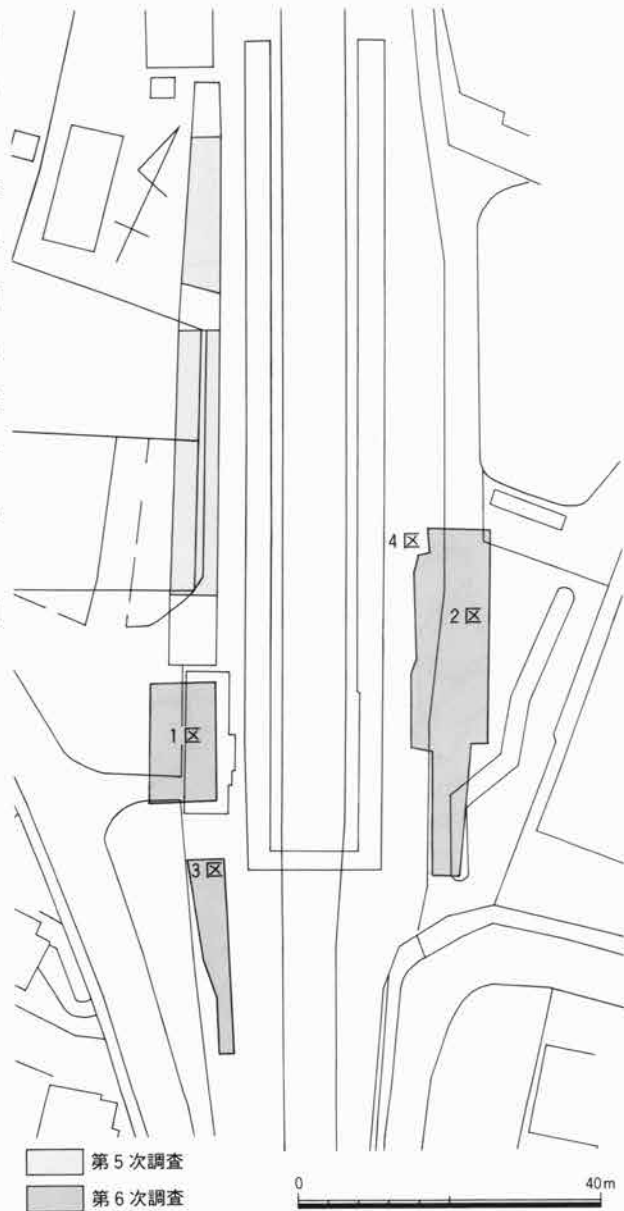
今回の調査は、昨年度から実施している西日本旅客鉄道株式会社(JR西日本)の、片町線輸送改善計画による、京田辺駅改良工事に伴う発掘調査の2年度目にあたる。所在地は京田辺市田辺久戸である。現地調査の期間は平成12年4月18日から同年8月4日までで、調査面積は約565m²である。調査に要した費用は、全額、西日本旅客鉄道株式会社が負担した。

稲葉遺跡は、JR西日本京田辺駅西側から近鉄新田辺駅西側付近にかけて、東西約550m・南北約950mにわたって広がる遺跡である。稲葉遺跡ではこれまでに5次の発掘調査が行われているが、京都府田辺総合庁舎建設に伴って行われた第1次調査で時期不明の溝状遺構が検出され、ショッピングセンター建設に伴って行われた第4次調査で弥生時代の方形周溝墓が検出されているほかは、顕著な遺構は認められない。昨年度に行われた第5次調査では、調査地周辺にみられる方格地割りの方向と一致する耕作溝群や、古墳時代の遺物包含層などを検出した。

今年度の調査は、駅の西側で2か所、東側



第10図 調査地位置図 (1/25,000)



第11図 調査区配置図(1/1,000)

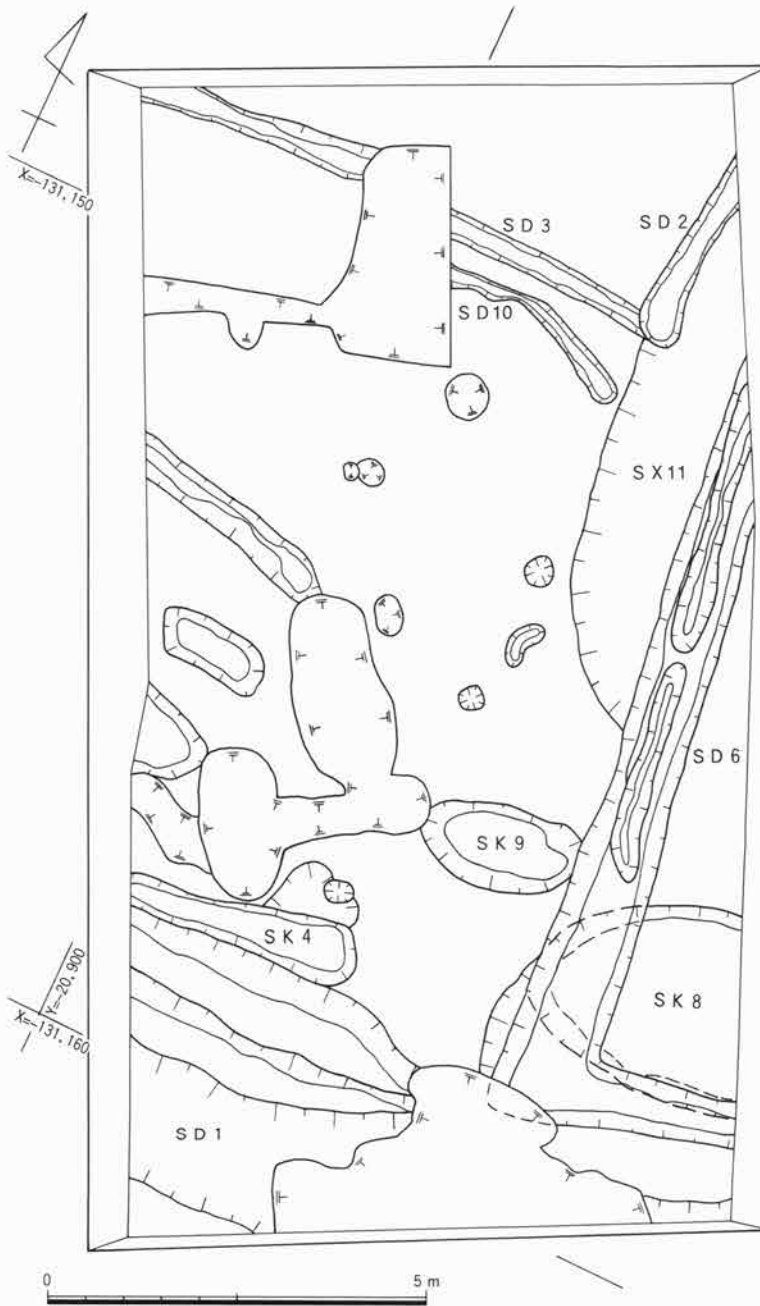
で1か所の、合計3か所で実施した。調査区名は、着手順に、京田辺駅仮設駅舎の北側を1区、駅東側を2区、仮設駅舎裏を3区としたが、その後、2区における工事が調査範囲を超えて西側に及ぶことが判明したため、4区として追加調査を実施した。

2. 調査成果

(1) 1区の遺構

1区では標高25.5m前後の淡灰色細砂層上面で、遺構検出を行った。検出した主な遺構は次のとおりである。

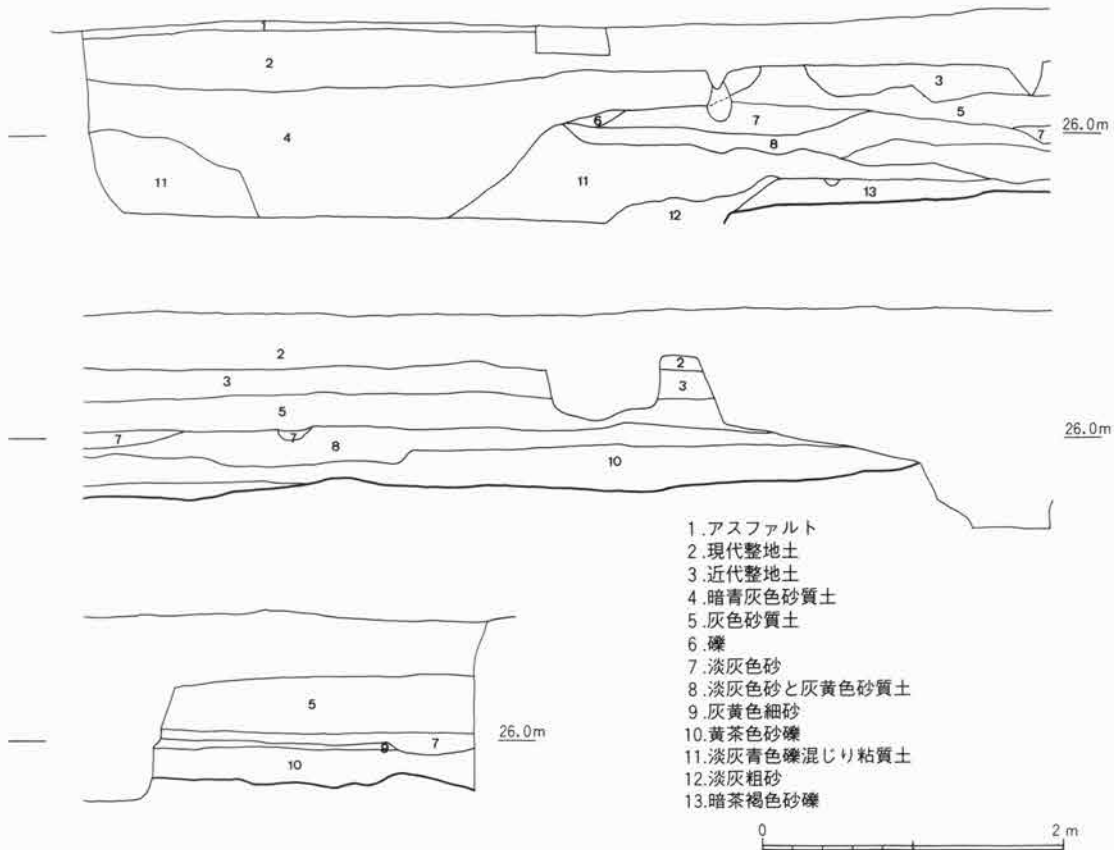
SD1 調査区南西隅で検出した東西方向の溝である。方格地割りの坪境にあたる溝で、鉄道



第12図 1区平面図(1/100)

建設時まで機能していたものと見られる。地下水位が高く、常に滞水していたため、底まで掘削することはできなかった。断面観察によれば、最も新しい段階の溝は標高26.1m付近から掘削され、これと重なる位置に、近世および中世後期の溝が存在する。いずれもその北肩を検出できたのみであるが、北肩の位置が、時代が下がるにつれて南に移動していることが確認できた。近世段階の溝の埋土から肥前磁器碗(20)が、近世段階の溝の肩を構成する淡灰色粗砂層から靴の羽口(27)が出土した。

SD2 調査区北部で検出した幅0.4m・深さ0.1m程度を測る南北方向の小溝である。埋土は茶褐色砂混じり粘質土で、土師器皿(7)・瓦器碗(1・2)の小片が出土した。14世紀前半以



第13図 1区西壁断面図(1/50)

降に埋没した遺構である。

SD6 調査区南東部で検出した「L」字形に屈曲する溝である。幅は1m前後、深さは0.1m未満である。埋土は暗灰色砂質土で、近世陶磁器片が出土した。また、西辺では、下層に淡灰褐色砂質土が堆積し、須恵器杯(12)・土師器皿の小片が出土した。あるいは、SD6を溯る時期の溝の一部が残ったものかもしれない。

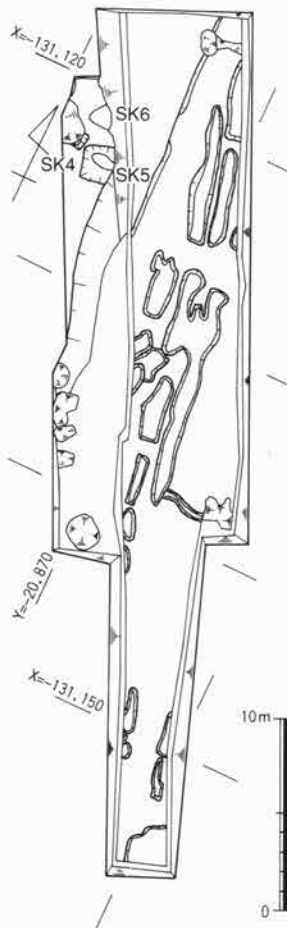
SK4 調査区南部で検出した細長い土坑である。直径3cm以下の円礫が詰まっていた。土師器皿(5)・瓦器椀(3)・須恵器小片が出土した。土師器皿から15世紀後半に埋没したものと考えられる。SD1の最古段階の北肩を切っているので、SD1の最古段階は中世後期に溯ることがわかる。

SK8 調査区南東端で検出した。円形の土坑と思われるが、全体を検出することはできなかった。SD6に先行するが、肥前磁器椀(19)が出土したことから、近世の遺構であることがわかる。湧水のため、底まで掘削することができなかった。

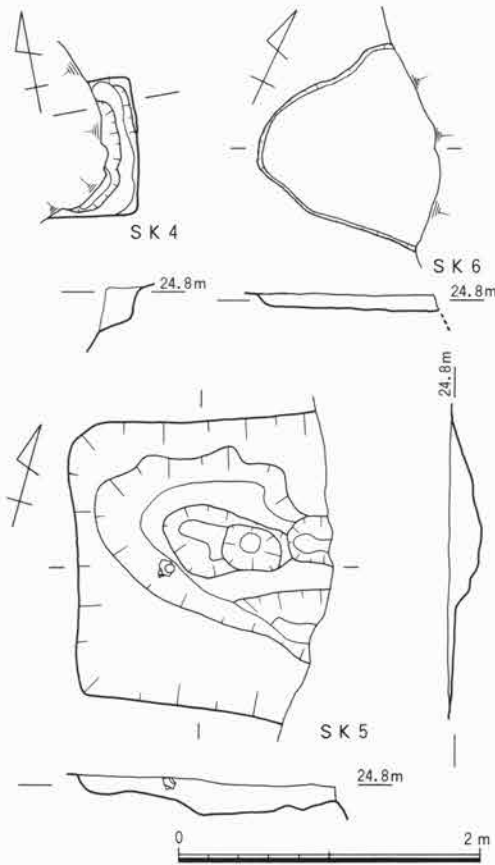
SK9 調査区中央南寄りで検出した長径2.2m・短径1.1mの楕円形土坑である。埋土は2層に分かれ、上層は灰色粘質土、下層は直径5mm前後の



第14図 1区SK9平面図・断面図(1/50)



第15図 2・4区平面図
(1/400)



第16図 4区SK4・5・6平面図・断面図
(1/50)

礫である。上層から瓦質土器すり鉢(18)・火鉢(16)、信楽焼すり鉢(15)、蓮弁文青磁椀(9)、白磁椀Ⅳ類(8)などが出土した。

SX11 SD6の周辺で検出した落ち込み状遺構である。整地のために盛土されたものと考えられる。SD2・6に切られている。中世の陶器(14)・土師器皿小片が出土した。

(2) 2区・4区の遺構

2区では調査区全体に削平が著しく、顕著な遺構は検出されなかった。西側に拡張した4区の遺構検出面が標高24.9m付近であるから、2区北壁断面図を見ると、調査前の歩道の面ですでに、遺構面よりも低くなっていることがわかる。

調査区北西隅で南北方向にのびる段差を検出し、この段差より東側では南北方向の浅い溝群を検出した。溝からは近世以降の陶磁器が出土しており、鉄道敷設以前の耕作関連の溝であると思われる。

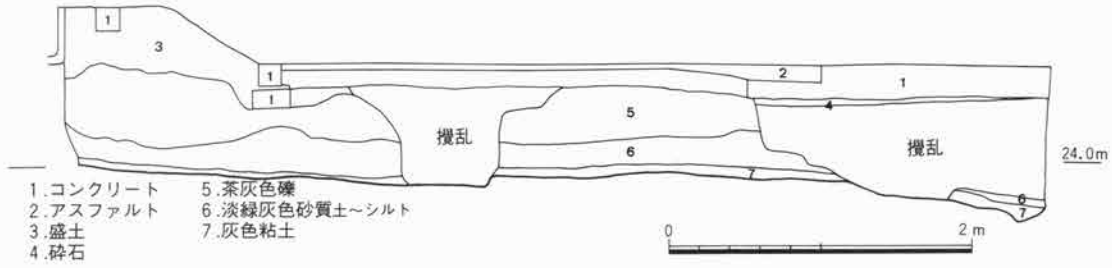
4区南部では、2区で検出された南北方向の段差の続きが検出されたが、段差の東側は基礎の攪乱が著しく、2区で検出された南北方向の溝の続きは検出されなかった。

4区北部では、古墳時代の須恵器を含む暗茶褐色礫混じり粘質土を除去した標高24.9m付近で、3基の土坑を検出した。

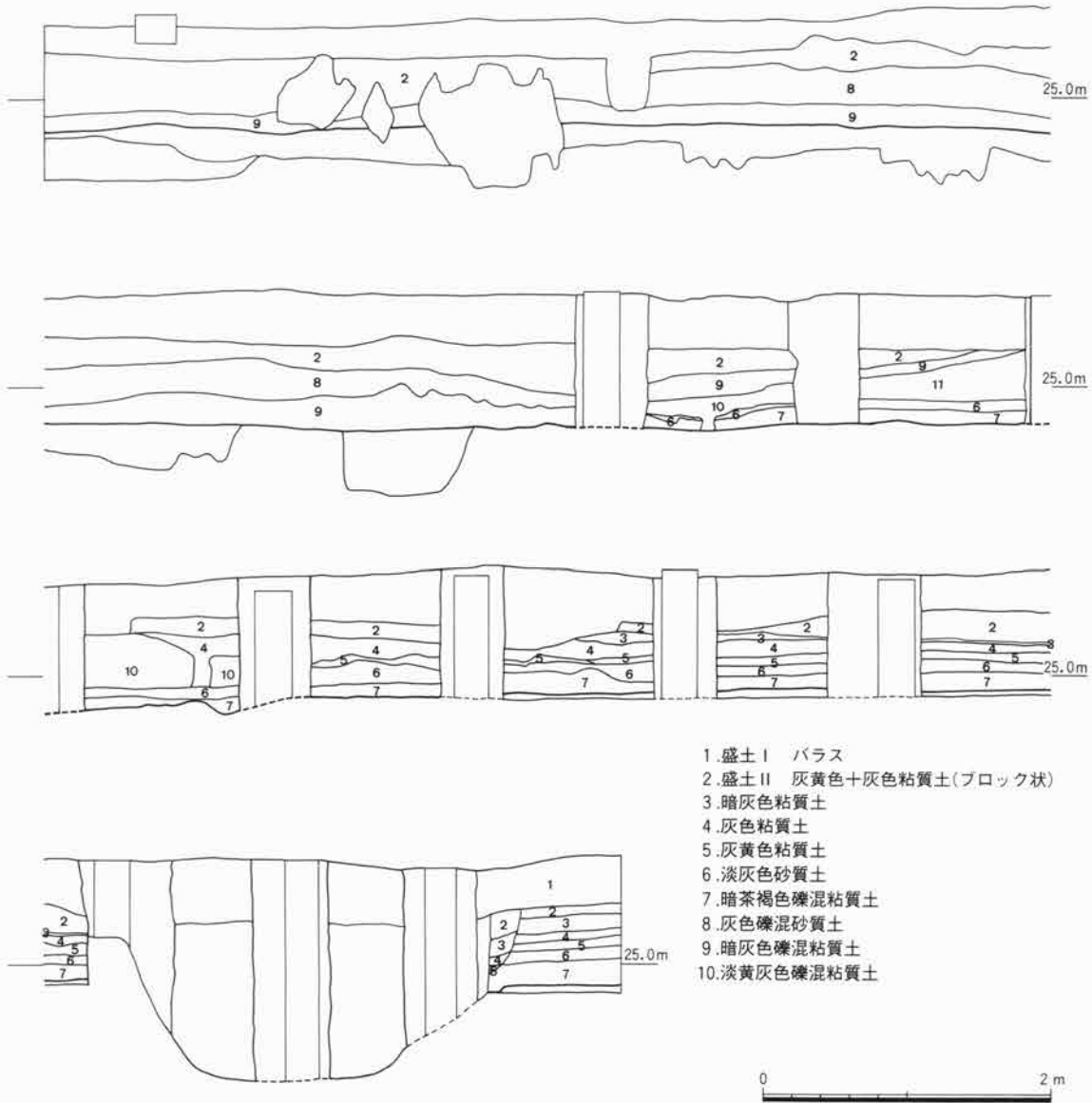
SK4 大きな攪乱により遺構の全容は不明であるが、方形の土坑と考えられる。埋土は茶褐色礫混じり粘質土で、サヌカイトの剥片が出土した。

SK5 1.9m×1.7m以上の方形土坑として検出したが、東側は削平によって失われている。底面は凸凹がはげしく、最も深いところで、約0.3mを測る。埋土は茶褐色礫混じり粘質土で、弥生土器底部片のほか、サヌカイトの剥片が25点出土した。

SK6 SK5同様に、東側が削平され、平面三角形を呈する土坑として検出した。底は平坦で、深さは約0.1mを測る。埋土は茶灰色粘質土で、土師器片(28)が出土した。



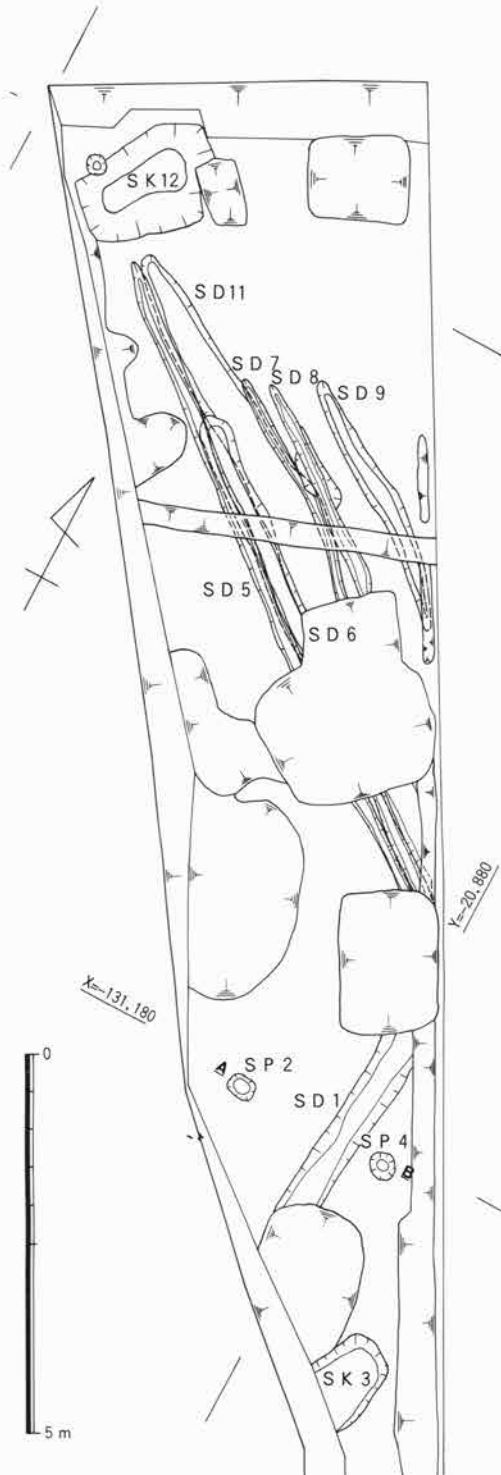
第17図 2区北壁断面図(1/50)



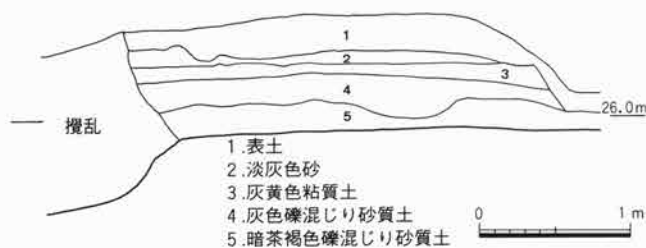
第18図 4区西壁断面図(1/50)

(3) 3区の遺構

3区では暗茶褐色砂質土を除去した標高25.9m付近で遺構検出を行ったが、北から約45°西に振る方向の溝SD5を境に北東側では灰色砂質土の盛土が存在した。なお、SD5は灰色砂質土上面から掘り込まれており、SD5および灰色砂質土から近世陶磁器が出土している。暗茶褐色砂質土および灰色砂質土を除去した灰黄色粘質土上面で検出された遺構は、次のとおりである。



第19図 3区平面図(1/100)



第20図 3区西壁断面図(1/50)

SP 2・4 調査区中央部で検出した2基のピットである。心々距離約2.2mで東西方向に並ぶが、深さ0.1m前後の浅いもので、柱痕跡なども確認できないので、積極的に柵や建物とすることはできない。

SD 1 調査区中央部で検出した南北方向の溝である。幅0.5~0.6m・深さ0.1m余りを測る。埋土は茶褐色粘質土で、白磁椀Ⅳ類の小片などが出土した。

SD 6~9 SD 5に平行する溝群である。埋土はいずれも灰色砂質土である。遺物が出土していないが、埋土の状況などから、近世以降の溝と考えられる。

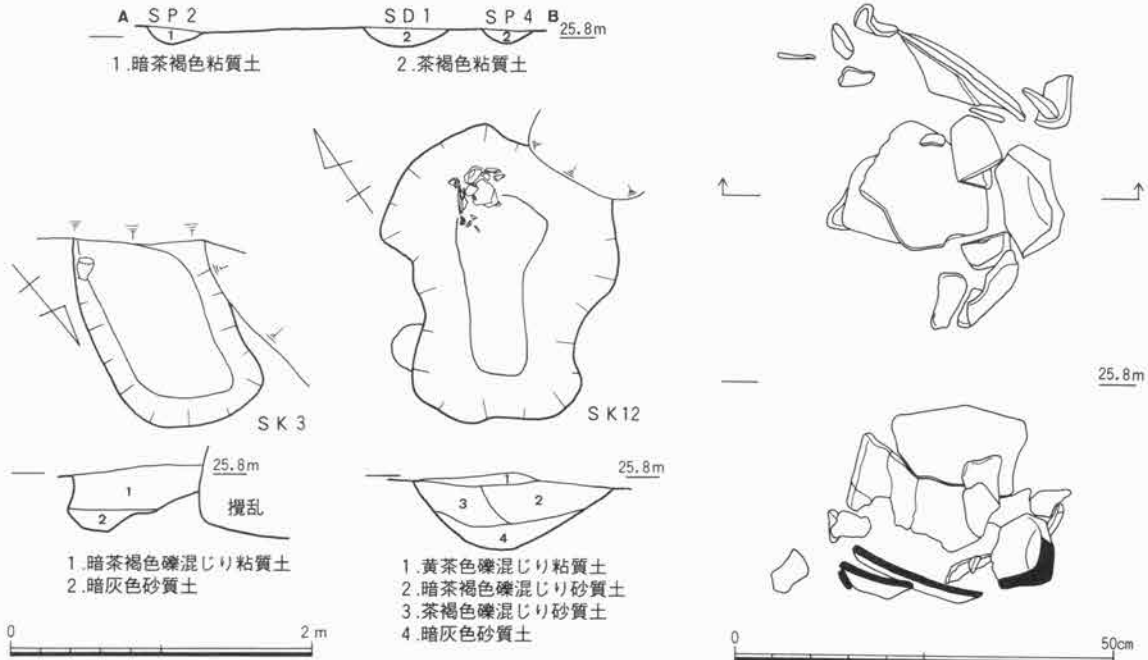
SD 11 SD 5~9に平行する溝である。遺構の切り合い関係から、SD 6・7に先行することがわかる。埋土は灰黄色粘質土のブロックを含む暗灰色粘質土で、瓦質土器甕の小片などが出土した。

SK 3 調査区南部で検出した。当初は南北方向の溝かと考えたが、土坑底南端が立ち上がることから、隅丸長方形の土坑と判断した。土坑の南東隅から完形の弥生土器鉢(23)が1点出土した。

SK 12 調査区北西隅で検出した土坑である。平面形は1.9m×1.3m前後を測る不整な長方形を呈し、深さは約0.5mを測る。土坑北東部に口縁部を南西に向けた横倒しの状態で甕(22)が出土した。甕は、口径27cm・器高33cmを測る大形のもので、土坑中央部に口縁を向けて出土していることから土器棺の可能性も考えられる。弥生時代前期後半の遺構である。

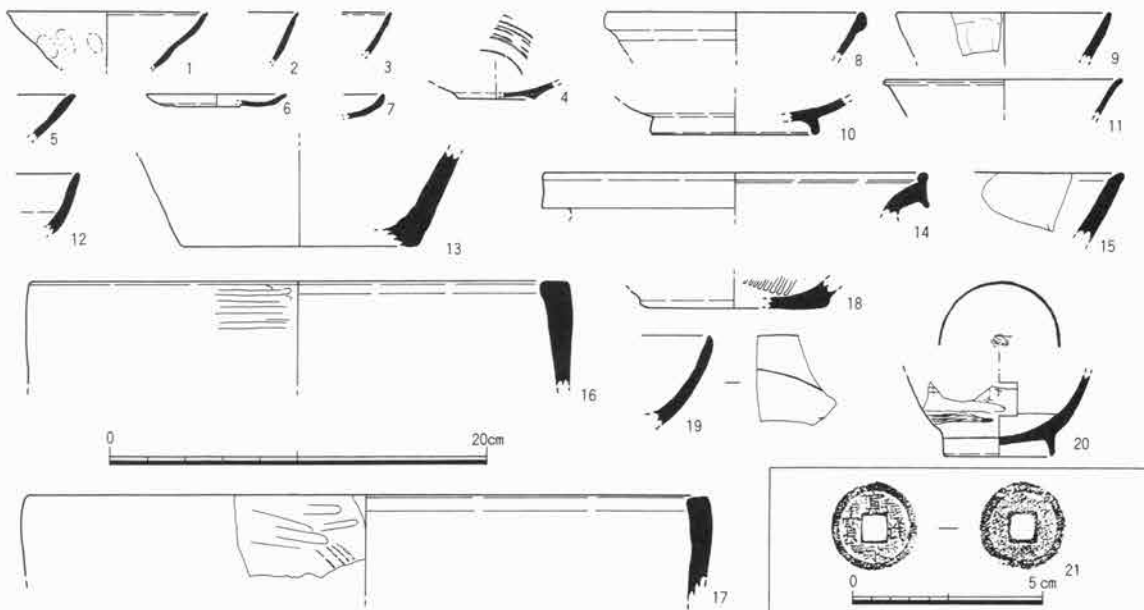
(4) 出土遺物

1~4は大和型瓦器椀である。1~3は磨滅が著しく、暗文が観察できない。1は口縁内端部に沈線がめぐる。13世紀後半から14世紀前半のものである。5~7は土師器皿である。5は大皿で、口縁部が外反して伸びる特徴から、15世紀後半のものと考えられる。6・7は小皿



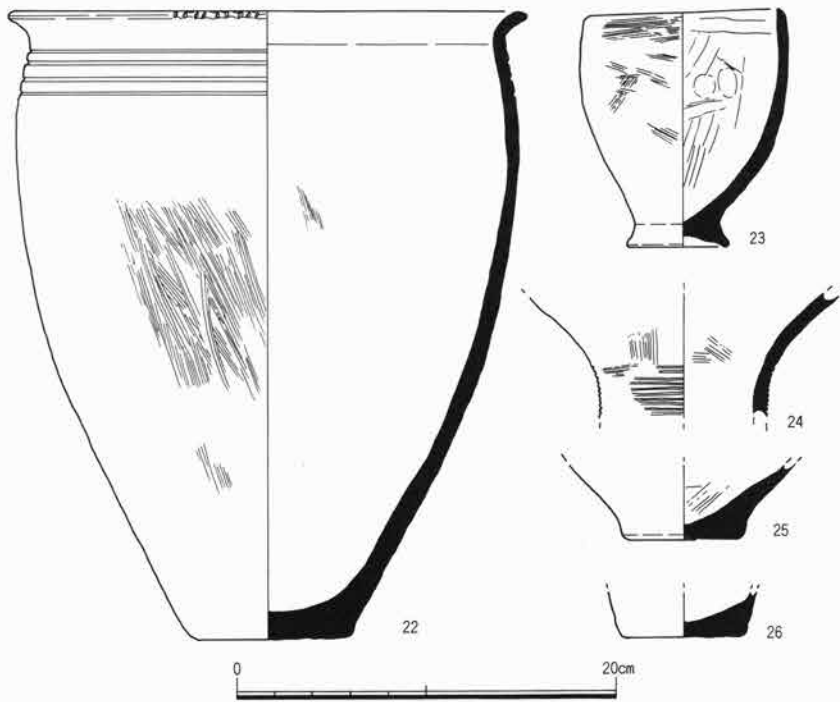
第21図 3区SD1、SP2・4断面図、SK3・12平面図・第22図 3区SK12遺物出土状況平面図・立面図(1/10)
断面図(1/50)

で、13世紀前後のものと思われる。8は白磁碗Ⅳ類である。9は青磁碗Ⅰ-5類である。10は灰釉陶器碗である。O53窯式に相当する。11は京都系緑釉陶器碗である。胎土は硬質で、暗灰色を呈する。12は須恵器杯である。色調は淡灰色を呈する。13は須恵器壺である。14は常滑焼の口縁部である。13世紀後半のものと考えられる。15は信楽焼鉢である。わずかにヘラ描きによるすり目が認められる。色調は茶灰色を呈し、焼成は軟質である。15世紀前半のものである。16・17は瓦質土器火鉢である。外面および、上端面に横方向の太く粗いミガキが施される。17の外面の一部には斜め方向のハケが消されずに残っている。18は瓦質土器すり鉢である。8条1単位の櫛描



第23図 1区出土遺物実測図

SD1:20、SD2:1・2・7、SK4:3・5、SD6:12、SK8:17・19
SK9:8・9・13・15・16・18、SX11:14、SP13:6、攪乱:4・10・11・21



第24図 3・4区出土遺物実測図

した弥生土器壺である。頸部に10条ほどのヘラ描き沈線がめぐらされる。25・26は弥生土器の底部である。25は4区SK5から、26は4区包含層から出土した。いずれも、前期後半のものと考えられる。

3. ま と め

1区では、方格地割りの坪境にあたる溝SD1が検出され、SD1の最古段階はSK4との切り合い関係から15世紀後半以前に溯ることが判明した。SD2・6がSD1の方向に規制されるので、SD1の初源は、14世紀前半に溯る可能性も考えられる。ともあれ、SD1は、少なくとも室町時代から鉄道敷設直前までほぼ同じ位置で維持され、鉄道敷設に伴って、JR京田辺駅を南に迂回して東西に続く現在の水路に作り替えられたものと思われる。

3区では南北方向の中世の溝SD1のほかに、北で西に振る方向の中世の溝SD11などが検出された。SD11に平行する方向の溝が近世まで繰り返し掘られていることから、中世から近世にかけて3区北部ではこの溝の方向の土地利用が維持されていたことがわかる。SD1とSD11の先後関係や時期が特定できないので、南北正方位の方格地割りと斜め方向の土地利用との関係は現段階では不明であるが、SD11の方向は、旧地形の等高線に平行する方向であり、南北正方位の大区画の中に等高線に平行する区画が存在したものと思われる。

3・4区では弥生時代前期の遺構を検出した。検出された遺構は、性格の特定できない土坑ばかりであるが、第4次調査で検出された方形周溝墓とほぼ同時期であり、当該期の遺構が平野部から丘陵部にかけて広がっていることを確認することができた。

(森島康雄)

3. 森垣外遺跡第4・5次発掘調査概要

1. はじめに

森垣外遺跡は、京都府相楽郡精華町大字南稲八妻小字森垣外に所在する古墳時代中期から後期にかけての集落遺跡である。この遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部が施工する府道木津八幡線街路整備事業に伴う事前調査であり、平成8年に試掘調査を行い、以後、平成9～12年度にわたり継続調査を実施してきた。平成12年度が最終調査となる。

ここに報告する森垣外遺跡の第4・5次調査は、第4次調査を平成11年度に実施し、第5次調査を平成12年度に実施した。また、第4次調査では、A3地区とB2地区を対象に調査を実施し、平成12年度はB3地区を中心に面的調査を実施した。各年度の調査期間は、第4次調査が平成11年5月10日から平成12年1月14日までの期間を要し、平成11年12月6日に80名の参加者を得て現地説明会を実施した。一方、第5次調査は、平成12年6月2日から平成12年8月11日の期間を要し、平成12年8月1日に関係者説明会を実施した。また、各々の調査面積はA3地区およびB2地区の総計が約2,000m²であり、B3地区が約600m²である。

第4次発掘調査は、当調査研究センター調査第2課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、同主任調査員小池 寛、同調査員伊賀高弘が担当し、第5次発掘調査は奥村および小池が担当し、調査第2係調査員野島 永が補佐した。また、遺物写真撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が担当した。なお、概要報告作成を目途にした整理作業は、小池が総括し、本概要報告の執筆と編集は、小池が担当した。

最後に、調査期間中、木津土木事務所および精華町教育委員会をはじめ、多くの関係者の方々からご協力を得た。記して御礼を申し述べたい。

2. 位置と環境

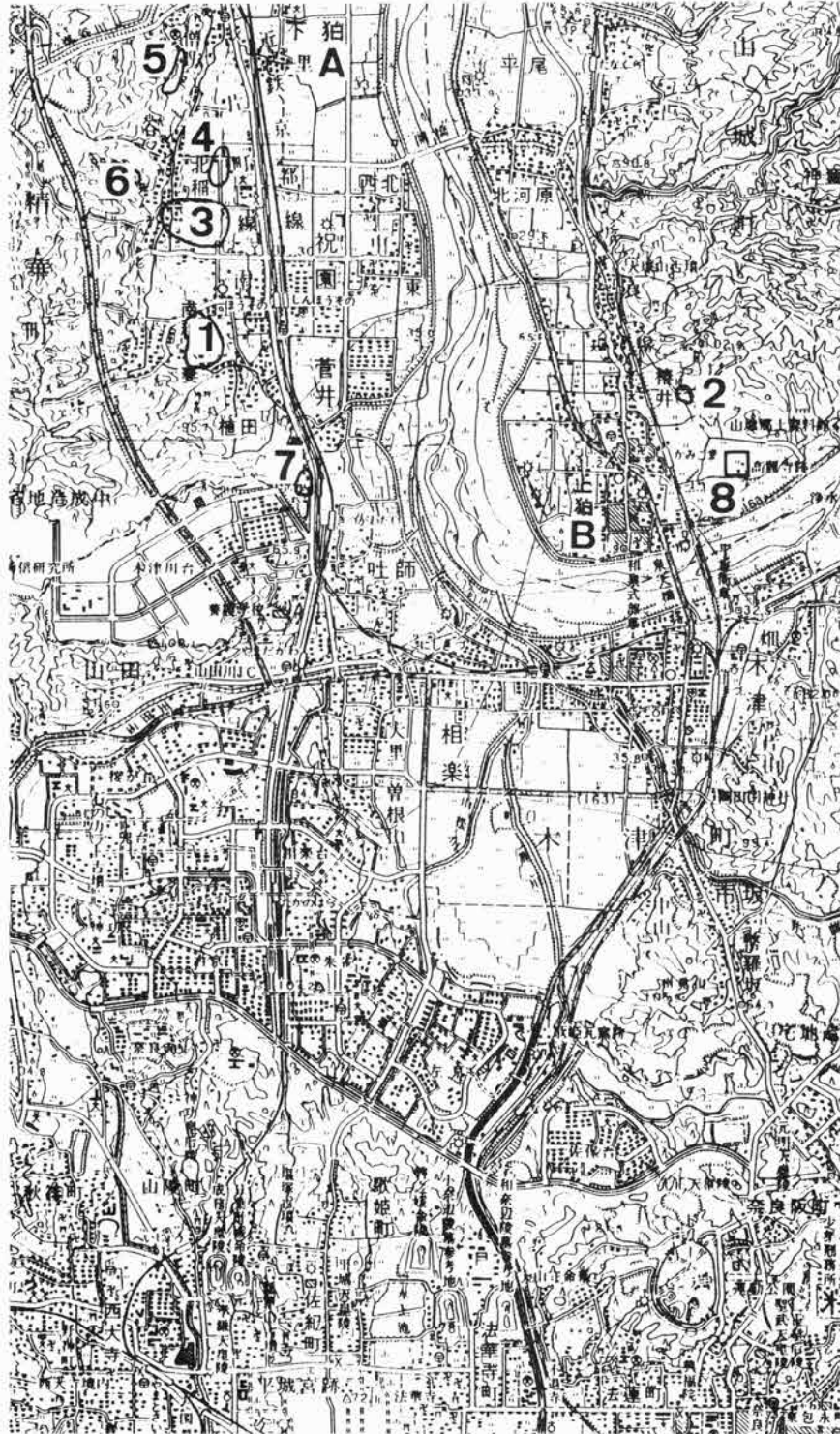
(1) 地理的環境

森垣外遺跡は、西方の田辺丘陵と東方を北流する木津川に挟まれた河岸段丘のほぼ中間に位置する。木津川の左岸流域一帯は、河川の氾濫により形成された平野が広がり、丘陵より流れ込む小河川により扇状地形が形成されている。森垣外遺跡は、南東から北東にかけてゆるやかに傾斜する傾斜地上に位置しており、地質的には、河岸段丘上に堆積した沖積層を基盤層としている。

本遺跡周辺の地形は、遺跡の北端には南西から北東にかけて流れる旧流路の存在が確認されており、南端では東西の丘陵に沿って谷状地形が観察できる。森垣外遺跡の最高所は、C地区中央部で標高45mを測り、最も低い遺跡北端部のA2地区では標高39mを測る。高差はおおむね6mであり、遺跡の最高所から城陽市南半部を含む南山城一帯を一望することができる。これらの地

理的條件から弥生時代以降、集落を営む条件としては良好であったことが容易に推測できる。

なお、森垣外遺跡の範囲としては、現行の府道精華生駒線沿いに谷地形が展開することと、それより以北に隣接する北尻遺跡では、古墳時代の集落関係遺構を検出し得ていないことから、当該府道周辺に北限を設定しうる。また、南限は、明確に集落を区画する施設などは確認してい



第25図 森垣外遺跡位置図(1/50,000)

- | | | | |
|------------|---------------|----------------|---------|
| 1. 森垣外遺跡 | 2. 山城町上粕天竺堂遺跡 | 3. 北稲遺跡 | 4. 柿添遺跡 |
| 5. 鞍岡山古墳群 | 6. 城山古墳群 | 7. 木津町吐師七ツ塚古墳群 | |
| 8. 山城町高麗寺跡 | A. 地名の「下粕」 | B. 地名の「上粕」 | |

いが、遺構密度が極端に低くなるC地区南端部に設定して大過はない。一方、東限は、精華中学校付近で現状地形に1m程度の落差が認められることと区画整備事業に伴う試掘調査成果から、この段差に東限を設定することができる。また、西限は南西方に所在する丘陵部下段に求めることができる。遺跡の範囲確定については、京都府教育委員会および精華町教育委員会と調整済みであることを付記したい。

(2) 歴史的環境(第25図)

森垣外遺跡周辺には、平谷古墳群、鞍岡山古墳群、城山古墳群、国名平古墳群、畑ノ前古墳群、畑ノ前東古墳群などが点在している。平谷古墳群が所在する薬師

山では、川西編年Ⅱ期の円筒埴輪が採取されており、4世紀後半の古墳の存在を示唆している。また、鞍岡山3号墳からは甕籠鏡が出土しており、鞍岡山古墳群が所在する丘陵からは、土師質亀甲形の陶棺が出土している。一方、城山古墳からは、MT15型式前後に比定できる須恵器が出土しており、森垣外遺跡と時期的に併存する古墳群である。

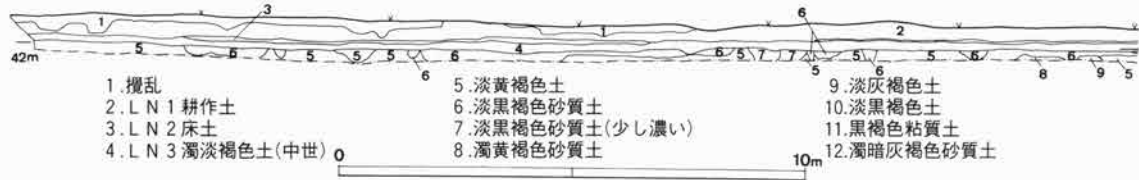
国名平1号墳では、滑石製刀子が出土しており、中期古墳の存在が確認されている。また、畑ノ前古墳群では、丘陵に7基の古墳群が確認されており、TK209型式からTK217型式に比定で



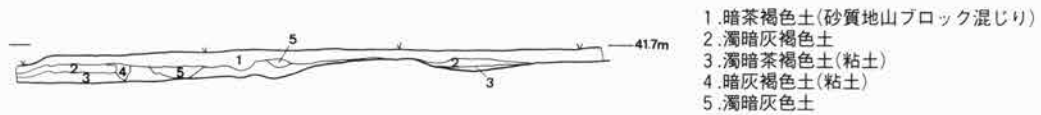
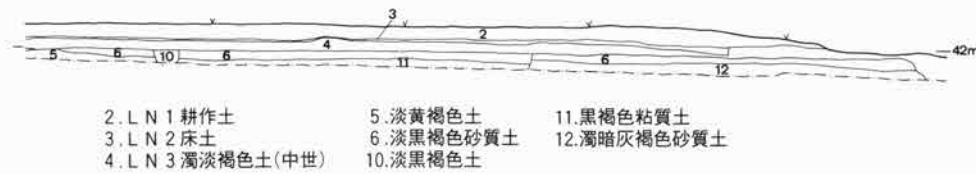
第26図 地区設定図

きる須恵器が出土するとともに、7号墳からは鉄鉾が出土している。

なお、平成9年度に実施したC地区から、精巧な鏡形石製模造品が出土し、また、それと酷似する石製模造品が、木津町吐師七ツ塚1号墳から出土している。森垣外遺跡から多くの滑石原石や砥石が出土していることから、当該遺跡で作製された鏡形石製模造品である可能性も視野に入れなければならない。



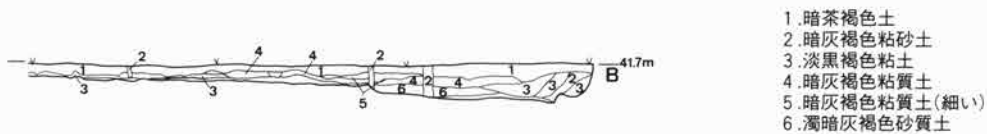
A 3地区西壁断面図(上下段連続図)



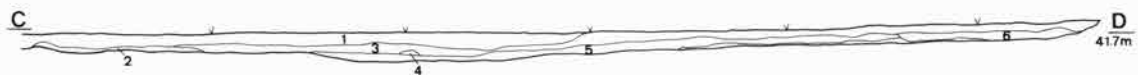
A 3地区池沼S X 20断面図(東壁)



A 3地区池沼S X 20断面図



A 3地区池沼S X 20断面図

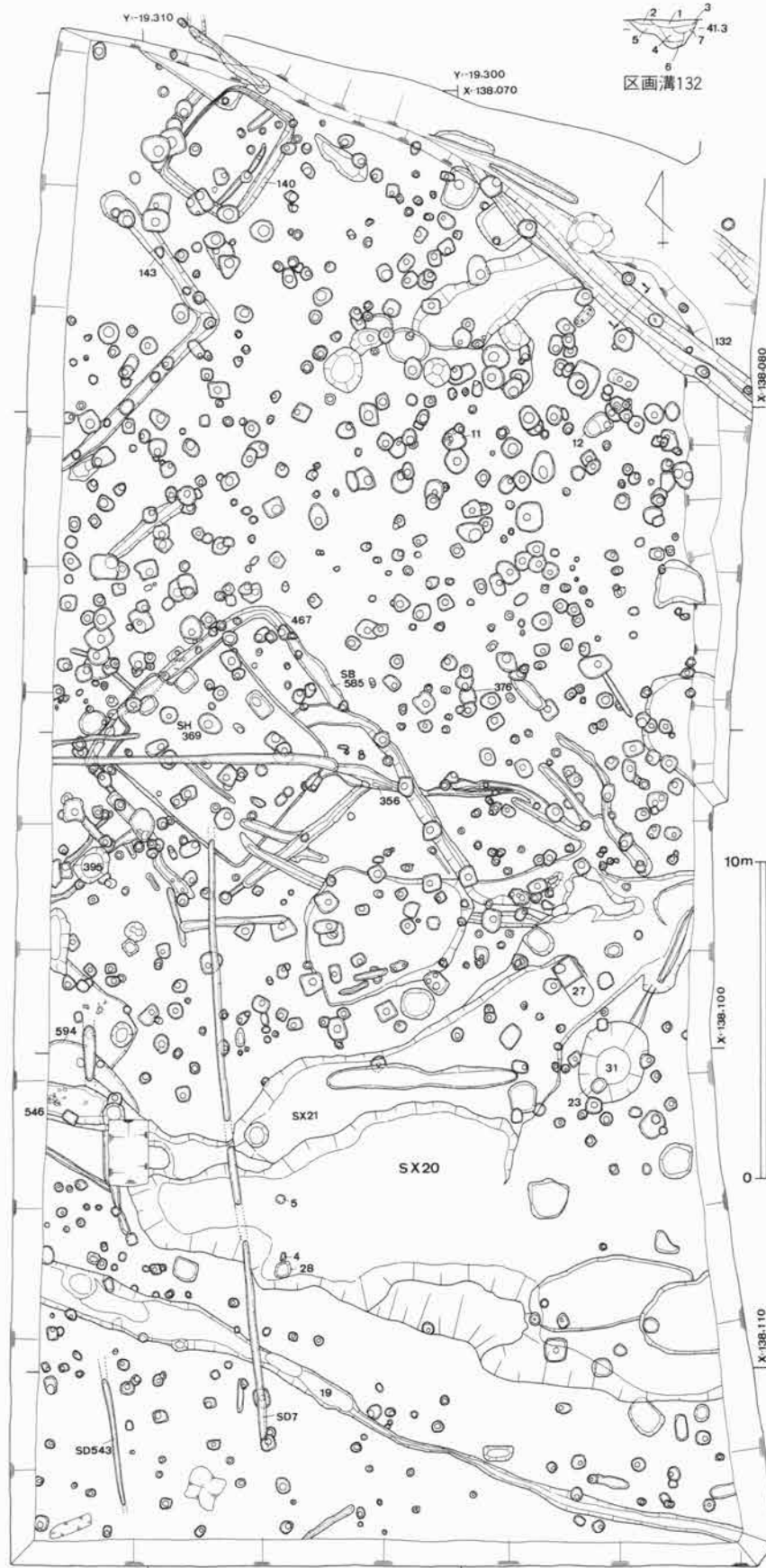


A 3地区池沼S X 20断面図

0 5m

第27図 土層断面図

一方、古墳時代の集落遺跡としては、北稲遺跡、柿添遺跡、北尻遺跡が挙げられる。北稲遺跡は、古墳時代前期末から中期にかけての集落跡で、数基の竪穴式住居跡や土坑や溝から布留式土器が出土している。特に、赤褐色で軟質焼成の格子タタキ目をもつ韓式系土師器が出土しており、南山城地域では類例の少ない土器として注目される。柿添遺跡は、古墳時代前期末から中期にかけての集落跡で、小規模な掘立柱建物跡や竪穴式住居跡、土坑・溝などが確認されている。中でも古墳時代中期末の竪穴式住居跡内とそれに隣接する溝から4点の琥珀製棗玉が出土しており、さらに、2点の滑石製有孔円板とミニチュアの手捏ね土器等も出土している。これらは、森垣外遺跡での琥珀片や滑石製品および



第28図 A3地区遺構実測図

滑石原石の出土と関連している可能性がある。最後に、古墳時代前期から中期にかけての北尻遺跡は、自然流路から布留式土器が出土している。特に、流路の南辺では礫敷の溝状遺構を確認しており、水辺で行なわれた宗教的行為に関する遺構の可能性を報文では指摘している。

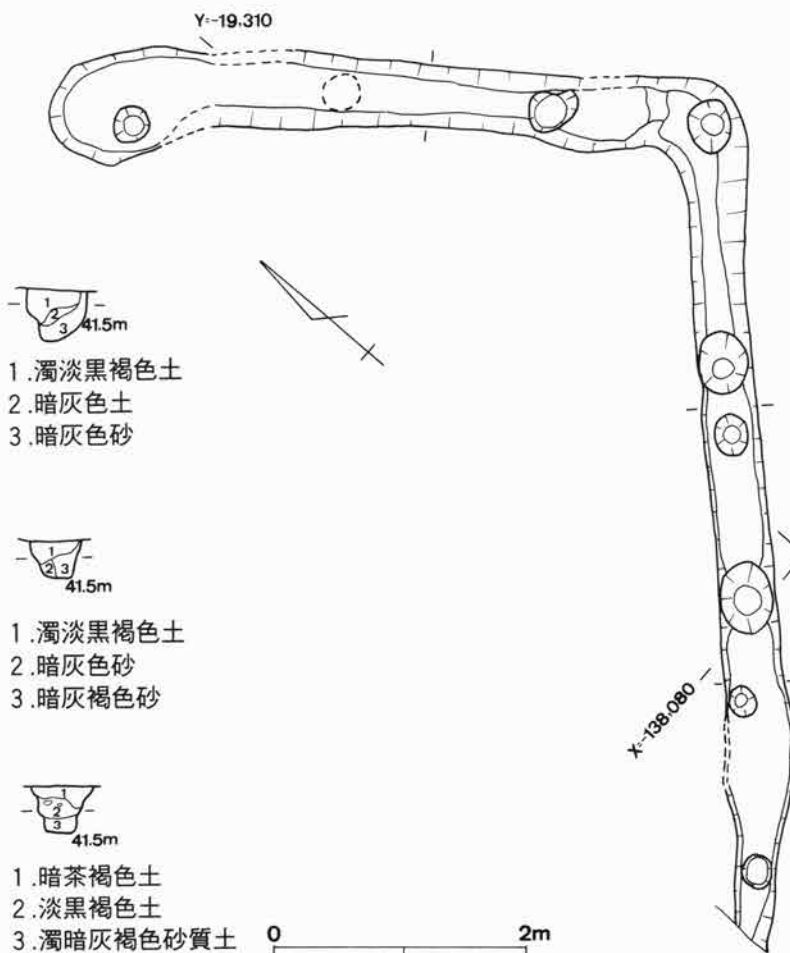
なお、森垣外遺跡の北東には野見宿禰の墳墓推定地である通称「丸山」と呼称される独立丘陵が所在している。詳細については、『精華町史』に詳述されているが、考古学的調査の結果によると、古墳である可能性はなく、裾部が人為的に円形に成形された独立丘陵であることが判明している。

以上のように、古墳時代の集落が、森垣外遺跡周辺に点在することが確認されており、森垣外遺跡とどのような関係があったのかが今後の検討課題である。しかし、少なくとも検出遺構や出土遺物の様相から、森垣外遺跡が周辺地域での中核的集落であったことについては、疑義をはさむ余地はないものと思われる。

次に、地名および文献からの歴史的環境を記述しておきたい。南山城地域の南半部には、山城町に上狛(かみこま)、精華町に下狛(しもこま)の地名があり、高麗寺(こまでら)など、高句麗を示す狛(こま)の呼称が散見できる。当該地域は、『和名抄』郡郷部に、山城国相楽郡大狛郷、下

狛郷と見え、古代における高句麗系氏族である狛氏の拠点であったと推測されている。また、南山城と高句麗系渡来人との関係については、『新撰姓氏録』山城国諸蕃に、黄文連、高井造、狛造などの高麗系氏族の名が見え、古代、南山城一带に高句麗を中心とした渡来系氏族が居住していたことを推察させる。

一方、『日本書紀』欽明天皇三十一年条には山城国の相楽館の記事が見られ、同欽明天皇二十六年五月条、『三代実録』貞観三年八月十九日条には、6



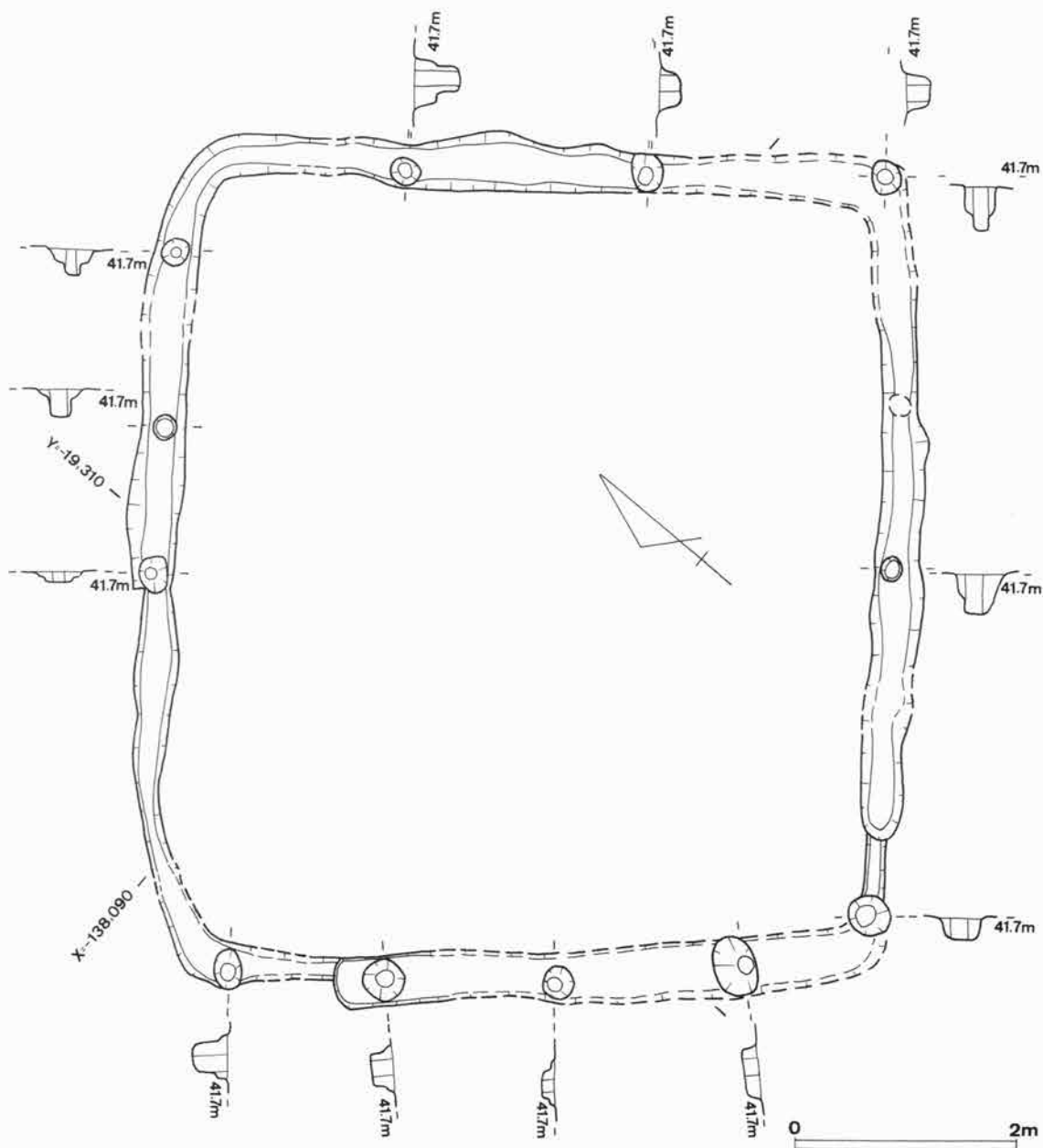
第29図 大壁住居跡143実測図

世紀代に高句麗系渡来人が、山城国に居住していたことを窺わせる記事が見える。

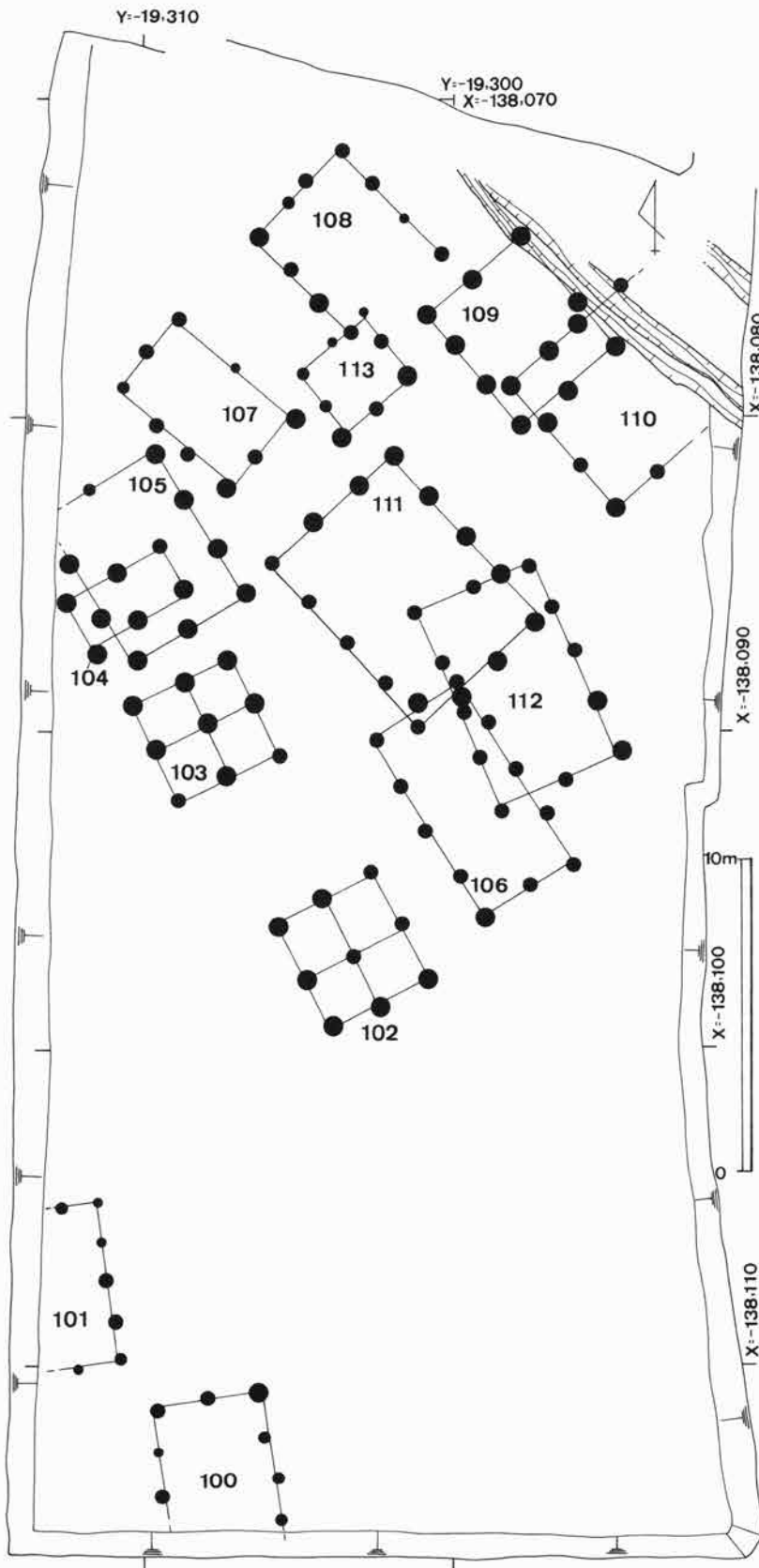
森垣外遺跡から出土する朝鮮半島系考古資料が、これらの文献記載事項と何らかの関連があることも視野に入れ、新出資料の検討を行う必要がある。

3. 第2・3次調査の概観(第86～88図、図版第38～44)

平成9年度に実施した第2次調査では、府内初出の5世紀後半に比定できる大壁住居跡639を検出し、更に、縄蓆文土器の出土により、渡来系技術者の居住が推測できた。また、柱穴内からTK216型式の甕と土師器の高杯が出土したことにより、集落の成立時期が判明した。なお、掘立柱建物跡による集落の中心時期は、TK23～47型式併行期である。一方、中核的な掘立柱建物



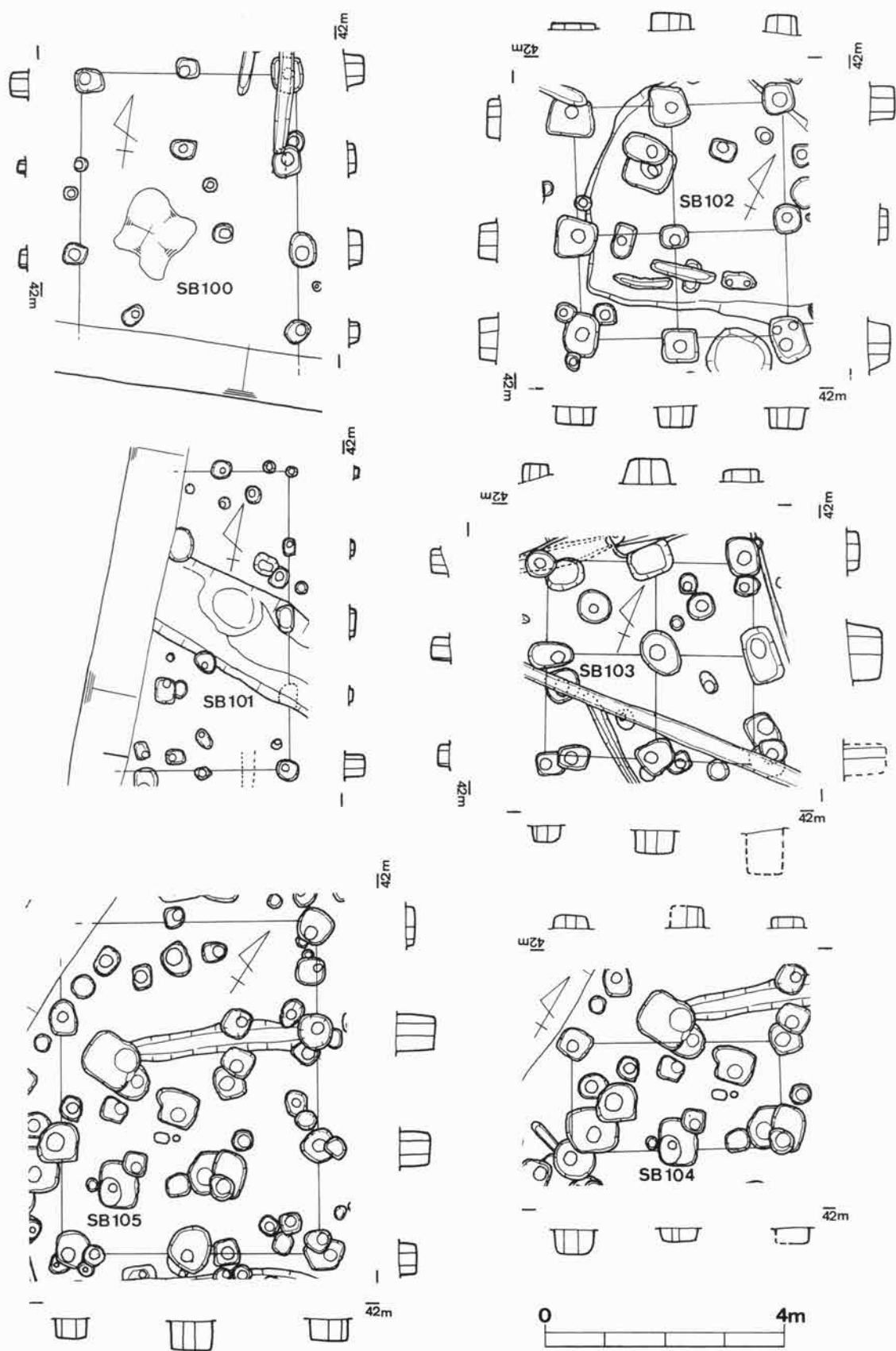
第30図 大壁住居跡585実測図



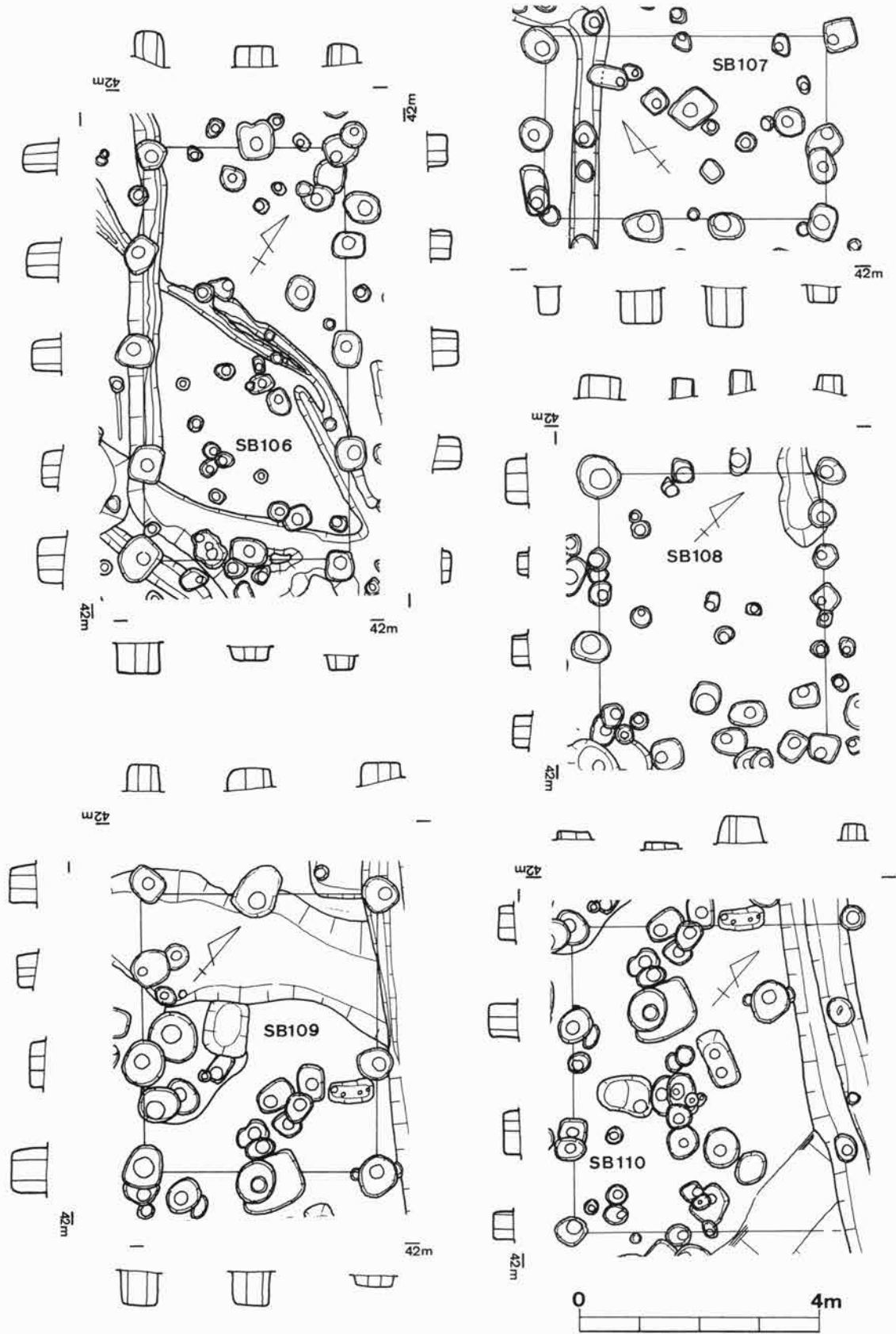
第31図 A3地区掘立柱建物跡分布図

跡群が廃絶した後のMT15型式段階に堅穴式住居跡群が形成されることも判明し、集落の変遷を考える上で重要な基礎資料を得ることができた。これらの調査成果は、南山城地域における初出資料を多く含んでおり、古墳時代中期集落の様相を理解できる遺跡として認識されるに至った。

平成10年に実施した第3次調査では、B1地区においてTK23~47型式に比定できる大型の掘立柱建物跡を複数棟検出するとともに、それを囲繞する一辺46mの方形区画溝を検出した。また、C地区において同時期の掘立柱建物跡群とそれを囲繞する区画溝を検出し、集落内には大型の掘立柱建物跡群を囲繞する施設が、少なくとも2個所に及ぶことが判明した。なお、先述した精巧に作製された



第32図 掘立柱建物跡100～105実測図



第33図 掘立柱建物跡106～110実測図

鏡形滑石製模造品がC地区の流路5から出土している。

以上のように第2・3次調査では、それまで古墳時代中期の集落が確認されていなかった南山城地域において、墳墓以外からの古墳時代研究が可能な先進的集落として認識されるに至った。本報告とあわせて、今後、さらなる歴史的な位置づけが必要である。なお、第86～88図に各地区の平面図を掲載した。

4. 調査の概要(図版第15・16)

本報告は、先述したように平成11年度に実施したA3、B2地区と平成12年度に実施したB3地区の概要である。B2地区は、B2-1トレンチとB2-2トレンチに分割して調査を実施した。また、平成12年度のB3地区もそれらと隣接していることから、検出した遺構番号は、2か年度におよぶものの連番とした。また、第26図には各々のトレンチを調査年度毎に示したが、遺構実測図などにはB2地区とB3地区を区分せず、一括して掲載した。

以下、A3地区、B2地区、B3地区の順に概観する。

(1) A3地区(図版第17)

A. 層位(第27図)

森垣外遺跡は、南西から北東にかけてゆるやかに傾斜する地形を呈しており、また、近世の新田開発により、同一地区において南西側の削平が著しく、北東側の遺構残存状況は比較的良好である。基本的な堆積状況は、耕作土である第1層(L.N.1)下に床土である第2層(L.N.2)が堆積し、中世の遺物をわずかに包含する第3層(L.N.3)が堆積する。その下層には、わずかではあるが、淡黒褐色土を主体とする古墳時代中期から後期の包含層である第4層(L.N.4)が確認できる。なお、淡黄褐色砂質土である地山には、遺物は包含しておらず、遺構の多くは、当該堆積土上において検出した。

B. 検出遺構(第28図)

検出した遺構は、古墳時代中期から後期の大壁住居跡、掘立柱建物跡、区画溝、竪穴式住居跡、土坑が大半を占めるが、既知の調査では未検出であった飛鳥時代の井戸や奈良時代の池沼、古道なども確認することができた。以下、時代順に概観したい。

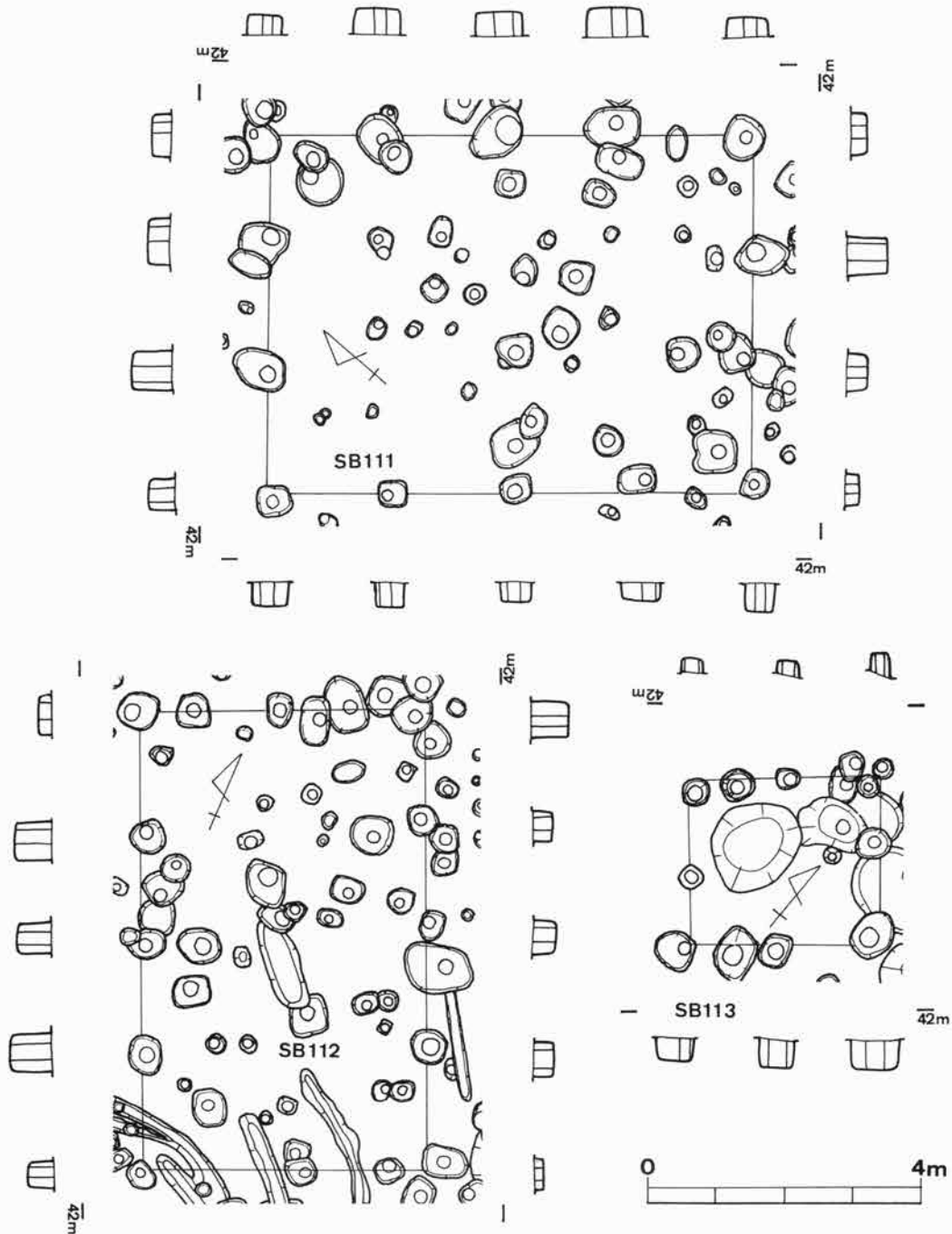
a. 古墳時代

大壁住居跡143(第29図、図版第18) トレンチ端での検出であり、遺構の全容は把握できない状況である。基本的な構造は、深さ0.4mの基礎布掘り溝の底部に柱穴を等間隔に穿っており、北角の溝は断絶している。北東辺の溝の長さは、5.5mであり、南東辺の溝の検出長は7mである。北東辺の溝底部には、おおむね1.8m毎に柱穴を穿っており、南東辺の溝にも1.8m毎に柱穴を穿っている。なお、南東辺には、補助的な小柱穴を穿っている。住居跡の主軸は、座標北から東へ47°の角度をもっている。

大壁住居跡585(第30図、図版第20-1) 柱穴や竪穴式住居跡が密集する個所での検出であり、基礎となる布掘り溝は、部分的にすでに消失している。住居跡の主軸は、座標北から西へおおむ

ね45°振っており、南西辺は溝最深部間で6.5m、北西辺は7mを測る。また、南西辺の溝底部には、1.5m間隔に柱穴を穿ち、北西辺ではわずかな誤差もあるが、おおむね1.5m間隔に柱穴を穿っている。なお、床面積は約46m²であり、第2次調査で検出した大壁住居跡639の約50%の床面積である。

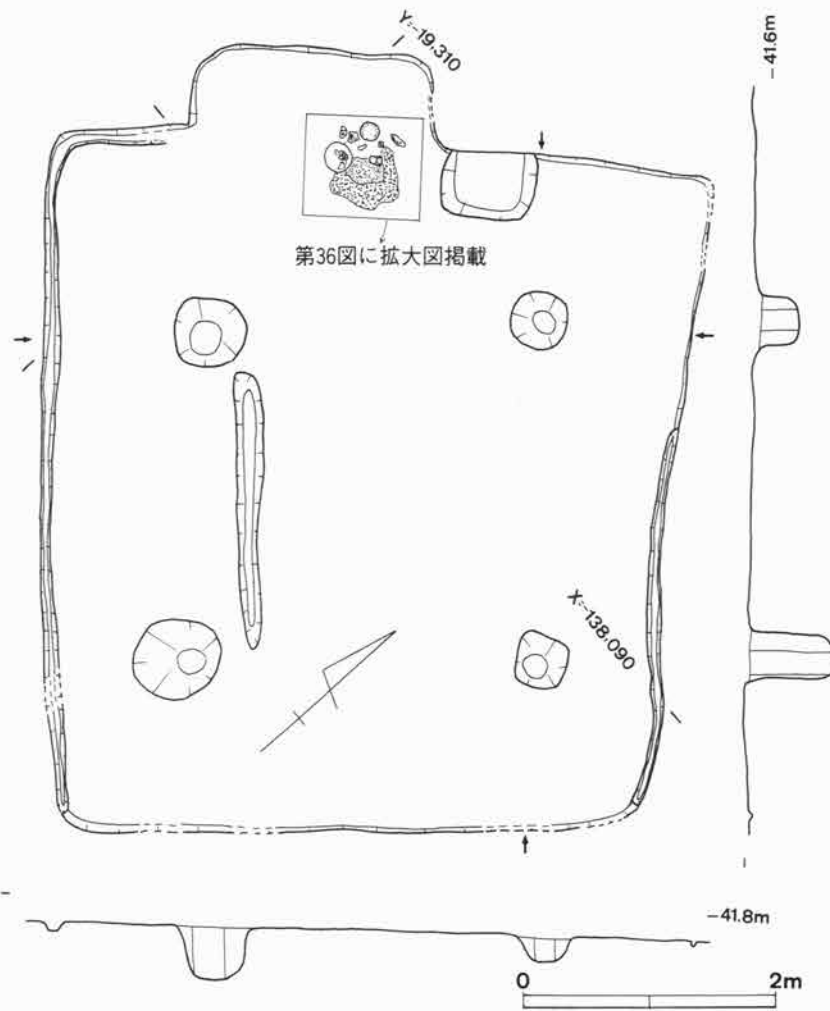
掘立柱建物跡(第31図、図版第19) 検出した柱穴は、約700を数えるものの、埋土や出土土器の検討から復原し得た掘立柱建物跡は、わずかに13棟を数えるに過ぎない。調査地の東西幅が23



第34図 掘立柱建物跡111～113実測図

m前後であり、掘立柱建物跡を復原する上では必ずしも好条件ではない。以下、現時点で復原し得た掘立柱建物跡について概観する。なお、掘立柱建物跡の付番は、第2次調査以後、棟数を把握する目的で順番に付してきている。本概要報告でも100番以降の番号を付して概観したい。

掘立柱建物跡100(第32図) 梁間2間(3.6m)・桁行3間以上(4.6m以上)の規模を有し、建物の主軸は、座標北から8°西へ振っている。床面積は17m²以上である。



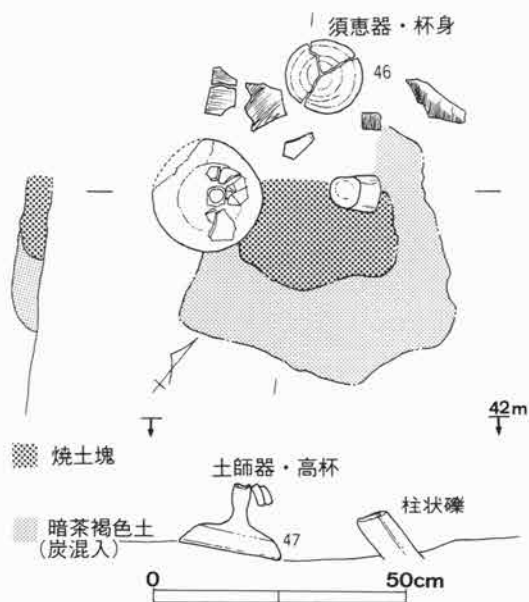
第35図 竪穴式住居跡396実測図

掘立柱建物跡101(第32図) 梁間1間以上(2.7m以上)・桁行4間(5.0m)の規模を有し、建物の主軸は、座標北から11°西へ振っている。床面積は14m²以上である。

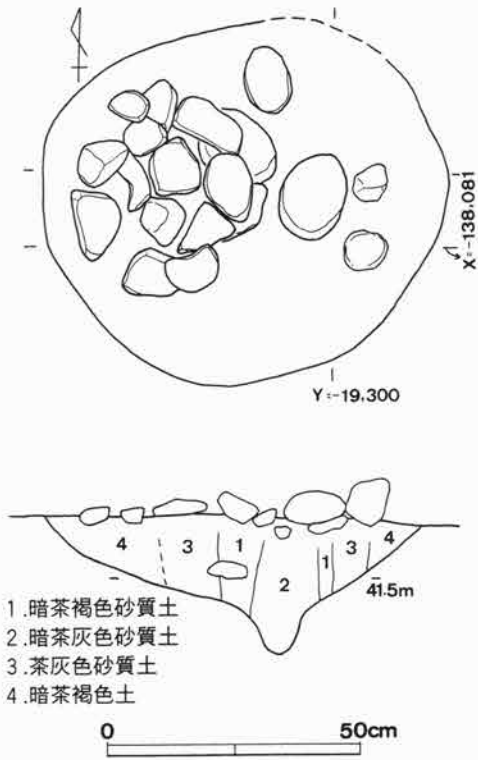
掘立柱建物跡102(第32図) 梁間2間(3.8m)・桁行2間(3.5m)の総柱の建物跡である。建物の主軸は、座標北から27°西へ振っており、床面積は13m²である。

掘立柱建物跡103(第32図) 梁間2間(3.5m)・桁行2間(3.4m)の総柱の建物跡である。建物の主軸は、座標北から22°西へ振っており、床面積は12m²である。

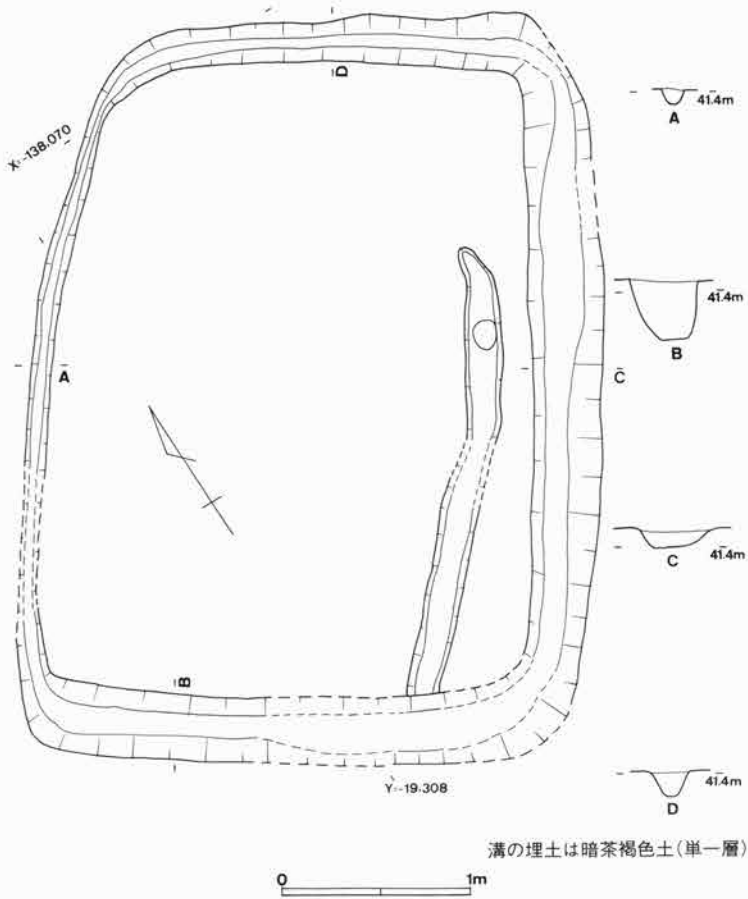
掘立柱建物跡104(第32図) 梁間1間(1.8m)・桁行2間(3.5m)の規模を有し、



第36図 竪穴式住居跡396竈実測図



第37図 礫充填土坑11実測図



第38図 方形周溝140実測図

建物の主軸は、座標北から60°東へ振っている。床面積は7㎡である。

掘立柱建物跡105(第32図) 梁間2間(4.3m)・桁行3間(5.4m)の規模を有し、建物の主軸は座標北から32°西へ振っている。床面積は23㎡である。

掘立柱建物跡106(第33図) 梁間2間(3.5m)・桁行3間(6.9m)の規模を有し、建物の主軸は座標北から34°西へ振っている。床面積は24㎡である。

掘立柱建物跡107(第33図) 梁間2間(3.0m)・桁行3間(4.7m)の規模を有し、建物の主軸は座標北から42°西へ振っている。床面積は14㎡である。

掘立柱建物跡108(第33図) 梁間3間(3.8m)・桁行3間以上(5.0m以上)の規模を有し、建物の主軸は、座標北から45°西へ振っている。床面積は19㎡以上である。

掘立柱建物跡109(第33図) 梁間2間(3.8m)・桁行3間(4.6m)の規模を有し、建物の主軸は座標北から40°西へ振っている。床面積は18㎡である。

掘立柱建物跡110(第33図) 梁間2間(4.6m)・桁行3間(5.1m)の規模を有し、建物の主軸は、座標北から42°西へ振っている。床面積は24㎡である。

掘立柱建物跡111(第34図) 梁間3間(5.2m)・桁行4間(7.8m)の規模を有し、建物の主軸は、座標北から40°西へ振っている。床面積は41㎡であり、当該地区において検出した掘立柱建物跡の中で最大規模を有している。

掘立柱建物跡112(第34図) 梁間2間(4.2m)・桁行4間(6.8m)の規模を有し、建物の主軸は、

座標北から24°西へ振っている。床面積は29m²である。

掘立柱建物跡113(第34図) 梁間2間(2.4m)・桁行2間(2.8m)の規模を有し、建物の主軸は、座標北から52°東へ振っている。床面積は7m²である。

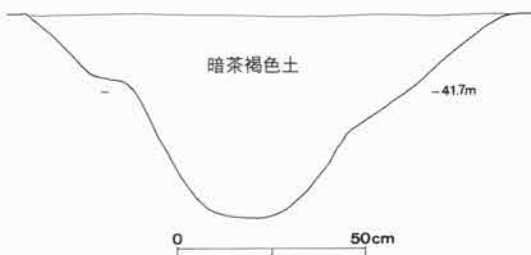
以上が、検出した掘立柱建物跡の概要であるが、トレンチ南半部分での検出がわずかである要因としては、後述する奈良時代の池沼21によって消失したことが考えられる。また、既往の調査と同じく、掘立柱建物跡の主軸は、地形の傾斜と一致しており、主軸方位による厳密な時期設定は基本的にはなし得ない状況下にある。

区画溝132(第28図、図版第21-3・22-1・2) 平成9年度A地区で検出した溝と同一の遺構である。溝は2段に掘り込まれており、検出面の溝幅は1.1mを測り、下段の溝幅は0.6mである。深さは、最深部で0.6mを測っており、断面観察から完全に埋没するまでに複数回の改修が行われたと考えられる。溝内からTK47型式の杯身や有蓋高杯や製塩土器などが出土した。

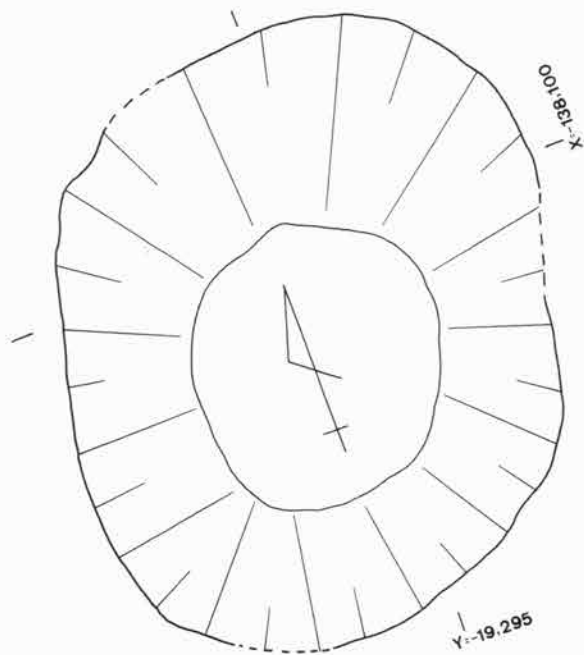
竪穴式住居跡396(第35・36図、図版第20・21-1・2) 座標北からおおむね45°に主軸をもち、北東辺と南西辺の距離は5.7m、北西辺と南東辺の距離は5.5mを測る。北東辺中央部には、幅2m・奥行き0.6mの拡張部があり、全体の床面積は33m²である。拡張部の北東寄りには、上下を反転させた土師器の高杯と角柱礫による竈の焼き口基部が残存し



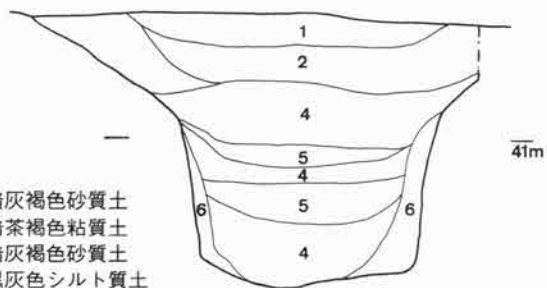
Y:-19.312



第39図 土坑395実測図



0 1m



1. 暗灰褐色砂質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗灰褐色砂質土
4. 黒灰色シルト質土
5. 暗灰色シルト質砂
6. 緑灰色シルト砂質土

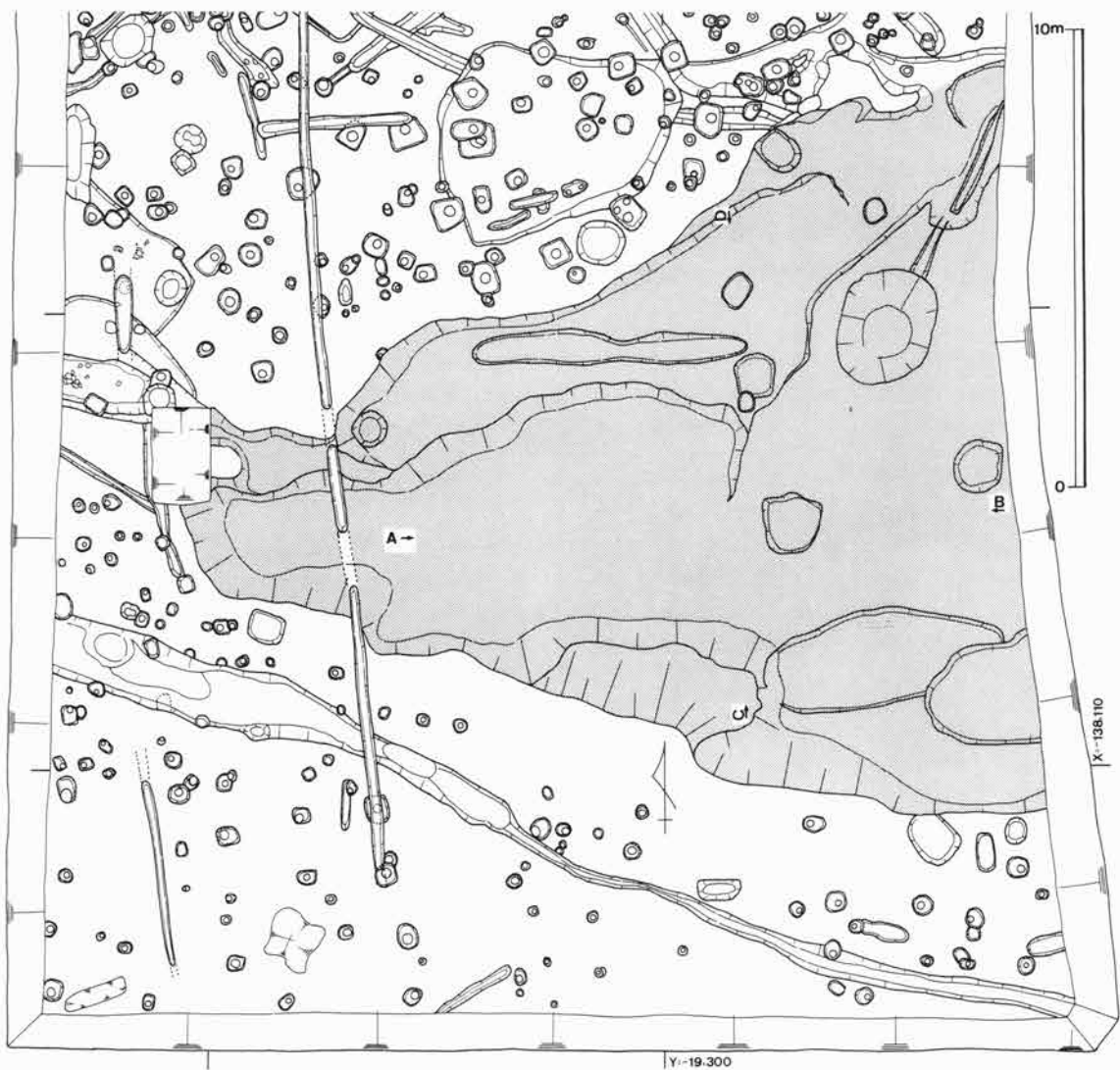
第40図 井戸31実測図

ており、その前面には焼土と炭層が堆積している。なお、焚き口後背部に、完形の須恵器の杯身を反転させて据えており、竈の基部構造の一部と考えられる。

礫充填土坑11(第37図、図版第24-2) 直径が0.7~0.8mの円形を呈しており、検出面直下に礫が充填されている。検出面では不明瞭であるが、垂直方向に堆積する土層を確認しており、土坑内を複数の円形に分割する施設がかつて存在した可能性がある。用途については不明であるが、古墳時代中期後半の土器片が出土している。

方形周溝140(第38図、図版第22-3) 溝最深部での計測では長辺3.7m・短辺2.7mを測る隅円長方形の周溝である。埋土は、暗茶褐色土の単一層であり、人為的に埋められた可能性が高い。溝底部には柱穴などは検出しておらず、当該遺跡で複数棟検出している大壁住居跡とは様相が異なっている。現時点における用途は、特定できない。方形周溝の主軸は、北から東へ32°の角度をもっている。

土坑395(第39図、図版第23-1・2) 長軸1.2m・短軸1.0mの不整形な円形土坑である。中央部での深さは0.5mを測り、断面形態は掘り鉢状を呈している。土坑内から第46図に見られる



第41図 池沼21実測図(アミ部)

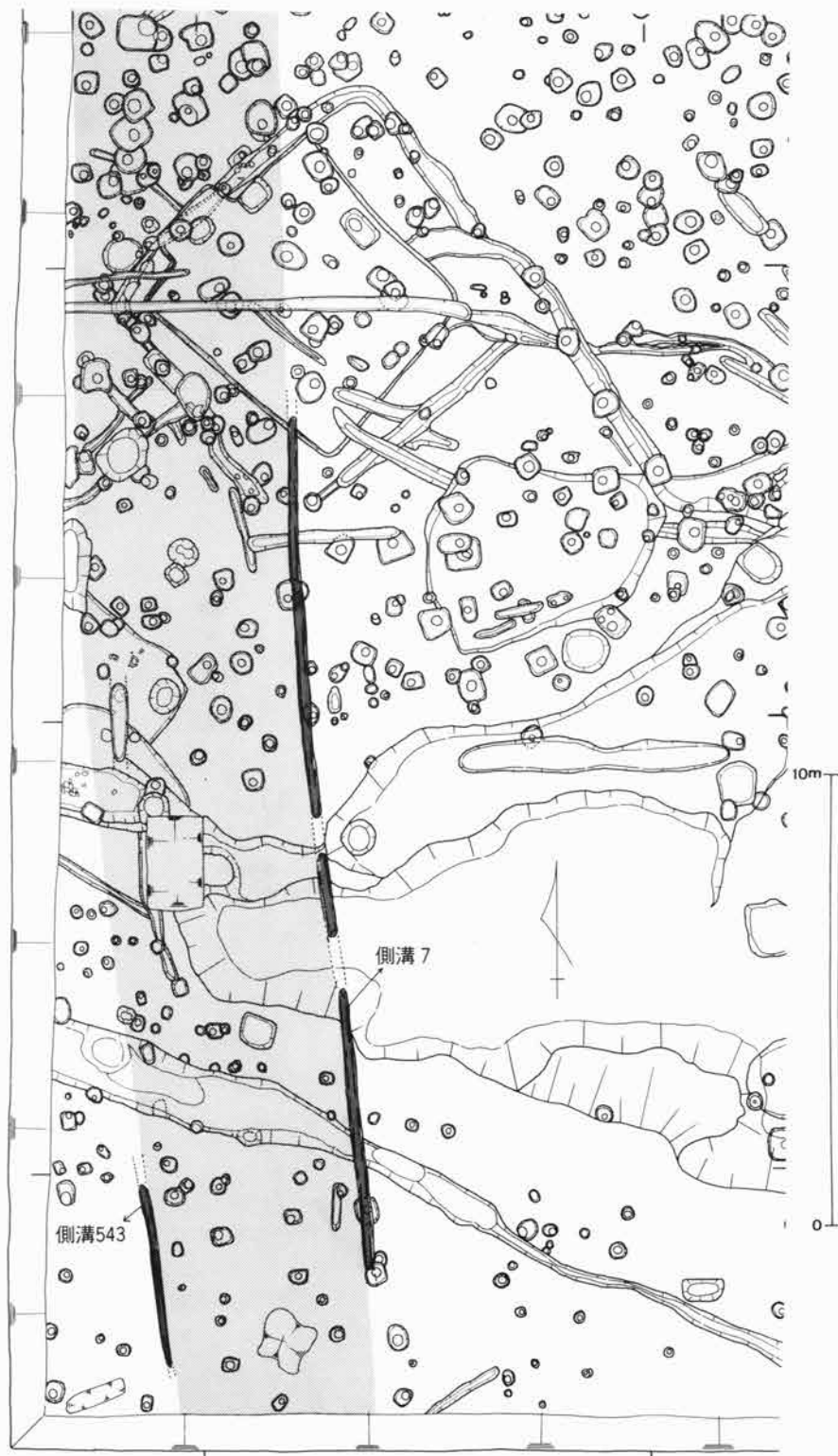
土師器の壺や甕・甑・須恵器の蓋杯や高杯などが出土している。完形土器も多く出土しているが、土器の出土状況には一定の埋納意図は看取できないことから、廃棄を目途とした土坑と考えられる。おおむねTK47型式前後に比定できよう。

b. 飛鳥時代以降

当該遺跡は、古墳時代中期から後期にかけての集落跡であることを把握しているが、飛鳥時代以降の遺構もわずかではあるが検出している。

井戸31(第40図、図版第23-3)後述する池沼21の埋土を除去した段階で検出した長径2.6m・短径2mの井戸跡である。最深部は1.1mを測り、ほぼ水平土層が堆積している。井戸枠などはすでに抜き取られている。埋土中から須恵器や土師器の一括資料が多く出土し、南山城地域において7世紀段階の良好な基準資料となる。

池沼20(第27・41図) トレンチ南半部において検出した池沼であ



第42図 古道復元想定図(側溝7・543)

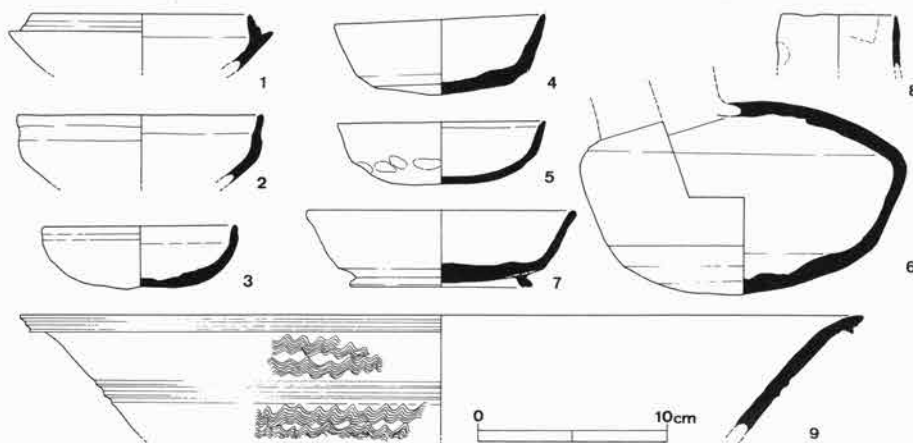
る。最大幅が14.8m、検出長が18.6mを測り、最深部で約0.5mを測る。最下層には、粘土が堆積しており、植物遺体などが遺存していることから、不整形な池沼として認識できる。当該遺跡では、丘陵上部からの人為的な流路や自然流路を各地区において検出したが、池沼21も集落内の雨水などを集水する用途が想定できる。



第43図 方形木組土坑27実測図

古道側溝7・543(第42図、図版第24-1) 古墳時代の遺構検出に主眼をおき、調査を進めたため、道路側溝である溝7および溝543の検出状況は不良である。両側溝間の距離は、おおむね4.8mを測り、溝自体の残存は深さ0.1mである。当該遺構と関連する溝は、平成10年度のB1地区や精華町教育委員会が実施した北尻遺跡において検出されている。北尻遺跡は、森垣外遺跡の北方に隣接する遺跡であり、一連の2条の溝は、同一である可能性がある。溝幅がきわめて狭いものの、古道として認識できる。

森垣外遺跡では、丸瓦や平



第44図 出土遺物実測図

1・2：柱穴376 3：柱穴5 4～6：柱穴23 7：柱穴4 8：柱穴544 9：溝19

瓦のほか、風字硯などの須恵器や緑釉陶器や灰釉陶器が出土しており、一般的な集落とは様相が異なっている。検出した古道は、当該遺跡と周辺域に所在する集落を接続する用途があっ

たと考えられる。各遺跡の存続時期を確認した上で、検証を深めなければならない。

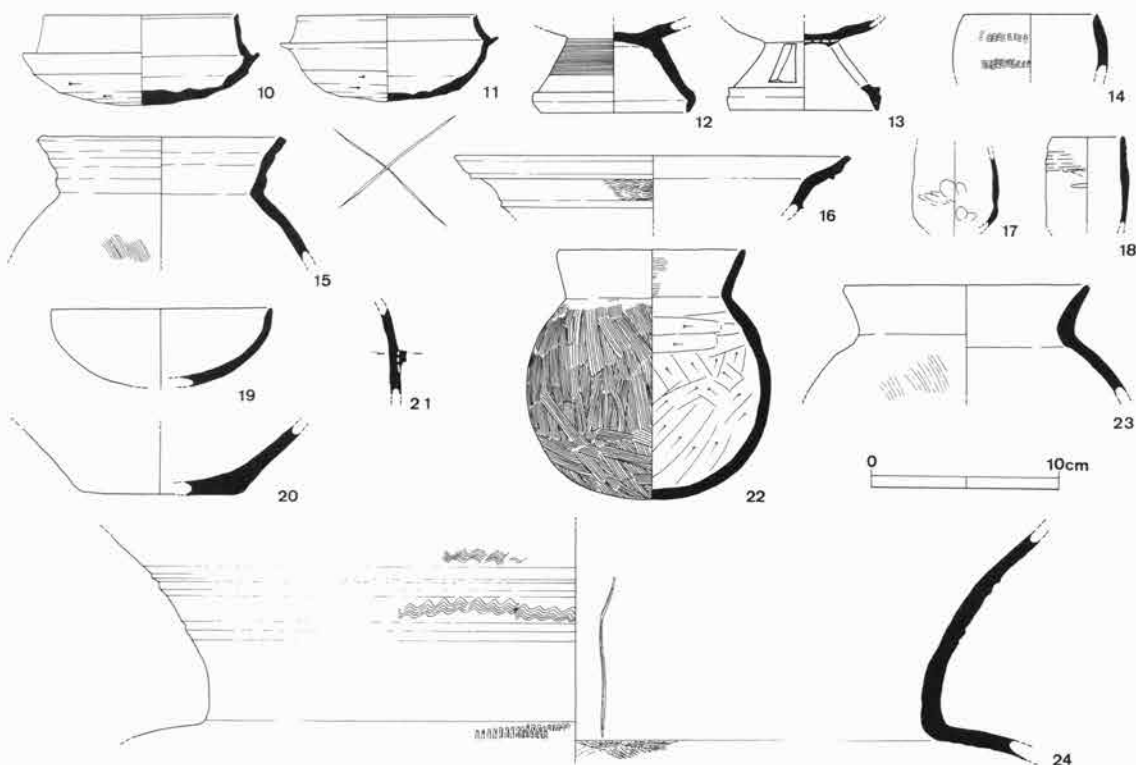
方形木組遺構(第43図、図版第24-3) 先述した池沼21の底面において検出した。基本的には0.7m四方の木組の南側に南端が不整な円形を呈する土坑が付設されている。木組の残存状況は極めて不良であり、最も深い部分で0.15mを測るに過ぎない。坑内から土師器の甕の破片が出土している。用途については不明であるが、池沼の埋土下からの検出であることから、池沼と関連する水溜めの可能性もある。

C. 出土遺物

検出した柱穴は、概数1,000を数える。全ての柱穴から遺物が出土しておらず、掘立柱建物跡の詳細な年代は、設定し得ない状況であるが、古墳時代から奈良時代の遺物を含め、柱穴出土遺物について概観しておきたい。

柱穴出土遺物(第44図、図版第25-1・2) 1は、柱穴376から出土したTK209型式に比定できる須恵器の杯である。3は、柱穴5から出土した土師器の椀である。4~6は、柱穴23から出土した須恵器、土師器である。7は、柱穴4から出土した須恵器の杯Bである。9は、柱穴19から出土した須恵器の器台である。おおむねTK47型式に比定できる。

区画溝132出土遺物(第45図) 大半の遺物が溝底部から出土している。TK23~TK47型式に比定できる須恵器の蓋杯と高杯、大型甕が出土し、甕などの土師器とともに製塩土器が出土している。平成10年度のA地区南端において検出した溝と同一であり、良好な一括資料を追加することができた。なお、有蓋高杯の脚部には、端部が著しく内側に屈曲し、透かし孔をもたない12と脚端部が肥厚し、3方に方形透かし孔をもつ13がある。17・18の製塩土器は、外表面に平行タタ

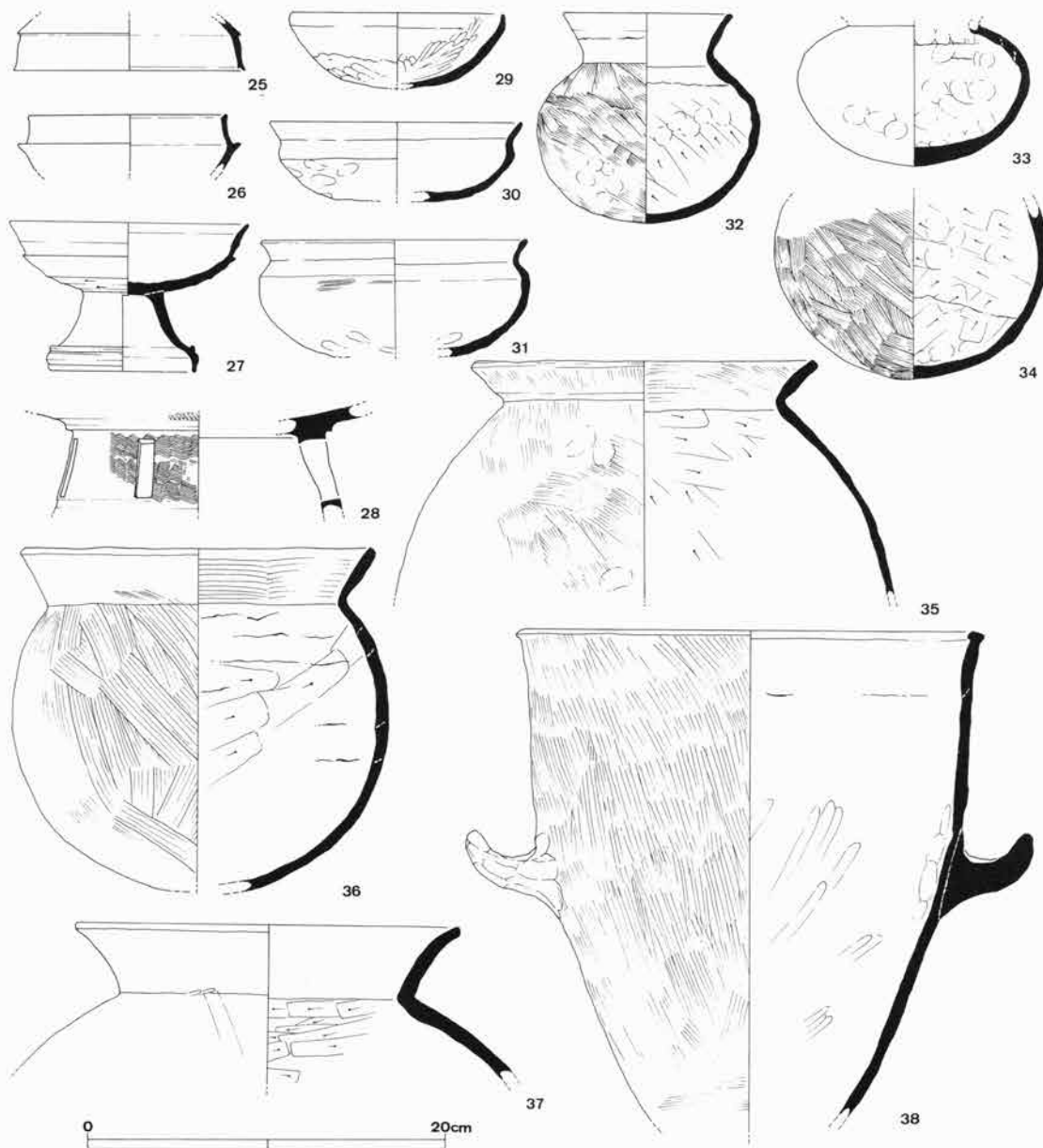


第45図 出土遺物実測図(区画溝132)

キが観察できることから、中部瀬戸内沿岸一帯からの搬入品と考えられる。21は、張り付け突帯をもつ須恵器片で、胎土は緻密であり、焼成は良好である。器形は細片のため不明である。

土坑395出土遺物(第46図) 須恵器の蓋杯は、口縁端部が内傾する特徴をもつことからMT15型式に比定できる。また、受け部と脚部の接合部分のみの出土ではあるが、器台28が出土している。また、脚部に透かし孔をもたない無蓋高杯がある。一方、共伴する土師器には外湾する口縁部をもつ35・37と外反し、内面に明瞭なハケ目を施す36がある。また、土師器には壺や甑がある。MT15型式に比定できる一括資料である。

包含層出土緑色凝灰岩原石(第47・48図) 明確な遺構からの出土ではないが、古墳時代の遺構検出面である第4層から図化可能な緑色凝灰岩原石が7点出土している。39は最大長4.9cm、40は最大長2.1cm、41は最大長3.2cm、42は最大長4.3cm、43は最大長3.0cm、44は最大長2.5cm、45

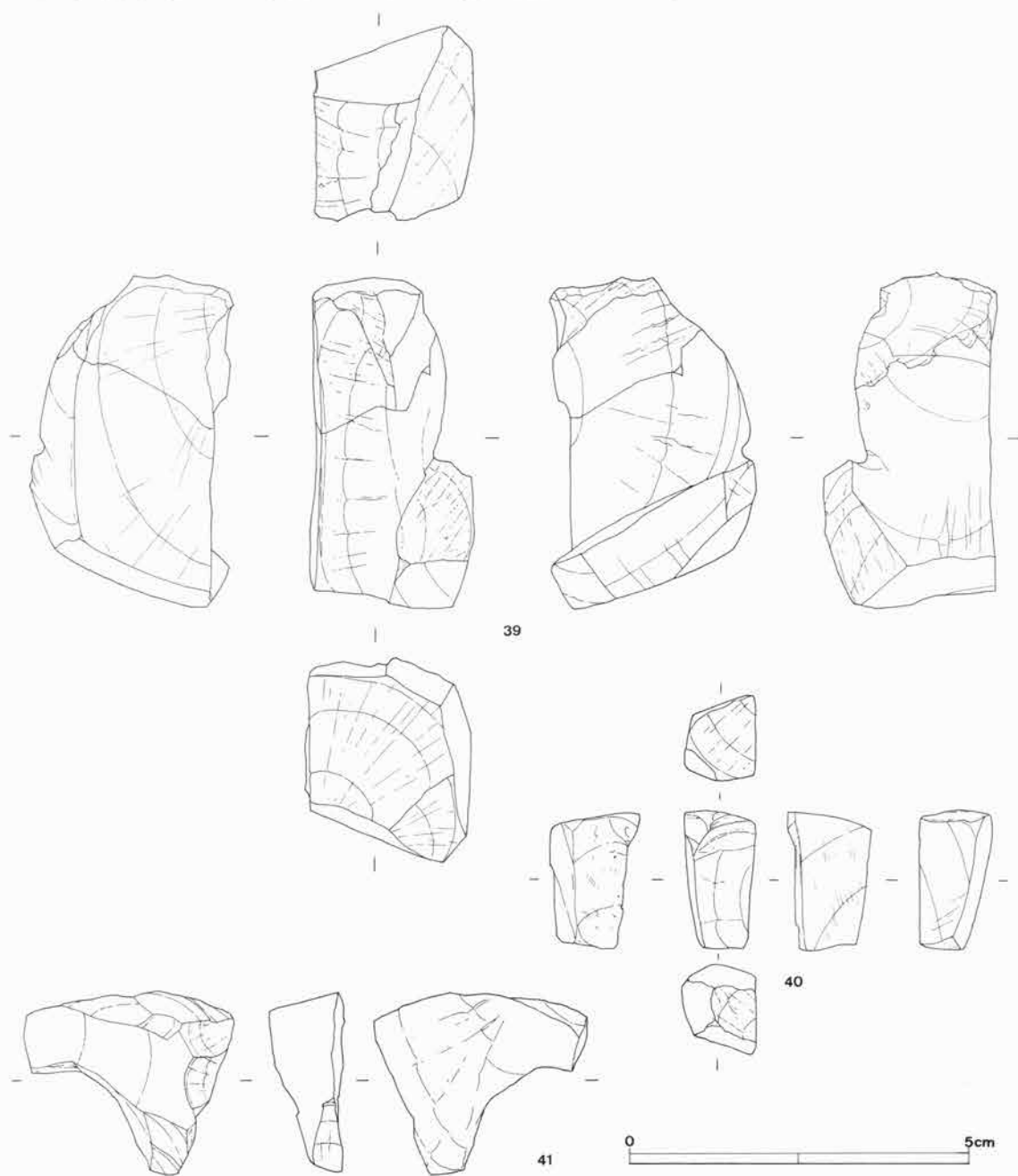


第46図 出土遺物実測図(土坑395)

は最大長2.3cmを各々測る。なお、39・42は接合資料である。

森垣外遺跡では、緑色凝灰岩製の管玉(第77図455)が出土しており、また、滑石原石や玉作り工具と見られる砥石、鉄製品などが出土していることから、当該遺跡地内において玉作りが行われたことを示している。

竪穴式住居跡396出土遺物(第49図) 46はT K43型式に比定できる須恵器の杯身である。47は中空の脚柱部と平らな杯底部と外反する口縁部からなる土師器の高杯である。48は口径3.4cm・器高4.0cm・底径1.0cmを測る甌の土製模造品である。手捏ねによって成形されており、外面には2個所に把手が付き、底部には、甌底部の穿孔を意図した錐状工具による未貫通の刺突痕が観察できる。類例の少ない土製品として、その事例研究がまたれる。

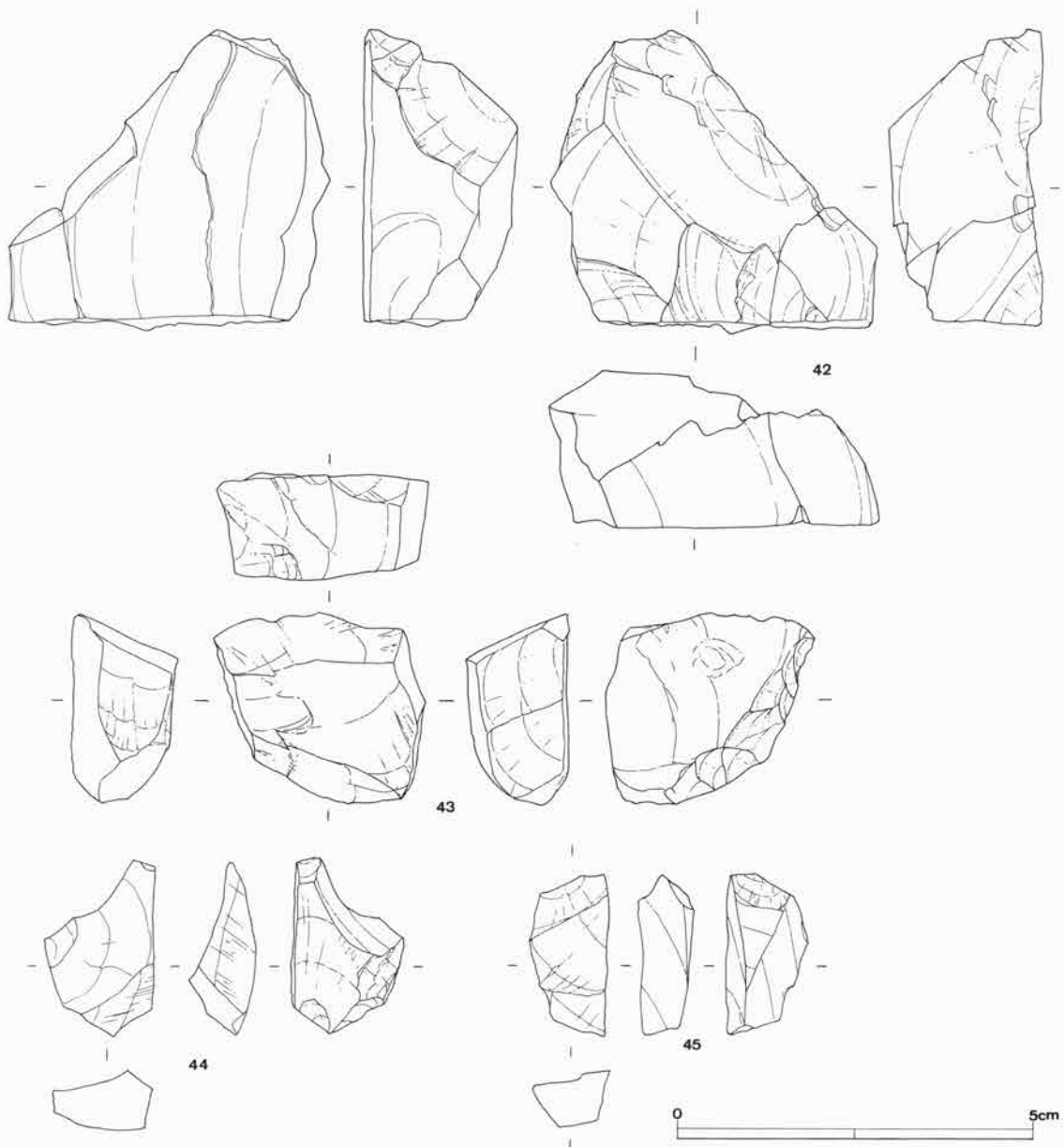


第47図 緑色凝灰岩原石実測図(包含層)

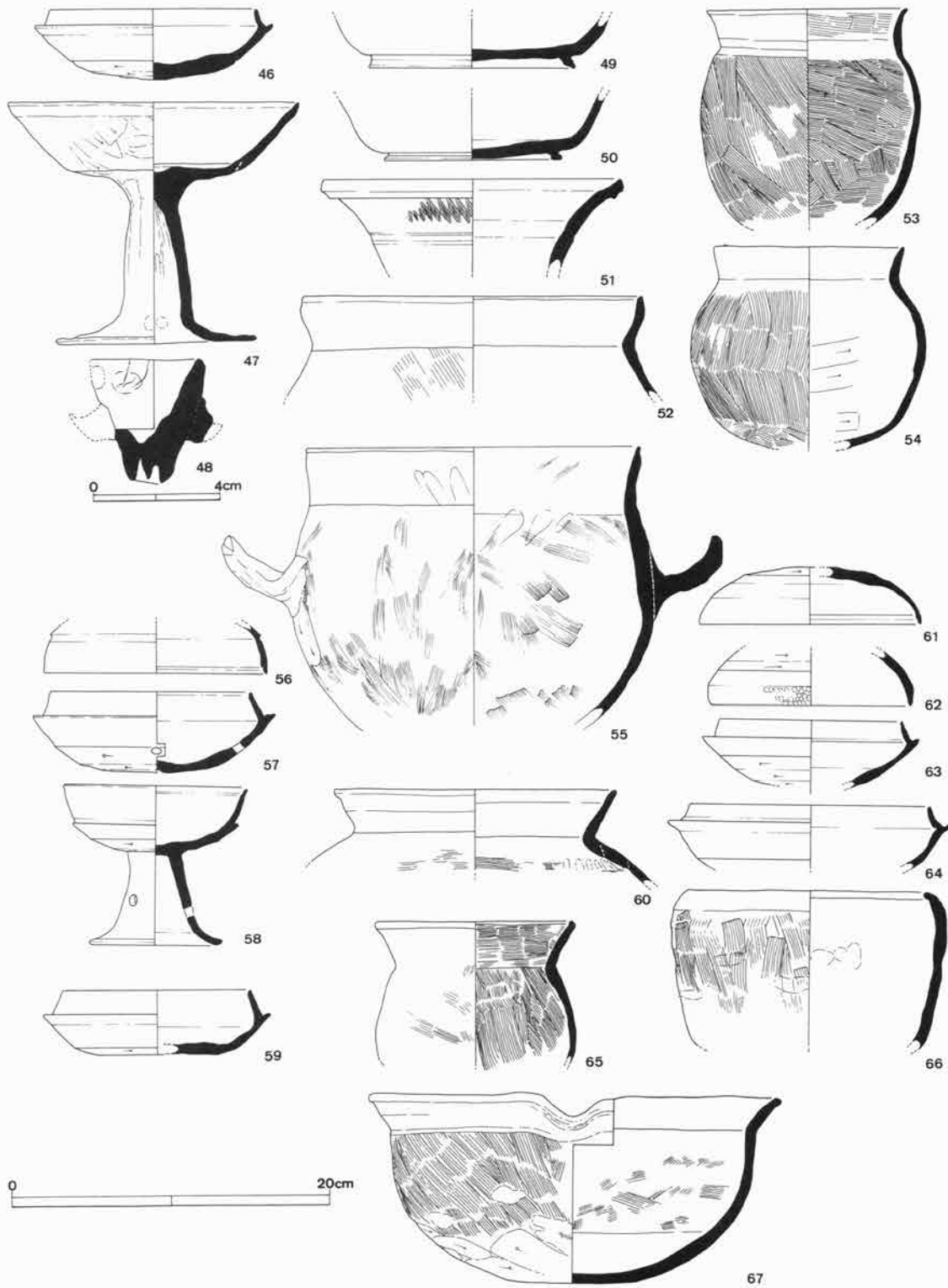
土坑28出土遺物(第49図) 57は、TK43型式前後に比定できる須恵器の杯身である。焼成後の穿孔が観察できる。

土坑546出土遺物(第49図) 須恵器の蓋杯は、TK43型式の特徴を有している。66は、口径14.8cmを測る製塩土器であり、口縁端部が内側に屈曲する形態的特徴をもつ。形態から律令期に属する可能性もある。67は、口径26cm・器高12cmを測る片口の鍋である。

井戸31出土遺物(第50図) 須恵器の杯蓋には、口径10.8cmを測る68と15cm前後を測る69、70の2種に分類できる。また、内面にかえりをもつ蓋71も出土している。一方、杯身は、口径10cm前後の76と77、口径12cm前後の74と75に分類できる。これは杯および蓋においても同じ傾向であることが指摘できる。78は、胴部最大径が8.8cmを測る須恵器の甕である。胴部中央には注ぎ口を固定するための粘土塊を付している。



第48図 緑色凝灰岩原石実測図(包含層)



第49図 出土遺物実測図

46～48：竪穴式住居跡396
57・58：土坑28

49～52：溝19
59：S X 14

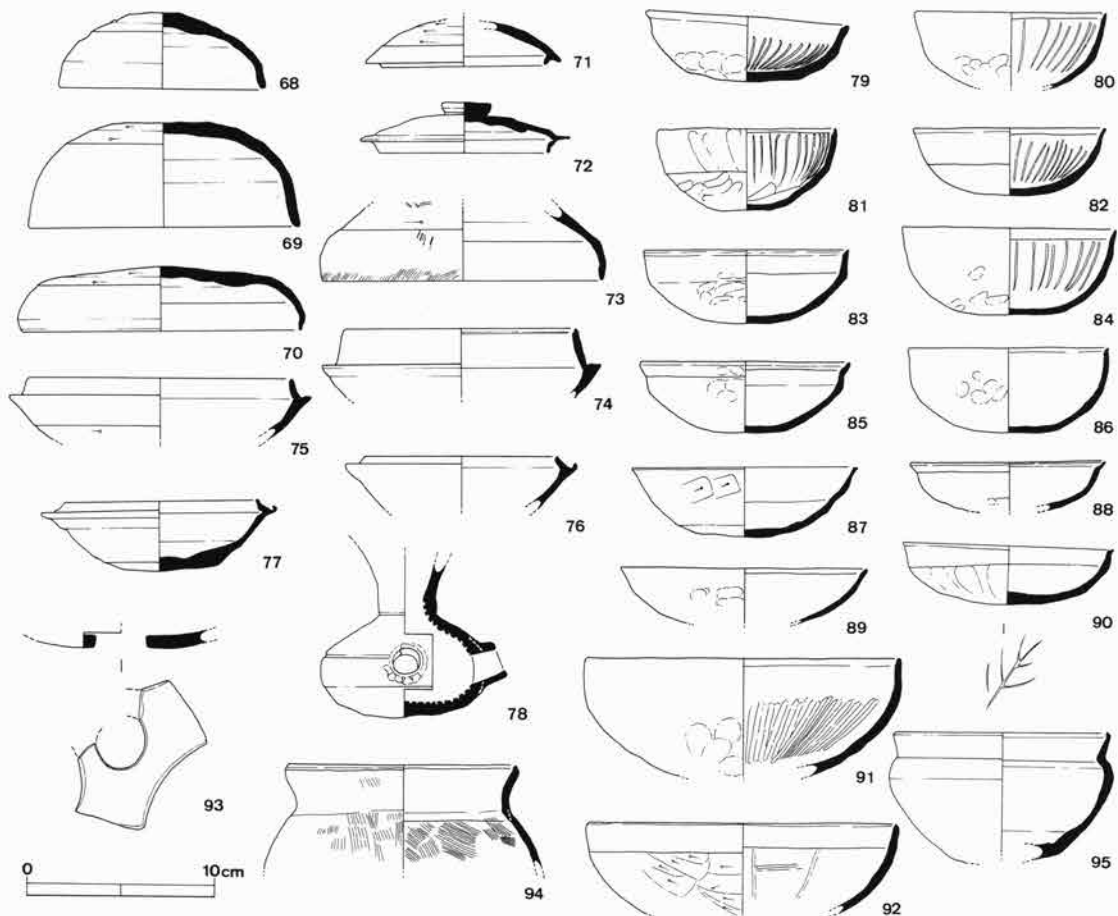
53・54：溝467
60：S X 549

55：土坑27
61～67：土坑546

79は、胎土が良好で、赤褐色を呈する土師器の椀である。内面見込みには、ていねいな暗文を施しており、底部外面にはわずかながら指頭圧痕が観察できる。胎土及び色調などから都城で出土するいわゆる律令的土器様式の範疇で把握されるべき搬入土器である。一方、80～82は、淡褐色の色調を呈し、内面には稚拙な暗文が施されている。胎土などから79とは様相が異なっており、律令的土器様式の範疇で把握されるべき搬入土器を模倣した土師器である。また、84は、暗文自体が沈線化しており、稚拙な模倣土器として認識できる。85・87・88は、口縁端部がわずかに外湾する特徴をもつ杯である。また、90は、底部外面に葉脈の圧痕が観察できる。

以上のように、井戸31の一括土器群は、TK217型式前後に比定できる良好な資料群であり、今後は、南山城地域における当該時期の基準資料にならう。

池沼20出土遺物(第51図、図版第25-3) 116は、穿孔部を口縁端部下にもつ弥生時代中期の無頸壺である。当該遺跡では、後述するように弥生時代中期の土坑を検出しており、本資料も弥生時代の遺物出土地点の広がりとして認識できよう。96は、TK43～209型式に比定できる須恵器の杯身である。118のフラスコ形土器や119の提瓶も同型式の範疇で把握すべき土器群であろう。98～103は、須恵器の杯Bである。特に、100は、金属器模倣起源の土器として認識できる。109および110は、口径14.4cm・17.2cmを各々測る鉄鉢形の須恵器である。同器形は、金属器の模倣がその系譜として認識されているが、その出土が風字硯や瓦、そして、古道の検出と深く関係し



第50図 出土遺物実測図(井戸31)

ている可能性がある。111は、灰白色を呈し、内外面には粘土接合痕が顕著に見られ、また、内面には縦方向のハケ目が観察できる還元焼成の製塩土器である。121は、甑ないしは鍋の把手である。把手の基部には3か所にヘラ状工具による貫通する切り込みが穿たれている。

122は、上端の受け部径31cm、器高44cmを測り、最大径63cmを各々計測する土師器の移動式竈である。鍋の受け部自体は水平面を保っているが、竈基底部から40cmの部位に張り付けられた上位突帯は、竈の前面に付された庇部分との交点では32cmを測り、後方から前面にかけて傾斜して張り付けられている。また、竈基底部から23cmの部位に張り付けられた中位突帯は、上位突帯と同じく後方から前面にかけて傾斜して張り付けられている。竈両側面には、上方にはね上がり、ヘラ状工具による切り込みを施した把手が、中位突帯直上に付されている。

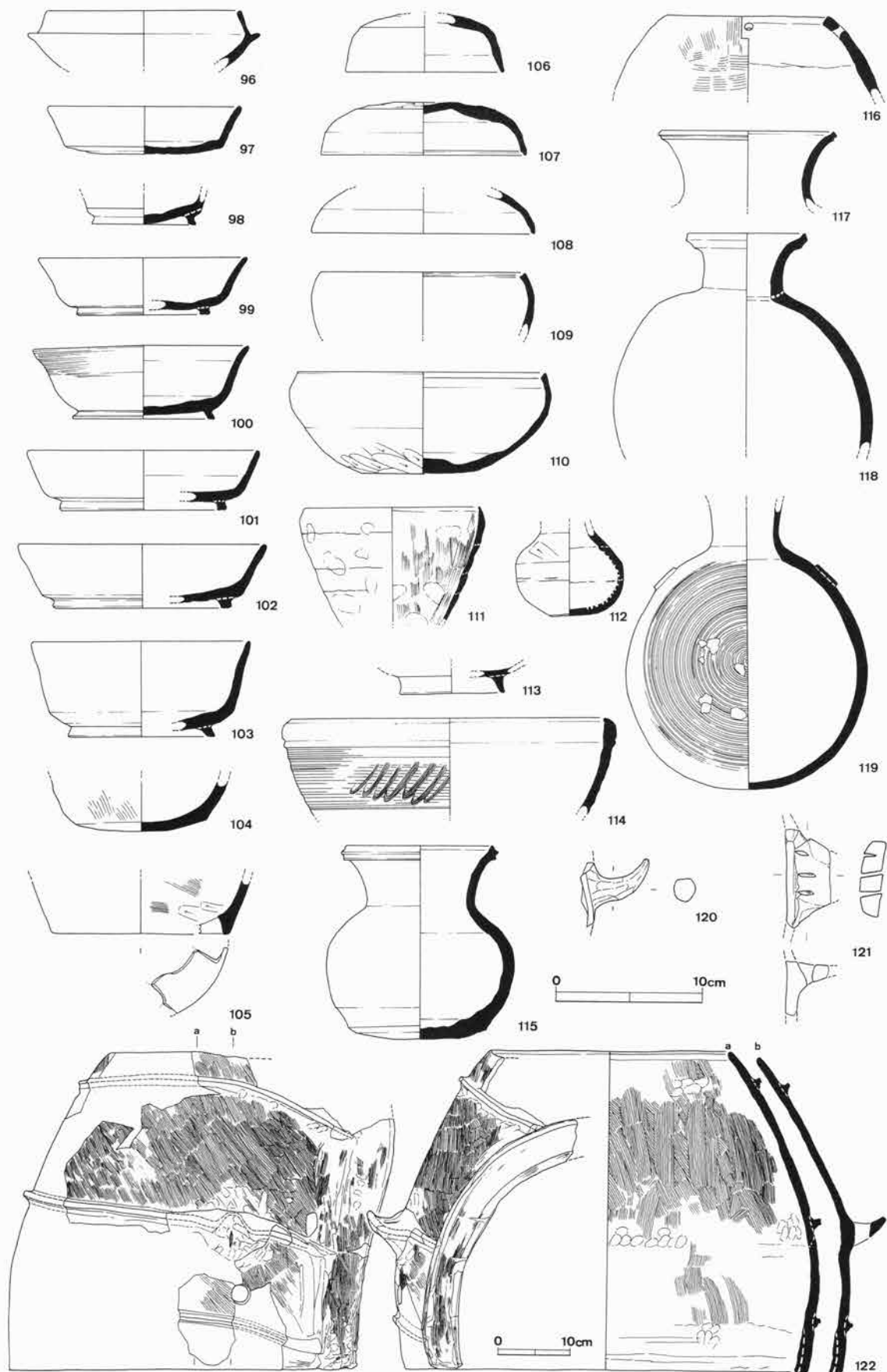
竈基底部の残存状況は不良であるが、基底部から8cmの部位には、後方から前面にかけて傾斜する下位突帯が付されている。竈側面の下位突帯上位には、直径2.4cmの円孔が穿たれている。一方、前面に付された幅4.8cmの庇は、厚みが1.5cmを測り、ていねいなナデとハケ目により成形されている。竈の外側面は、斜め方向のハケ目、内面は縦方向のハケ目によって器面調整が施されている。当該資料のように3条の突帯とヘラ状工具による切り込みを施した把手をもつ竈の事例は、希有であり、今後、その系譜について検討する必要がある。帰属時期は、相伴土器から一応、古墳時代から奈良時代の広い幅で把握しておき、今後検討を加え、確定したいと思う。

池沼21出土遺物(第52図) 明確な遺構の輪郭は確認できなかったが、多くの土器が出土している。123は、MT15型式、124はTK10型式、126はTK43型式、127はTK209型式、131はTK217型式に各々比定できる。128および129は、天井部につまみが付く蓋である。130は、口径9.6cm・器高16cm・胴部直径15.6cm・胴部長18cmを測る須恵器の樽形横瓶である。134は、還元焼成された灰白色を呈する製塩土器であり、和歌山県西庄遺跡に代表される紀淡海峡付近から搬入されたと考えられる。136は、口径25.6cmを測る甑であり、上方にはね上がる把手をもつ。139は、口径22cmを測る土師器の甕である。肩部が張らない長胴の甕である。

包含層出土遺物(第53図) 当該遺跡では、古墳時代を中心とする遺物を多く含む第4層を確認している。森垣外遺跡の年代観を捉える上で根拠となる須恵器を中心に図化した。

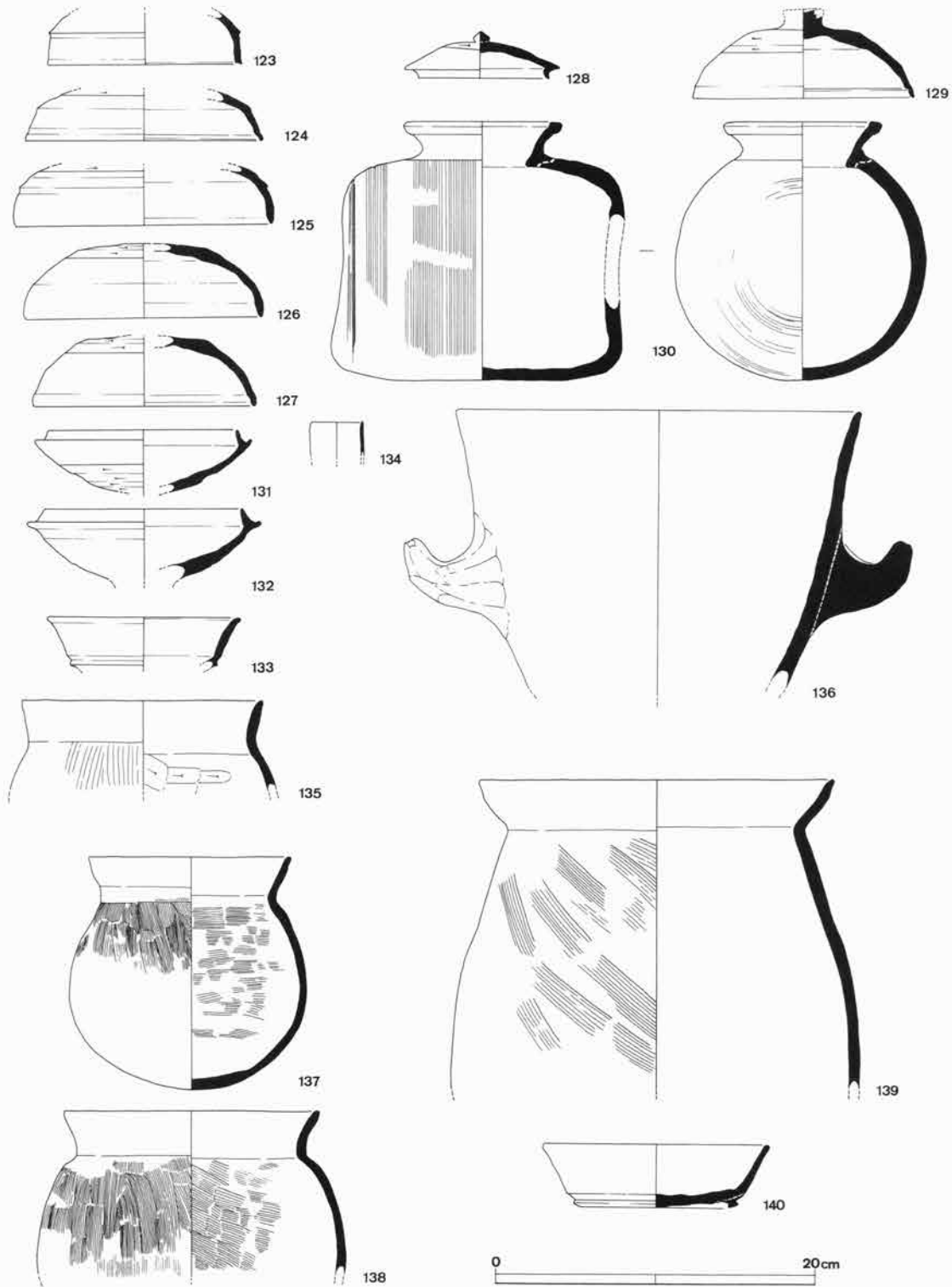
141は、TK47型式に比定できる須恵器である。161の杯身と型式である。142～144は、MT15型式に比定できる。同型式の杯身としては、162などがある。149は、TK10型式に比定でき、165の杯身が同型式に比定できる。153～156は、TK43～209型式に比定できる杯蓋群である。

173は、先述した井戸31から出土している甕78に形態的に酷似している。TK217型式に比定できる。174は、口縁部が欠損するものの、頸部中央に波状文を施文する甕である。TK47型式に比定できる。175は、口縁部が屈曲し、外面に多条の線刻を施す甕の口縁部片である。184および185は、ヘラ状工具による切り込みを施した把手である。元来、同様の把手は、朝鮮半島の瓦質土器の系譜上にあることから、その形態的特徴のみで韓式土器あるいは、韓式系土師器として認識されてきた。が、土師器の甑などには多く見られることから、定型化した段階以後にも多用された把手として認識すべきである。179は、わずかな突帯を持つ竈の一部である。

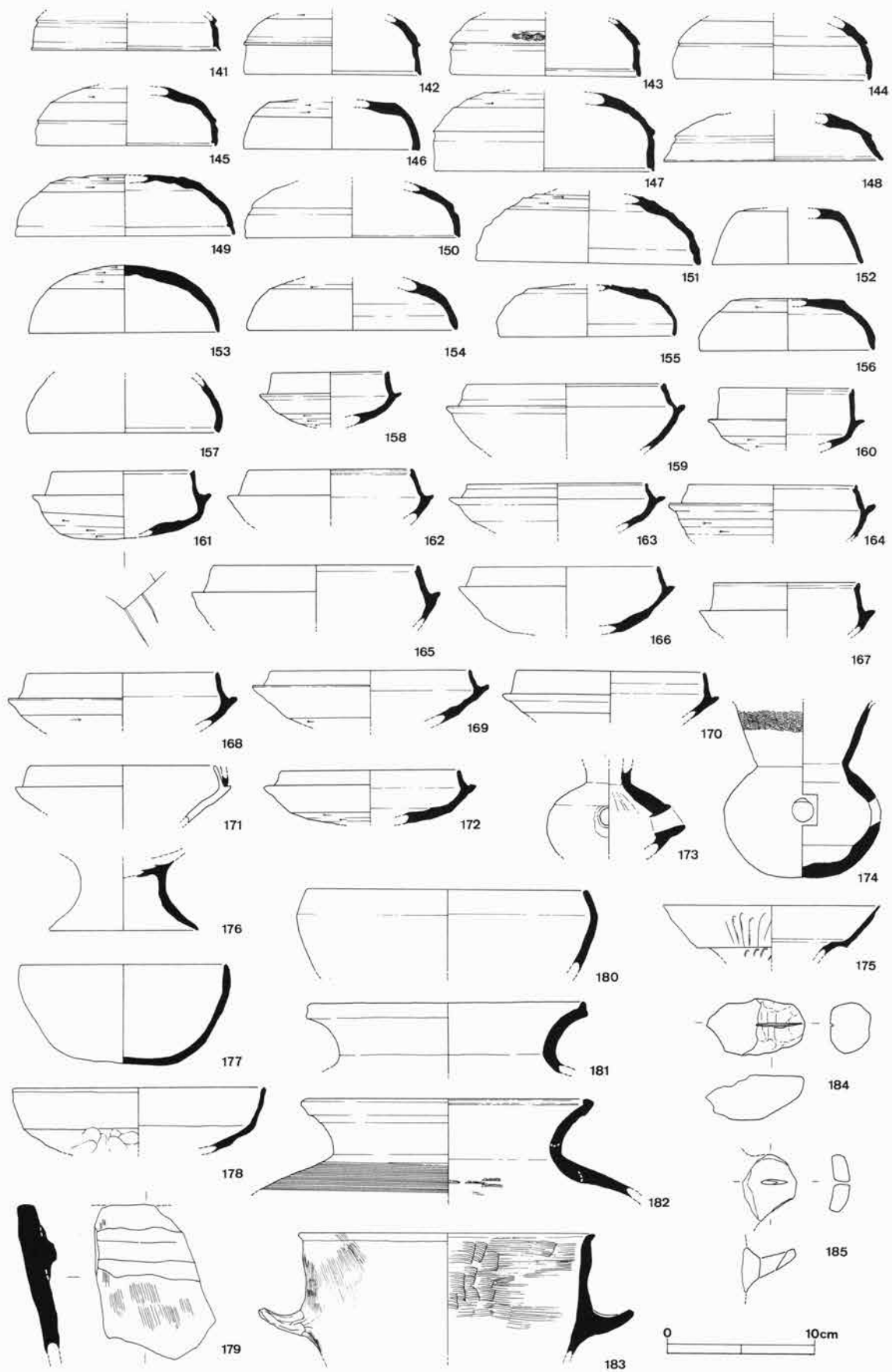


第51図 出土遺物実測図(池沼20)

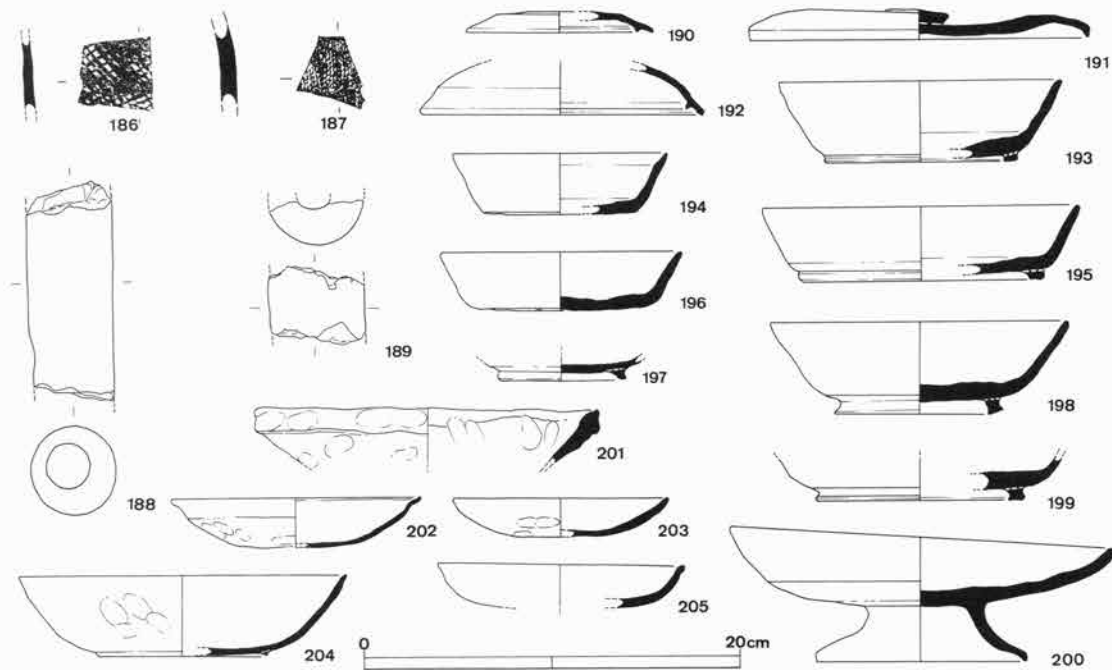
包含層出土遺物(第54図) 包含層からは先述した緑色凝灰岩片以外にも多くの遺物が出土しているが、森垣外遺跡の性格を表し得る遺物についてのみ図化した。186は、格子目タタキ痕が外表面に観察できる陶質土器片である。内面には、ていねいなナデが観察できる。187は、縦方向に縄文が観察できる陶質土器片である。186と同じく内面にはていねいなナデが観察できる。



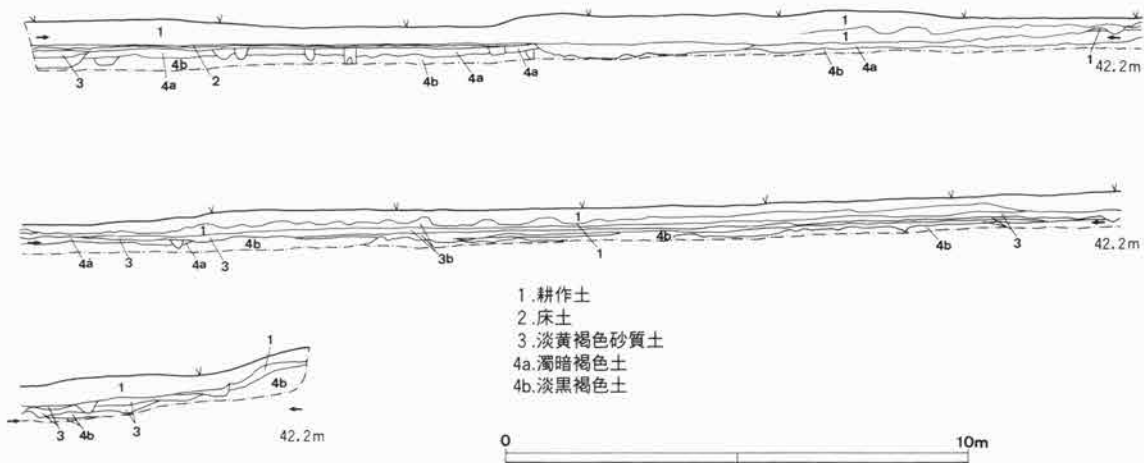
第52図 出土遺物実測図(123~136:池沼21 137~140:S X12)



第53図 出土遺物実測図(包含層)



第54図 出土遺物実測図(包含層)



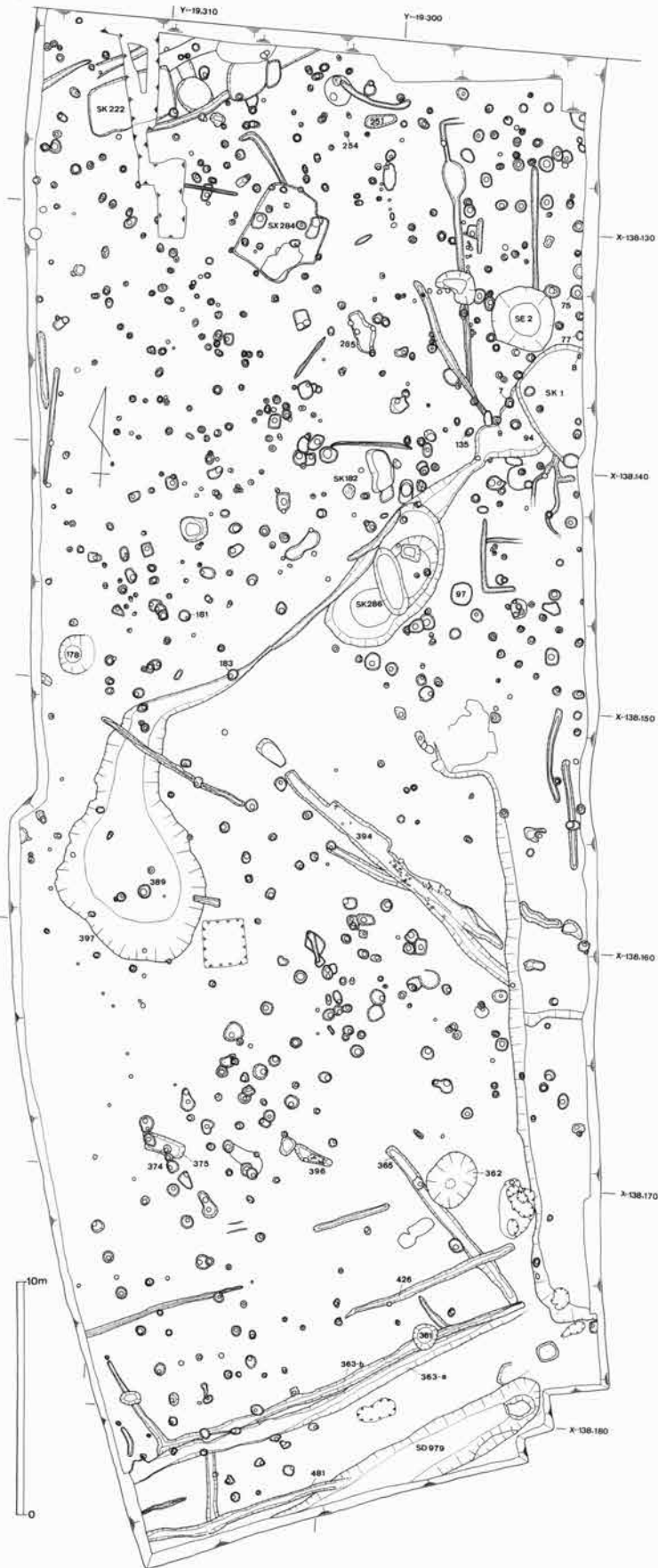
第55図 B2-1地区東壁土層断面図

188は、残存長12cmを測る轆羽口である。直径4.6cm・内径2cmの円筒状を呈している。両端部は欠損しており、金属熔着は認められない。190～199は、奈良時代に比定できる須恵器群である。202や204は、平安時代に比定できる資料群である。森垣外遺跡では、緑釉陶器や灰釉陶器などが出土しており、平安時代の土地利用が想定できる。

(2) B2地区・B3地区

A. 層位(第55図)

森垣外遺跡では、耕作土、床土、中世包含層、古墳時代包含層および遺構検出面の層序が、各トレンチで確認されている。この層序は、遺跡地内のほぼ全域に共通するが、B2地区の西壁断面では、部分的に中世の整地層を検出した。遺物は微量で、中世段階の遺構は検出していない。



第56図 B 2・3地区遺構実測図

B. 遺構(第56図、図版第26~28)

森垣外遺跡における既往の調査では、集落関連遺構が高密度で確認されてきた。また、古墳時代の柱穴であっても直径60cm前後の規模を有しており、時期幅はあっても、比較的規模の大きな掘立柱建物群が密集した景観を復原することができる。

以下に述べるB 2地区およびB 3地区は、検出した柱穴の規模も小さく、柱穴自体の密集度も低い。しかし、掘立柱建物の用材などを蓄える貯木施設286などが所在しており、また、焼土坑182などの存在などから、集落内における生産ないしは倉庫群が配置された空間であった可能性が指摘できる。以下、主要遺構について概観しておきたい。

a. 古墳時代

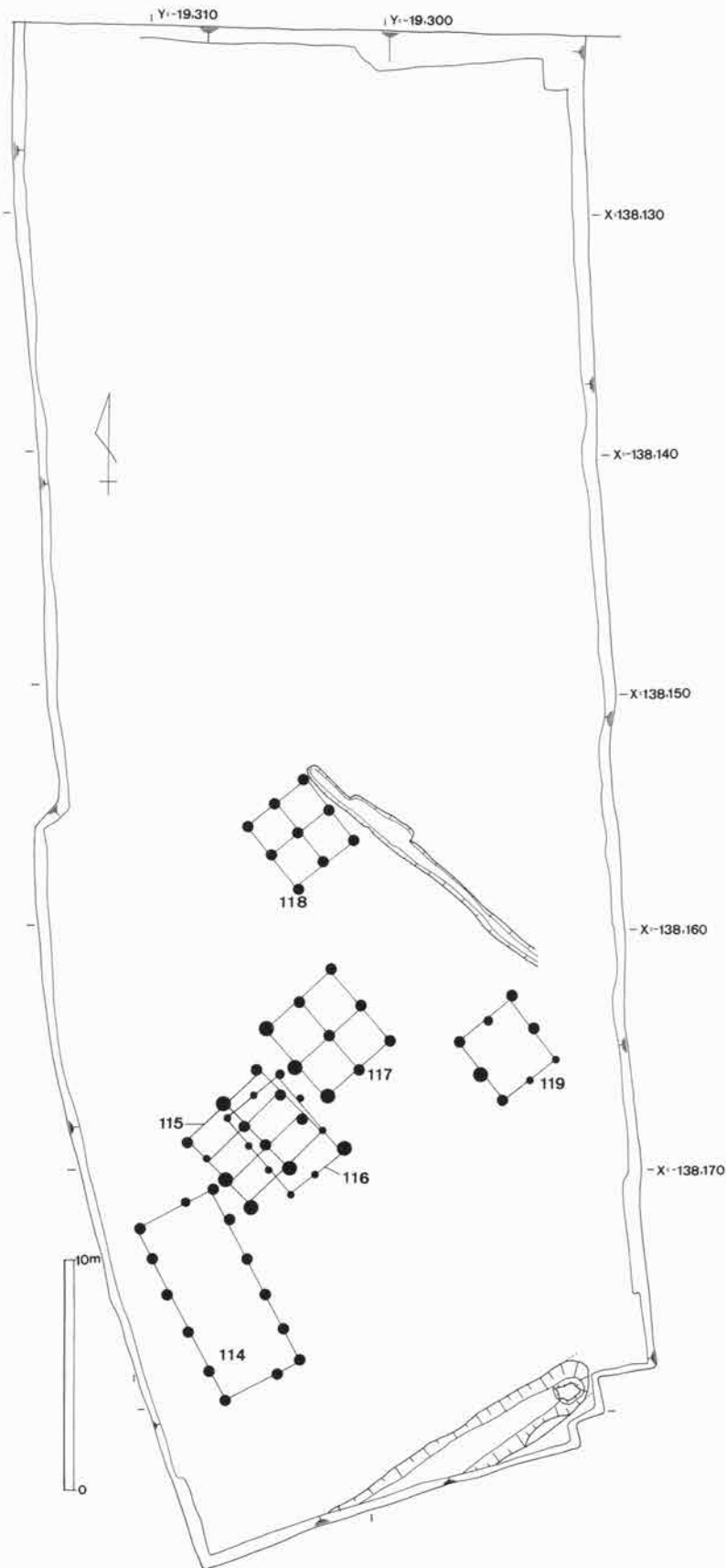
検出した掘立柱建物跡(第57図、図版第31・32)群は、復原し得た棟数も他地区に比べてわずかである。また、総柱の掘立柱建物跡を確認していることから、先述したように倉庫群が配置された空

間である可能性も視野に入れて記述を行う。

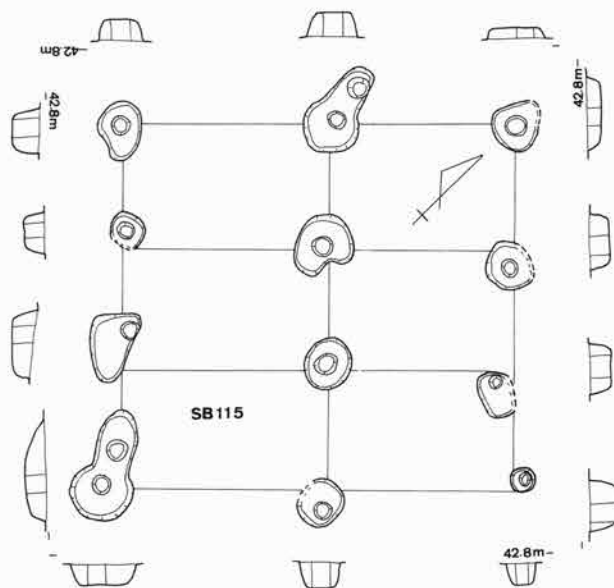
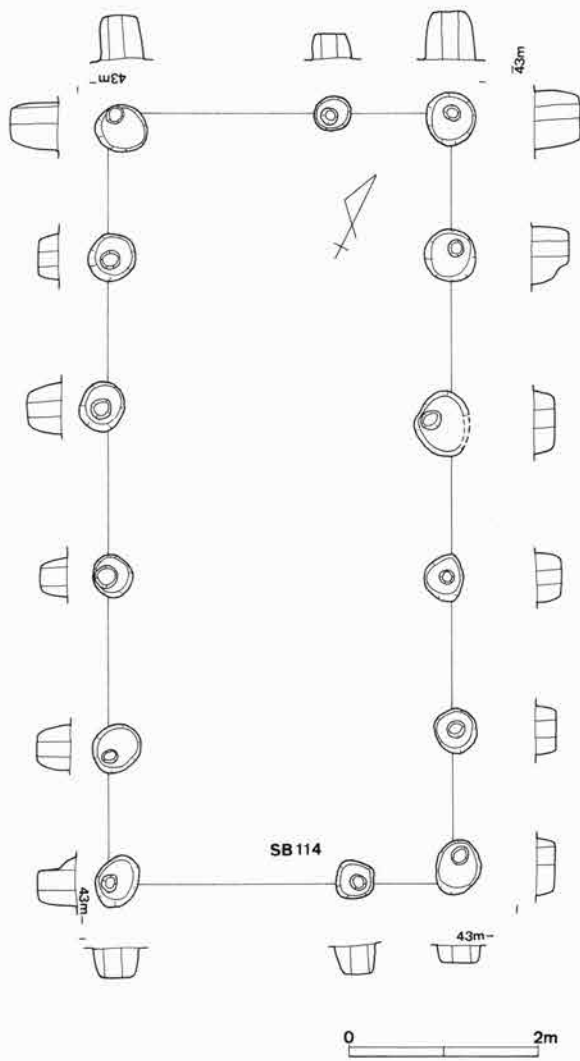
掘立柱建物跡114(第58図) 梁間3間(3.6m)・桁行5間(8m)を測る掘立柱建物跡であり、建物の主軸方向は、座標北から西へ26°振る。桁行の柱間距離は、おおむね1.6m前後に統一されているが、梁間は、東面から1.2mの地点に他の柱穴よりは直径の小さい柱穴を配している。この柱穴と建物の西面は、2.4mを測るものの、柱穴は穿たれておらず、出入口を想定することができる。床面積は29㎡である。

以上のように掘立柱建物跡114は、梁間と桁行の柱間距離が各々異なっている点と梁間の一部の柱穴が穿たれていない点に大きな特徴がある。通有に見られる居住目的の掘立柱建物跡ではなく、倉庫や馬の飼育施設などを想定する必要がある。

掘立柱建物跡115(第58図) 梁間2間(6.6m)・桁行3間(5.1m)



第57図 B2・3地区掘立柱建物跡分布図



第58図 掘立柱建物跡114・115実測図

の総柱の掘立柱建物跡である。建物の主軸は、座標北から西へ46°振っている。梁間の柱間距離は2.1mを測り、桁行の柱間距離は1.2mを各々測る。部分的に規模の小さい柱穴が穿たれており、柱穴の規模は一定しない。床面積は34m²を測る。

掘立柱建物跡116(第59図) 梁間2間(2.9m)・桁行3間(4.4m)の掘立柱建物跡である。建物の主軸は、座標北から西へ37°振っている。梁間および桁行の柱間距離は1.4mを測り、柱穴の直径も0.4mと小さい。床面積は13m²である。

掘立柱建物跡117(第59図) 梁間2間(3.7m)・桁行2間(4.0m)の総柱の掘立柱建物跡である。建物の主軸は、座標北から東へ48°振っている。床面積は15m²である。

掘立柱建物跡118(第60図) 梁間2間(3.0m)・桁行2間(3.4m)の総柱の掘立柱建物跡である。建物の主軸は、座標北から西へ48°振っている。床面積は10m²である。

以上が掘立柱建物跡群の概略である。当該地区では、総柱の掘立柱建物跡群を多く検出しており、集落内における倉庫群として認識できる(図版第33-2)。

柱穴7(第61図、図版第33-1) 掘立柱建物跡として復原し得なかった柱穴である。直径0.4mを測り、最深部が同じく0.4mを測る。やや外方にひろがりをもつ柱痕が確認でき、柱痕には暗茶褐色土、掘形には濁暗茶褐色土が確認できる。柱痕最上位から横置の状態を

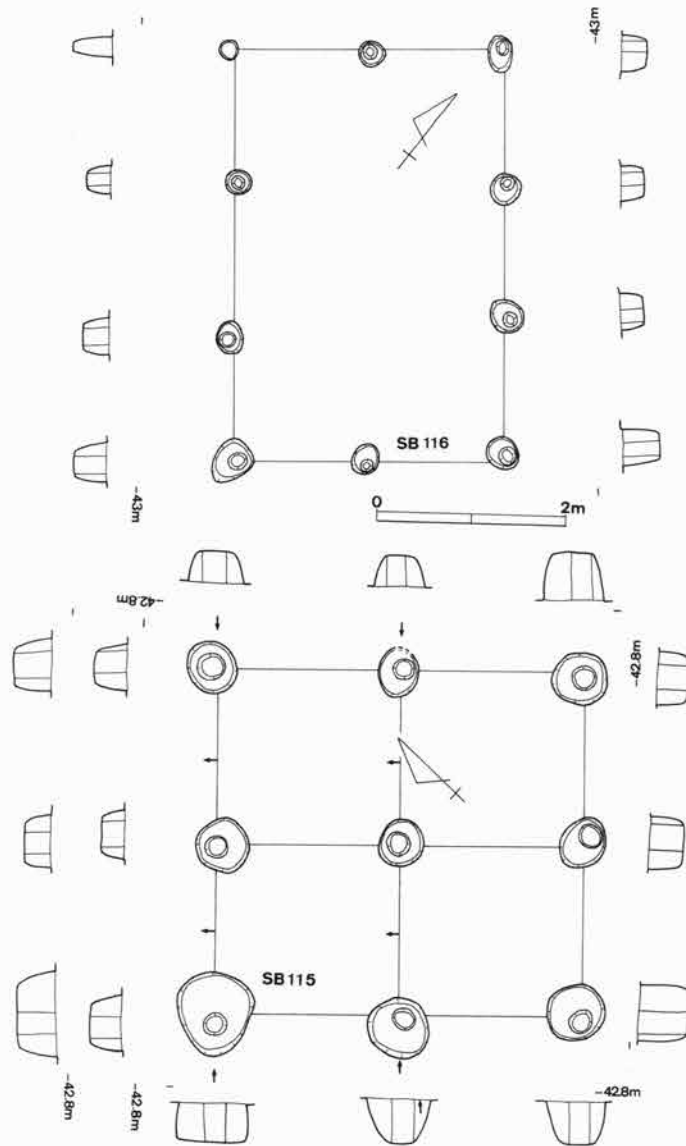
保ち、半截された須恵器の有蓋高杯が出土している。建物廃絶時における何らかの宗教的行為を想定できる。森垣外遺跡では、柱穴内埋納事例が、数例確認できており、律令期の地鎮に近似する概念が、すでに定着していることを示している。

方形区画溝979(第62図、図版第34-1・2) 平成10年度に実施したB1地区において検出した一辺46mを測る方形区画溝979の延伸部分にあたる。明らかに同一の遺構であることから遺構番号は、平成10年度に付したSD979を踏襲した。また、B1地区の方形区画溝979は、新田開発による削平を受けているために、溝幅は0.4~0.8mであったが、今回、検出した部分は、ほとんど削平を受けておらず、最大幅が2.2mを測り、残存状況は良好である。

平成10年度のB1地区から延伸する溝は、当該地区においても同じ主軸を有しており、北から東へ57°の振り角を測る。溝の深さは、ほぼ一定しているが、東方では徐々に浅くなり、トレンチ端では完全に断絶している。溝の最深部が0.6mを測ることから削平により消失した可能性はなく、意図的な掘り残しを想定することができる。

溝内の土層堆積状態は、基本的には最下層に淡黒褐色粘土が堆積し、有機物が残存している。中間層には暗灰褐色砂層が流水作用によって十数層に分層可能な状況で堆積している。部分的には下層の堆積土が混入する。一方、最上層には暗褐色土が厚く堆積しており、古墳時代後期の遺物が細片の状態出土している。溝内から第69図231~236に見られるようにTK23~47型式の土器群が出土しており、B1地区で出土した土器群と基本的には型式に矛盾はない。

貯木施設286(第63図、図版第35-1・2) 不整形な楕円形を呈しており、土坑の主軸は、地形の傾斜と一致している。土坑の規模は、長軸が6.6m、短軸が3.4mを測り、土坑最深部は1.5mを測る。土坑底面は、やや凹凸があるものの、おおむね0.8mの深さで安定している。土坑内



第59図 掘立柱建物跡115・116実測図

部の堆積層は、淡黒褐色粘土を主体としており、底部にはわずかな砂層が確認できる。

土坑内には0.8~1.6mを測る柱材が6本出土しているが、いずれも柱材の端部は加工面が残存せず、欠損した状態である。また、柱の外表面は、比較的ていねいに成形している。土坑内から出土する土器は、破片資料が大半であるが、TK47~MT15型式前後に比定できる資料群が見られる。

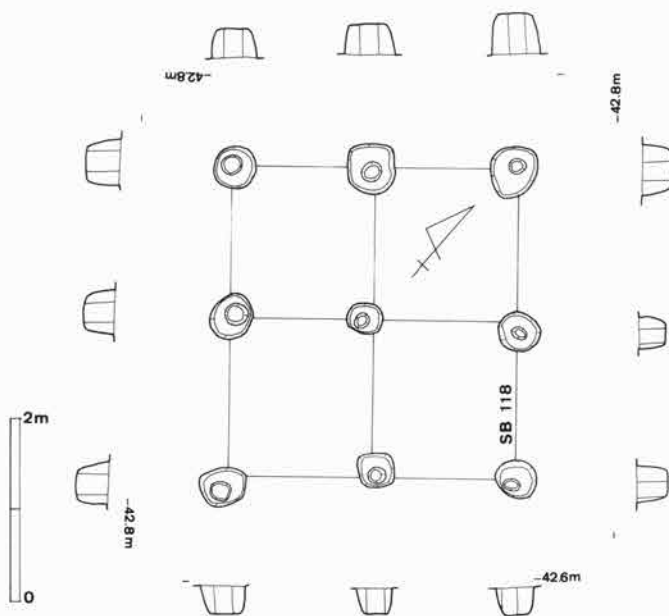
以上のように当該土坑は、単に廃棄を目的にした施設ではなく、加工を施した柱材が出土していることから、掘立柱建物を建築する柱の用材を貯木する施設であった可能性が高い。古墳時代中期から後期にかけて営まれた集落における事例を今後も確認する必要がある。

焼土坑182(第64図、図版第33-3) 直径0.5~0.6mの不整な円形を呈している。土坑底部は凹凸が激しく、南半部が0.34m、北半が0.25mの深さを有している。土坑内の堆積は、おおむね2層に分層できる。下層には淡黒褐色土が堆積し、上層には炭を多く含む暗茶褐色土が堆積し、なおかつ、最大で長軸0.13mの焼土塊を多く含んでいる。土坑壁面には被熱の痕跡はなく、土坑内の焼土や炭は2次的に堆積した状況である。

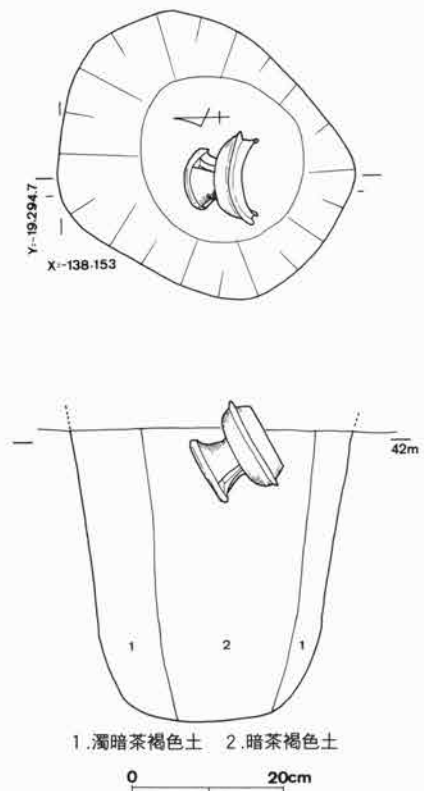
土坑1(第65図) トレンチ壁際での検出であるため、全体の形状や規模については不明であるが、平面プランは、一辺4.4mを測る隅円方形である可能性が高い。周壁溝もなく、また、土坑底部からなだらかに立ち上がることから竪穴式住居跡の可能性はない。土坑内の堆積土は基本的には淡黒褐色粘質土であり、完形の製塩土器や須恵器・土師器・縄文土器などの陶質土器が出土している。

b. 奈良時代以降(図版第30)

検出した遺構の多くは古墳時代に属しているが、奈良時代の古道や鎌倉時代の小規模なピットや井戸などを検



第60図 掘立柱建物跡118実測図

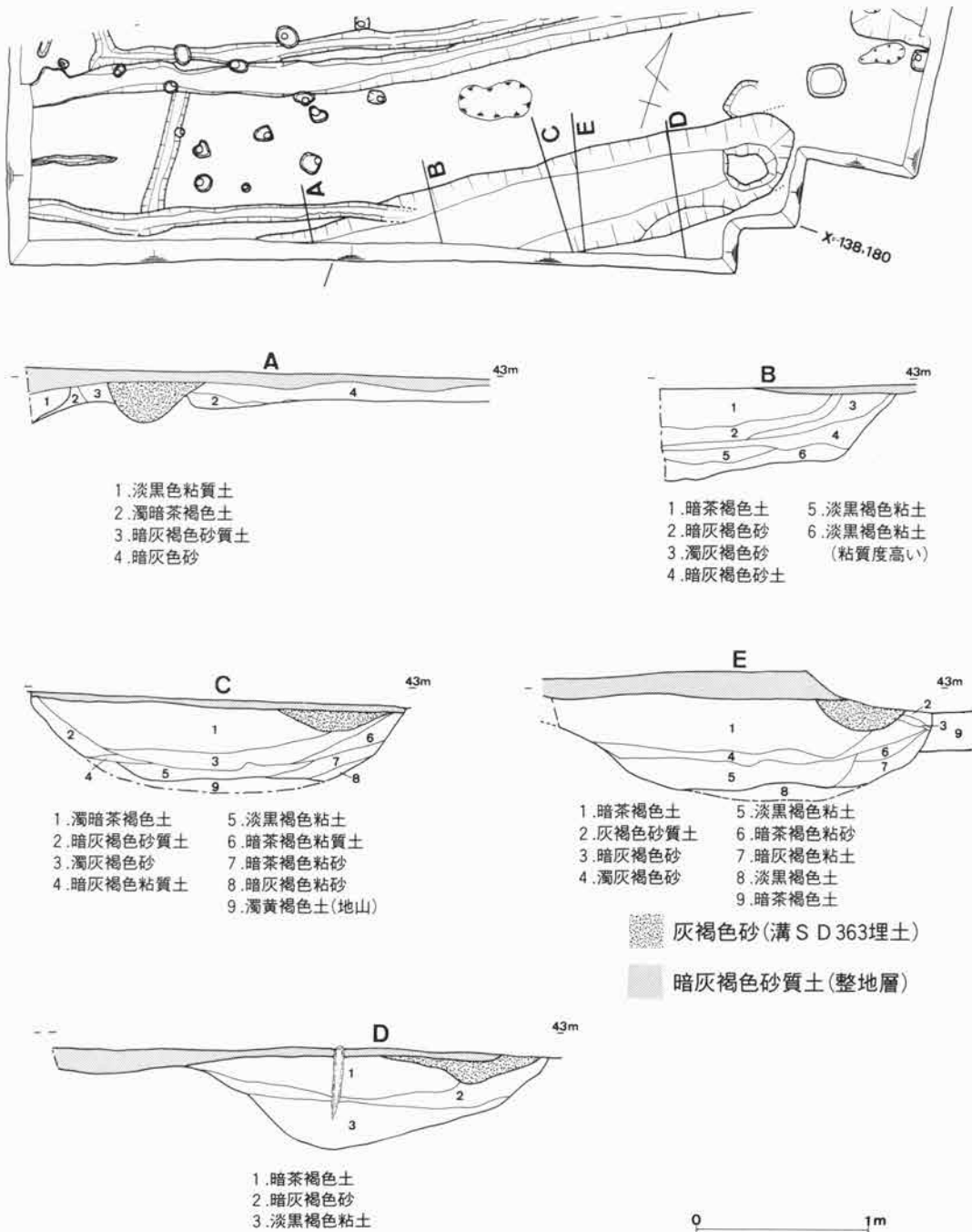


第61図 柱穴7実測図

出している。

井戸2(第66図、図版第29-1) 直径2.7~3.0mを測る不整な円形を呈している。底部中央部には直径1mの円形平坦面があり、井筒の抜き取りが想定できる。遺構検出面から底部までは1mを測る。井戸内の堆積土は、井筒抜き取り部に黒灰色粘質土が0.8m程度堆積しており、最上層には黒褐色粘質土が0.2m程度堆積している。奈良時代の須恵器杯A(第74図385)が出土しているが、13世紀後半の瓦器椀(第74図386)の出土により遺構の年代を把握できた。

古道側溝363・481(第67図、図版第36-2・3) 先述した古墳時代中期の方形区画溝979と重複する状態で3条の溝を検出した。溝は、北方に2条、南方に1条に穿たれており、平行してい



第62図 方形区画溝979土層断面図

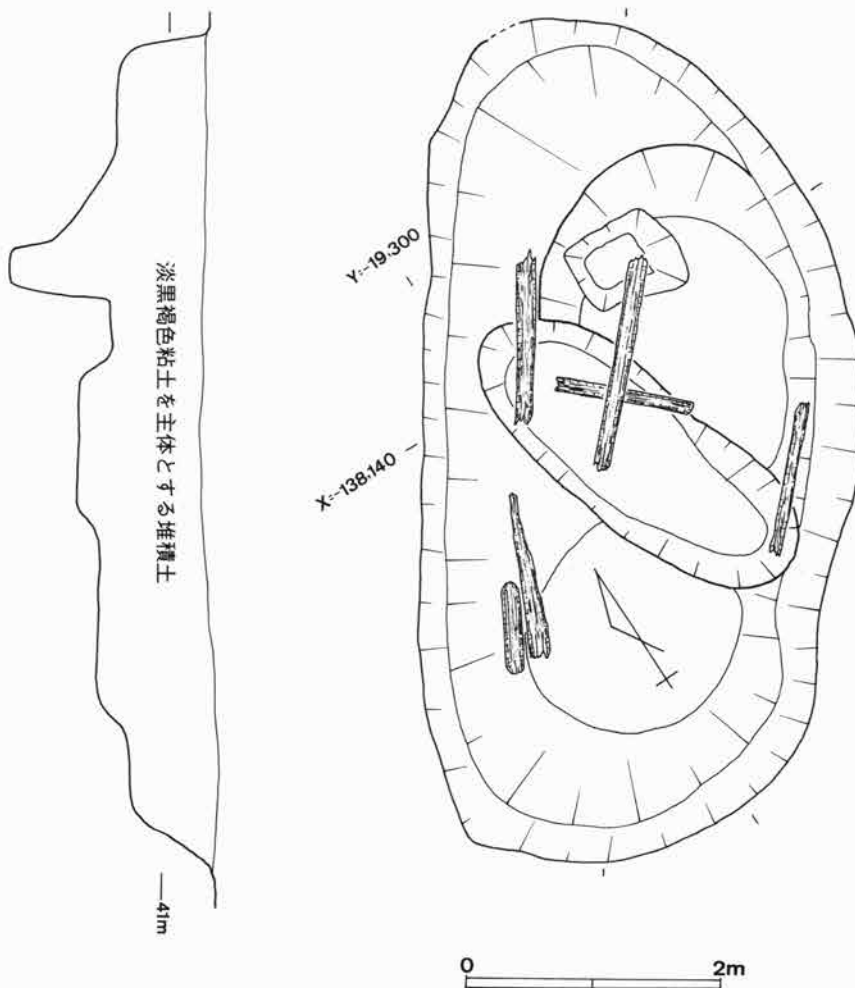
る。溝の主軸は、座標北から東へ34°振っており、北方の内側溝363-aと南方溝481の最深部間で3.4mを測る。溝481の東半は、先述した方形区画溝979を先行して掘り込んだため平面的には確認できなかったが、溝979に設定した断面確認用のセクション(第62図)において、灰褐色砂を埋土とする溝を確認しており、溝363と平行して掘り込まれていることが把握できた。

以上のように、地形の傾斜に主軸を振ることや平行して掘られた溝であることから、奈良時代の古道として認識できる。A3トレンチで確認した古道や池沼と同時期に比定できることから、当該地には南北方向と東西方向に古道が敷設されていたと考えられる。なお、瓦片などが出土し、当該地南西方には「堂」字を含む字名があることから、何らかの公的施設が南西方に存在する可能性が指摘できよう。

C. 出土遺物

柱穴出土遺物(第68図、図版第29-3) 206は、柱穴7から出土した。直立する立ち上がりと方形透かし孔を脚部にもつ高杯であり、TK47型式に比定できる。207は、柱穴9から出土した。立ち上がりの形状と内傾する口縁端部からMT15型式に比定できる杯である。208は、柱穴97から出土した。

立ち上がりの形状と内傾する口縁端部からMT15型式に比定できる杯である。209は、柱穴135から出土したTK10型式に比定できる杯である。210は、柱穴181から出土した。柱穴自体は、古墳時代に帰属すると思われるが、柱穴埋め戻しの際に混入した弥生時代中期の底部



第63図 貯木施設286実測図

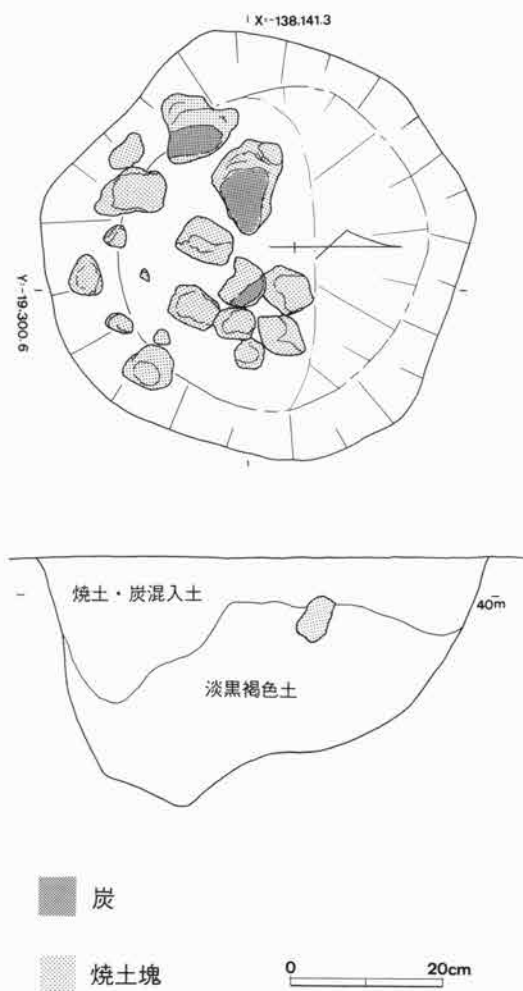
である。211は、柱穴183から出土した口径13.6cmを測る土師器の甕である。口縁部はやや肥厚し、肩部がほとんど張らない。内外面とも細かいハケ目調整により調整している。

貯木施設286出土遺物(第68図) 須恵器の蓋には、内傾する口縁端部をもつ212と沈線化する口縁端部をもつ214に分類することができる。一方、杯身は、内傾する口縁端部をもつ215とわずかに内傾する216、丸く仕上げる217に分類することができる。以上の分類からTK47~10型式に比定できる土器群である。出土須恵器に型式差があるが、土坑自体の規模が大きく、完全に埋没し、土坑上が生活空間として安定する間に土坑上層に混入した可能性がある。

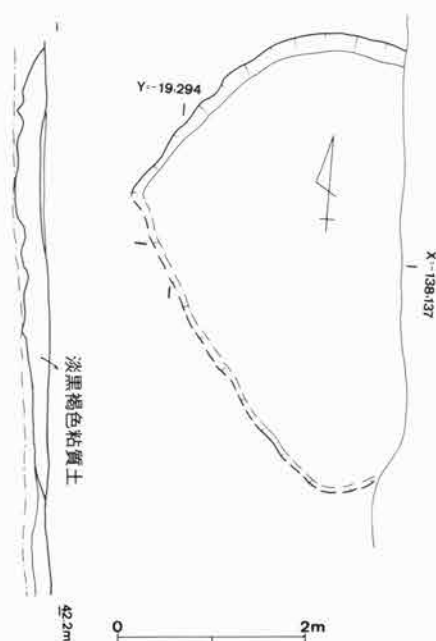
土師器の鉢には、頸部が内側に屈曲し、外反する口縁部をもつ個体が多い。226は、口径26.4cm・頸径23.6cm・器高24.4cmを測る土師器の鍋である。内外面とも基本的にはハケ目調整によって器壁を成形している。胴体部の最大径部には、把手をもつ。把手接合部内面には、指頭圧痕が顕著に見られる。

土坑222出土遺物(第68図) 杯蓋には尖頭状の口縁端部をもつ227と内傾する口縁端部の228が出土している。前者はTK47型式、後者をMT15型式に比定できる。229は227と同型式に比定できる。230は、口径10cm・器高6.4cmを測る須恵器の把手付椀である。最大径部には波状文を施し、底部外面は、手持ちヘラケズリにより成形している。また、最大径部には、形骸化しているものの把手が付されている。

方形区画溝979出土遺物(第68図) 口縁端部をていねいに仕上げる233・234と内傾する口縁端部をもつ231に分類することができる。特に、233は、肩部の稜が比較的鋭く、天井部のヘラケズリの範囲が広範囲に及ぶことからTK23~47



第64図 焼土坑182実測図



第65図 土坑1実測図

型式に比定できる。なお、溝内から滑石片236が出土しているが、石製模造品の未製品と考えられる。また、第77図448は、全長3.8cmを測る剣形石製模造品である。

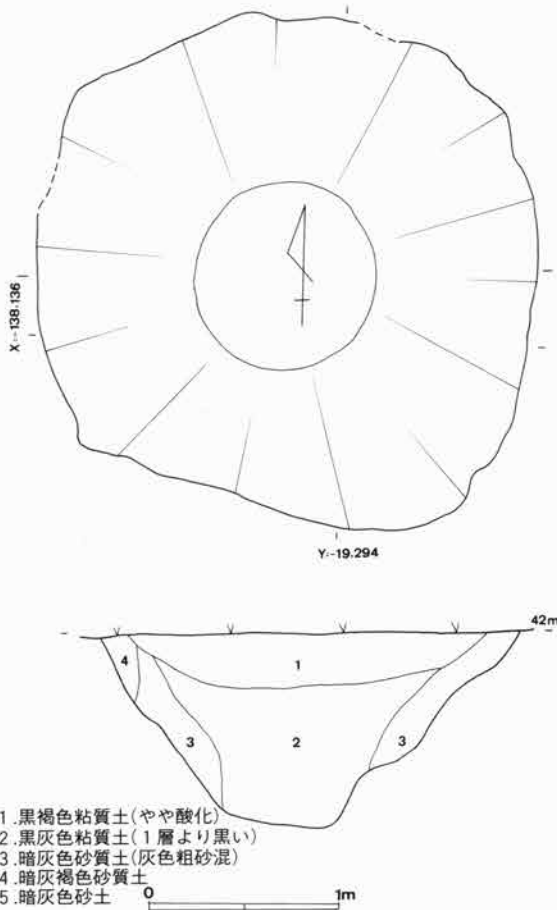
土坑362出土遺物(第69図、図版第30-3) 製塩土器237は、口径9.2cm・残存高2.8cmを測り、外面には指頭圧痕、内面には綾杉文状の貝殻状痕が観察できる。胎土は緻密であり、還元状態での焼成を想定することができる。諸特徴から和歌山県紀淡海峡付近からの搬入であろう。

溝394出土遺物(第69・70図) 直線的に掘られた溝であることから、集落内の小区画を意図して掘られた溝である可能性がある。遺物は、通有に見られる土師器や須恵器のほか、滑石製白玉48点と滑石片11点が出土している。

須恵器の杯蓋は、口縁端部が内傾し、肩部の稜が明瞭であり、なおかつ、天井部が平らな240や241、口縁端部は内傾するものの、天井部が丸い238や239に分類できる。また、杯身は、ほぼ垂直に立ち上がり、内傾する口縁端部をもつ243などが出土している。これらからTK47~MT15型式に比定できる。一方、無蓋高杯には、口径13.6cmを測る244と口径15.2cmを測る245がある。ともに緻密な胎土で堅緻な焼成であり、大阪府陶邑古窯址群産と考えられる。甕246は、口径12.8cmを測り、その形状からTK47~MT15型式に比定できる。甕247は、頸径12cmを測る。口縁端部を欠き、口縁部の全容は不明であるが、2条の稜間に精緻な波状文を3条施している。大阪府陶邑古窯址群産である。

土師器には屈曲部の形状が異なる鉢と甕および甌がある。甌255は、口径30cmを測り、口縁端部は、ていねいに仕上げられており、面を形成している。牛角状の把手を付している。これらの土器群は、溝出土資料ではあるが、良好な土器群である。

一方、滑石製白玉と滑石片(第70図)は、溝394の東端に集中して出土している。出土状況から一括して投棄はされているものの、その出土配置には意図的な背景は考えられない。白玉群は、滑石の範疇で捉え得る石材ではあるが、滑石の材質と色調から緑色系257~273、灰色系274~282・300、淡緑色系283~295、暗灰色系296~303に大きく分類することができる。緑色系および暗灰色系の2種類の白玉は、平均直径が0.5cmを測り、灰色系および淡緑色系の白玉は平均直径が0.6cmを各々測る。一方、平均した厚みは、前者が0.3cmであるのに対して後者は0.4~0.5cmを



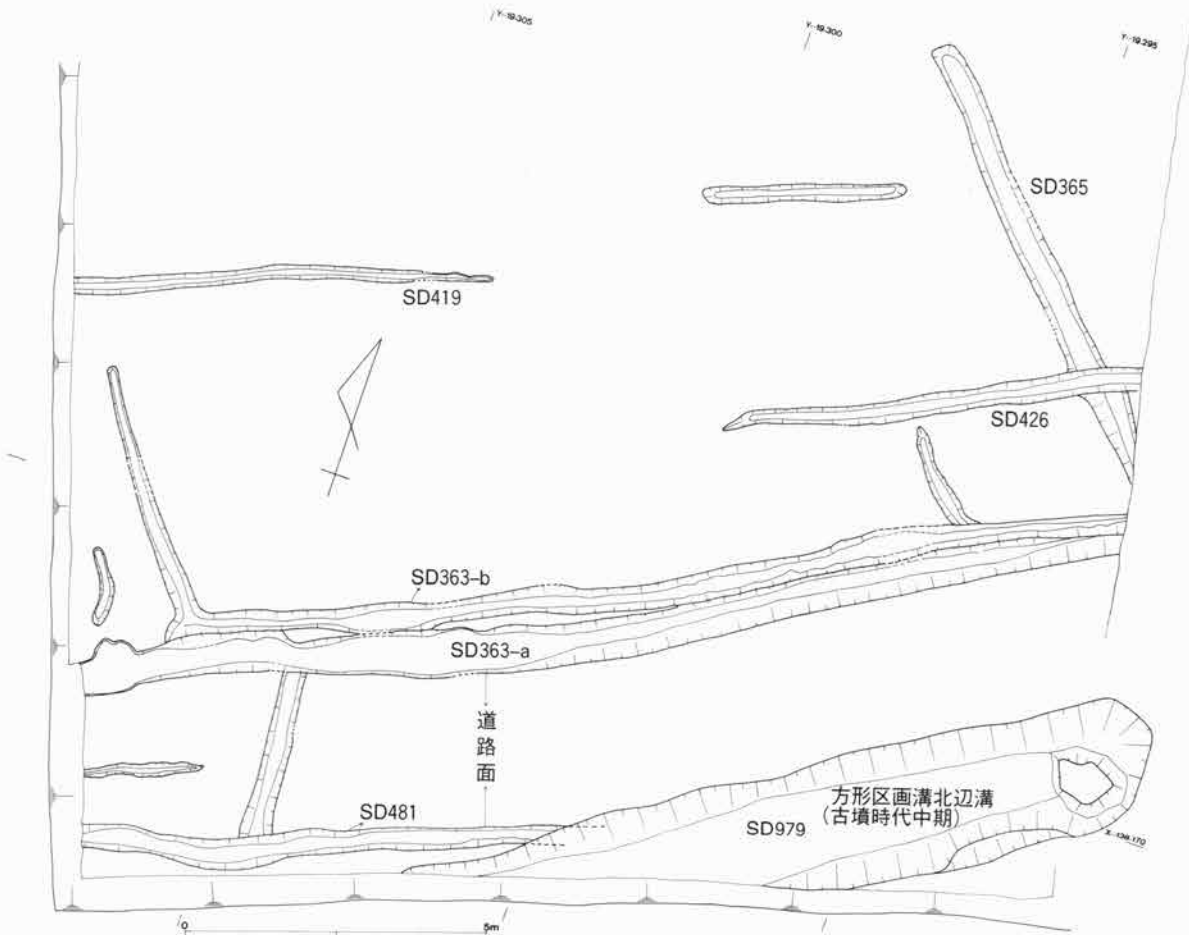
第66図 井戸2実測図

測り、全体的に石材粒子の細かい緑色系および暗灰色系の白玉の一群が、わずかではあるが小さく成形される傾向にある。なお、同一地点から滑石片305～315が出土している。最も大きい破片では長軸が1.7cm、最小破片で長軸0.9cmを測る。図化しえない剥片も多い。

以上ように白玉と滑石片とが共伴していることについては、まず、宗教的行為後の廃棄が最も一般的な解釈といえる。また、一方では、滑石片が石製模造品の未成品ないしは剥片と考えた場合、製作過程に伴う廃棄も念頭におく必要がある。しかし、同時代の他集落から出土する未成品には、穿孔部が確認されているものが多いが、本資料群には1点も確認できないことから、当該滑石片が未成品である可能性は低い。廃棄時期と白玉および滑石片の共伴を念頭においた類例調査を急がれる。

土坑1出土遺物(第71・72図) 遺構検出面積が、おおむね8㎡ではあるが、須恵器、土師器、製塩土器および陶質土器が出土している。完形の製塩土器が出土していることから一括して投棄されたと考えられる。

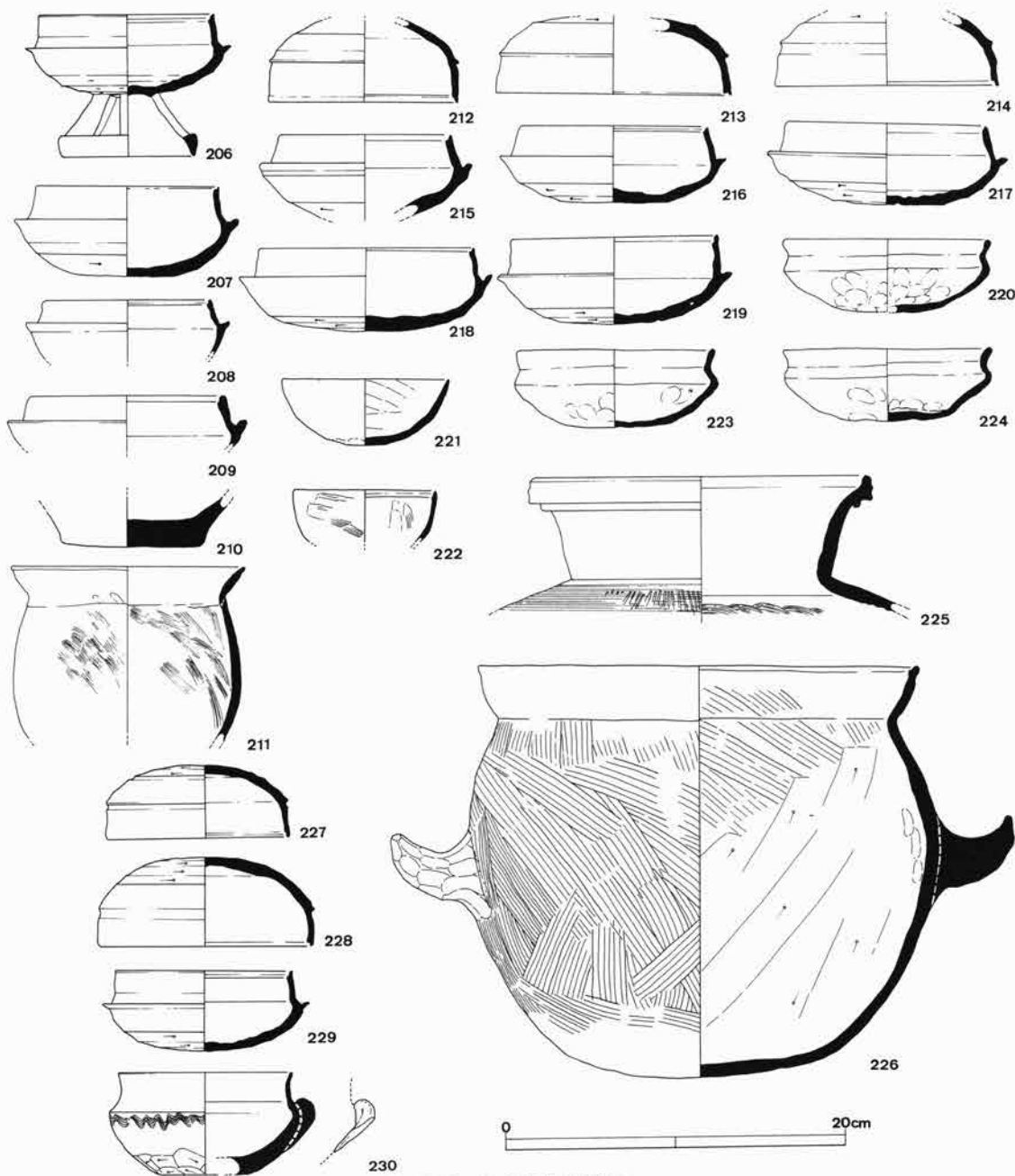
須恵器の杯蓋は、内傾する口縁端部を有する個体が多い反面、沈線化を呈する個体も見られる。一方、杯身にも同様な傾向が看取できる。このことからTK47～MT15型式に比定できる。須恵器の無蓋高杯には、外面に波状文をもつ341ともたない340がある。343は、脚径17cmを測る器台ないしは高杯の脚部である。現状では、器形認定には及ばない。



第67図 古道側溝363・481実測図

土師器には椀・高杯・甕・甑などがある。339は、口縁部がわずかに外反する椀である。先述した貯木施設286出土の椀類220や224などとは異なる形態である。高杯348は、内湾する杯部と脚下半部で屈曲する脚部からなる。図示したように、円筒状の中実脚上部を杯部に差し込み、接合の補助粘土を巻き付ける接合技法を看取できる個体である。352は、壺底部に付された台部である。一方、甑は、尖頭状の口縁端部を有し、断面円形の粘土棒を上方に湾曲させた把手が付く。また、平らな底部には中央に6cmの円孔を穿ち、その周囲3方に幅2.4cm、底部中心点から100°にわたって湾曲する孔が穿たれている。

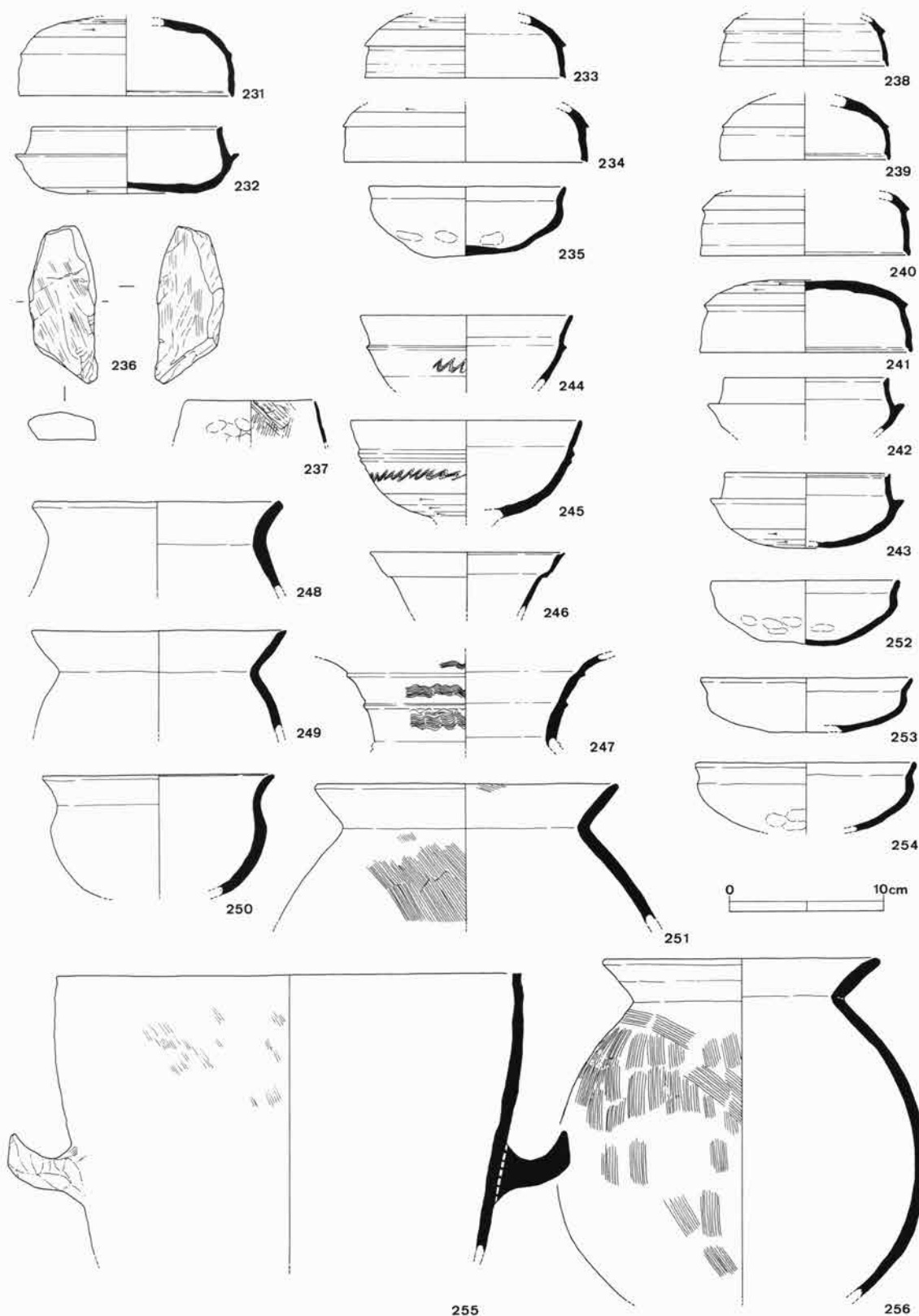
350は、歪んだ砲弾形を呈する製塩土器である。内外面に指頭圧痕が顕著にみられ、内面上部



第68図 出土遺物実測図

- 206：柱穴7 207：柱穴9 208：柱穴97 209：柱穴135 210：柱穴181 211：柱穴183
 212～226：貯木施設286 227～230：土坑222

には粘土接合痕が明瞭に残存する。全体的に淡桃色を呈し、多くの砂粒を含む。残存率100%である。大阪湾岸地域からの搬入か。351は、全体的に濃桃色を呈する製塩土器である。和歌山県



第69図 出土遺物実測図

231~236：区画溝979 237：土坑362 238~256：溝394

紀淡海峡付近からの搬入である。

357は、外面に縄蓆文、内面にナデ痕が残る、いわゆる陶質土器の中でも縄蓆文土器と呼ばれる土器片である。森垣外遺跡では各地区において半島系の土器が出土するが、当該資料も確実な共伴関係を把握できる土器として類例を追加できた。

土坑94出土遺物(第73図) 361は、内傾する口縁端部と平らな天井部をもつTK208型式に比定できる杯蓋である。一方、362は、MT15型式に比定できる杯身である。

溝363出土遺物(第73図) 杯蓋369と杯身370では口径が異なるが、MT15型式に比定できる。

溝365出土遺物(第73図) 377は、甑ないし鍋の把手である。把手中央部には上方と下方からヘラ状工具によって切り込みが入る。

土坑254出土遺物(第73図) 373は、MT15型式に比定できる杯身である。

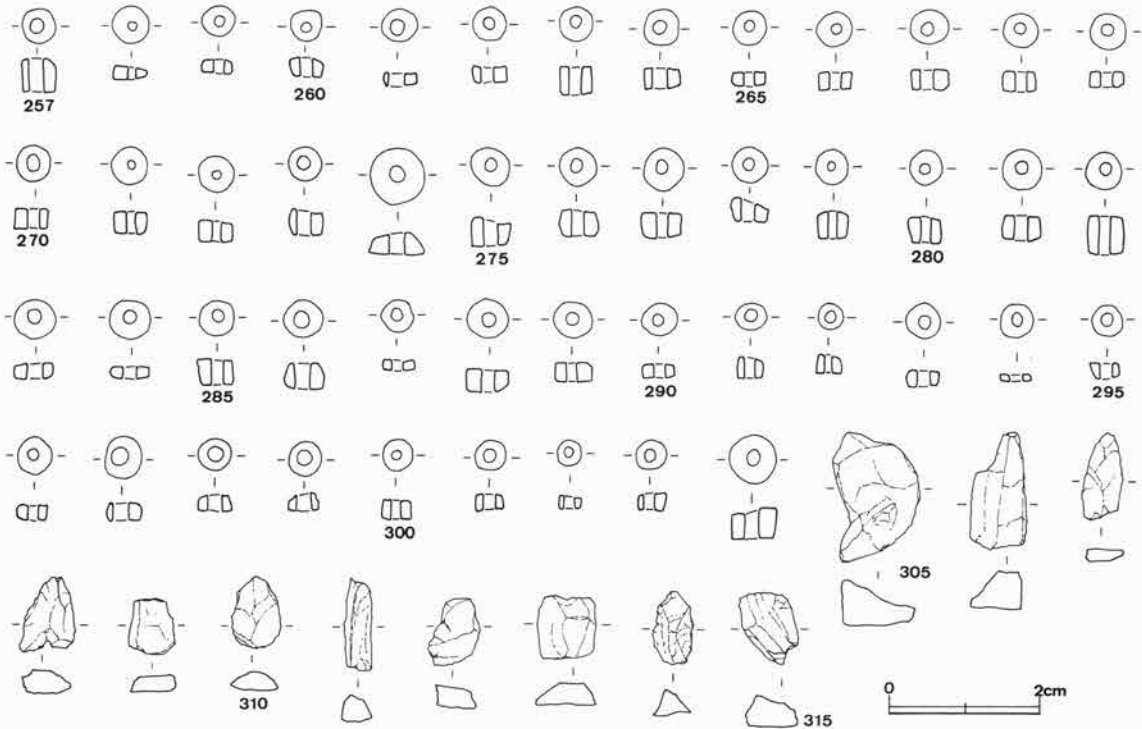
柱穴75出土遺物(第74図) 387は、口縁端部が直立する土師器の皿である。382は、口径13.6cmを測り、わずかに暗文が観察できる瓦器椀である。383は、口径10cmを測る瓦器椀である。

柱穴8出土遺物(第74図) 379は、口縁端部がわずかに肥厚する土師器の皿である。

土坑426出土遺物(第74図) 384は、内面にかえりが残存する口径17.2cmの須恵器蓋である。

井戸2出土遺物(第74図) 385は、口径13.2cmを測る須恵器杯Bである。386は、口径10.2cmを測る瓦器椀である。わずかな高台をもつ。

土坑284出土遺物(第74図) 388は、口径10.4cmの須恵器の蓋である。器高が高く、壺類の蓋であろう。389は、内面にかえりが残存する須恵器の蓋である。393は、口径17.2cmの須恵器の杯Bである。これらの土器は、おおむね奈良時代に比定できよう。

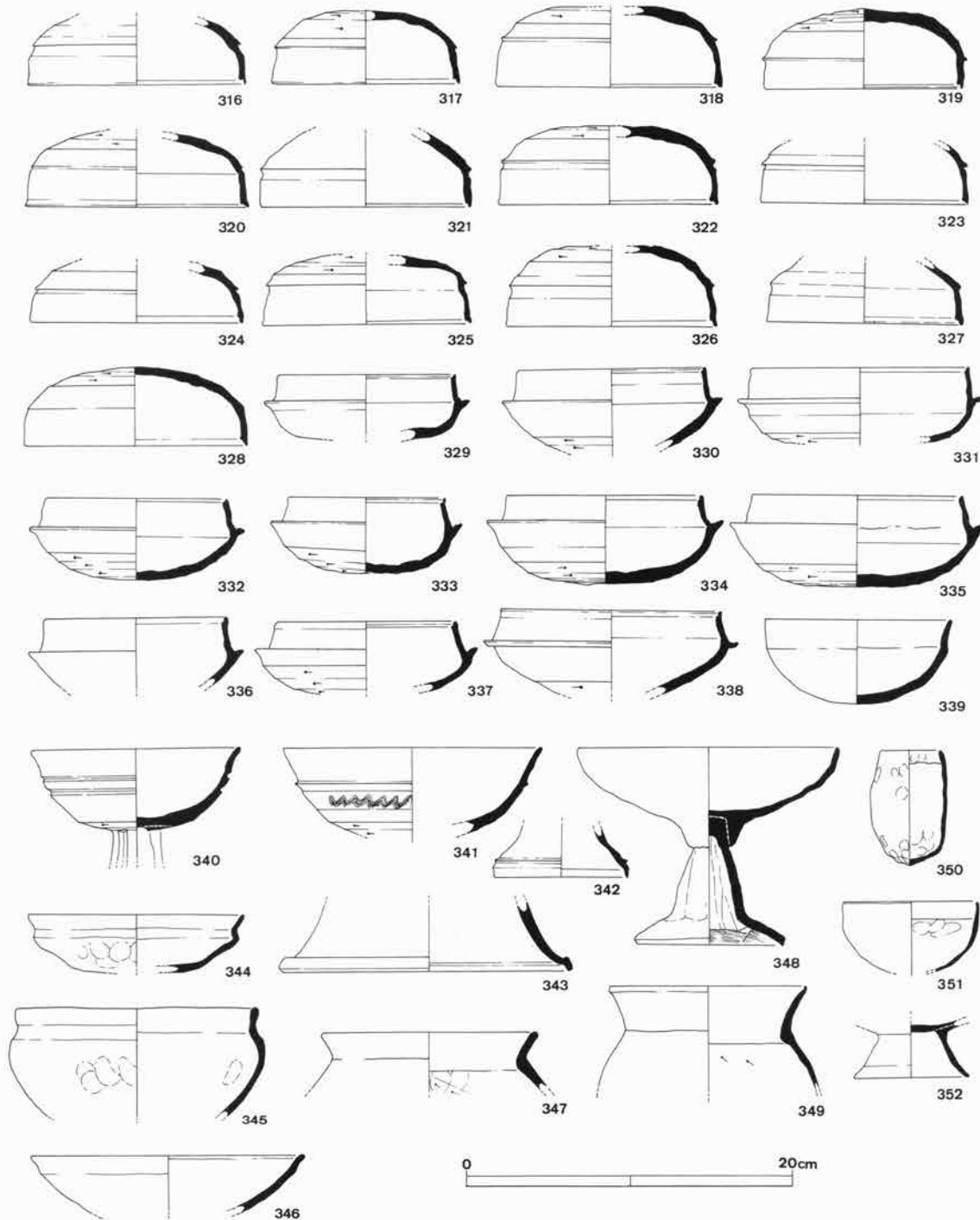


第70図 白玉・滑石片実測図(溝394)

土坑389出土遺物(第75図) 土師器の高杯には平らな杯部から直線的に外反する口縁部をもつ421と椀形を呈する422がある。425は、屈曲する口縁部をもつ土師器の甕である。これらの土器群には須恵器が共伴しないが、須恵器出現直後の土器群であろう。

土坑396出土遺物(第75図) 427は、口径22cm、杯部の深さ8cmを測る大型の土師器の高杯である。428は、口縁部が短く外反する土師器の甕である。古墳時代中期に比定できよう。

包含層出土遺物(第74・75図) 包含層からは、古墳時代を中心とする遺物が多く出土している。その中でも第75図443~444は、第67図に示した古道の整地層から出土した布目瓦である。同整地



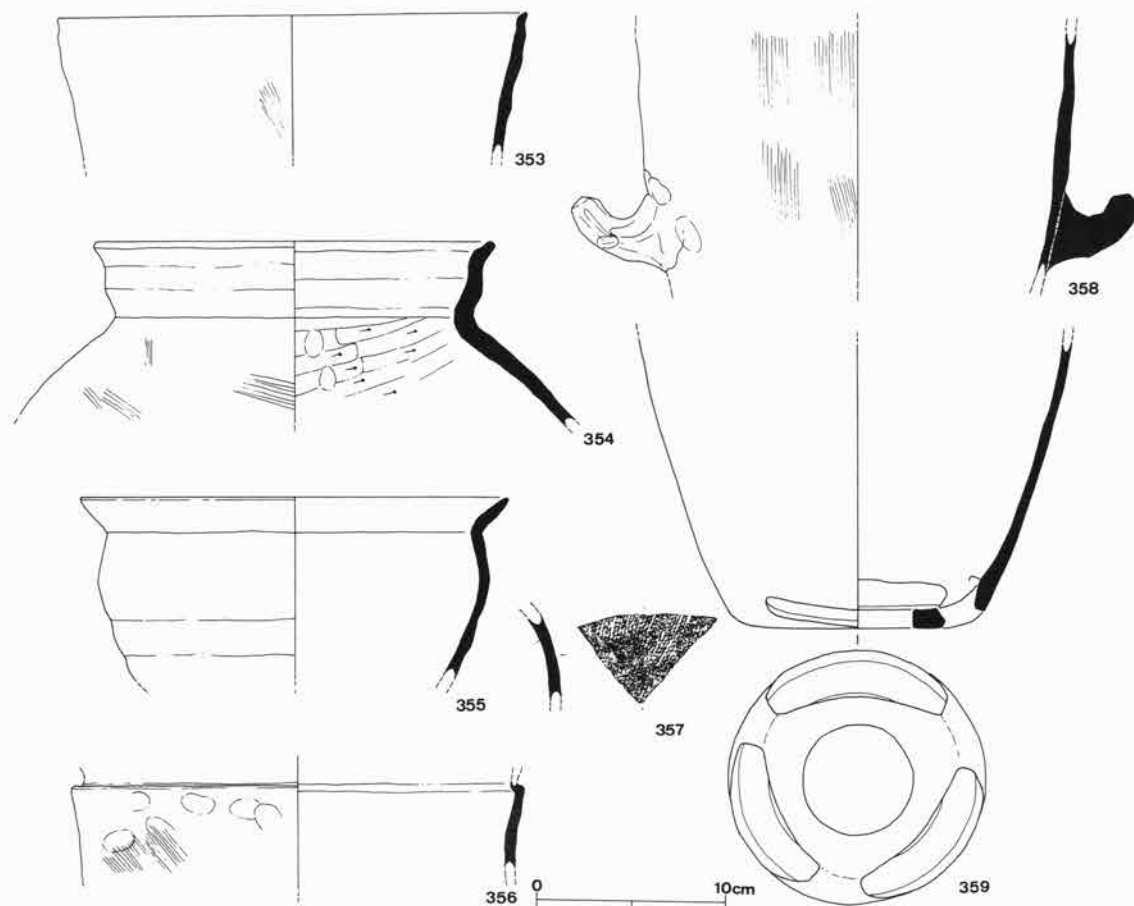
第71図 出土遺物実測図(土坑1)

層からは、奈良時代の土器も出土しており、古道の時期を決する上で根拠となる遺物群である。

以上が、各遺構単位の出土遺物の概要であるが、ここからは、森垣外遺跡を特徴付ける遺物を他の共伴遺物から切り離し、遺物の種別毎に概観していきたい。

第76図445は、粘板岩製の石包丁である。森垣外遺跡では、過去にも弥生時代の遺物が散発的にはあるが出土している。第78図459～461、第70・72図にも類似資料を図示した。446は砂岩系の砥石である。平面形態が台形を呈しており、最大幅が残存する側面には、多くの深い擦痕が見られる。第76図447は、最大長7.8cmの鉄滓である。当該遺跡では、多種類の砥石ならびに多くの鉄滓が出土しており、鍛冶や鉄製品および石製品模造品が製作されていたことが想定される。

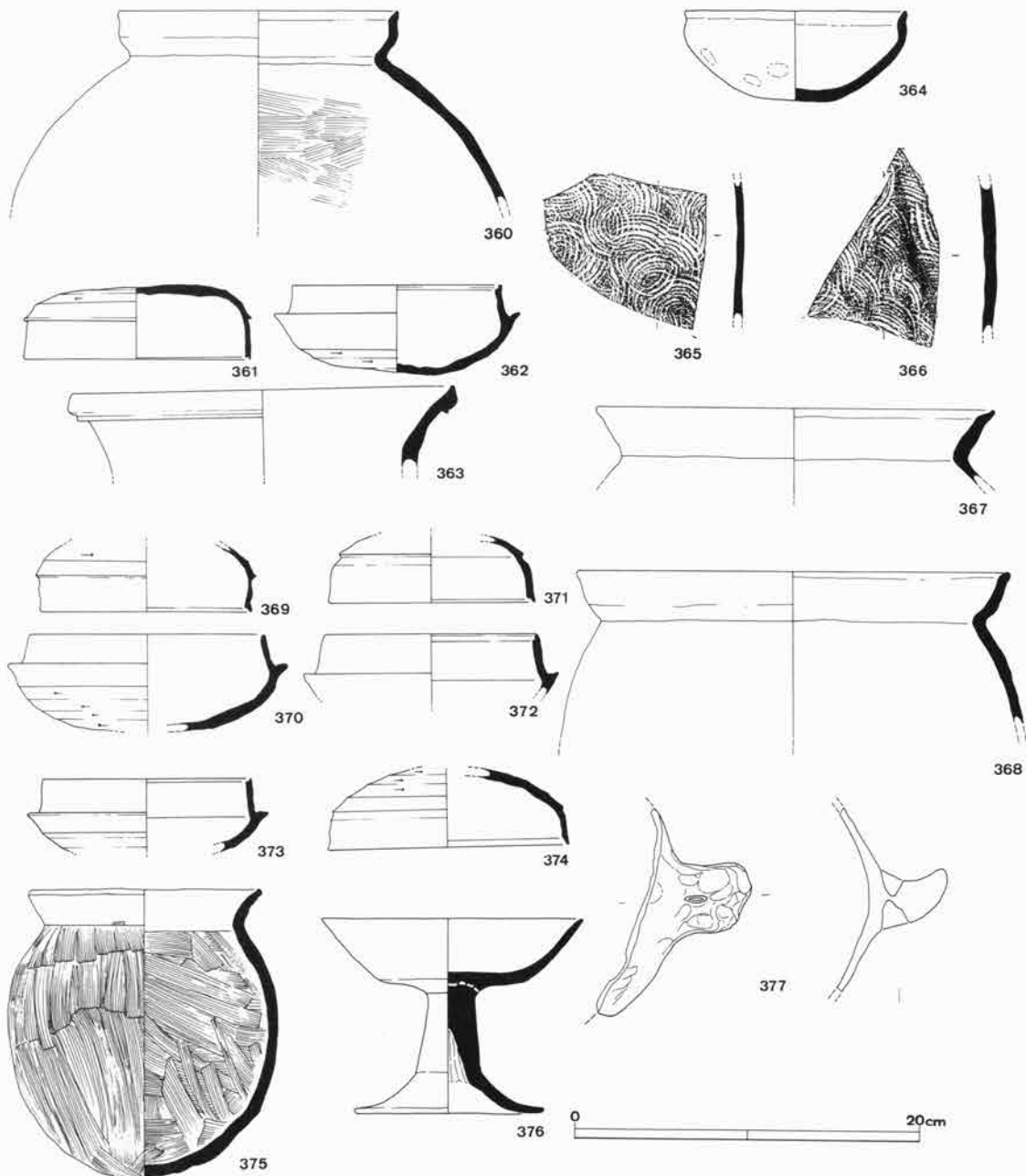
第77図448は、B3地区方形区画溝979から出土した全長3.8cmの剣形石製模造品である。449は、A3地区第4層から出土した残存長3.1cmの剣形石製模造品である。2か所に穿孔部があり、有孔円板の再加工による転用と考えられる。450は、A3地区SX235から出土した全長2.9cmの勾玉形石製模造品である。側面の加工は粗く、粗雑な成形が目立つ。451は、B3地区土坑362から出土した全長3.6cmの勾玉形石製模造品である。450と同じく側面の加工は粗く、粗雑な成形である。452は、A3地区第4層から出土した最大直径2.5cmの有孔円板である。側面の遺存状況は著しく不良で、粗雑な成形が目立つ。453は、A3地区第4層から出土した最大径3.5cmの有孔円板である。側面は、直線的な成形であり、一部欠損する。454は、A3地区第4層から出土した直



第72図 出土遺物実測図(土坑1)

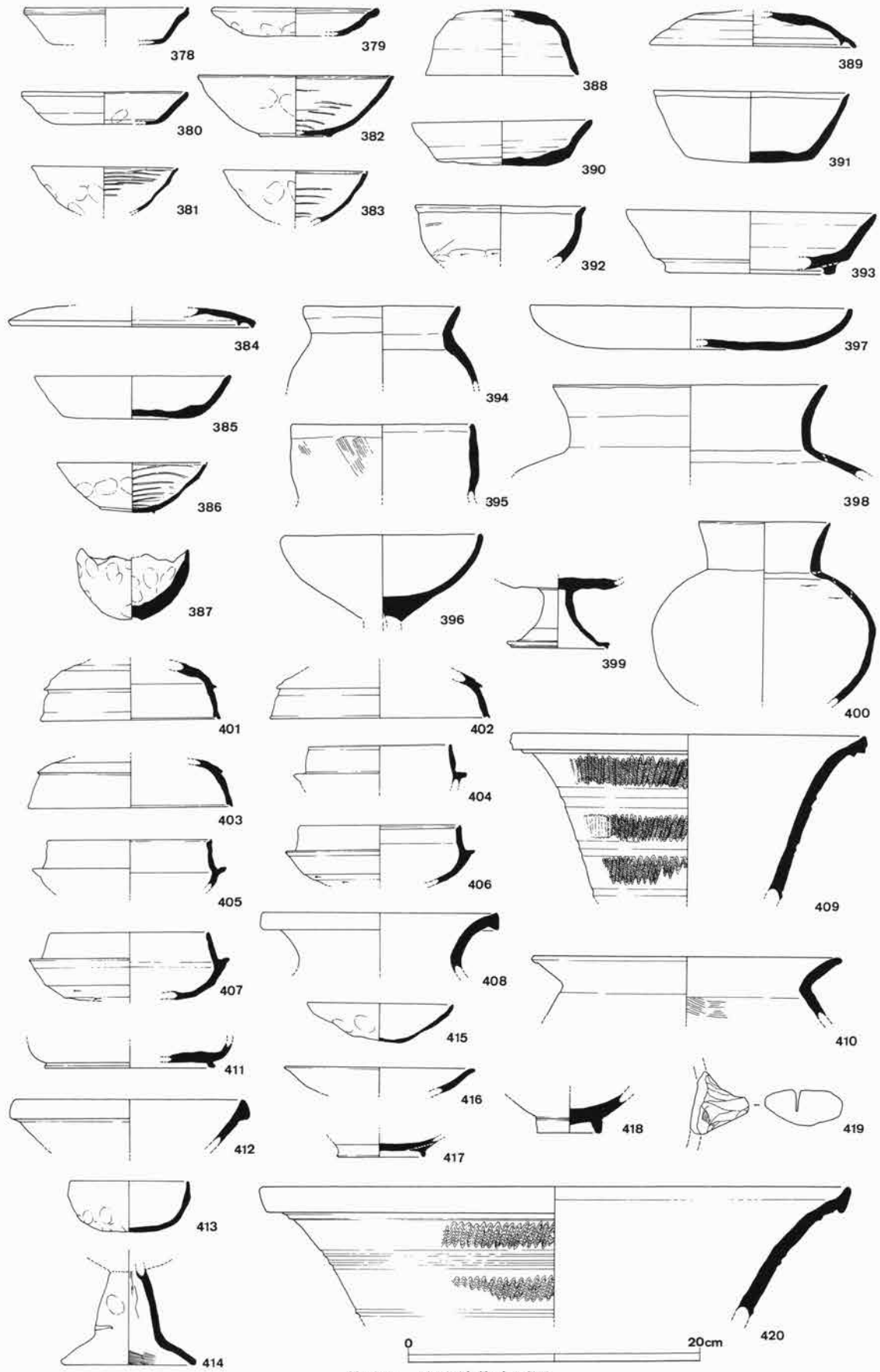
径0.8cmの滑石製管玉である。455は、A3地区柱穴11から出土した直径0.5cmの緑色凝灰岩製の管玉である。第47・48図に示したように同地区では緑色凝灰岩の原石が出土しており、当該遺跡地内で作製された製品である。456は、A3地区第4層から出土した直径0.8cmの滑石製管玉である。457は、A3地区第4層から出土した直径1.1cmの滑石製管玉である。458は、直径4cm、中央部の穿孔直径0.4cm、厚み1.4cmを測り、傾斜面が内湾する滑石製紡錘車である。

第78図459は、B2地区土坑286出土の全長3.9cm・幅2.2cmを測る打製石鏃である。460は、A3地区包含層出土の全長3.5cm・幅1.4cmを測る打製石鏃である。461は、B2地区包含層出土の打製石鏃である。先端および基部が欠損している。



第73図 出土遺物実測図

360～368：土坑94 369・370：溝363 371・372・377：溝365 373：土坑254 374～376：包含層



第74図 出土遺物実測図

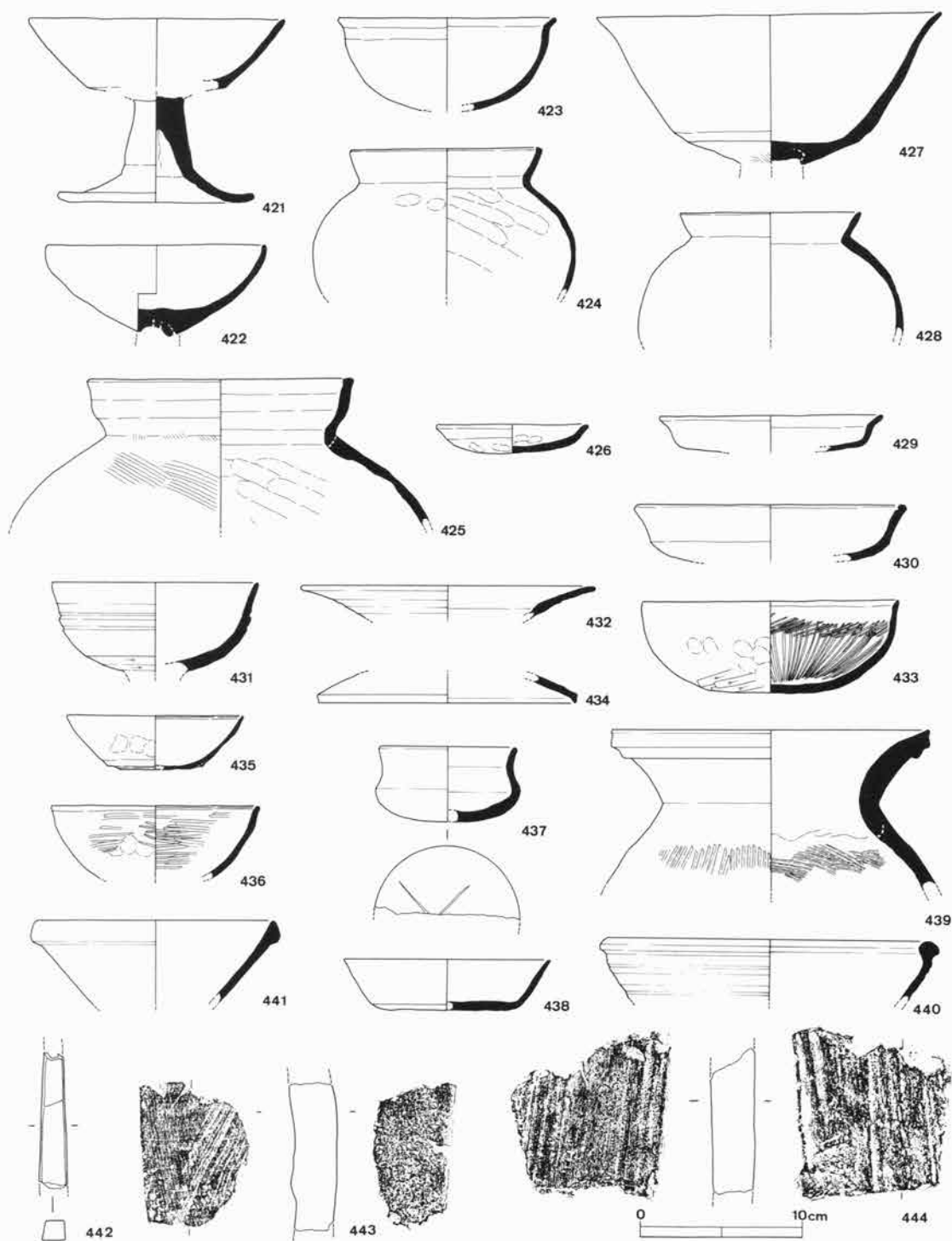
378・382・383：柱穴75
385～387：井戸

379・380：柱穴8
388～400：S X 284

381：柱穴77
401～420：包含層

384：土坑426

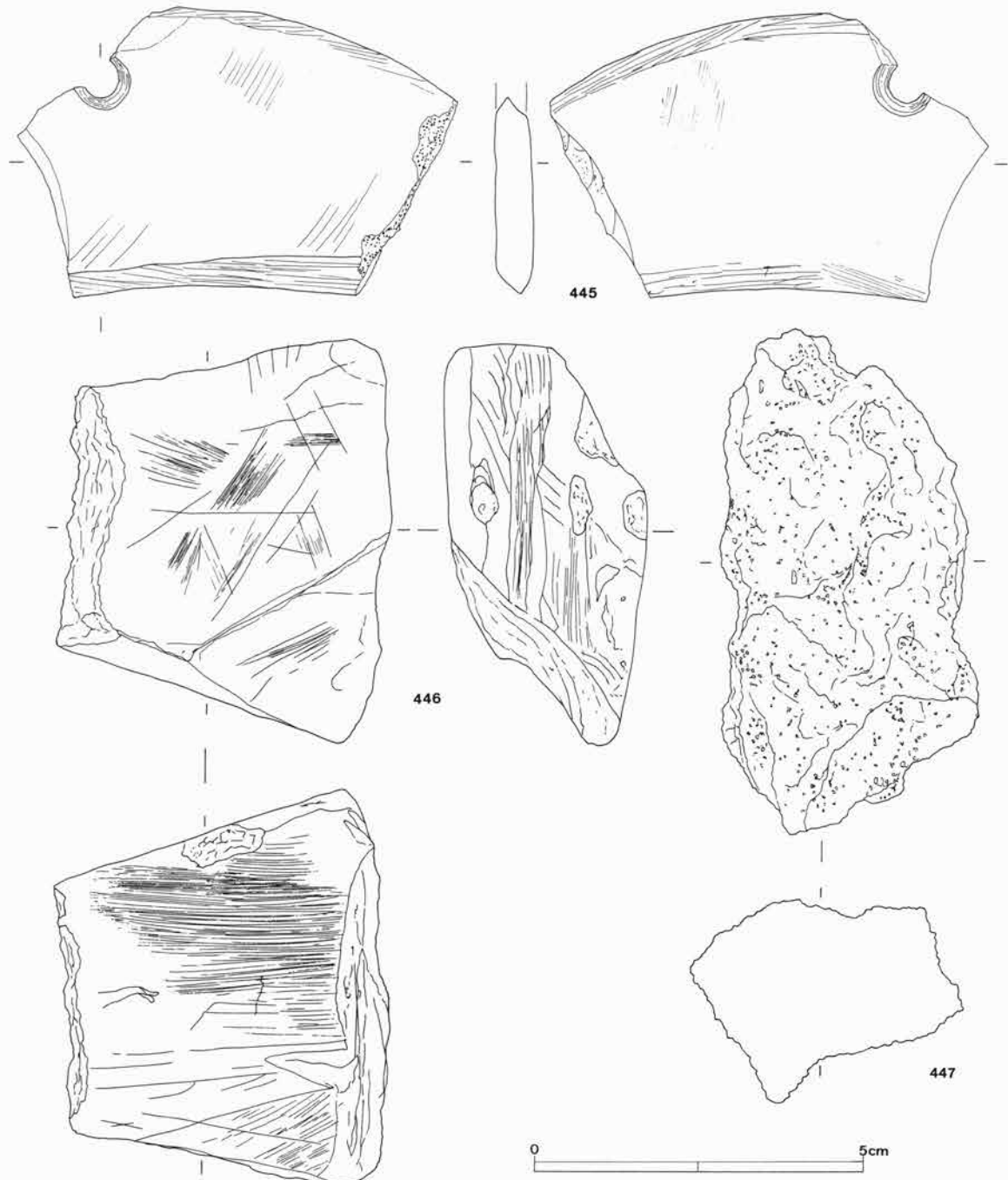
462は、A3地区包含層出土の残存長7.6cmの鉄釘である。断面が不整な五角形を呈し、敲打のため全体的に湾曲している。463は、A3地区包含層出土の幅2.6cmを測る鉄剣片である。464は、平成9年度16bt出土の残存長5.4cmの鉄剣片である。465は、A3地区包含層出土の断面が半円形を呈する半環状の鉄製品である。溶接痕が見られ、何らかの製品から剥落したのであろう。466は、平成9年度竪穴式住居跡171から出土した幅1.6cm・厚み0.2cmを測る小札状の鉄製品である。



第75図 出土遺物実測図

421～425：土坑389 426：土坑361 427・428：土坑396 429～444：包含層

穿孔の有無はレントゲン未撮影のため知り得ないが、形態的にはミニチュア鉄製品の可能性もある。467は、平成9年度26bt出土の断面「Y」字形の鋤先基部である。468は、A3地区包含層出土の残存長9.2cmを測る鉄釘である。469は、平成9年度堅穴式住居跡171から出土した幅1.4cmのミニチュア鉄製鎌である。470は、A3地区包含層出土の残存長6.4cmを測る曲刃鎌である。471は、A3地区包含層出土の残存長4.6cmの鉄鋸である。472は、B1地区SX869出土の鉄製鎌である。先端部は欠損しているものの、装着のための折り返し部は残存している。473は、平成9年度16bt出土の残存長5.2cmの鉤である。486は、B2地区包含層出土の最大長7.6cmを測る鉄滓



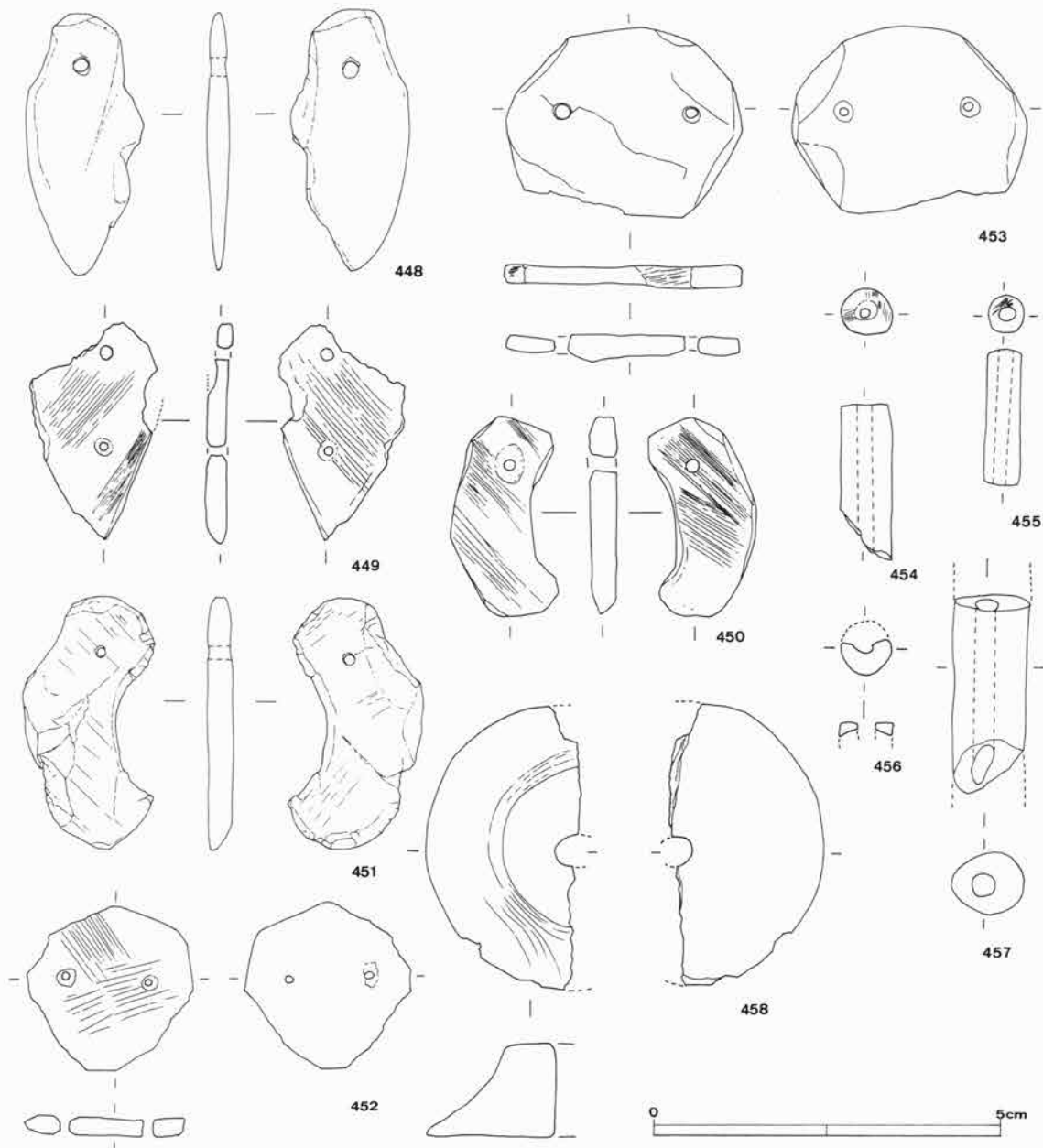
第76図 石器・鉄滓実測図
445・446：A3地区包含層 447：B2地区包含層

である。474～485は、滑石白玉である。

第79図には滑石原石を集成しており、各々出土地点と最大長を列挙しておく。487はB3地区SX396出土、最大長12.1cm。488はB3地区SX397出土、最大長4.7cm。489はB3地区SK362出土、最大長3.6cm。490はB3地区SX489出土、最大長1.7cm。491はB3地区SX489出土、最大長1.1cm。492はB3地区SX489出土、最大長1.0cmである。

森垣外遺跡からはサヌカイト片が多く出土している。第80図には、その内の一部を掲載している。石材から、二上山系サヌカイトと認定できる。

第81図496～499は、外面を格子タタキ目、内面をていねいにナデ消した軟質焼成の韓式土器で

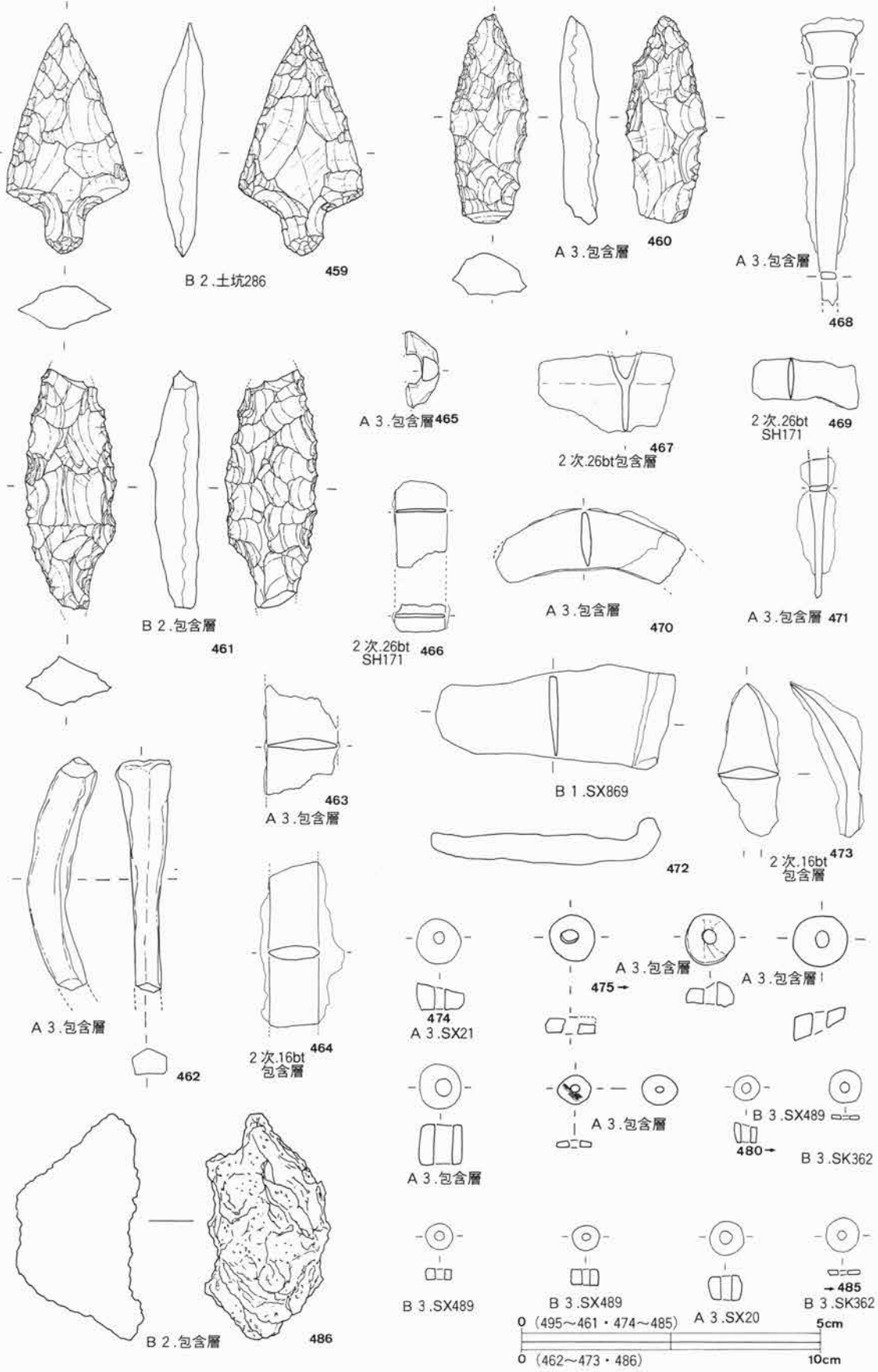


第77図 石製品実測図

448：B3地区区画溝979
451：B3地区土坑362

449・452～454・456・457：A3地区包含層
455：A3地区柱穴11

450：A3地区SX235
458：B2地区土坑251



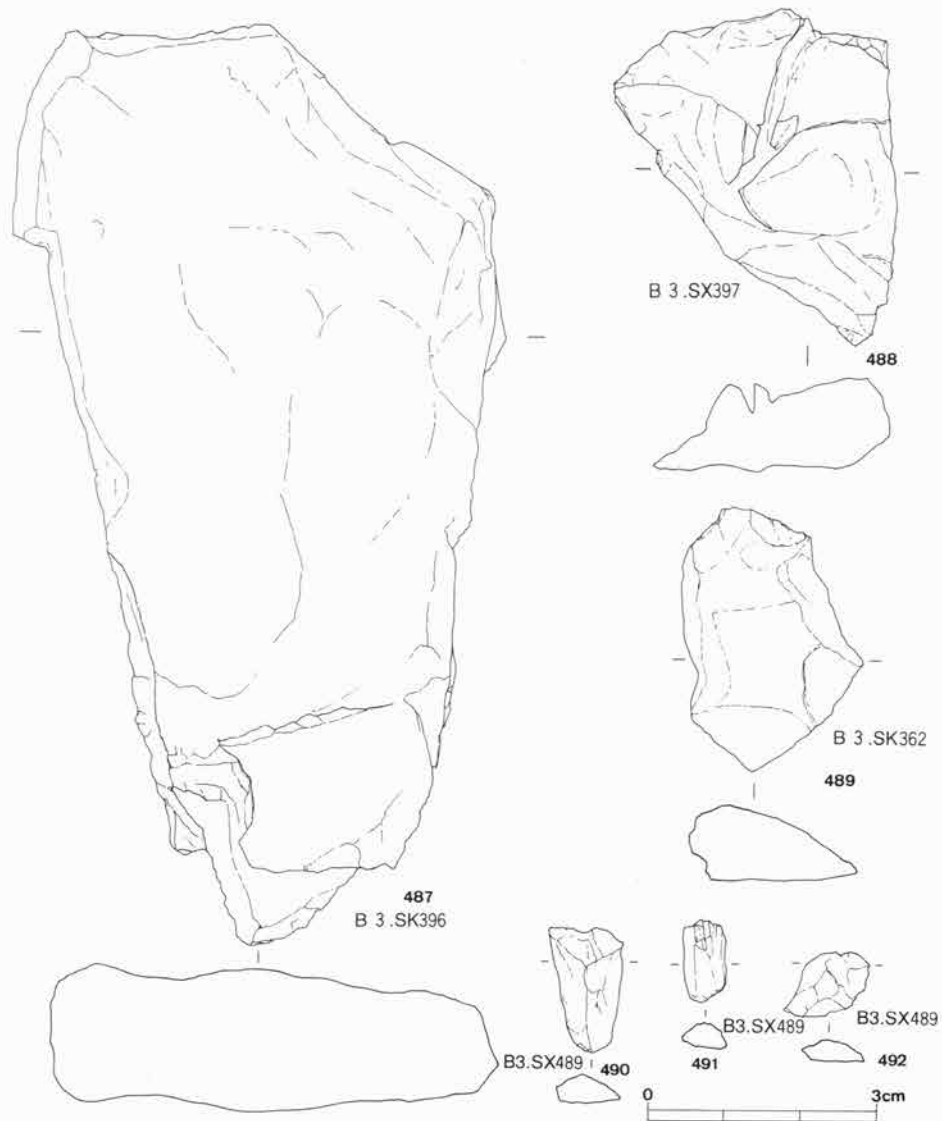
第78図 石器・鉄器・白玉実測図

ある。500～502は、縄目タタキ目を有する平瓦片である。503は、風字硯の脚部を含む破片である。森垣外遺跡では、奈良時代から平安時代に比定できる緑釉陶器、灰釉陶器、瓦片などが出土しており、一般的な集落の出土遺物とは様相を異にしている。風字硯の出土も森垣外遺跡周辺に公的施設が存在する可能性を示唆している。

第82図は、B2地区土坑178から出土した弥生土器である。505は、口径17.2cmを測る甕形土器である。外面に縦方向のハケ目が観察できる。506は、口径24cmを測る甕形土器である。外面には斜めハケ目、口縁部内面には横ハケが観察できる。507は、櫛描文と櫛描扇形文を施した壺形土器である。これらは、弥生時代中期に比定できる資料であり、当該遺跡では、唯一の良好な一括資料である。既往の調査においても中期の土器や石器が出土している。調査地西方に弥生時代の遺構が存在する可能性については、既刊した概要報告において記述したとおりである。

以上が、森垣外遺跡第4・5次発掘調査の事実関係と若干の私見である。ここに、取り上げた遺構・遺物群は、全体の総数から見ればわずかではある。しかし、既往の発掘調査成果とあわせて総括する上

では、一定の基準には到達したと考えたい。本来ならば、これらの発掘調査成果を含め、詳細な検討と考察、類似資料の集成などを行う必要があるが、概要報告でもあり、多くを割愛しなければならない。総括は別稿を起こすこととし、次章では調査成果の全体を概観するにとどめたい。



第79図 滑石原石実測図

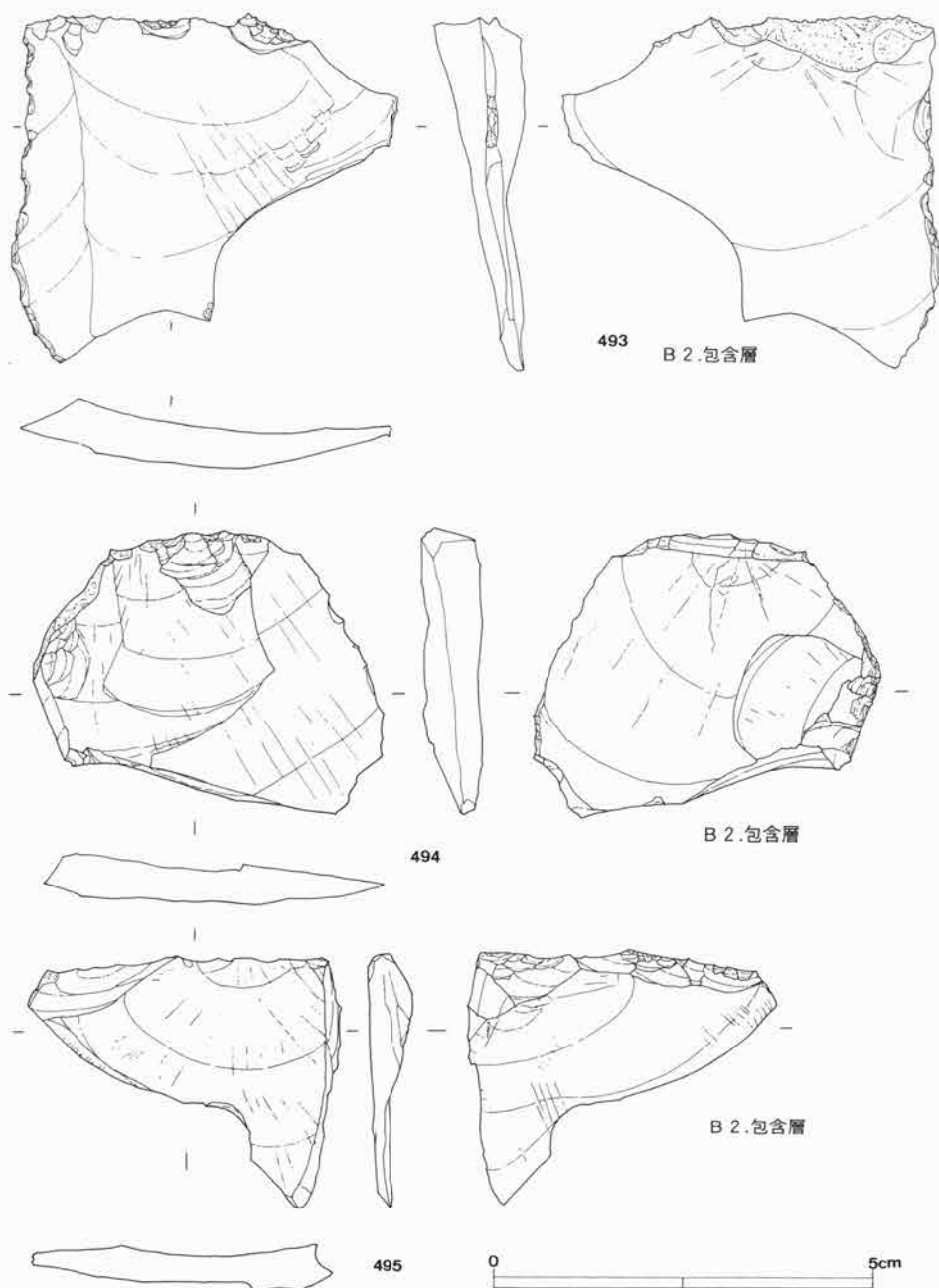
5. 検出遺構・遺物の総括

(1) 遺構(図版第44)

森垣外遺跡において検出した遺構で最も注視すべきは、古墳時代中期後半に比定できる大壁住居跡群である。現時点では第2次A1地区大壁住居跡639と本稿に報告したA3地区大壁住居跡143および585の3棟である。構造的には、基礎布掘り溝が方形に全周する建物と平面プランが長方形を呈し、隅部で溝が断絶する建物に分類できる。溝が全周する建物が、大半を占めることは、すでに、指摘されているが、隅部の溝が断絶する事例は、滋賀県穴太遺跡等においてわずかに確認されている。大壁住居跡が朝鮮半島起源の建築様式であることは、半島内の調査事例の増加な

どにより、徐々に明らかになりつつある。なお、住居との認識が一般的であるが複数棟の大壁住居によって集落が検出される事例がないことから、用途としては倉庫を想定する方が蓋然性が高いといえる。

一方、古墳時代の掘立柱建物跡群は、第85図にあるように現時点では、119棟確認している。時期的には第2次A1地区柱穴653からTK216



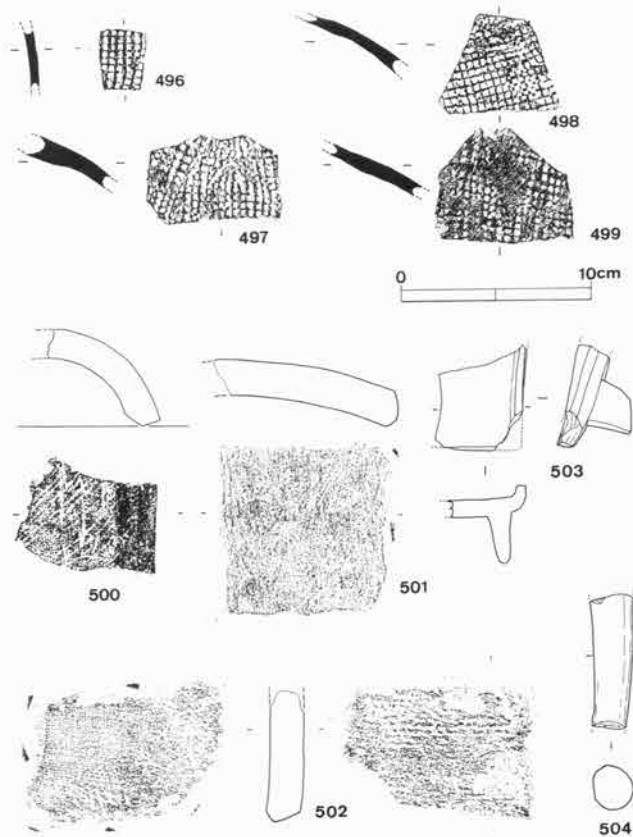
第80図 サヌカイト実測図

型式に比定できる礎が出土しており、集落形成期と認識できる。しかし、最も盛行する時期はTK23~47型式併行期であり、第2次A1地区、第4次A3地区、第3次B1地区を中心に掘立柱建物跡群が形成されていることがおおむね把握されるに至っている。特に、第3次B1地区では、一辺46mの方形区画溝内に大型の掘立柱建物跡が造営されており、同様な遺構が第3次C地区においても造営されている。このことから、集落内には複数の区画が存在し、一般の居住空間とは隔絶された様相をうかがい知ることができる。これらの施設については、首長の居住空間も視野に入れて検討すべき課題であろう。なお、これらの中核的掘立柱建物跡群が廃絶する時期は、方形区画溝上においてMT15型式に比定できる竪穴式住居跡を検出していることと、多くの竪穴式住居跡が同型式からTK10型式に出現していることから、おおむねMT15~TK10型式に設定できよう。しかし、掘立柱建物は、小規模ながら、それ以後も存続する。

(2) 遺物

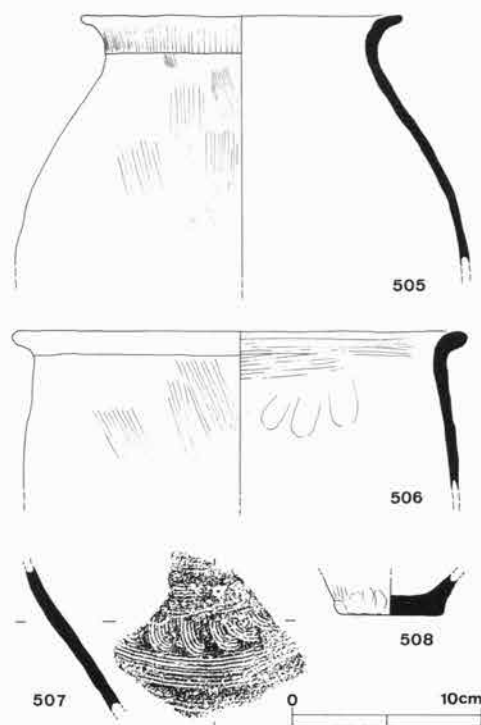
当該遺跡で最も注視すべき遺物として朝鮮半島から搬入された陶質土器がある。完形率の高い縄文土器も出土しており、破片資料の出土は、おおむね全地区に広がりを見せている。また、軟質焼成の格子タタキ目を有する陶質土器や、タタキ目や青海波文が一切残存しないことから、無文の工具によって成形されたと考えられる甕なども出土している。また、格子タタキ目をもつ韓式系土師器や甑ないしは鍋の把手にヘラ状工具による切り込みが入る韓式系土師器も出土して

いる。その他、朝鮮半島系遺物としては、携帯用のために紐を通す穿孔部をもち、

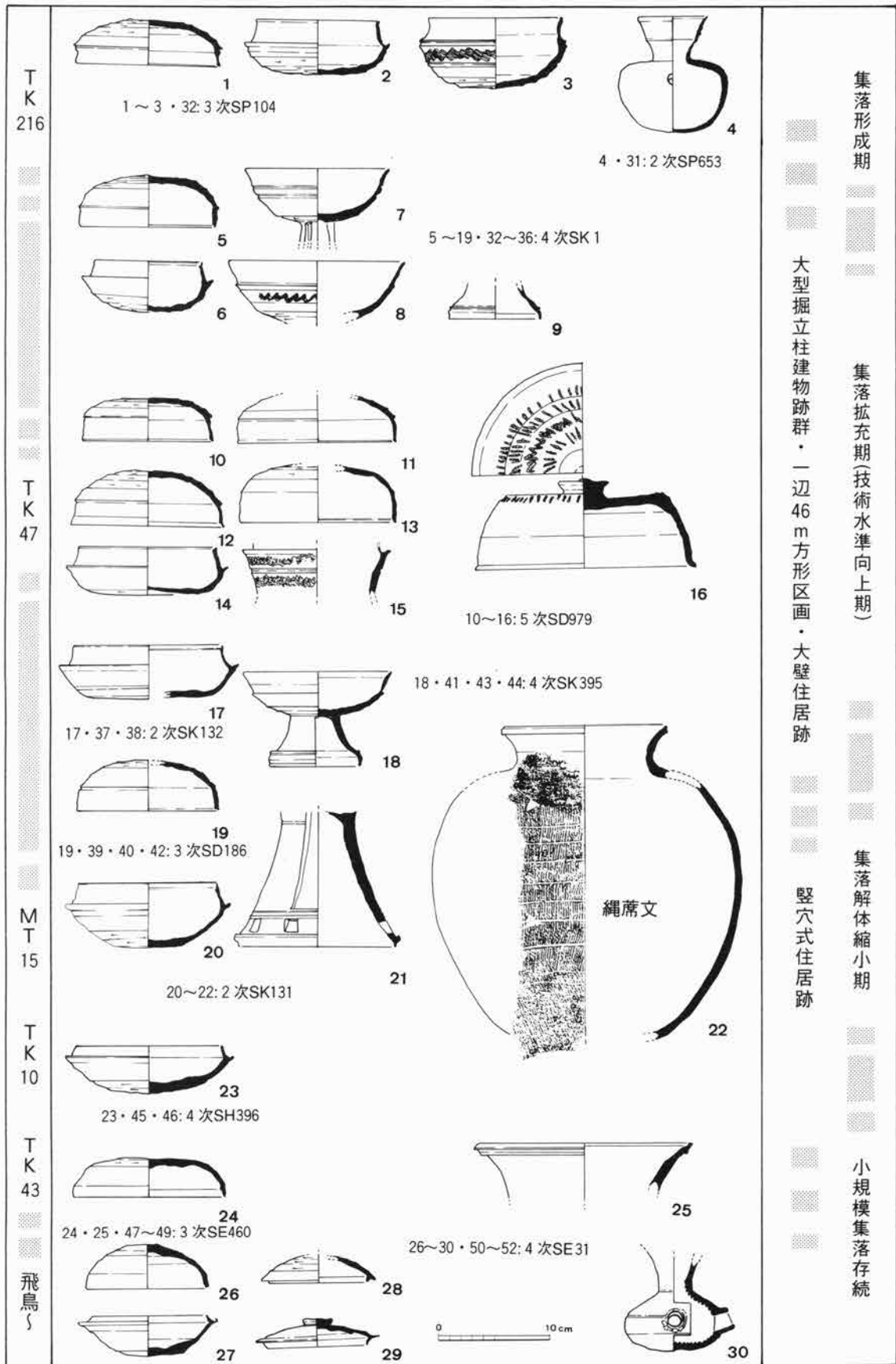


第81図 出土遺物実測図

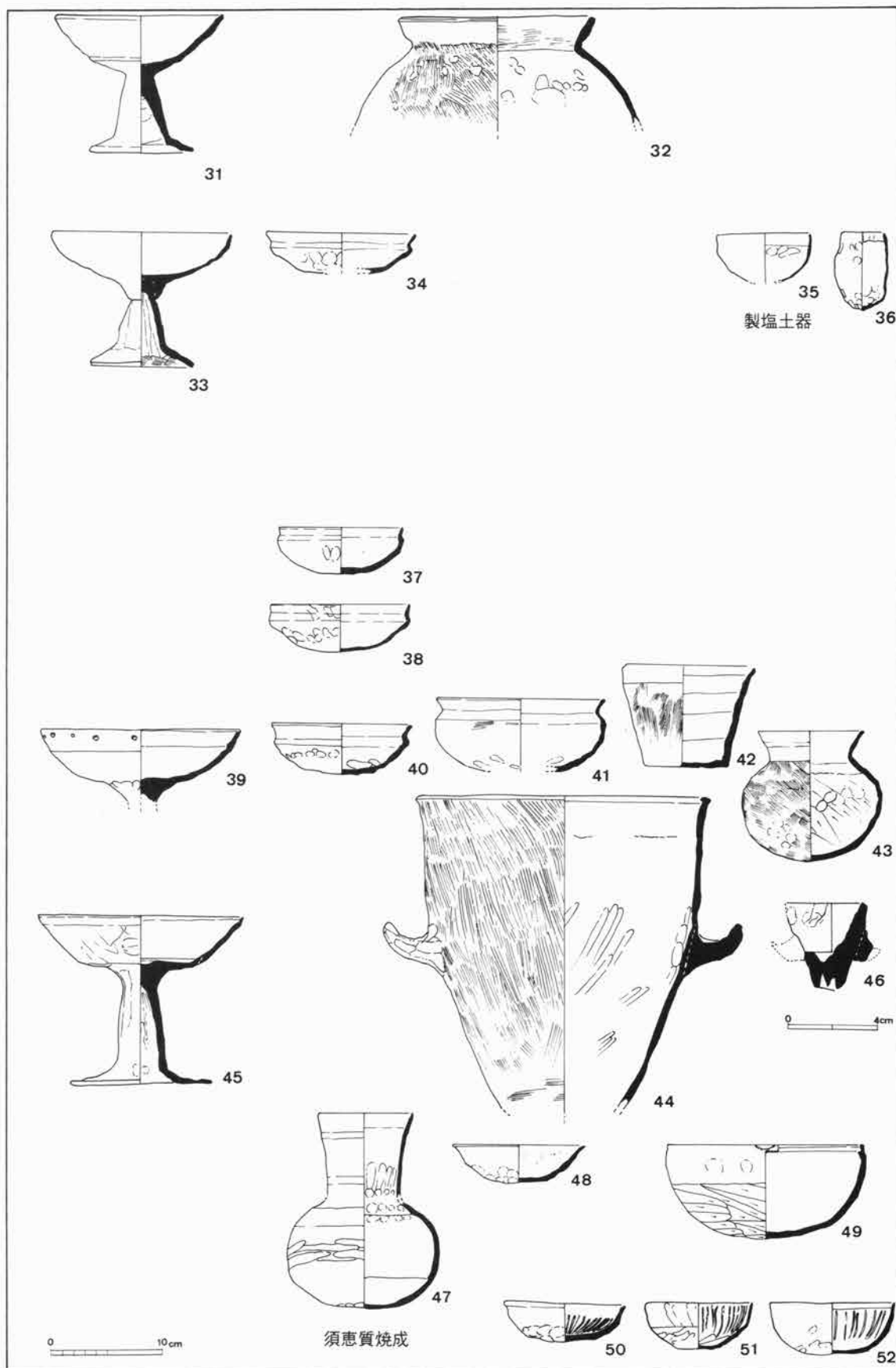
496~499: 2次SH171 500~502: B2包含層
503・504: B1包含層



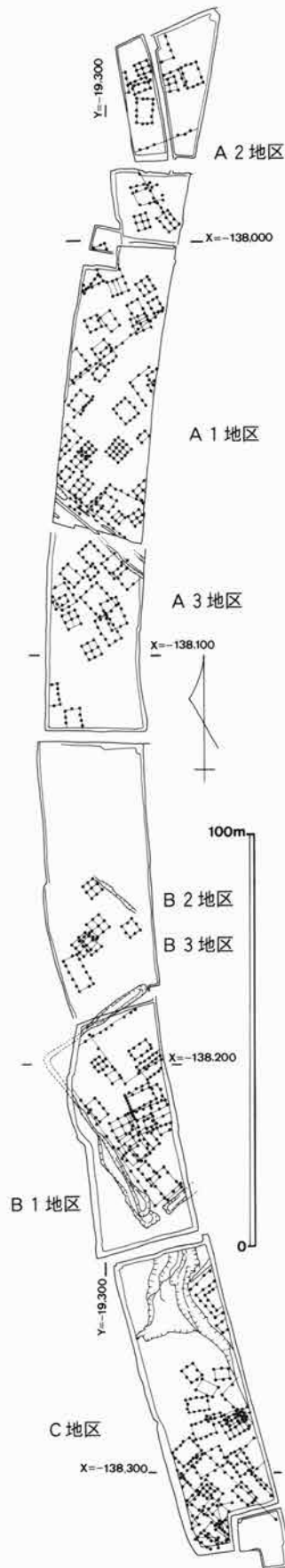
第82図 出土遺物実測図(B2地区土坑178)



第83図 出土土器変遷図(須恵器)



第84図 出土土器変遷図(土師器)



第85図 掘立柱建物跡分布図

扁平な形状を呈する砥石や鉄鍔、移動式竈などがあり、それらの出土の意義が当該遺跡の性格を考える上で重要である。

一方、大量に出土する須恵器および土師器は、TK216型式から飛鳥Ⅰ・Ⅱ型式におよぶ一括資料が良好な状態で出土している。その編年的な概観は第83・84図に譲るが、南山城地域における古墳や集落の動向との関連を今後検討する必要がある。提示した編年表は、その基礎資料としておきたい。

各地区からは相当量の製塩土器が出土している。その多くは細片であるため、形態については不明な点が多いが、和歌山県紀淡海峡付近から搬入された貝殻条痕を内面に有する個体や、還元焼成の個体などが確認できる。また、第71図350に見られるように砲弾形を呈する大阪湾岸からの搬入品や、平行タタキを有する中部瀬戸内からの搬入製塩土器も見られる。製塩土器で得られた塩は、固形塩であり、食用、工作用、宗教的な儀礼用と用途もさまざまであるが、第2次A1地区では、馬歯を埋納したピットを検出していることから、馬の飼育が集落内で行なわれたことが想定できる。馬の飼育に塩は飼料として不可欠であるが、大量に出土する製塩土器がそれと密接に関係することも念頭に置かねばならない。

一般的に古墳時代中期の技術革新には、鉄の原材料確保から製鉄・鍛冶による工具などの作製が大きく影響したとされる。それらの行程では、鉄滓が多く生じるため、集落内の鉄滓出土は、鍛冶などが行われたことを示す遺物として認識されている。当該遺跡においても、全地区から鉄滓や椀形鉄滓、鞆羽口が出土し、焼土坑も検出していることから、集落内で鍛冶が行われたことを推測させる。鉄製工具を集落内で作製する技術の定着は、生産力の向上につながり、周辺域では見られない先進的集落へと変貌を遂げていく重要な契機ともなったのであろう。これと符合するようにさまざまな農具・工具・武器などの鉄製品が出土している。

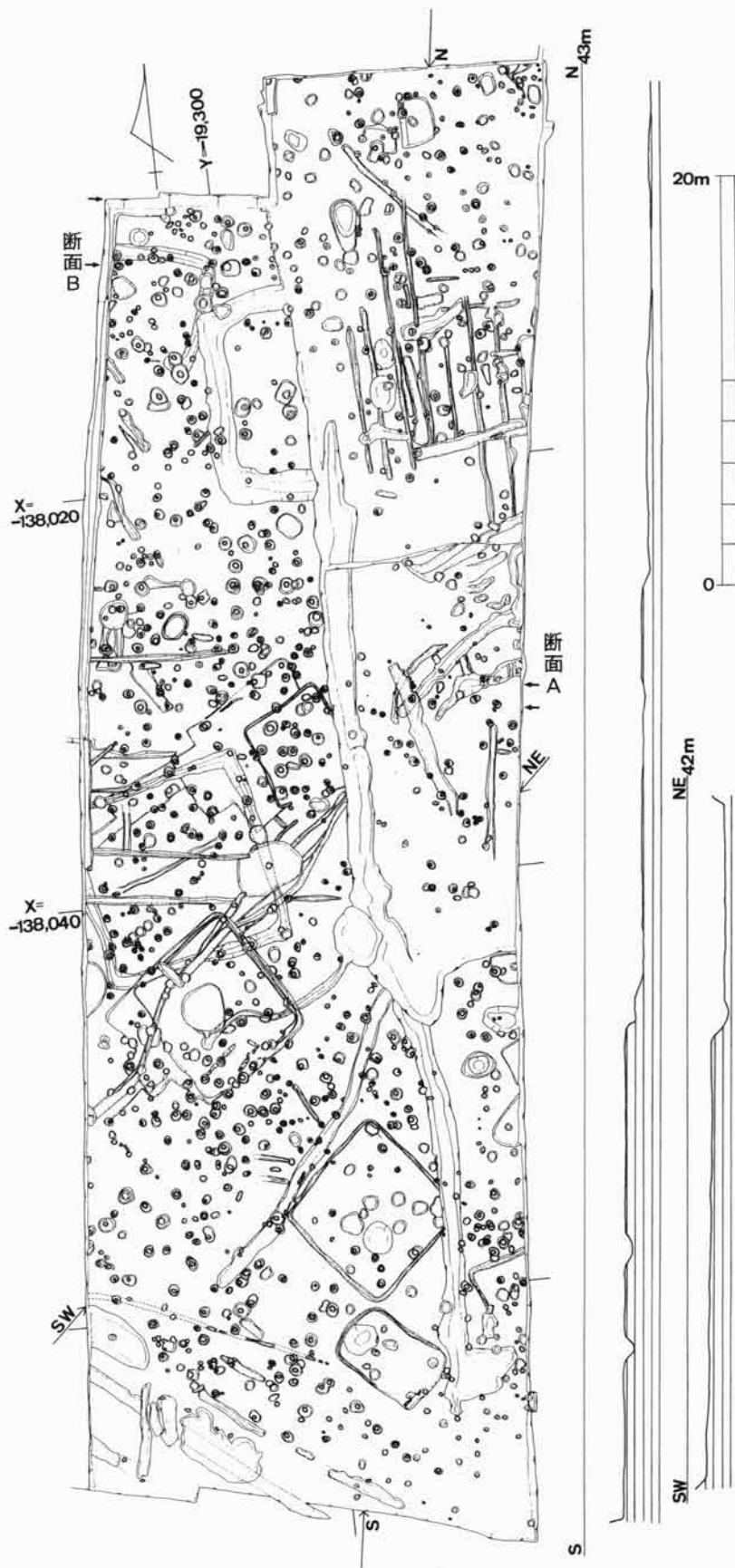
調査区全域で出土する遺物として精巧な鏡形・剣形・勾玉形・白玉などの石製模造品がある。また、滑石原石も多く出土していることから当該遺跡において製作された可能性が高い。石材種から紀伊産の滑石であり、製塩土器の出土との関連も想定できる。一方、粘板岩製および鉄製紡錘車や軽石・土錘の出土は、集落内の生業を表出する遺物であり、また、琥珀や緑色凝灰岩製の管玉

および原石、土玉は、多様な装身具の一端を表している。

このように森垣外遺跡では、南山城では類を見ない遺構・遺物を検出しており、古墳時代中期に形成された先進的集落の実態が把握された意義は大きい。南山城地域では、古墳を中心に古墳時代像が把握されてきたが、今後は、集落遺跡の動態と併せて研究が進展すれば、各画期を多角的に検証できるであろう。今後、古墳の動態と調査成果を含めて稿を起こしたいとおもう。なお、森垣外遺跡についての研究に資するため、第2次調査A1地区、第3次調査B1・C地区の遺構実測図および写真図版を再度掲載した。詳細は、各概要報告を参照していただきたい。

(1) 第2次調査A1地区(第86図、図版第38)

当該遺跡における本格的な面的調査である。朝鮮半島起源の大



第86図 A-1地区遺構実測図



第87図 B1地区遺構実測図(復元掘立柱建物跡は平安時代)

壁住居跡や陶質土器、韓式系土師器などとともに、陶邑編年TK23~47型式に比定できる掘立柱建物跡やMT15型式に比定できる竪穴式住居跡などを検出した。特に、柱穴からTK216型式の須恵器甕が出土しており、集落形成期を示す根拠となる。なお、一辺10mを測る方墳を1基確認しており、集落形成期以前の土地利用の一端を把握することができた。当該調査により、遺構密度の高い古

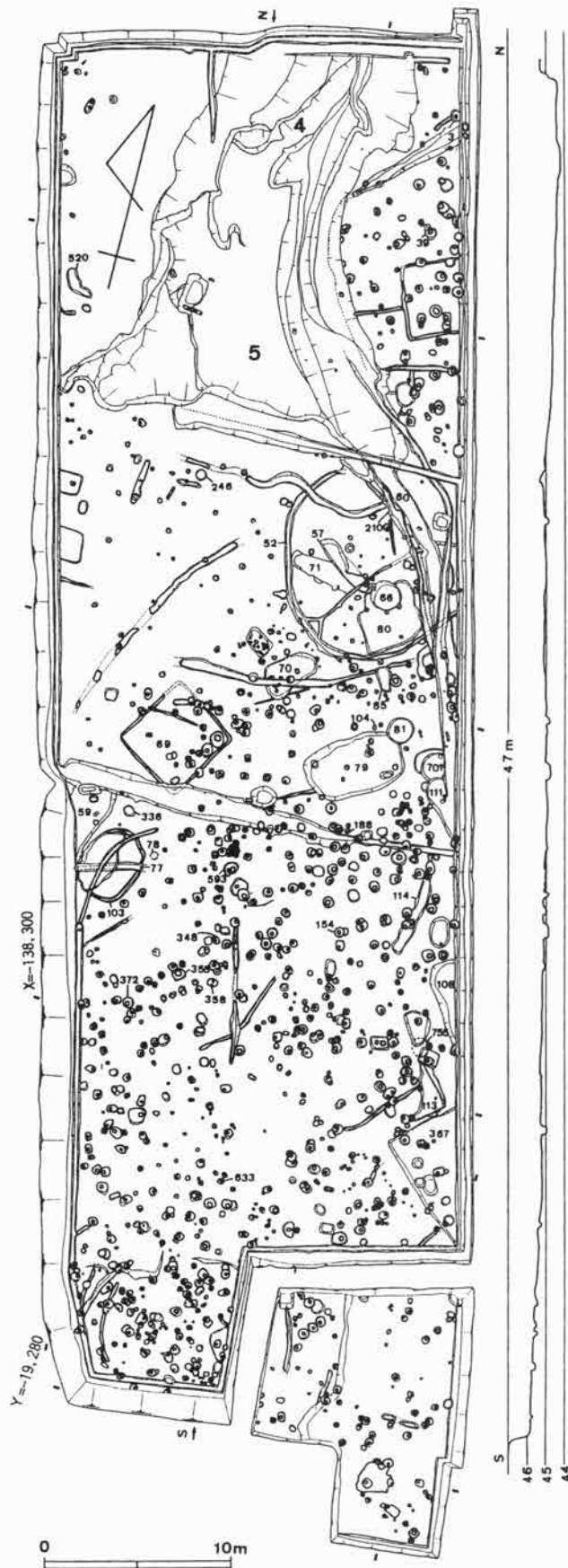
墳時代中期の集落跡であることが判明した。

(2) 第3次調査B1地区(第87図、図版第40・41)

陶邑編年TK23~47型式に比定できる掘立柱建物跡やそれらを囲繞する区画溝を検出した。掘立柱建物跡は、A1地区で検出した建物跡と比較すると、規模も大きく、密集度も高い。一方、それらを囲繞する区画溝は、南北方向で46mを測り、内側にそれと平行するように柵がめぐる。区画溝の内外では柱穴の粗密に明らかな相違があり、集落内において隔絶された施設であったことがわかる。なお、区画溝内に堆積する流入土から多量のクワ科・イラクサ科(Moraceae-Urticaceae)の花粉が検出されている。当該草本は、土手に多く群落を形成して生育する植物であり、区画溝と柵とともに、堤によっても区画されていることが判明した。なお、区画溝上では、陶邑編年MT15~TK10型式に比定できる竪穴式住居跡15を検出しており、区画溝によって囲繞された居住空間も、MT15~TK10型式にはその機能を喪失し、解体されていたことを示している。

(3) 第3次調査C地区(第88図、図版第42・43)

B1地区と同じく、方形区画溝とそれに囲繞された掘立柱建物跡を検出するとともに、多くの掘立柱建物跡や多量の遺物を含む流路などを検出した。また、集落の南限については、それを区画する施設の検出はできなかった



第88図 C地区遺構実測図

が、遺構密度が極端に希薄になることからそれを想定するに至った。流路内より鈕をもつ精巧な鏡型石製模造品が出土しており、滑石原石や砥石・鉄器などの出土から当該集落内で製作された可能性が指摘できた。また、縄蓆文土器や鍛冶工具の出土は、森垣外遺跡の特徴を表出する遺物として、その比較検討が重要な課題となろう。

以上が、既往の調査の概観である。今後、これらの調査成果を総合的に検討し、古墳時代の集落研究の基礎資料としたい。

6. おわりに

森垣外遺跡の報告は、試掘調査1冊、本調査3冊の計4冊を数える。このうち、本調査概要3冊の中で掲載した遺構の挿図数は、合計177点、出土遺物実測図点数は、1,638点を数える。この点数が集落の実態を把握する上で適量であるか否かは判然としない。しかし、集落の時期幅を検討する上では、必要量には達したと考えたい。全概要報告を上梓した今こそが、検討作業の開始をも意味するという認識をもち、今後に備えたいと思う。また、のべ350名の方々に現地説明会にお越し頂いたことも付記しておきたい。

酷暑、厳冬の中、発掘調査に従事していただいた多くの作業員諸氏、調査補助員諸氏にあらためてお礼を申し述べたい。また、複雑かつ膨大な挿図を作成していただいた、整理員諸氏にもお礼を申し述べたい。

最後に発掘調査を効率的に進捗できるように有形無形の協力を惜しまれなかった京都府木津土木事務所所員の方々のご配慮に対し、お礼を申し述べたい。また、多くの情報を提供していただき、数々のご配慮をいただいた精華町教育委員会の方々にもお礼を申し上げたい。

既刊の森垣外遺跡の発掘調査概要報告は、以下のとおりである。

試掘調査・・・有井広幸「森垣外遺跡第1次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

第2次調査A1地区・・・小池 寛・中村周平・野島 永「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

第3次調査A2・B1・C地区・・・小池 寛・松尾史子「森垣外遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

4・5次発掘調査参加者 竹村弘美・六車美保・田鍬美紀・木藤洋介・井上あい子・宮元香織・西置純子・伊森顕一・鷺坂有吾・岡野和美・城間恵美子・岡田 晃・井上雅善・坂本直子・笥 和也・前田洋輔
(小池 寛)

4. 大畠遺跡第4・5次発掘調査概要

はじめに

大畠遺跡は、相楽郡木津町相楽岸間堂に所在する弥生～古墳時代の集落跡である。木津町平野部の西南に位置し、奈良県との府県境に近接している(第89図)。周辺には、音乗谷古墳・音如ヶ谷瓦窯などの遺跡が所在している。また、昭和57年に調査地の南西側の丘陵から銅鐸が発見されている(相楽山銅鐸出土地)。発掘調査はこれまで3次にわたって実施されている。第1・2次調査(昭和57・58年度)は、相楽台ニュータウンの造成に先立ち、木津町教育委員会が実施し、弥生時代中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓、古墳時代中期～後期の土坑、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸などを検出している^(注1)。第3次調査(平成10年度)は当調査研究センターが実施し、弥生時代中期～古墳時代後期の流路や古墳時代後期の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡・土器棺などの遺構を検出している^(注2)。今回は、第4次が第3次調査トレンチ北側、第5次は第3次調査トレンチ南側でそれぞれ発掘調査を実施した。

今回の調査は、国土交通省・日本道路公団が計画している国道24号京奈道路の建設に先立ち、国土交通省近畿地方整備局京都国道工事事務所の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。

調査は、第4次調査については、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克と同調査員村田和弘が担当し、平成12年1月24日～3月7日までの期間で、約200㎡の面積



第89図 調査地位置図・周辺遺跡配置図(S=1/50,000)

を調査した。第5次調査は、同調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎と同調査員伊賀高弘が担当し、平成12年4月27日～6月29日の期間で約400m²の面積を調査した。また、概報執筆は伊賀・村田が分担して行ったほか、第5次調査の「出土遺物」の項目を小牧健太郎(奈良大学学生)が執筆した。発掘調査の際には、京都府教育庁指導部文化財保護課・木津町教育委員会・京都国道工事事務所・同京奈監督官連絡室や地域周辺の方々、調査補助員・整理員の方々の協力を得た。^(注3)ここに記して感謝したい。

(伊賀高弘・村田和弘)

(1)第4次調査

1. 調査概要

①調査経過

今回の調査地は、京奈道路北側の側道予定地内で、平成10年度(第3次調査)の調査地の北側に隣接している。そのため、第3次調査で検出した遺構の北延長部や関連遺構が検出されることが予想された。

調査は、側道建設予定地内に長さ約100m・幅約4.0mの調査トレンチを設定し、調査した(第90図)。掘削は、遺構の確認される面の上面まで重機で、それ以下は人力による掘削を行った。遺構面を精査すると、柱穴や土坑・溝などの遺構を多数検出した。また、トレンチ東側において、さらに下層で溝などの遺構を検出した。

②基本層序

第4次調査トレンチは、基本的な層序は第3次調査での所見と同じであった。地形は、トレンチの西側(標高約39.0m)から東側(標高約37.0m)に向けて傾斜している。前回の調査と同様に、西側は田畑の造成によってほとんど削平されており、遺構の密度は低かった。中央から東側については、遺構がよく残っていた。そして、東側にはさらに下層(標高約36.5m)で溝などの遺構を検出した。

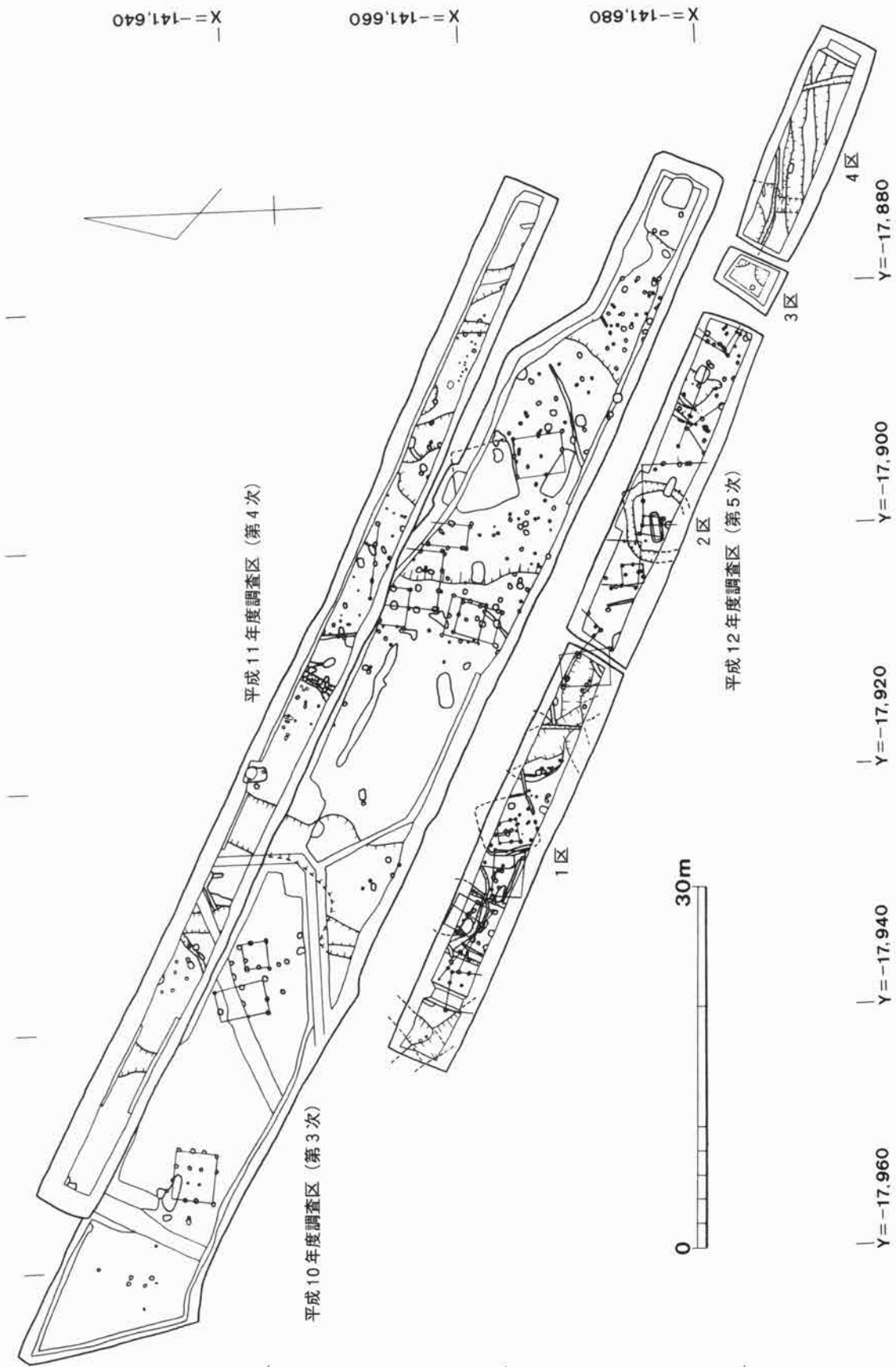
2. 検出遺構

今回の調査トレンチで検出した遺構の主なものについて報告する。

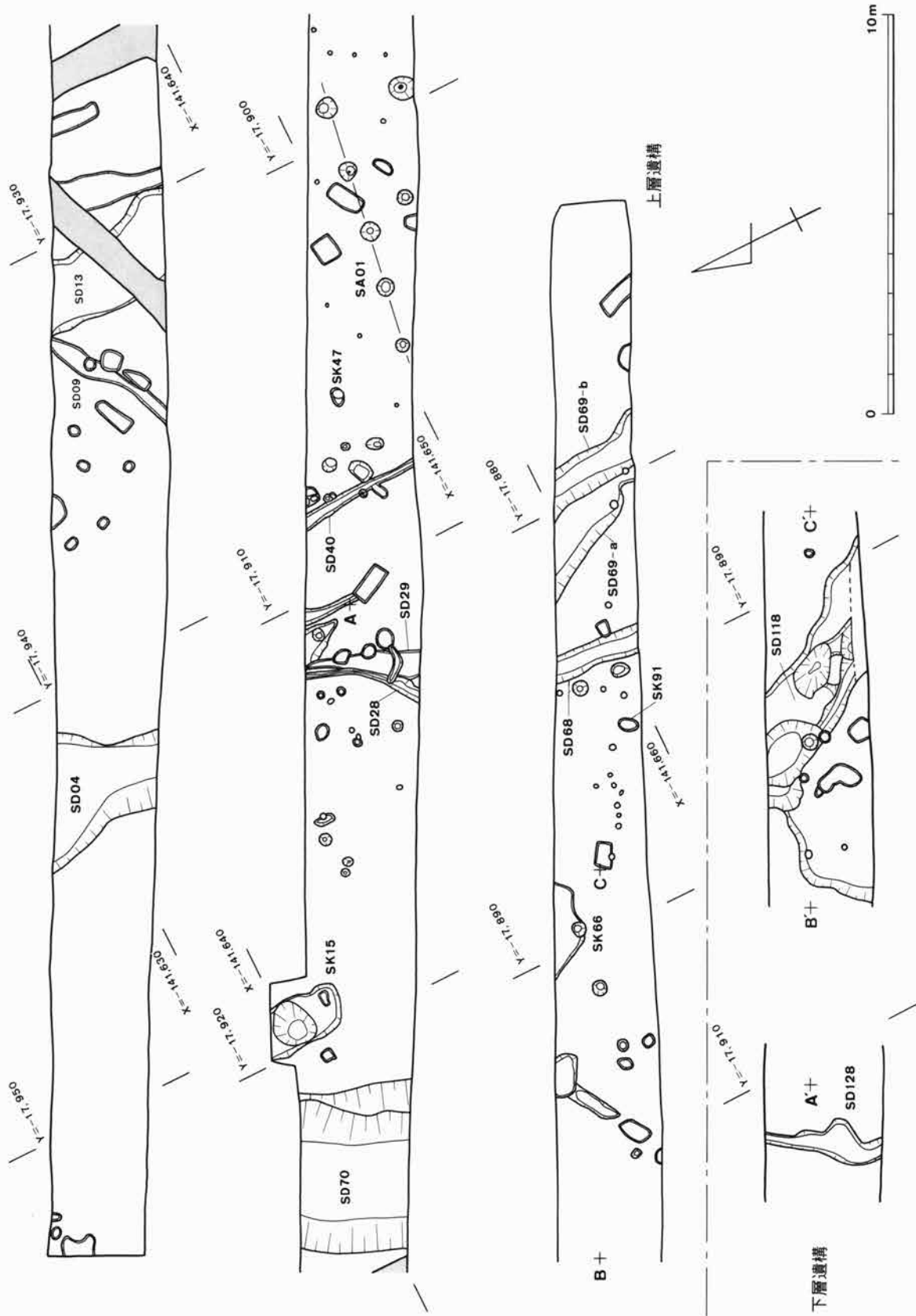
①上層遺構(古墳時代初期・中期～後期)

S A 01 調査地の東半分で検出した柱穴5基が東西方向に並ぶ柵である(第92図)。柱穴の規模は平均で径約0.4mを測る。柱穴の埋土からは、須恵器壺の破片などが出土した。柱穴55には柱痕が残っていた。

S D 04 当初南北方向の溝として検出したが、北側で落ち込みを検出した。北側のトレンチ壁面を断ち割って観察した結果、井戸状の掘形を確認した。しかし、調査地外である北側に広がっ



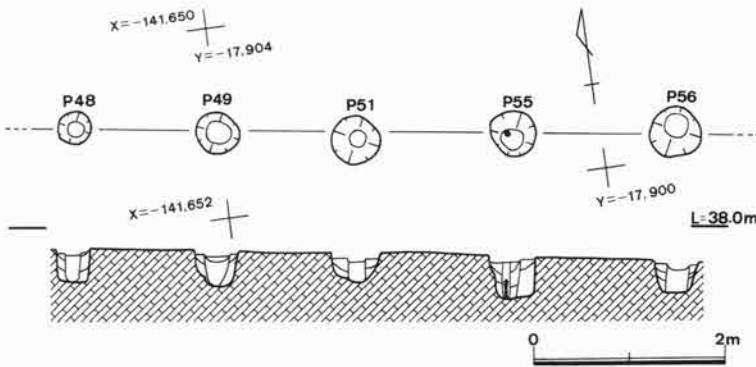
第90図 調査区配置図(主要遺構配置図 S=1/500)



第91図 第4次調査トレンチ遺構配置図(上層・下層) S=1/150

ていることから、これ以上は調査できなかった。

S K 15 南北方向に長い長方形を呈した土坑である。東西の長さは約1.2m・南北の長さは2.2m以上で、深さは約0.3mを測る。埋土からは須恵器・土師器の破片が少量出土した。



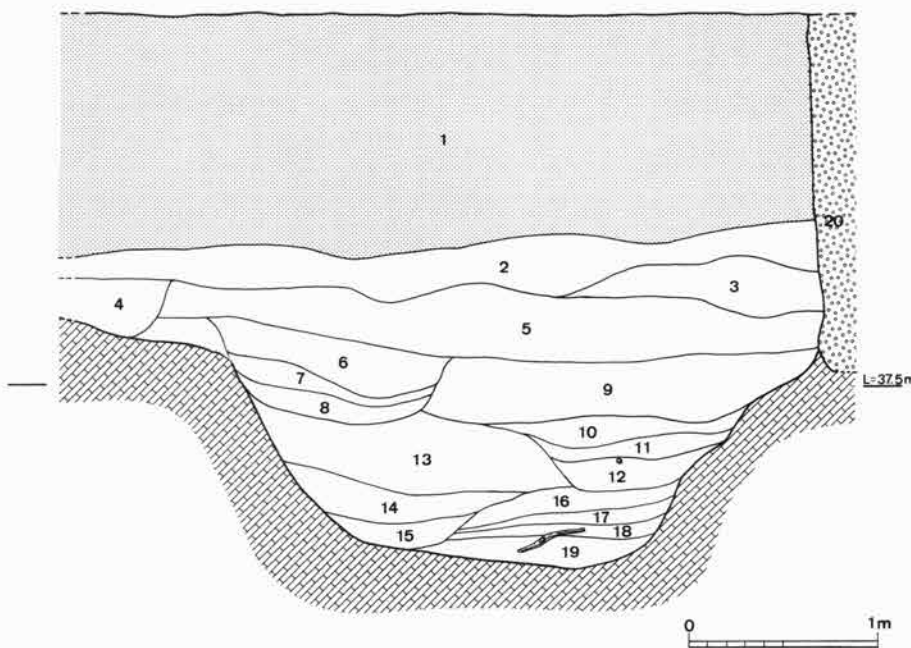
第92図 柵 S A 01柱穴平・断面実測図 (S=1/80)

S D 28 幅約0.3m・深さ約0.1mの溝で、東隣のS D 29を弧を描くように切っている。埋土からは土師器の破片が少量出土している。

S D 29 幅約0.3m・深さ約0.2mの溝で、土師器が少量出土した。

S K 47 トレンチの中央部で検出した。この土坑は東西に長い楕円形を呈する。埋土からは須恵器の杯身が出土した。

S K 66 調査トレンチの東側で検



- | | | |
|--------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 現代盛土 | 7. 暗青灰色砂質土 | 14. 淡灰色粗砂(砂礫混じり) |
| 2. 暗灰色粘質土 | 8. 淡青灰色粗砂(砂礫混じり) | 15. 淡灰褐色粗砂(礫混じり) |
| 3. 淡灰色砂質土 | 9. 暗青灰色砂質土(炭混じり) | 16. 暗灰褐色砂質土(炭混じり) |
| 4. 淡黄灰色砂質土(中世遺構埋土) | 10. 暗灰色砂質土 | 17. 淡灰褐色砂質土(炭混じり) |
| 5. 淡青灰色砂質土 | 11. 淡灰色砂質土(粗砂混じり) | 18. 黒灰色砂質土(炭混じり) |
| (古墳時代以降の遺物の含む) | 12. 淡灰色細砂(流木・種子を含む) | 19. 灰褐色粗砂(流木・種子を含む) |
| 6. 淡茶灰色細砂(砂礫混じり) | 13. 暗灰色粗砂(流木・砂礫を含む) | 20. 攪乱 |

第93図 溝 S D 70南側壁面土層断面図 (S=1/40)

出した土坑である。埋土から土師器片のほかに、弥生土器も出土している。

S D 68 上層の古墳時代の遺構面から掘り込まれた、幅約1.1mの南北方向の溝である。埋土からは、布留式土器(古墳時代前期)が出土した。

S D 69 S D 68と同じく、古墳時代の遺構面から掘り込まれた、最大幅約2.2mを測る南北方向の溝である。再掘削されており、溝69-aが掘られた後に、東側に溝69-b(幅約1.3m)が掘削されている。埋土からは、布留式土器などが出土した。

S D 70 幅約4mの南北方向に流れていた自然流路である(第93図)。この流路は、昨年度の調

査で検出された流路の北側延長部分となる。深さは遺構検出面から約1.5mあり、底からは流木や種子が多く出土した。土器などの遺物は出土しなかった。

S K 91 調査トレンチの東側で検出した土坑状の遺構である。埋土は砂が堆積していた。遺構はトレンチ南壁にかかり、断面観察によれば上層から切り込んだ新しい遺構と考えられる。

②下層遺構(弥生時代前期～後期)

S D 118 幅約2.5mの南北溝で、やや西側に傾いている。深さは約0.25mを測る。

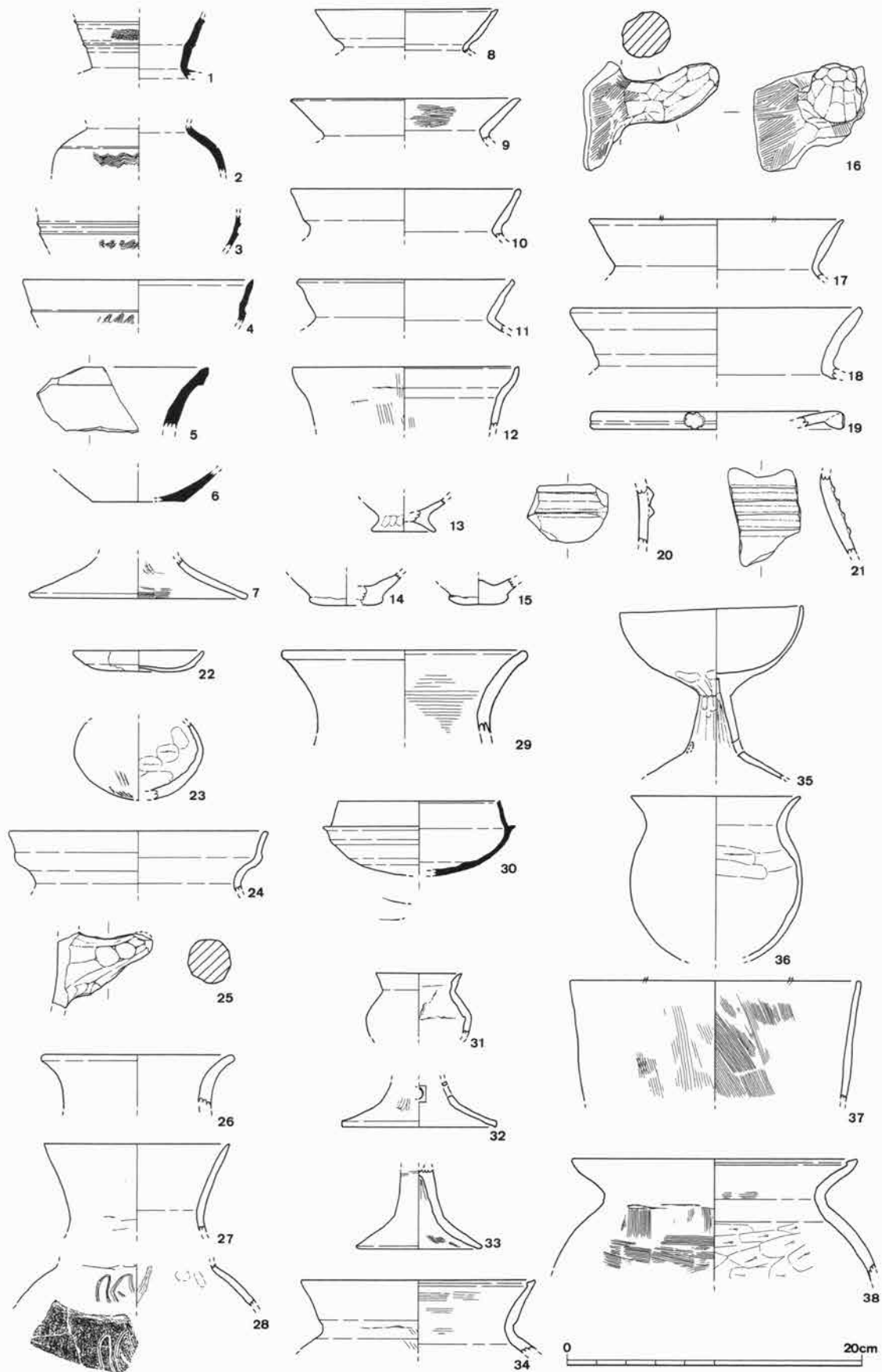
S D 128 幅約0.4mの南北溝で、やや東側に傾いている。この溝は、S D 28・29の下層で検出した。埋土からは、弥生土器や敲石と思われる石器が出土した。

3. 出土遺物

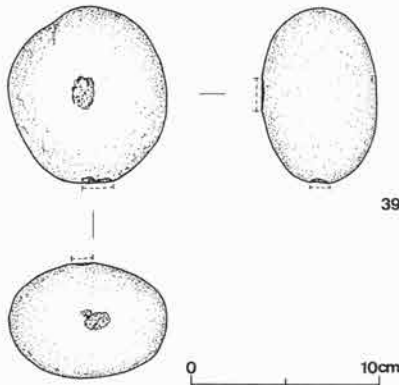
第4次調査で出土した遺物の主要なものについて報告する(第94・95図)。

1～13・16～18は、古墳時代初頭～中世の遺物包含層から出土した。14・15・19～21は、トレンチ東側で検出した下層遺構面の上面に堆積する包含層から出土した遺物である。1は須恵器の壺の頸部である。外面に波状文がある。2は須恵器の壺の体部で、外面に波状文がある。3は須恵器の高杯の杯部で、外面に波状文がある。4は須恵器の高杯で、外面に波状文がある。5は須恵器の甕の口縁部である。6は内面が濃緑色をした陶器である。7は土師器の高杯の脚部である。8～11は土師器の甕の口縁部である。12は土師器の鉢の口縁部である。13は台付鉢の脚部である。14・15は弥生土器の甕の底部と思われるが、磨滅が著しい。16は土師器の甕の把手部分と思われる。17・18は土師器の甕の口縁部である。19は弥生土器の壺の口縁部である。20・21は弥生土器片で外面に突帯がつく。

22～39の遺物は、遺構から出土したものである。22はS K 91から出土した土師器の小皿である。23はS X 15から出土した土師器の小型丸底壺の体部片であるが、磨滅が著しい。24はS X 15出土の土師器の甕の口縁部である。25はS A 01を構成する柱穴4から出土した土師器の甕の把手部分である。26はS X 66から出土した弥生土器壺の口縁部であるが、磨滅が著しい。27はS X 66から出土した弥生土器壺の口縁部である。28はS X 66から出土した弥生土器壺の頸部で、外面に線刻がみられる。29はS D 29から出土した弥生時代前期に属する壺の口縁部である。弥生時代前期後葉に属する。30はS K 47から出土した須恵器の杯身で、T K 23～47に属する。31はS D 69から出土した土師器の小形壺である。32はS D 69から出土した土師器の高杯の脚部である。円形の透かし孔が4方向に穿たれている。33はS D 69から出土した土師器の高杯の脚部である。34はS D 69から出土した土師器の甕の口縁部である。35はS D 68から出土した土師器の高杯であるが、脚部が一部欠損している。円形の透かし孔が3方向に穿たれている。36はS D 128から出土した弥生土器の甕である。内外面は磨滅のため調整は確認できない。37はS D 29から出土した土師器の甕の口縁部であろう。内外面には強いハケメ調整が施されている。38はS D 69から出土した布留式土器の甕である。39はS D 128から出土した弥生時代の敲石である。2か所に打撃痕がみられる。



第94図 出土遺物実測図(1) S=1/4 (第4次調査分)



第95図 溝S D128出土石器実測図
S=1/4 (第4次調査分)

4. 小 結

第4次調査地は、第3次調査地の北側に隣接することから、第3次調査で検出された遺構の北側の続きの検出が予想された。

検出した遺構の時期は、上層で検出した古墳時代前期と中期～後期にかけての遺構と、トレンチ東側の下層で検出した弥生時代前期～弥生時代後期の遺構に分けられる。

①上層遺構

上層での遺構として、第3次調査で検出した自然流路の続き(S D70)を検出した。今回の調査では遺物は出土しなかったが、おそらく前回に検出された流路と同一の時期と

思われる。また、第3次調査地中央部で検出している建物跡と方位を同じくする柵の柱列(S A 01)を検出した。第3次調査検出の建物跡と方位が同じではあるが、柱の位置や規模が異なることから建物跡に付属する柵と判断した。また、トレンチの東側で、古墳時代前期の遺構と思われる南北方向の溝を2条検出した。

②下層遺構

下層の遺構は、調査地の中央部から東部にかけて確認した。また、S D118は、昨年度の調査では検出されず、新たな検出となった。出土遺物の中にはこれまでの調査で、出土しなかった弥生時代前期の土器なども新たに出土した。以上、昨年度の調査(第3次調査)で検出した遺構の北延長部を検出したことと、新たに弥生時代前期の遺構の存在をうかがわせる遺物が出土したことが今回の大きな成果といえる。今回の調査地は丘陵裾の東端部の平坦地であり、遺構は希薄であるが丘陵裾部まで遺構が散在していることが確認できた。したがって、遺跡の範囲は北側・東側にさらに広がる可能性が高い。

(村田和弘)

(2)第 5 次 調 査

1. 調 査 概 要

①調査経過

第5次調査地は、先に記した第3・4次調査地の南に近接して位置する(第90図)。調査原因は北側の第4次と同じく、自動車専用道(本線)の両脇に側道が計画されたことにより、その路線幅分が調査の対象となった。

調査地の現状は、本線部分の道路敷設に係る盛土造成がすでに施工されており、対象区内の旧

地形を追跡しにくい状況にあった。しかし、地形図や対象区南隣接地に残された地形を参照すると調査地は、西から東へ耕作面を順次落とす4筆の棚田を、その傾斜軸に対して、東で南に振れる方向に貫かれている。

掘削は、客土除去を原因者に依頼し、旧耕作土以下の掘削から当調査研究センター施工に切り替えた。遺物包含層の上面までを重機で掘削した後、人力による掘削によって遺構検出・掘削・遺物採取を行った。なお、調査地の掘削に際してこれを横断する仮設配水管が3か所に埋設されており、この部分の掘削を控えた。このため、調査区は4ブロックに分断されることになり、これを利用して便宜上西側から1→4区と名付けて大地区割りとした。

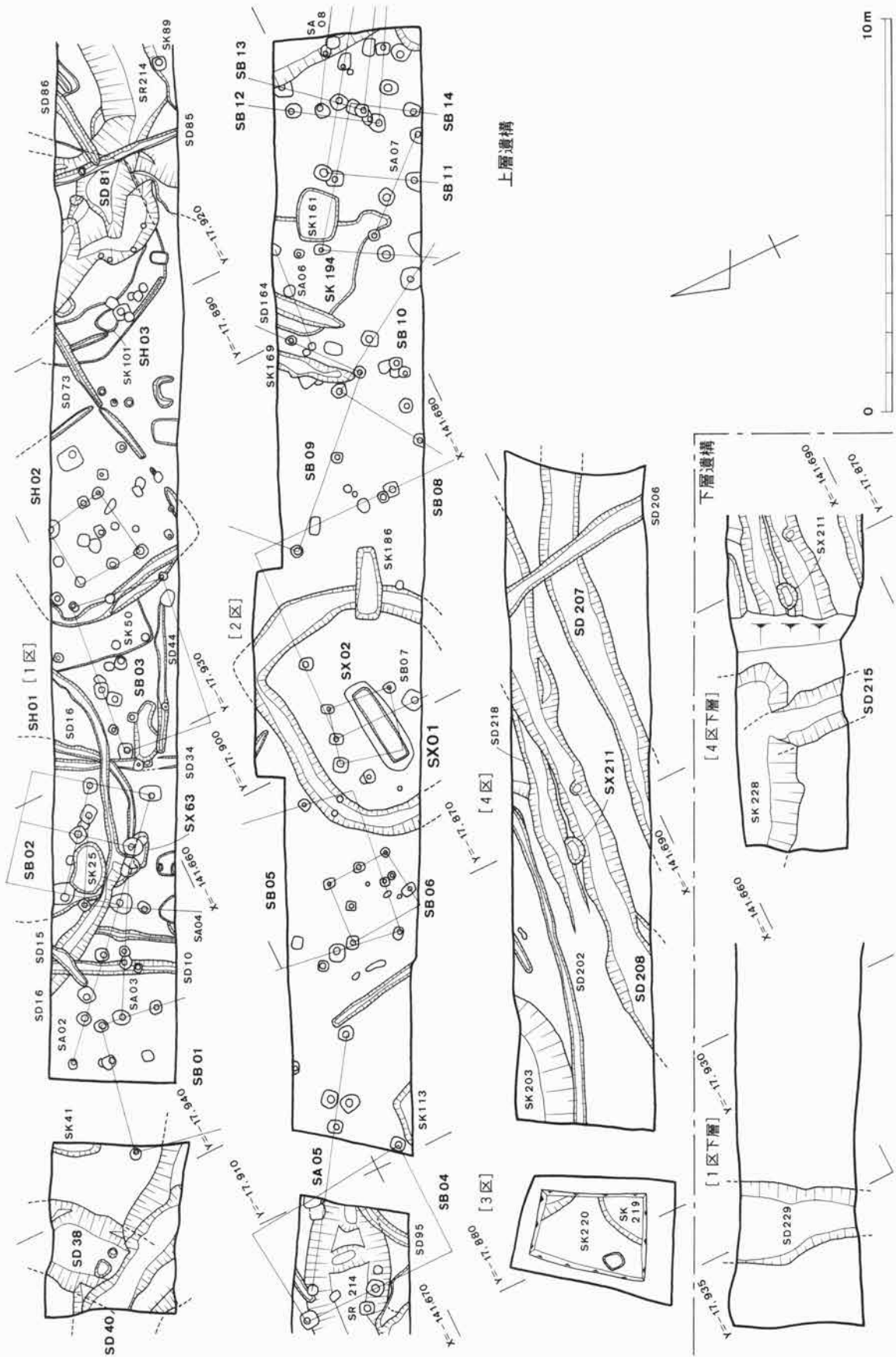
②基本層序

調査地の堆積層序は、第3・4次調査区に隣接するため、これらと大きく変わることはない。ただ、当地区周辺の地勢は、南西から北東に向かってゆるく傾斜する丘陵の末端部分に位置しているため、京奈道路関連の一連の調査の中では、第5次調査区が最も高い位置を占める。一方、地山までの掘削深度は他と比較して最も浅く、遺構面上を覆う堆積土の層厚は相対的に少ない。すなわち調査区内の基本層序は、工事造成土を除いて上位よりⅠ)現代の耕作土、Ⅱ)褐灰色系土、Ⅲ)上面が酸化した明黄褐色土、Ⅳ)暗灰色粘質砂土、Ⅴ)淡黄灰色を呈する粘性土の層順を基本とする。このうちⅡ層は瓦器片等の包含により中世(前期)の耕作に伴う土、Ⅳ層は主に古墳時代の遺物を多量に出土する包含層、Ⅴ層は局所的にグライ化して青灰色を呈する変化が認められるが、遺物を全く含まない地山である。遺構は基本的にはⅤ層上面で確認した。調査区内でのⅤ層上面の標高は1区西端で39.5m、4区東端で37.5mを測り、西から東に向かってゆるく傾斜している。遺構は、調査区の全般にわたって比較的高い密度で分布しており、遺構深度から、後述する竪穴式住居跡を除けば、大きく削平を受けた状況は見受けられなかった。

2. 検出遺構

検出された遺構のうち主要なものについて以下に説明を加える。

S H01 1区西寄りの国土座標 $Y = -17,930$ 付近に、中心を北に置いて円弧を描く溝が2条重複して検出されたが、そのうち曲率の高い溝はその中心軸が通る平面形が直径約4.5mの正円を描くことから、円形プランを呈する竪穴式住居跡の周壁溝である可能性が高い。住居の遺存状態は概して悪く、周壁溝を挟んでその内外のレベル差は認められず、壁体はおろか周壁溝の内側の当初の床面すらある程度削平を受けているものとみられる。壁溝は上縁幅(0.15~0.3m)の規模の差の少ない「U」字形の横断面を示し、検出面からの深さは約0.1mを測る。屋内部分には大小の柱穴が6基確認されたが、その配列から多くは当住居に伴うものとは考え難い。住居内の、南西部に貯蔵穴と思われる東西に長軸をもつ長円形プランの土坑がある(S K25)。現状での規模は長軸1.3m・短軸0.45m、検出面からの深さ0.12mを測る。屋内の火処は調査区内に入る住居南半部においては認められなかった。出土遺物は、本来の床面を失っていることからきわめて少なく、貯蔵穴埋土内から土師器小片が出土したにすぎない。



第96図 第5次調査トレンチ遺構配置図(上層・下層) S=1/150

S H02 S H01の東方に位置し、約2.0mの間隔をおいて営まれた竪穴式住居跡である。北東側1/3が調査区内からはずれぬが、壁体あるいは周壁溝が描くラインから一辺約4.8m(東西間で計測)の隅丸方形プランを呈するものとみられる。住居の主軸方向はおおむね正方位と一致する。図示していないが、住居の中程に南北方向の現代の耕作境界溝が走り、これを境に東側が一段深く削平されている。このため、住居西辺は壁体が残るが(壁高約12cm)、東半部はそれが失われ、かろうじて周壁溝が断続的に走るのみである。周壁溝は壁体が残る西辺では、西壁から0.15m中央寄りにめぐっており、幅約0.25m、床面からの深さ約8cmを測る。床面には柱穴が多数存在するが、掘形の深いものを支柱穴とみるなら、図に示したように住居内の西に偏して同一円周上に柱穴が等間隔に4本配される構造をとる。支柱の間隔は北に位置するものから右回りで1.65m・1.9m・1.7m・1.65mを測る。その他の柱穴については規模が小さく、おそらく補助支柱であろう。屋内に被熱による赤変部は認められず、炉(竈)の位置は不明である。覆土は住居西半部に薄く残るにすぎず、出土遺物もきわめて少ない(甕口縁部を含む土師器小片のみで、須恵器は含まれない)。

S H03 S H02と1mの間隔をおいて営まれた竪穴式住居跡とみられる遺構である。検出したのは、その南半部のみで北側は調査区から外れる。また、調査区内においても、検出範囲の50%以上が後出遺構(S D81)等で切られ、旧状を大きく改変されている。周壁が示す住居の平面形は、多角形(各辺長あるいは内角から推測すると六角形もしくは七角形)を示し、各辺は直線的(辺長約2.5m)で角が比較的明確である。遺存状態は悪く、壁高は西側で8cmを測るにすぎない。周壁溝は西辺にのみ断続的にみられ、壁体に接するものとやや離れて中寄りに設けられたものがある。西側にわずかに残された床面に、柱穴数基と小土坑S K101を検出した。柱穴はその位置から壁柱であろう。床面上の遺物は小片少量だが、土師器に限られ、屋内土坑S K101内からは土師器甕の体部片と高杯杯部片、小形壺小片が出土した。

S B06・07 2区西半で検出したいずれも一間四方の小規模な掘立柱建物跡である。四辺ともほぼ等間隔の正方形プランを呈し、柱間寸法も1.6m前後と小規模なことから、削平により壁体、周壁溝を失った竪穴式住居跡の支柱穴のみが遺存したものかもしれない。

掘立柱建物跡 調査区の西側およそ2/3にあたる1区および2区において掘立柱形式の柱穴を多数検出した。それぞれの柱穴が建物を構成するのであろうが、調査区の幅が一律に3.0mと狭いことから、南北方向の柱穴の展開を追跡できない状況にある。したがって、調査区の南北に隣接する部分の実態がおさえられた時点で、より広範囲のデータをもとに、建物の復原作業をすべきである。一応ここでは調査範囲内で得られた情報をもとに試みに建物復原案を提示したが(第96図)、上記の条件から将来変更を生じるケースも否定できない可能性もある。個々の要素を若干補足すると、柱掘形の遺存度は相対的に高く、検出面からの深さは掘形の平面規模(直径)を上回るものが大半を占める。掘形の平面形は、平面規模に反映され、おおむね0.3m未満のものには円形、0.3mを越えるものは隅丸方形を志向する。方形掘形の辺が示す方向はまちまちで、とくに一定の方位に揃えるといった法則性は見出せない。掘形内埋土は同質の土で一気に埋戻され

ており、版築工法は採らない。柱痕跡はおおむね掘形の規模に比例し、径0.1～0.2mの円形を呈する。とくに、土壌がグライ化している2区では柱痕を残すものが目立った。建物形式は多くが側柱建物で、SB02のみ総柱の可能性もある。建物主軸は正方位にほぼ一致するもの(SB01・03・04・06・08→A群)と、北で30～40°東に振るもの(SB02・11～14、SA02・05・08→B群)、同じく45°以上大きく振れる建物(SB09・10→C群)に大きく3区分できる。中でも正方位に近いものは、当調査区内ではその西半に一定の棟間距離をおいて重複することなく分布するが、この造営方位は第3次調査区の中央付近で検出された建物群やそれに近接する第4次調査区のSA01に近く、同じ造営規格を共有したものとみられる。これに対し、東に振れる建物群はSB02を除くと2区の東半部に遍在しており、限られた敷地内で複数回の重複関係をもつ。この地点は池沼状の堆積土をベースにしているため、地盤が不安定で、同一敷地内で立て替えが頻繁に繰り返されたものと考えられる。柱間構成は、多くの建物が柱間寸法が揃わない不等間隔の柱間に割りつけられている。柱穴内からの出土遺物は掘形、柱当たりともに少なく、いずれも細片資料であるが、その内容は、多くが土師器(甕・甑・椀・長頸壺・高杯)と須恵器(蓋杯・甕)で、これに少量の弥生土器・製塩土器が確認できる。

SX01 2区のほぼ中央で検出した、方形にめぐる周溝を備えた墳墓遺構である。遺構に伴う出土遺物がほとんどなく、築造時期の決め手を欠くが、中央埋葬施設SX02の木棺裏込土中より出土した土器片(貯蔵形態土器の体部とみられる)に弥生的な要素がみられることを根拠にすれば、方形周溝墓とみるのが相応しいであろう。周溝は、南北両側が調査範囲から外れるが、その中心軸が描くラインはやや歪んだ方形を呈する。周溝の横断面形は、平坦な底部を設けることなく側壁が外上方に開く「U」字形を呈し(上縁幅0.6～1.0m、検出面からの深さ5～23cm)、溝底には起伏がほとんどなくコーナー部で途切れることもない。周溝の主軸は、北辺と東辺で計測するとN8°Wを示す。周溝に圍繞された台状部の規模は、対向する周溝の中心軸間で求めると東西5.7mを測る。埋葬施設は、台状部中央やや西寄りですべて確認した(SX02)。組合わせ式箱形木棺を墓壙内に直葬する形式である。墓壙は主軸を台状部のそれと揃えて東西にとり、両小口側がやや丸味を帯びる長方形プラン(長軸2.5m、幅は0.7～0.9mで西側ほど広い)を呈する。木棺痕跡は墓壙の内側に長方形の落ち込みとして検出されたが(長軸2.1m、幅は一律で0.5m)、墓壙底を二段に掘削するのではなく、やや舟底状を呈する土壙底に長側板を直接立て、側を埋め戻して固定する。小口側の仕口は、棺幅と同寸の小口板を墓壙底に小口穴を設けることなく側板の端に外側から当てがって閉塞する。底板の形跡はなく側板設置後その内部に厚さ約6cmにわたって灰色粗砂を敷いて棺床とする。副葬品および供献遺物は上記の土器片以外全く出土しなかった。

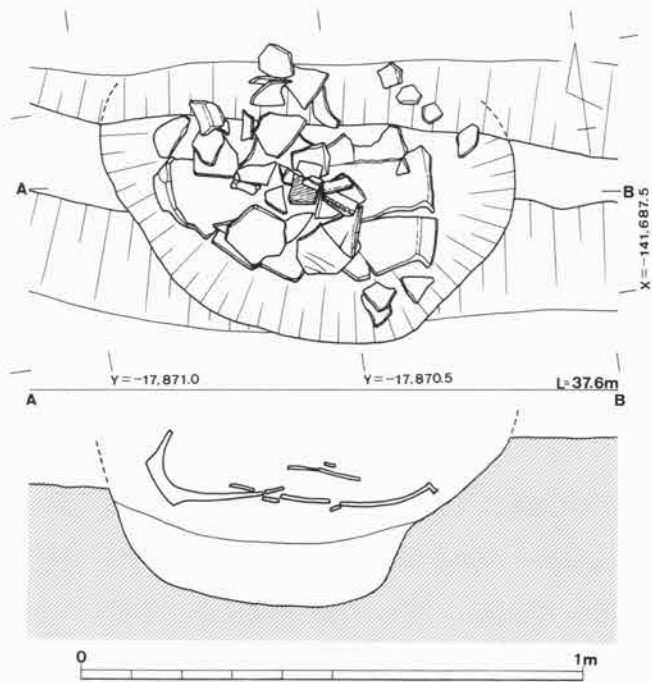
SX211 4区で検出された土器埋納遺構である(第97図)。南北両側を古墳時代後期の溝(SD208・218)に切られ、かつ上面は近年の水田造成の際の削平が及んでいる。東西方向に長い長円形(長軸約0.8m)プランで、勾配を違えて2段に掘り込まれた土坑の中に中形の甕形土器(第99図40)を横位に埋納している。土器は下半部を残すのみで、全体の3割強が元の位置を保つ。ただし、後世の攪乱を受けて周囲に散乱した破片の接合状況を検討すると、土器の上側も残存するこ

とが判り、おそらく1個体の土器を半截することなくそのまま棺に転用したとみられる。口縁部側(東側)の閉塞方法は不明である。内部からの出土遺物はない。

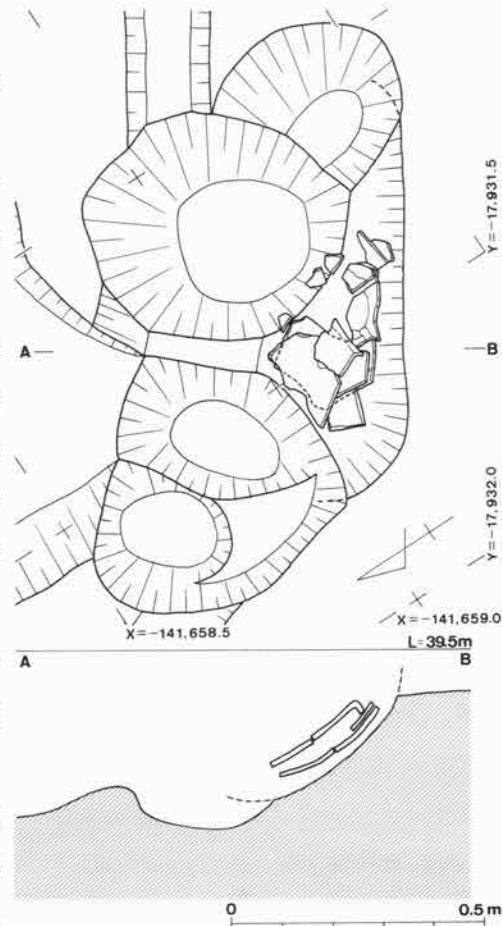
S X 63 1区のSH01の南に接する位置で検出された土器埋納遺構である(第98図)。4基の柱穴とSH01の周壁溝に切られ、南側の一部が残存するにすぎない。舟底状に残る底に接するように弥生中期段階の特徴をもつ甕形土器の一部が内面を上に向けて遺存しており、その構造から土器棺の可能性が指摘できる。甕の口縁部片が墓壙と推定される中央付近に位置することから、複数個体の比較的小形の土器を結合して棺本体を構成していたものかもしれない。棺内外からの副葬品および供献遺物は残されていない。

S D 38・40 調査区西端で検出されたやや規模の大きな素掘りの溝である。当初は「L」字形に折れる1条の溝とみていたが、調査区を西に拡張したところ2条の溝が切り合い関係をもってほぼ直角に交差していることが判明した(S D 40が先行する)。主軸をN50°Eにとって調査区を直線的に横断するS D 38は、調査区内では一定幅を保ち(上縁幅2.3m)、横断面は隅角が丸味を帯びる逆台形(検出面からの深さ約0.48m)を呈する。溝内には褐灰色系の粒子の細かい粘性土がレンズ状に堆積し、その下半を中心に完形率の高い土器類(土師器(壺・甕・甑・椀)・須恵器(杯・高杯・甕)・ミニチュア土器・滑石製紡錘車など)がまとまって出土した。遺物の内容から古墳時代後期初頭(T K 23~47型式)に帰属する。

S D 40は、南縁の多くが調査区外のため平面形を正しく捉えることができないが、溝の下縁線は直線を描き、その方位はおよそN30°Wを示す。溝の断面は、南北両側壁とも中位で傾斜を違える二段構造を示し、



第97図 土器棺 S X 211実測図 (S = 1/15)



第98図 土器棺 S X 63実測図 (S = 1/15)

溝底はS D38より深い(北側の検出面からの深さ0.65m)。埋土の色調はS D38に近似するも、やや粒子が粗く、流れを伴う堆積と判断される。出土遺物は少量である。

S D81 1区東寄りに占地するSH03を切って掘り込まれた遺構で、主軸をおおむね南北にとる溝状を呈する。上縁ラインは複雑でとくに西岸は大きく蛇行している(上縁幅1.9~3.0m)。横断面形状も、図に示したように起伏が激しく変化に富む(検出面からの最大深さ約1m)。遺構内には褐灰~暗灰色系のシルトがブロック状に堆積し、人為的に埋められた形跡がある。内部から土師器(高杯・杯・椀・甑・甕)・須恵器(杯・高杯・甕・器台・甕)・手捏ねのミニチュア土器・製塩土器・釘状鉄器・砥石・サヌカイト剥片などが出土した。このうち、供膳形態の土器は完形率が高い傾向が認められた。

S R214 1区東端で検出した自然流路である。調査区内では緩く弧を描いて東西流するが、東隣の2区では延長部が確認されず、おそらく調査区を外れて大きく曲折するものとみられる。埋土はゆるやかな洪水堆積をうかがわせる灰色粗砂礫で、比較的短期間に埋没した状況を示す。S D81と重複し、それに先行する。出土遺物は少ないが、縄文晩期と弥生前~中期に属する土器片がローリングを受けた状態で出土し、上流域(南西方向)に当該期の遺構の存在が予想される。

S D207・208 4区で検出されたほぼ一定間隔を保って東西方向に直線的に走る素掘りの溝である。溝間距離は心々間でおおよそ1.8mを測る。溝の主軸線は東側でやや乱れるもののおおむね直線でありW5°Nを示す。両溝とも規模(上縁幅約0.3~0.5m、検出面からの深さ23~52cm)、構造(下底部が平坦面をなさない「U」字形断面)が近似している。溝内には酸化の進行した明褐色系の粗砂礫が堆積し、洪水により一気に埋没したものとみられる。土師器(高杯・甕・甑)・須恵器(杯・高杯・甕)・製塩土器・ミニチュア土器を含む手捏ね土器などが多量に出土している。

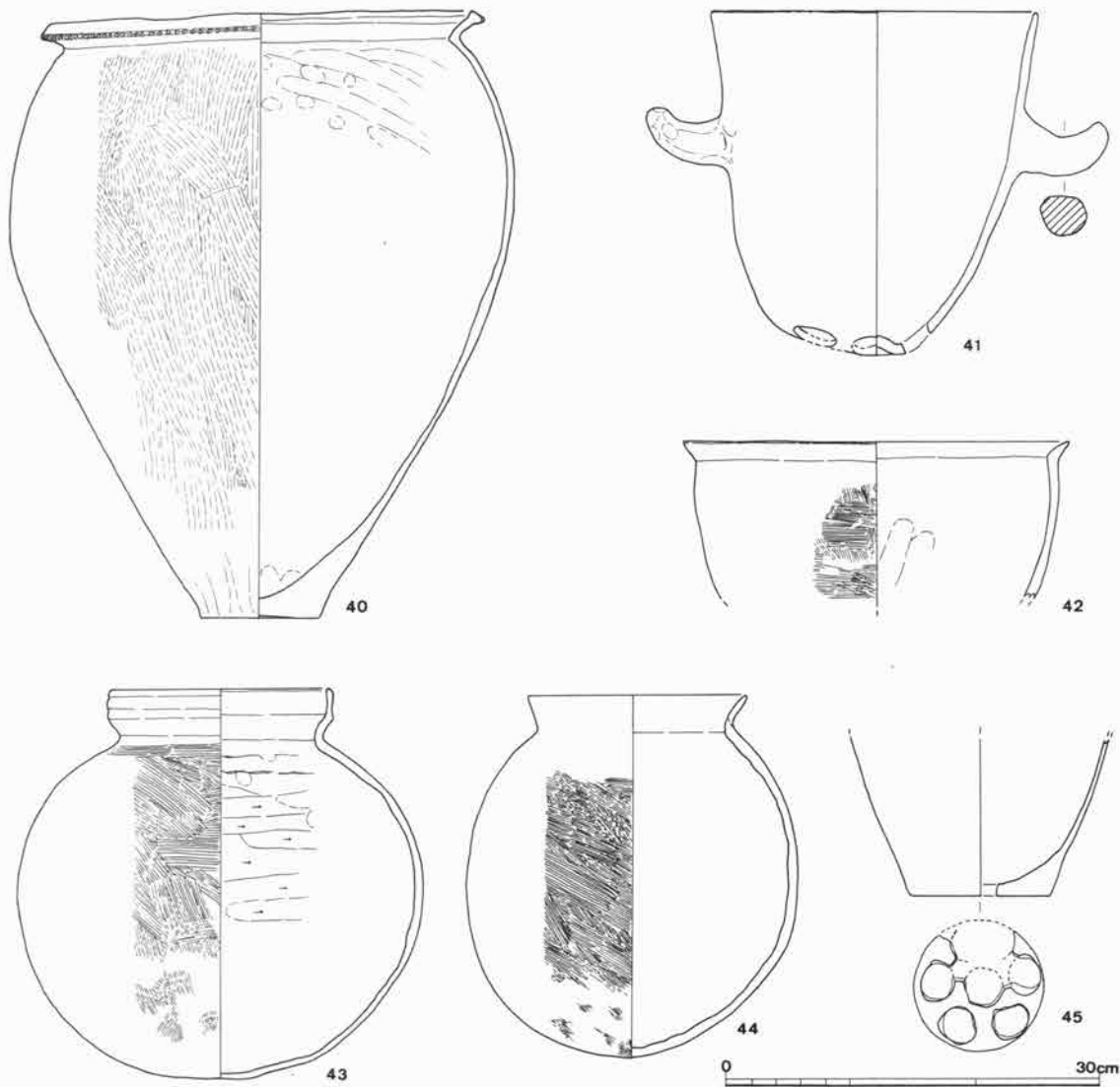
S D218 S D208の北側で、それと軸を揃えて東西流する素掘りの溝である。S D208と重複する東半部の断面観察の結果、より先行することが判明した。断面の規模と形状はS D208とはほぼ同じである。溝内には炭化物を混じえた暗灰色粘砂質土が堆積し、上記の207・208とは埋土が異なる。ただし、ややまとまって出土した遺物には大きな時期差はみられない。

このほか調査区の各所で小規模な溝や土坑が点在するが、その多くは出土遺物がなく、性格や時期を特定できないものである。

(伊賀高弘)

3. 出土遺物

第5次調査では、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土し、その大半は古墳時代のものである。古墳時代の遺物は、溝状遺構を中心とした出土であるため、一括して遺物を扱うことには注意を要するが、出土遺物の時期は、須恵器において陶邑編年のTK23~47型式に比定でき、須恵器以外の他の遺物についても、一部を除きおおむねこの範囲内で捉えられるものと考えている。なお今回は実測図化したものの8割程度を掲載しており、都合上掲載していないものの中に



第99図 出土遺物実測図(2) S=1/6 (第5次調査分)

40: S X 211 41・43~45: S D 38 42: S D 218

は、縄文晩期の土器片、弥生時代中期末の凹線文を施した広口長頸壺の頸部片などがあつた。以下では器種・器形ごとにその概要を記す。

①弥生土器(第99図40・第100図46・47)

40は土器棺S X 211の棺本体に転用されたものである。横位に埋納された状態で削平を受けたため、全体の1/2程度しか残存していない。器体の上半部に張りを持った「く」字状口縁の甕で、口縁端部をこころもち広げる程度に拡張させ、下端に刻目を施す。外面は目の粗い原体(2~3本/cm程度)によるハケ目調整、底部付近はケズリによって仕上げられている。46は遺存状態が不良であるが、その形状から弥生時代前期の小形広口壺と考えられる。47は広口壺である。口縁内に施文がなされ、口縁拡張部には波状文が施された後、円形浮文が一定間隔で貼付される。頸部波状文の直下には部分的に直線文も確認できる。47は森岡編年の山城Ⅳ様式に比定でき、40もほぼ同時期のもので、在地系甕の属性が多分にみられる。

②土師器

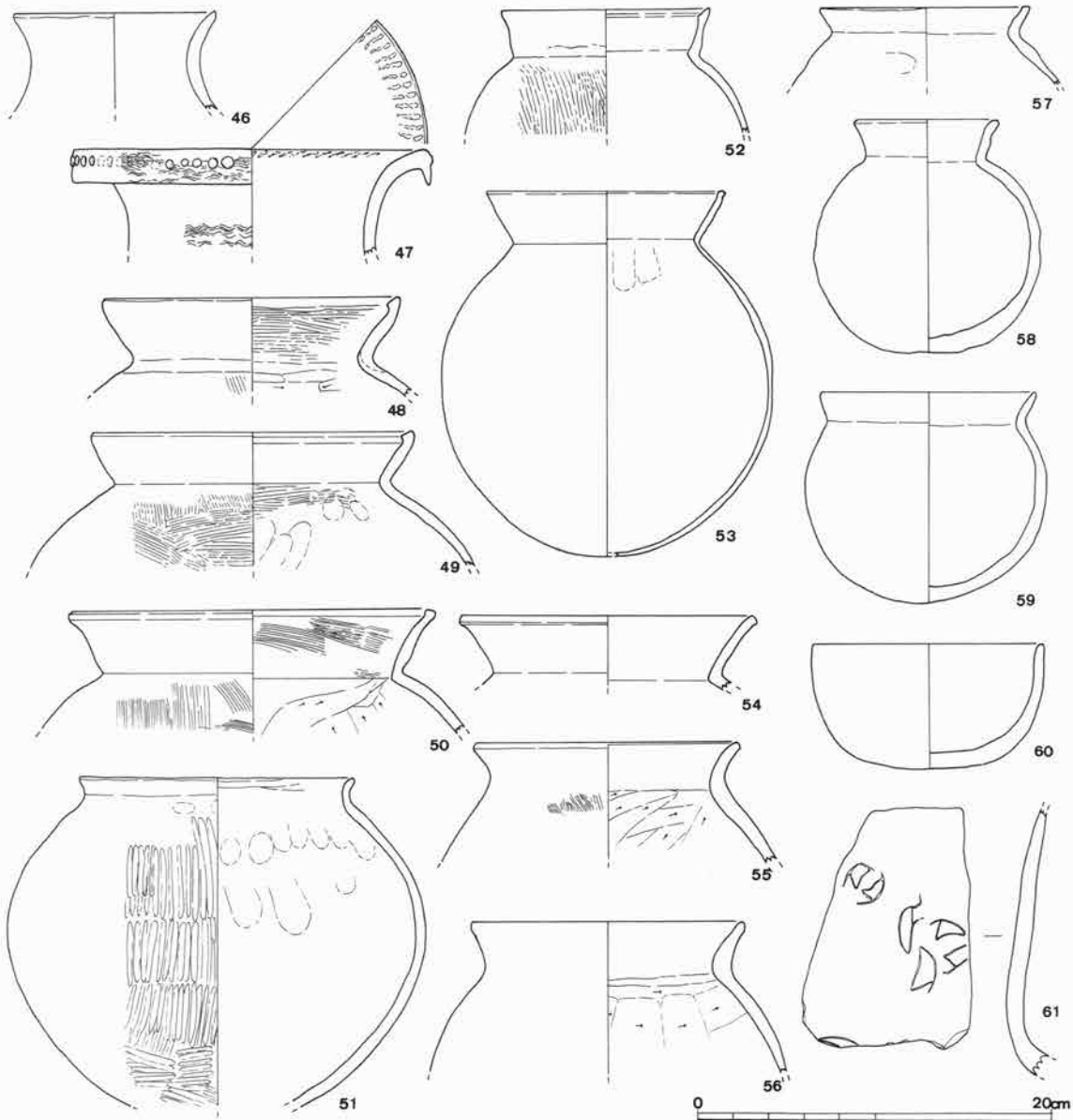
鉢(第99図42) 42は大形鉢である。体部上半は内湾ぎみに外上方に立ち上がり、外方に短く延びる口縁部をもつ。体部外面はていねいなハケ目で仕上げ、内面にもハケ目が見られる。

甕(第99図43・44、第100図48～59) 43は外反した後やや内傾ぎみに直立する複合口縁を持ち、胴部は、その最大径を中位におく円形を呈す。肩部には横位のハケ目が見られる。48～50・52・53はいわゆる布留形の甕である。体部以下を欠くものが多く、全体を窺えるものが少ない。口縁は一般に口縁接合部外面を強くナデるために内方にくびれ、全体として内湾した形状を呈すが、50は口縁部外面中位の強い横ナデによりこの傾向が弱い。口縁端部の断面形態は、内面が肥厚したもの(48～50)、内面を面取りしたもの(52)、丸くおさめたもの(53)が確認できる。器面調整は口縁部では内外面ともに横ナデを基調とするが、48・50は横ナデの前にハケ目が観察できる。体部外面はハケ目による調整が行われ、50はハケ目が口縁・胴部界を越えてやや上方にまで及ぶ。体部内面は48・50において口縁部屈曲線以下にケズリが見られ、他のものについても磨滅が激しいため確認できないが、ケズリ調整が施されていたものと思われる。51は口縁部を短く外反させ、肩が比較的張った胴を持つ。外面は横位のタタキの後、縦位のタタキで仕上げている。54は口縁部が内湾することなく外反する、「く」字状のはっきりとした口縁部を持ち、口縁内部にはわずかにハケ目が見られる。55～57の一群は体部下方を欠くものの、その形状は44のものに近似すると思われる。55・56の胴部内面はケズリ調整が見られる。58・59は小形の甕である。58は球形の胴を持ち、外上方に口縁が延びる。59はあまり張らない肩部から、滑らかに外方に延びる口縁を持つ。58・59は内外ともに磨滅が著しい。

甗(第99図41・45) 41は底部に楕円形の蒸気孔(長径3cm前後)が、底部中央の孔を中心に全周する形で、計7孔見られる。45も41とほぼ同形態の蒸気孔をもち、両者はいはゆる多孔タイプに分類できる。41は内湾しながら立ち上がる胴部に2個の牛角状把手を持ち、口縁部は外方に直線に延びておさまる。45は胴部下半が残存するにすぎないが、底部は41とは異なり平底に作る。41・45は内外ともに磨滅が著しく、調整は不明である。^(注5)

椀(第100図60、第101図96・98・99) やや平底ぎみの底部から口縁部がゆるやかに内湾し直上にのびるもの(60・96・98)と、やや外方に傾くもの(99)の2者に類別できる。口縁部は60・96・99では丸くおさめられているが、97は内面が面取りされて鋭く仕上がり、口縁端部内面がやや肥厚する。どの個体も遺存状態が不良であるが、横ナデと指押さえが観察できる。

高杯(第101図88～95・97) 高杯は口縁部などを部分的に欠くものの、全体として完形に近い状態での出土が多く見られたが、どの個体も器面の磨滅が進行している。杯部の形状は、体部から口縁部へ滑らかに移行する椀形のものが大半である。他の高杯より一回り大きな97の杯部は、口縁と体部との境界が比較的明瞭で、わずかに屈折して外上方に直線に延びている。全体として脚柱部は直線あるいはやや内湾気味に広がり、屈折して明瞭な裾部を形成する。90の脚柱部には孔が3つ穿たれる。杯部の調整は91・94で杯部外面にわずかにハケ目が確認できる。脚部外面の調整は88・92・95で縦位のミガキが用いられている。脚部内面はシボリの痕跡が残る未調整のも



第100図 出土遺物実測図(3) S=1/4 (第5次調査分)

46 : S R214 47・48 : S D215 49・51・57・60・61 : S D81 50 : S D208
 48・52・54・55・58・59 : S D218 53 : S K194 56 : S D169

のと(92・94・97)、ナデを加えたもの(89)、ケズリを加えたもの(91)が見られる。

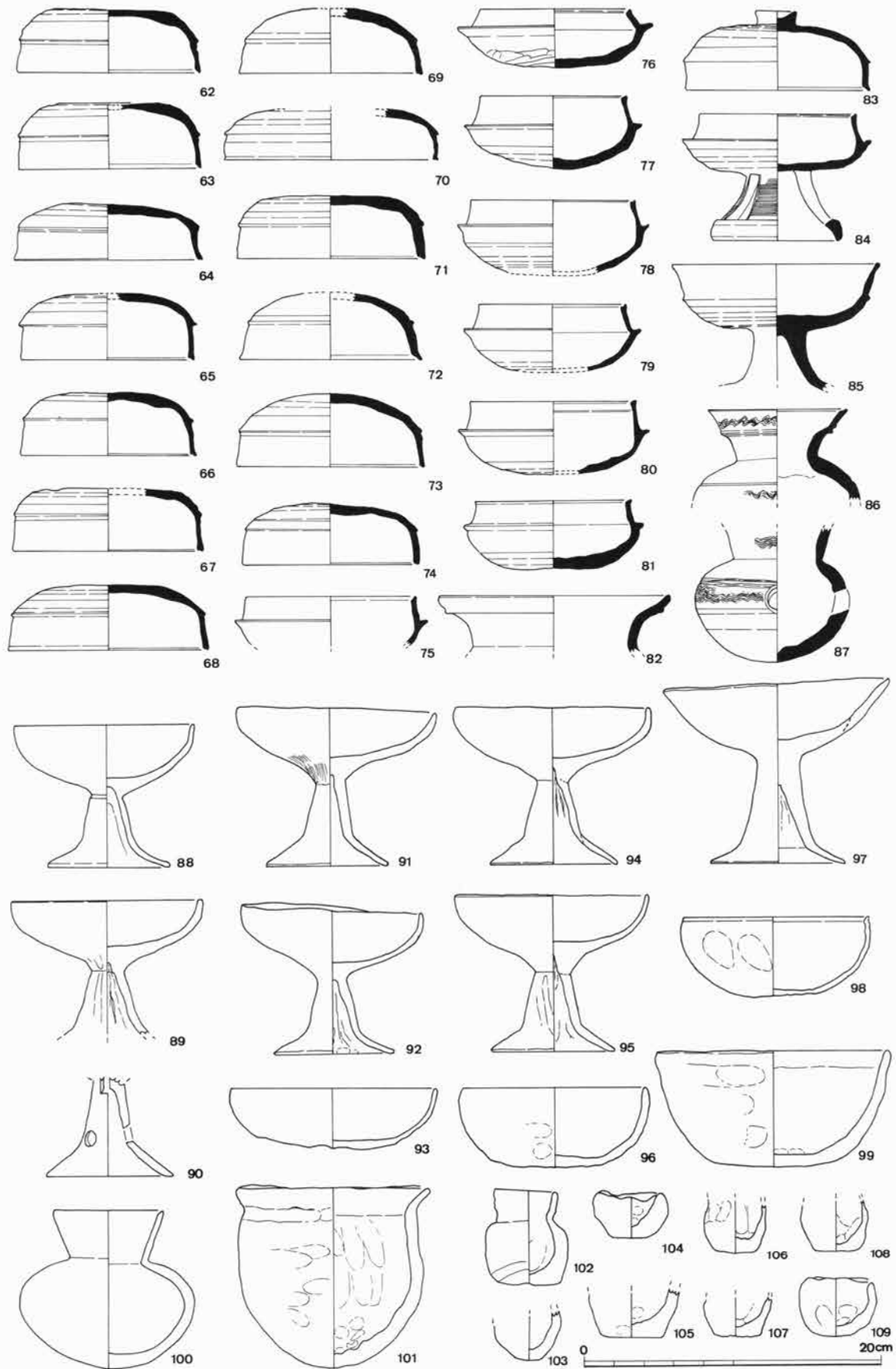
壺(第101図100) 100は直口壺である。磨滅が激しいため横ナデ以外の調整は確認できない。

線刻文を有する土器片(第100図61) 61は同一意匠の単位図文を複数線刻した土器片である。下端が強く屈曲するものの、器種は特定できない。抽象的な図像から、弥生時代後期の遺物の可能性も考えられる。^(注6)

③須恵器

今回出土のものは、全体的にTK23～47型式に比定できる。他の遺物の年代を決定する上において、大変参考になるものである。

蓋杯(第101図62～81) 蓋は平らな天井部をもつものが目立ち、杯身においても底部にその傾向が強い。ヘラケズリが広範囲になされる個体も圧倒的に多い。72の杯蓋の外表面天井部は、4mm



第101図 出土遺物実測図(4) S=1/4 (第5次調査分)

62~64・67・75~78・87~90・93・98・104~108 : S D 81
 65・66・68・79 : S D 207
 69・70・80・84~86・101 : S D 208
 72・91・92・94~96・99・102・103 : S D 218
 73・74・82・83・97・100・109 : S D 38

71 : S D 205

程度の原体による静止ヘラケズリが粗く施され、最後に乱ナデによりていねいに仕上げられる。そのナデは部分的に稜にまでおよび、内面にも体部以上に全て乱ナデが入る。76の杯身の外面底部には、中心を除き全周する形で静止ヘラケズリが施される。ケズリは大きく4方向から反時計回りに加えられ、削られていない底部中心は乱ナデ・指押さえによる調整である。内面も全面にナデが加えられる。76は今回出土中その形状も特異なもので、陶邑ON46号窯出土品に類品が見出せる。66・68・71・74・83は内面中央に乱ナデによる最終調整がなされる。なお、76・81には底部に直線によるヘラ記号がある。

甕(第101図82) 82の甕は口縁部のみの出土であり、口縁部直下に1条の稜をめぐらせる。

高杯(第101図83~85) 83は有蓋高杯の蓋である。口縁端部は鋭く内傾する。84は有蓋高杯である。杯部の底部は平らであり、83と同様に口縁端部は鋭い。脚部には長方形の透かしが3か所空けられており、カキ目が施される。また脚端部の稜は鈍い。85は無蓋高杯である。脚部の裾部分は欠損している。口縁部は外反して外上方にのび、端部は丸くおさめられる。杯体部には上下を区画する稜が1本入り、稜の下からヘラケズリがなされる。脚部は外反気味に外に広がる。

甕(第101図86・87) 86・87は甕である。86は短く外上方に広がる口縁部を有し、86は口縁部に87は頸部に波状文をめぐらす。86の体部は比較的張った肩をもつが、一方87の肩はあまり張らない。ともに肩部にヘラ描き沈線が1条めぐり、86の沈線はロクロ回転による沈線の始めと終わりの部分が1/4ほど重複する。87は肩部沈線の直下にめぐる波状文上に円孔が1つ穿ってあり、86も同様の場所にわずかに円孔が確認できる。86・87は内面において接合痕が観察できる。

④手捏ね土器

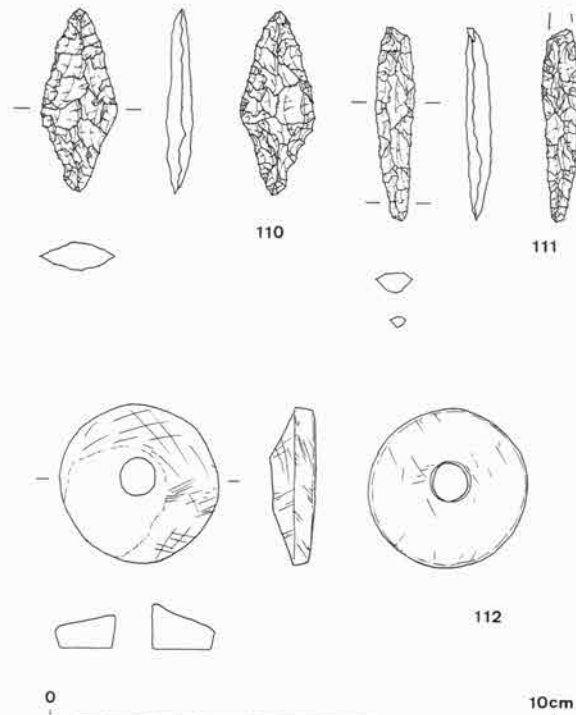
甕(第101図101) 101は手捏ねの甕である。尖底ぎみで球形の体部から口縁部が短く外折する形態を呈する。調整は簡略化され、口縁を指で引き出した後、器面全体をオサエとナデで仕上げる。

ミニチュア土器(第101図102~109) 102~109は手捏ねのミニチュア土器である。102は直口壺形のものであり、口縁部は手捏ねの体部とは別に横ナデによりていねいに仕上げられる。

⑤石製品(第102図110~112)

110は有茎石鎌である。周縁部は押圧剥離による調整が入念に施される。111は石錐である。断面は三角形状を呈し、上端を折損する。回転痕は見られない。110・111の石材はサヌカイトである。112は滑石製の紡錘車である。色調は緑灰褐色を呈し、上面・下面ともにていねいに研磨されている。上面は一部を欠損する。

(小牧健太郎)



第102図 出土石器実測図 S=1/1.5
(第5次調査分)

4. 小 結

第5次調査の成果を簡単に列挙する。まず、出土遺物から検出された遺構の造営時期を求めると、大きく弥生時代中期後葉と古墳時代中期後半の2つのピークが見出される。弥生時代の遺構は土器棺2基が確実で、これに方形周溝墓1基が加わる可能性がある。つまり、過去の調査成果も加味すれば、この時期には調査区一帯は、決して密度は高くないものの、墓域として利用されていたようで、調査区の南方の台地上に展開していた集落遺構(第1・2次調査で住居跡を検出している)は、北側では当地区にまで及んでいない可能性が高くなった。一方、古墳時代の遺物がまとまって出土した遺構は、第5次調査に限ってみてみると、いずれもやや規模の大きな溝(状土坑)であるが、調査範囲が狭いこともあってその全体像を把握し難く、遺構の機能や性格を明らかにすることはできない。ただ、遺物の内容に注意すべき要素が指摘できる。一例を示せば、残存率の高い供膳形態の土器の占める割合が高い点や、手捏ね土器の一定量の混入などは、日常土器の廃棄行為とは単純に結びつかないもので、そこに何らかの祭祀色をうかがわせる。

次に、住居(建物)遺構について若干の解釈を加える。今回確認したものは、建物形式に関係なく、いずれも伴出遺物に恵まれないため、重複関係から相対的な新旧を確認することはできても、正確な時期を特定できない。そうした制約の中で、例えば竪穴式住居跡の場合、円形や多角形の平面形態が見られること、竈を壁面に付設した形跡が認められないこと、純粋に住居内埋土とみられる土中に全く須恵器の混入がみられないことなどから、少なくとも下限を古墳時代中期以降に設定することはできない。調査区の広範囲に点在する布留式土器(布留新相)の出自をこれらの住居跡と結びつけて積極的に評価すれば、あるいは造営時期を古墳時代前半期に求めるのも一案であろう。一方、掘立柱建物跡については、狭い調査区に制約され建物の復原に問題を残すが、多くは側柱建物であり、その床面積が先の竪穴式住居跡に近いものは住居の可能性がある。時期については、上記の遺物を多量に包含する溝との間に重複関係がなく、意識してこれらの溝を避けている傾向が読み取れることから、その同時性を指摘できる。おそらくTK208型式以降TK47型式にかけての時期を中心とする古墳時代後半期に盛行期を求めるのが妥当であろう。これらの年代観に大きな誤りがなければ、今回確認した住居遺構は、古墳時代の中で住居形式を竪穴式から掘立柱平地式にスムーズに移行しているケースとなり、比較的早い段階で、後者のみで集落が構成される点は留意すべきである。

(伊賀高弘)

注1 『木津町史』史料篇I 木津町史編纂委員会 1984

注2 岩松 保「大島遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第87冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注3 現地調査および整理作業に参加していただいたのは以下の方々である(五十音順・敬称略)。
及川あや子・荻野富紗子・奥田久美子・木藤洋介・久米政代・小牧健太郎・鷺坂有吾・高木祐志・高田良太・竹村弘美・田中美恵子・長尾美恵子・長谷川透・藤木旬子・丸谷はま子・山本弥生・吉村美穂

注4 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』-近畿編II-木耳社) 1990

注5 杉井 健「甗形土器の基礎的研究」(『待兼山論叢』第28号 大阪大学文学部) 1994

注6 春成秀爾「絵画から記号へ-弥生時代における農耕儀礼の盛衰-」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館) 1992

版 图

図版第1 橋木林遺跡



(1)調査地遠景（東から）



(2)調査地遠景（西から）

図版第2 橋木林遺跡



(1)調査地東部（東から）



(2)調査地中央部（西から）



(3)調査地西部（東から）

(1)丘陵頂部付近（東から）



(2)S X01検出状況（南から）



(3)S X01須恵器埋納状況（東から）



図版第4 橋木林遺跡



(1) S X02 (東から)



(2) S X03 (西から)



(3) S D04 (北から)



(4) S D04断面 (南から)



(5) 調査地西端 (S X07周辺・東から)



(6) S K07完掘状況 (西から)



5



6



13



14



2



23



16



17



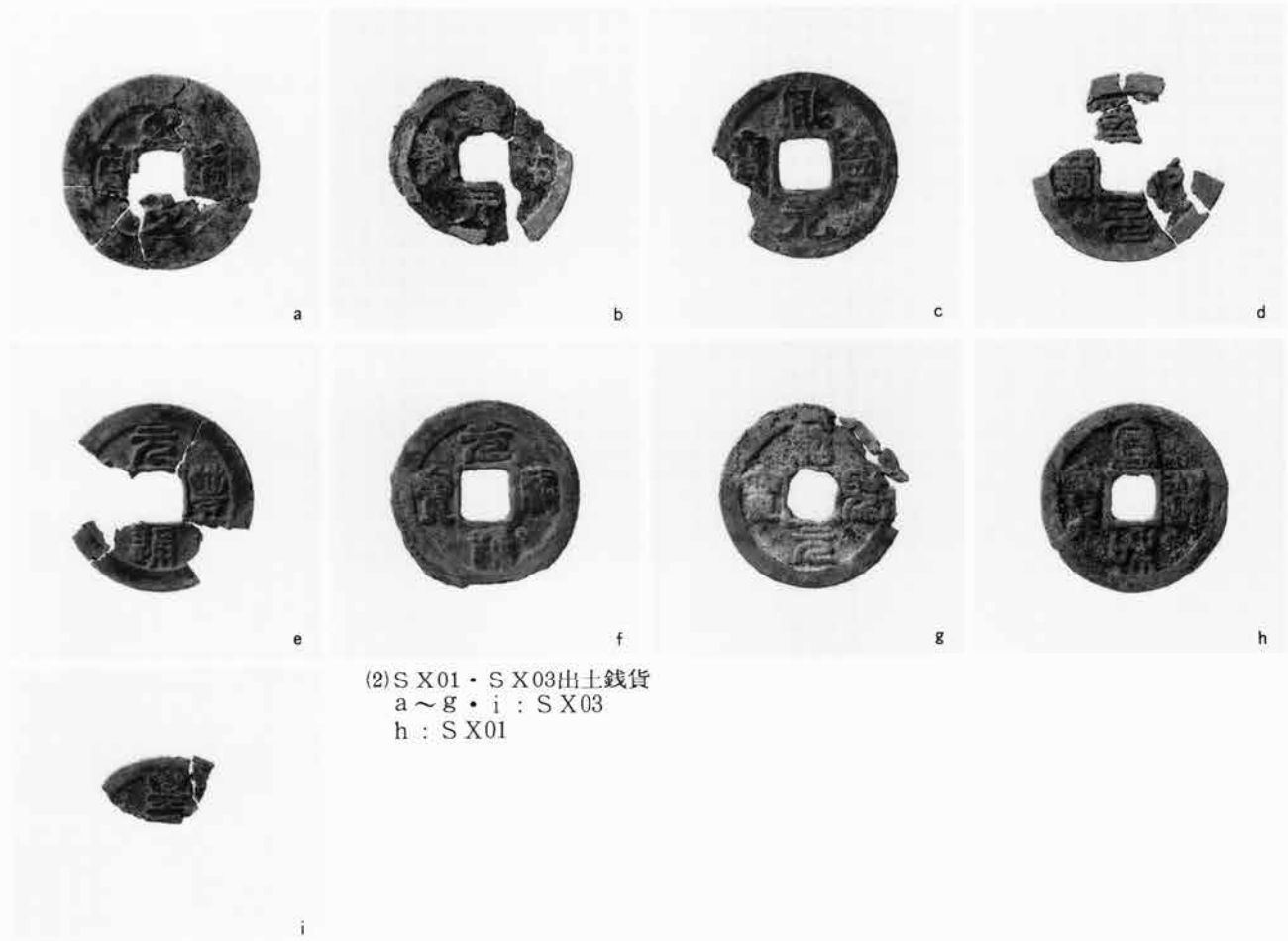
1



3



(1) S X01出土遺物



(2) S X01・S X03出土銭貨
a~g・i : S X03
h : S X01

図版第7 稲葉遺跡第6次



(1) 1区全景 (北北西から)



(2) 1区全景 (南南東から)



(3) 1区SD6全景 (南から)



(1) 1区SD 1 全景 (東から)



(2) 1区SD 1 北肩断面 (東から)



(3) 1区SK 9 全景 (南から)



(1) 2区全景（北北西から）



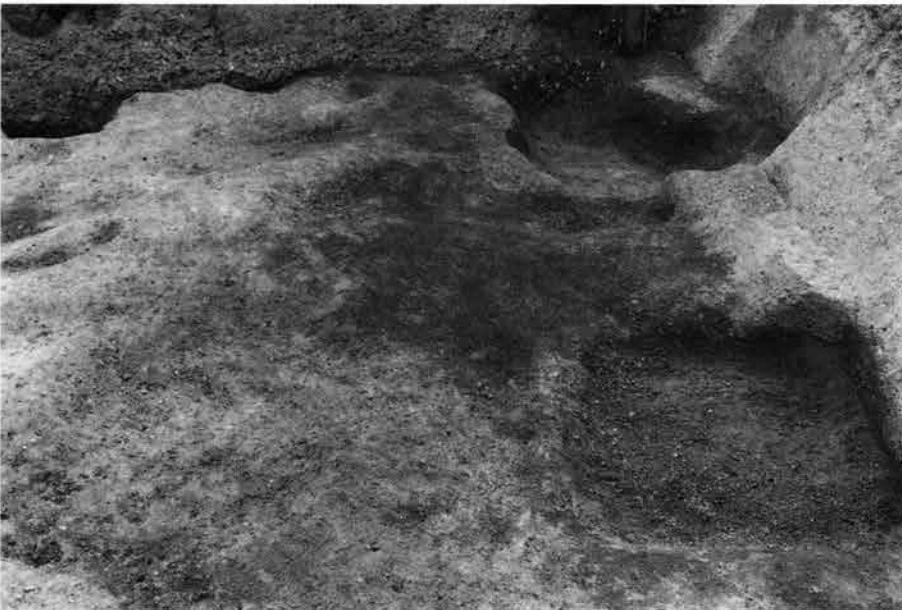
(2) 2区全景（南南東から）



(3) 2区北半部（南南東から）



(1) 3区全景（北北西から）



(2) 3区北部全景（東北東から）



(3) 3区土層堆積状況（北東から）



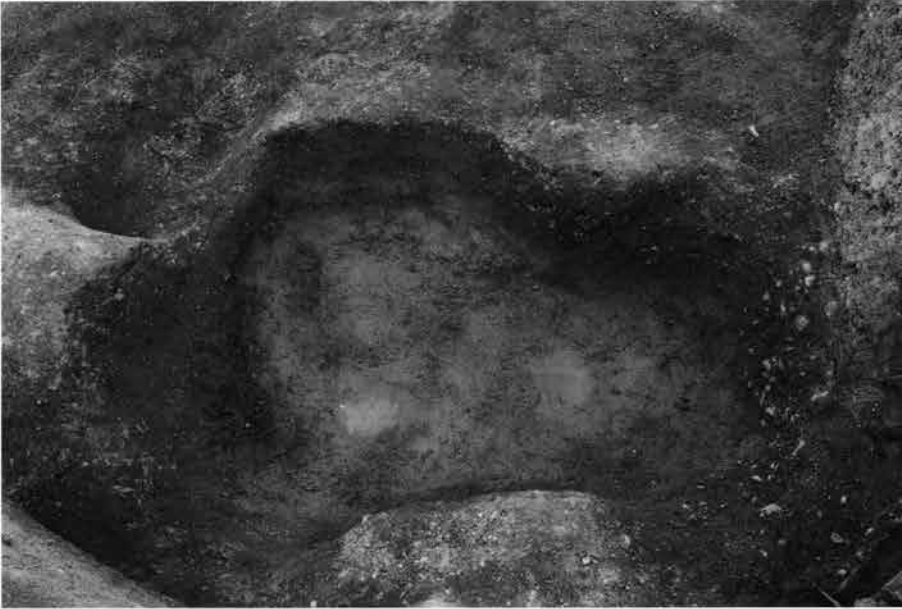
(1) 3区上層遺構全景 (北北西から)



(2) 3区S K12断面 (南西から)



(3) 3区S K12遺物出土状況
(東から)



(1) 3区SK12全景（北東から）



(2) 3区SD3 遺物出土状況
（北から）

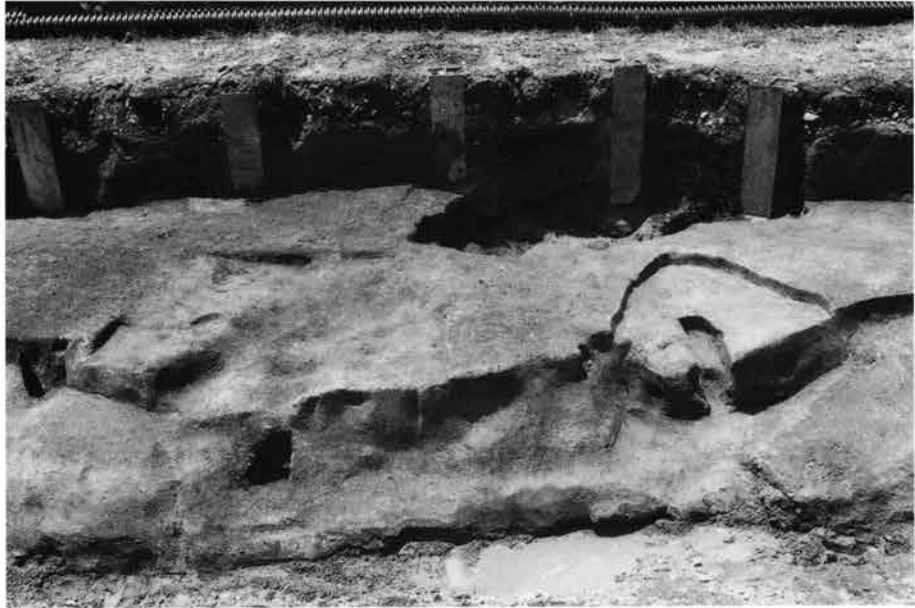


(3) 4区全景（北北西から）

(1) 4区北部全景 (東から)

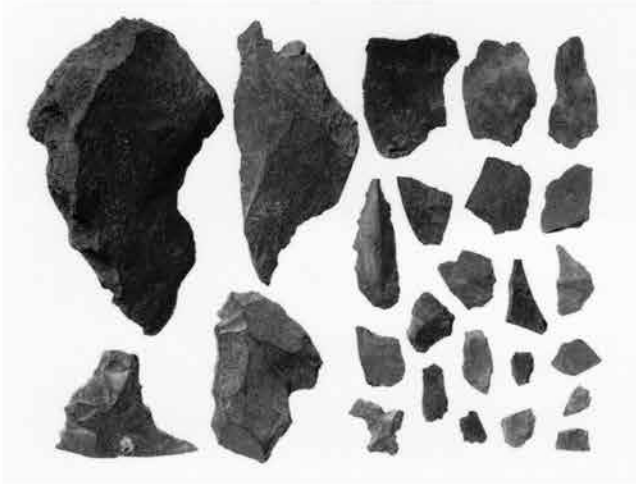
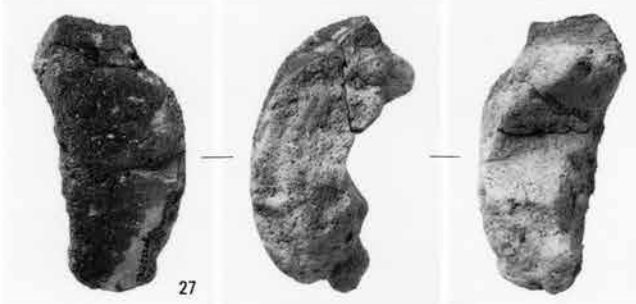
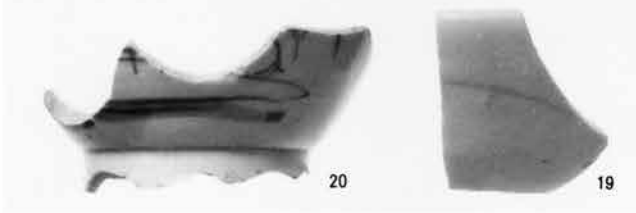
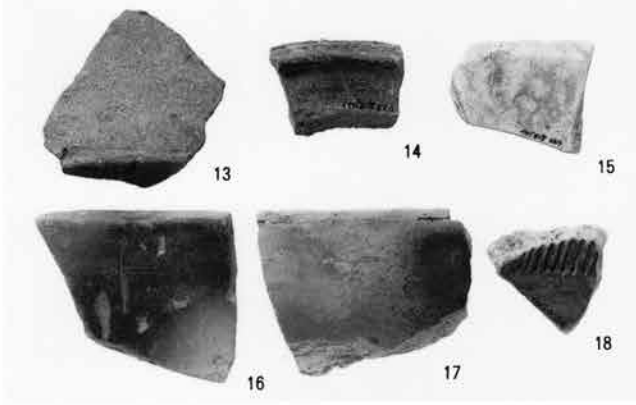
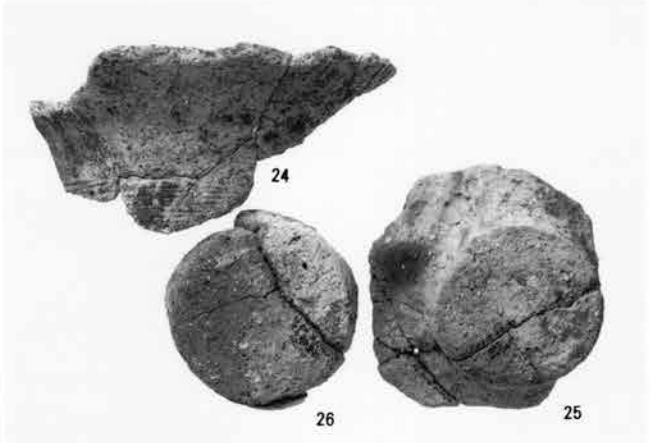
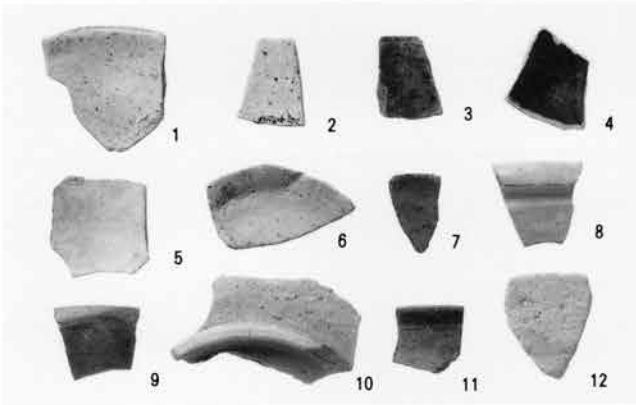


(2) 4区SK3・4・5全景
(東北東から)



(3) 4区SK5全景 (西南西から)







(1) A 3・B 2 地区遠景 (北から)



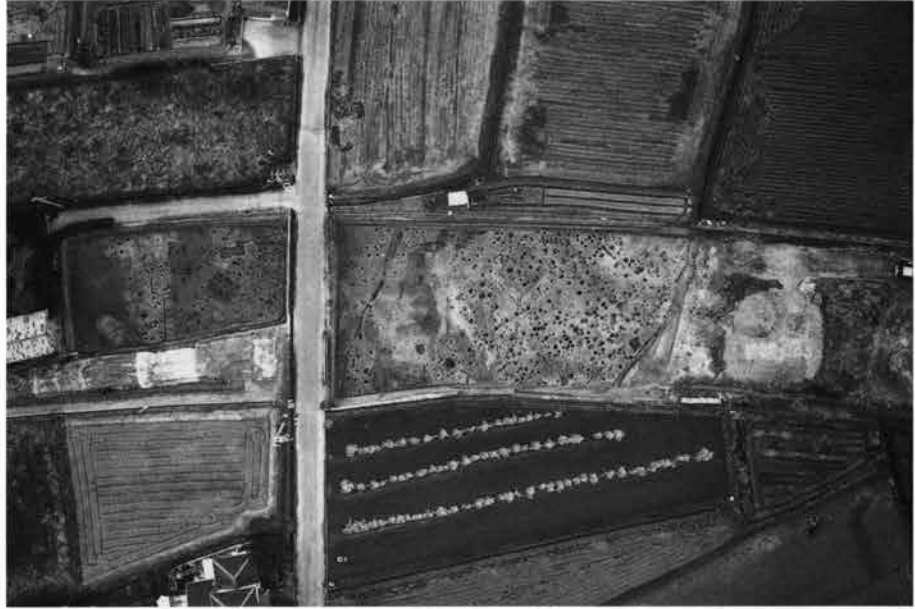
(2) A 3・B 2 地区遠景 (南から)



(1) A 3・B 2 地区遠景 (東から)



(2) B 2 地区全景 (右方が北)



(1) B 2 ・ A 3 地区全景 (右方が北)



(2) A 3 地区全景 (右方が北)



(3) A 3 地区全景 (北から)



(1)大壁住居跡143遠景(北から)



(2)大壁住居跡143南東面溝内柱穴検出状況(北東から)



(3)大壁住居跡143南東面溝内断面(北東から)

(1) A 3 地区掘立柱建物跡全景（北から）



(2) A 3 地区掘立柱建物跡全景（北から）



(3) A 3 地区掘立柱建物跡全景（北から）





(1) A 3 地区大壁住居跡585
竪穴式住居跡396検出状況
(南から)



(2) A 3 地区竪穴式住居跡396
北東辺拡張部検出状況
(南西から)



(3) A 3 地区竪穴式住居跡396
北東辺拡張部竈検出状況
(南西から)

(1) A 3 地区竪穴式住居跡396
北東辺拡張部竈検出状況
(南西から)



(2) A 3 地区竪穴式住居跡396
北東辺拡張部竈検出状況
(南西から)



(3) A 3 地区区画溝132以南遺構
検出状況(北西から)





(1) A 3 地区区画溝132完掘状況
(北西から)



(2) A 3 地区区画溝132
須恵器杯10出土状況
(北西から)



(3) A 3 地区方形周溝140
完掘状況 (北東から)

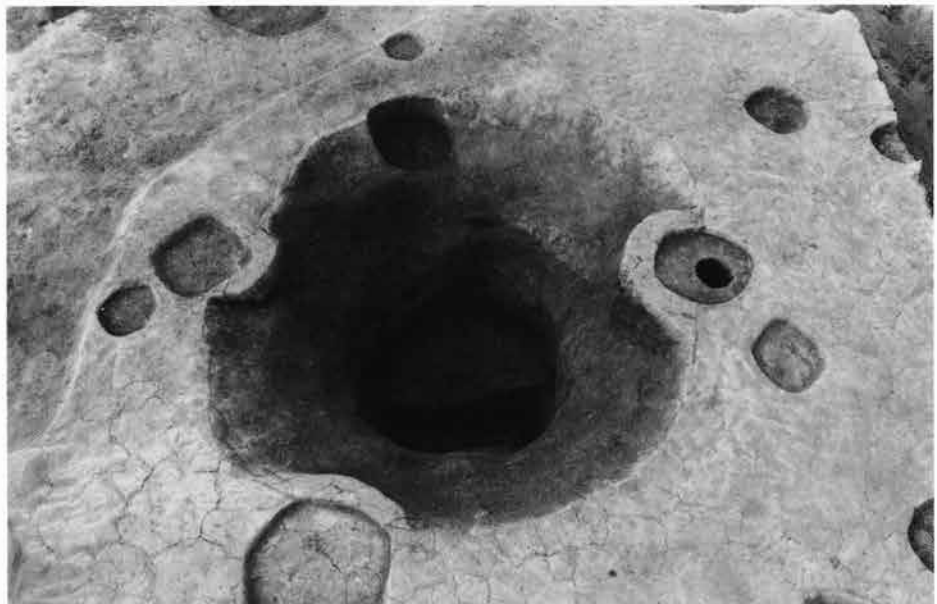
(1) A 3 地区土坑395
遺物出土状況 (東から)



(2) A 3 地区土坑395
遺物出土状況 (西から)

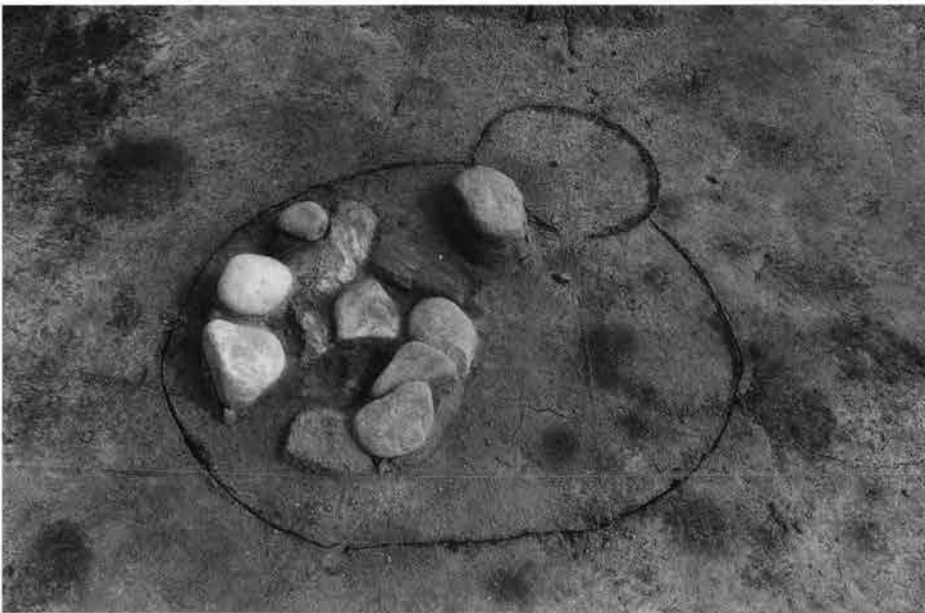


(3) A 3 地区井戸31完掘状況
(南から)

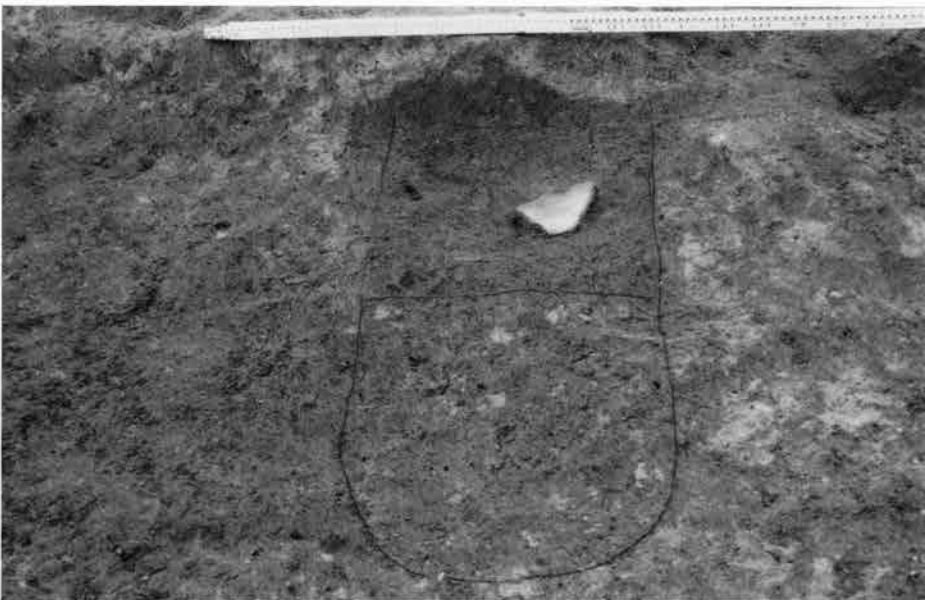




(1) A 3 地区古道側溝 7 土馬出土
状況 (南から)



(2) A 3 地区礫充填土坑11
(南から)



(3) A 3 地区方形木組土坑27
検出状況 (南東から)



(1) A 3 地区ピット63遺物
出土状況 (南から)



(2) A 3 地区柱穴23遺物
出土状況 (南から)



(3) A 3 地区池沼20遺物
出土状況 (俯瞰)



(1) B 1 地区全景 (東から)



(2) B 1 地区全景 (北から)

(1) B 2 地区全景 (北東から)

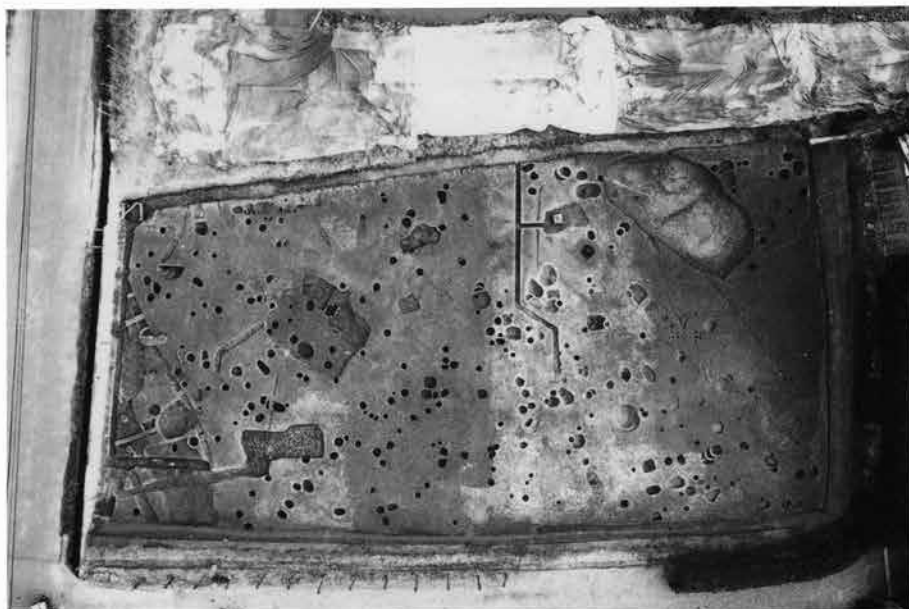


(2) B 2 地区北半全景 (東から)



(3) B 1 地区全景 (北から)





(1)B 1 地区全景 (左方が北)



(2)B 2 地区全景 (左方が北)



(3)B 3 地区全景 (北から)

(1) B 1 地区井戸 2 土層堆積状況
(南西から)



(2) B 3 地区 S X 389 土層堆積
状況 (南西から)



(3) B 3 地区北端部遺構検出状況
(北から)





(1) B 2 地区南壁古道側溝 7・543 検出状況 (北から)



(2) B 2 地区西壁土馬出土状況 (東から)



(3) B 2 地区土坑 285 遺物出土状況 (東から)



(1) B 3 地区掘立柱建物跡
全景 (南から)



(2) B 3 地区掘立柱建物跡
114~117検出状況 (北から)



(3) B 3 地区掘立柱建物跡114
検出状況 (南から)



(1)B 3 地区掘立柱建物跡114
検出状況（東から）



(2)B 3 地区掘立柱建物跡118
検出状況（北西から）



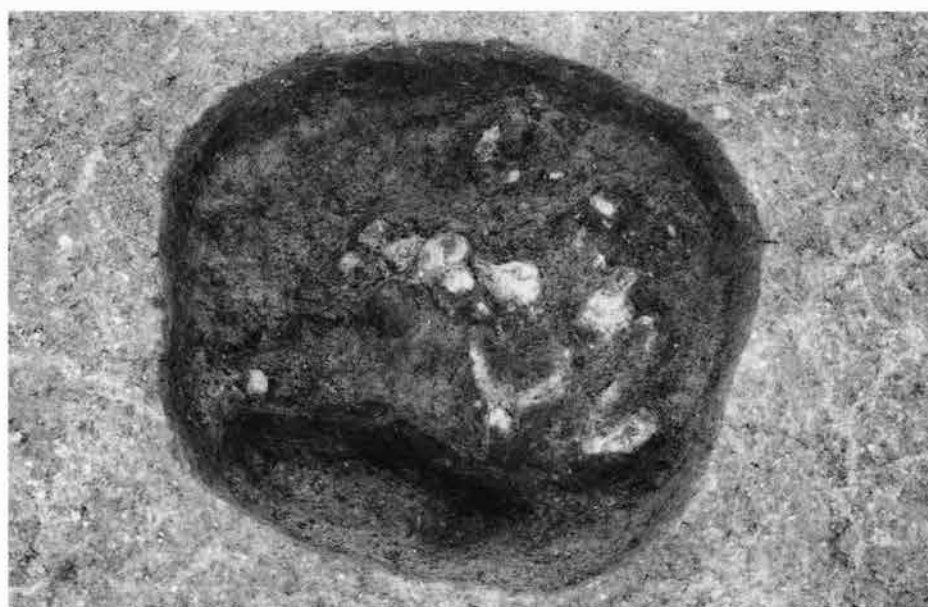
(3)B 3 地区掘立柱建物跡118
検出状況（西から）



(1) B 1 地区柱穴7 須恵器高杯
206出土状況 (下方が北)



(2) A 3 地区柱穴51柱根検出状況
(東から)



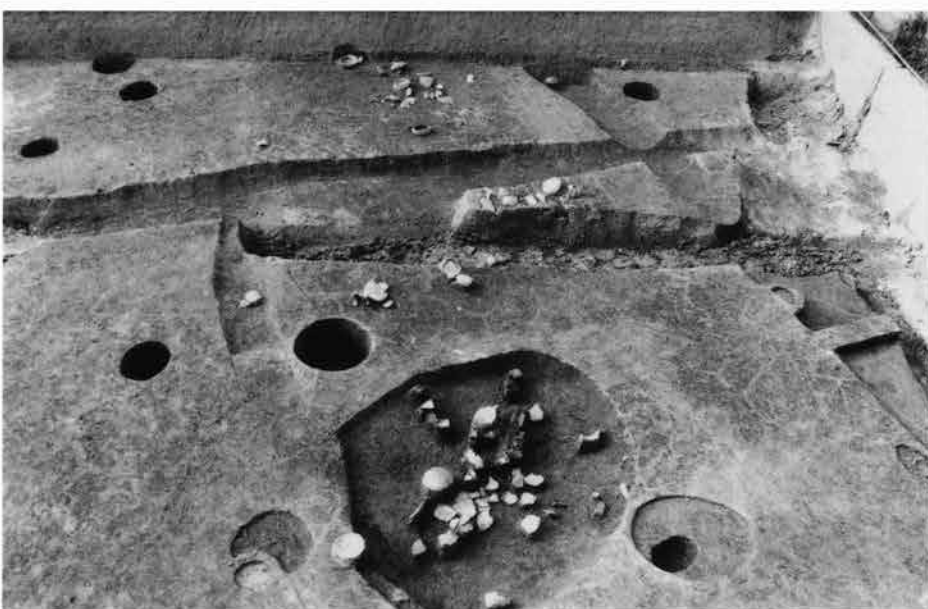
(3) B 2 地区焼土坑182検出状況
(北から)



(1) B 3 地区方形区画溝979土層
堆積状況（東から）

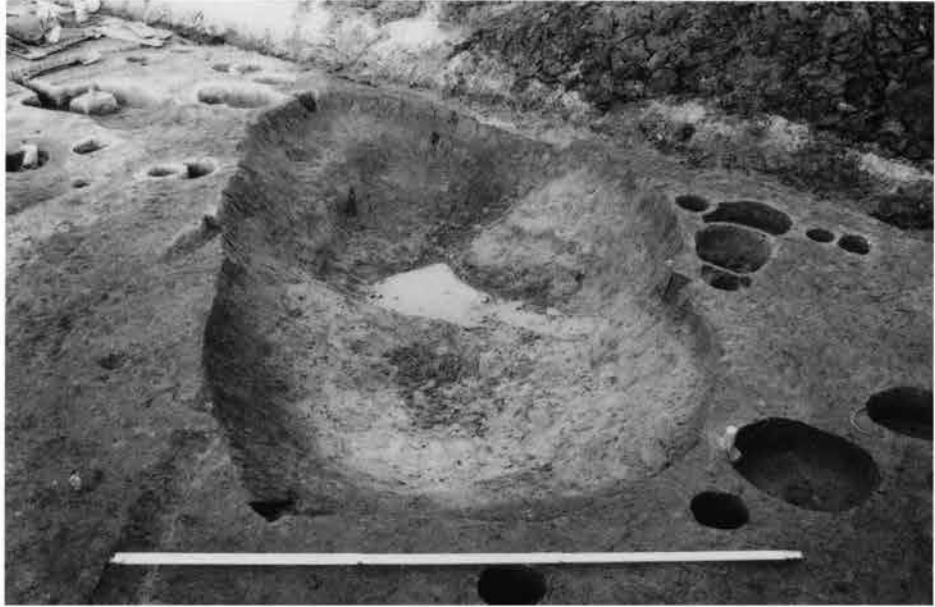


(2) B 3 地区方形区画溝979完掘
状況（東から）



(3) B 2 地区土坑222遺物出土
状況（東から）

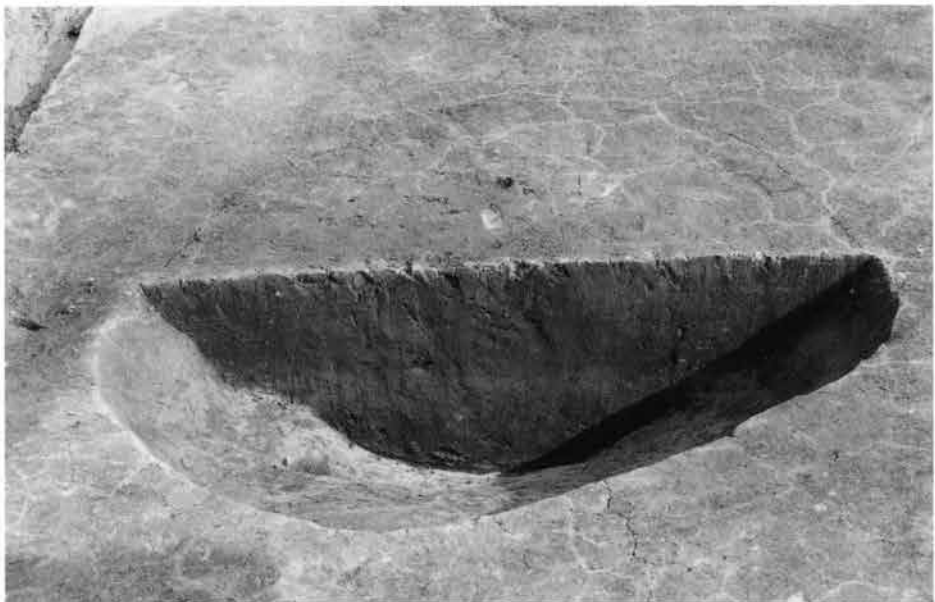
(1) B 2 地区貯木施設286完掘
状況（南西から）

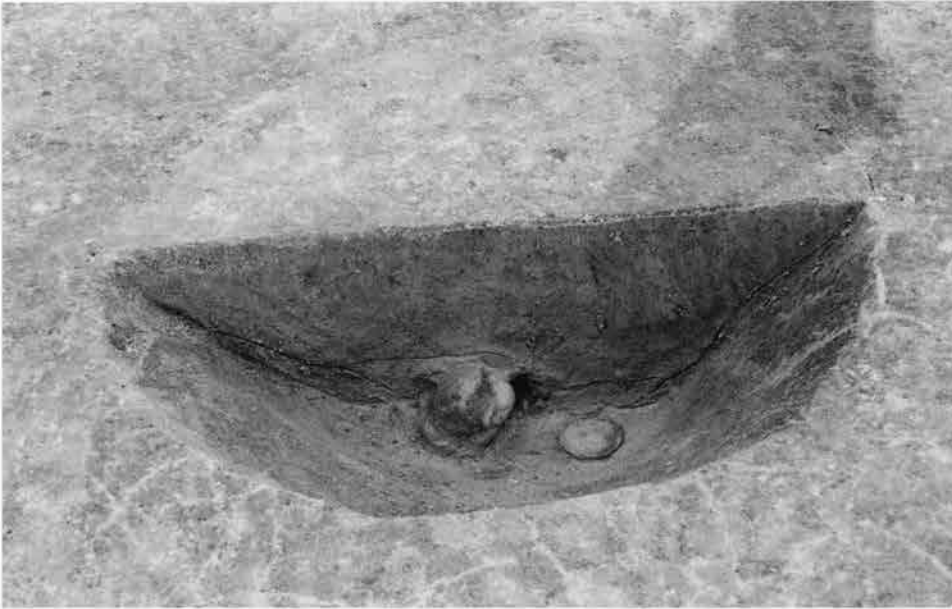


(2) B 2 地区貯木施設286完掘
状況（北西から）



(3) B 3 地区土坑362土層堆積
状況（北から）





(1) B 3 地区土坑361土層堆積
および遺物出土状況（東から）



(2) B 3 地区古道側溝363・481
完掘状況（東から）



(3) B 3 地区古道側溝363・481
完掘状況（東から）

(1) B 2 地区第4層上面石鏃出土
状況（俯瞰）



(2) B 2 地区土坑284遺物出土
状況（南西から）



(3) B 2 地区土坑389内偶蹄類目
足跡検出状況（俯瞰）





(1)第2次A1地区全景(上方が東)



(2)第2次A1地区遺構検出立体視画



(1)第3次A2地区遠景(東から)



(2)第3次A2地区全景(右方が北)



(1)第3次B 1-1・2地区全景(西から)



(2)第3次B 1-1・2地区全景(左方が北)



(1)第3次B 1-3地区全景(下方が北)



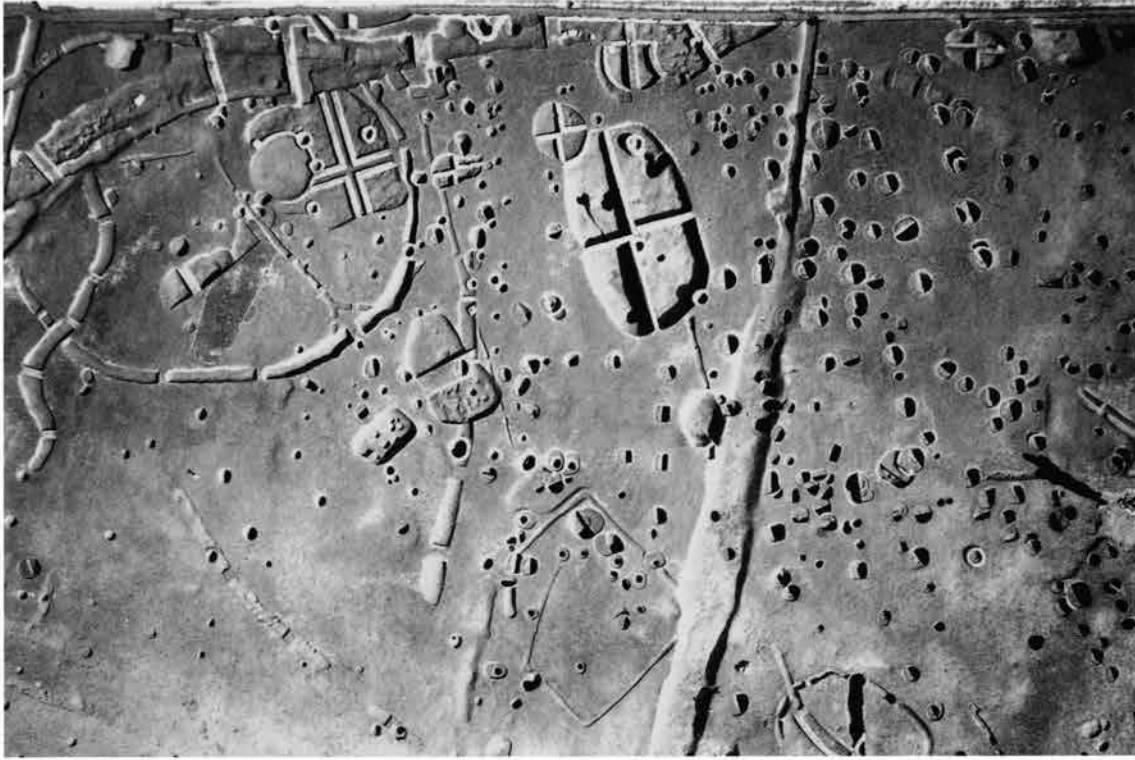
(2)第3次B 1-3地区区画溝878完掘状況(南西から)



(1)第3次B1-3・C地区遠景(南から)



(2)第3次C地区全景(右方が北)



(1)第3次C地区溝52・土坑79付近遺構検出状況(上方が東)



(2)第3次C地区流路4・5、溝52付近遺構検出状況(上方が東)



A・B・C地区合成写真（上方が北）



4



7



22



47



48



48



32



53



58



78



67



79



46



79



68



81



77



81



80



83



84



85



111



115



90



122



122



72



161



86



177



110



191



128



198



137



200



206



226



207



227



218



228



219



229



224



235



252



317



326



333



350



359



361



364



426



385



375



433



古道側溝 7



433



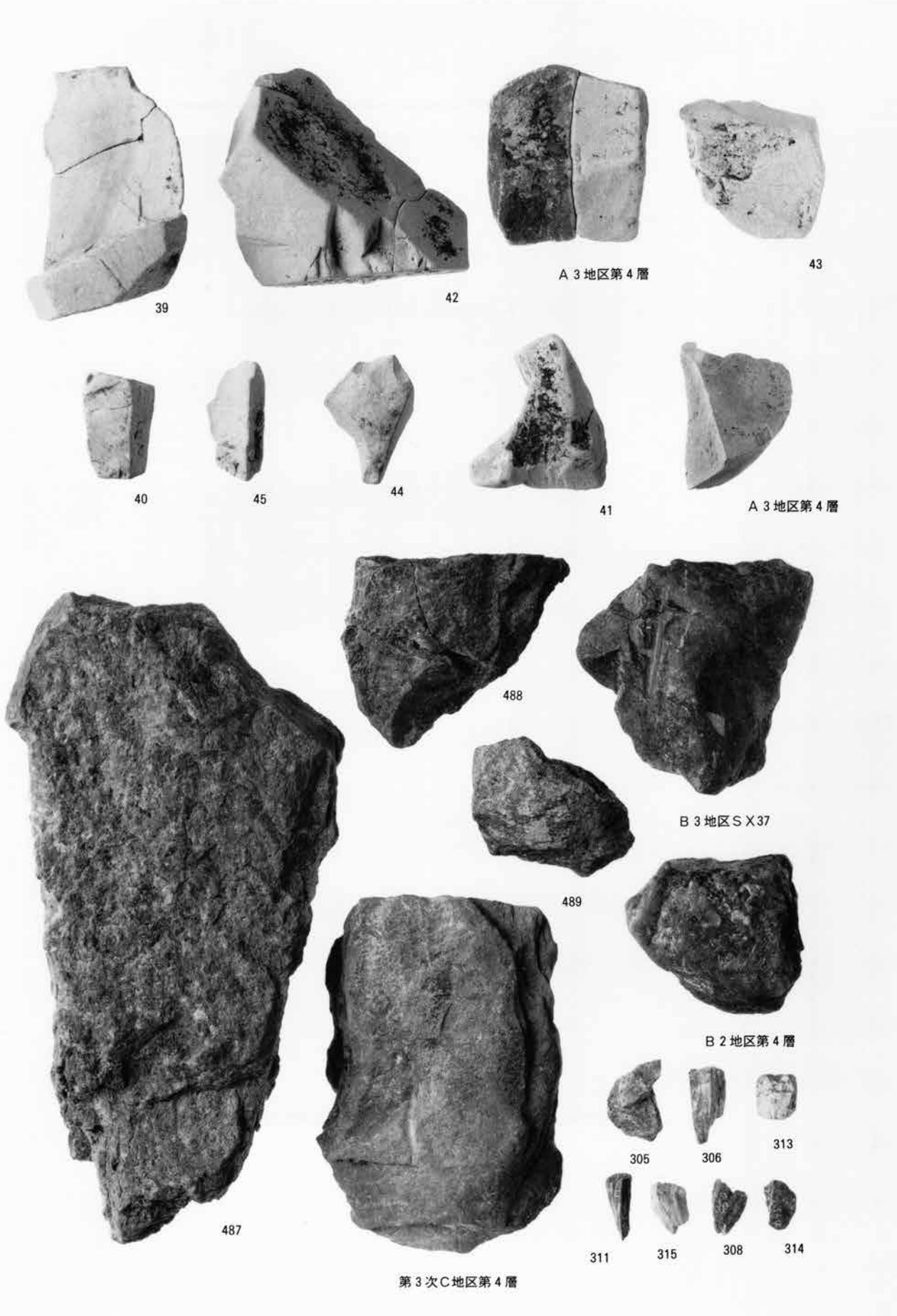
446



B 2 地区第 4 層



B 2 地区第 4 層





188



189



357



506



505



507



459



461



460



445

(1)調査トレンチ西半部(東から)



(2)調査トレンチ東半部(西から)



(3)S K15完掘状況(南から)





(1) S A01検出状況 (南東から)



(2) 下層遺構検出状況 (西から)



(3) 関係者説明会風景 (西から)

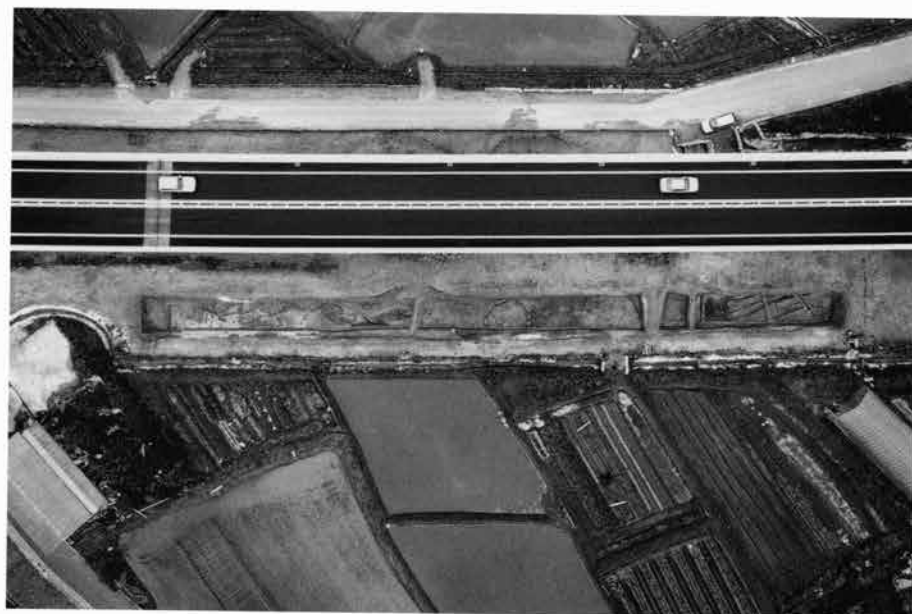
(1)調査地遠景（北東から）



(2)5次調査区全景（南東から）



(3)5次調査区全景（垂直写真、
上が北東）





(1) 5次調査区1区全景
(北西端拡張前、北西から)



(2) 5次調査区1区南東半部遺構
検出状況(南東から)

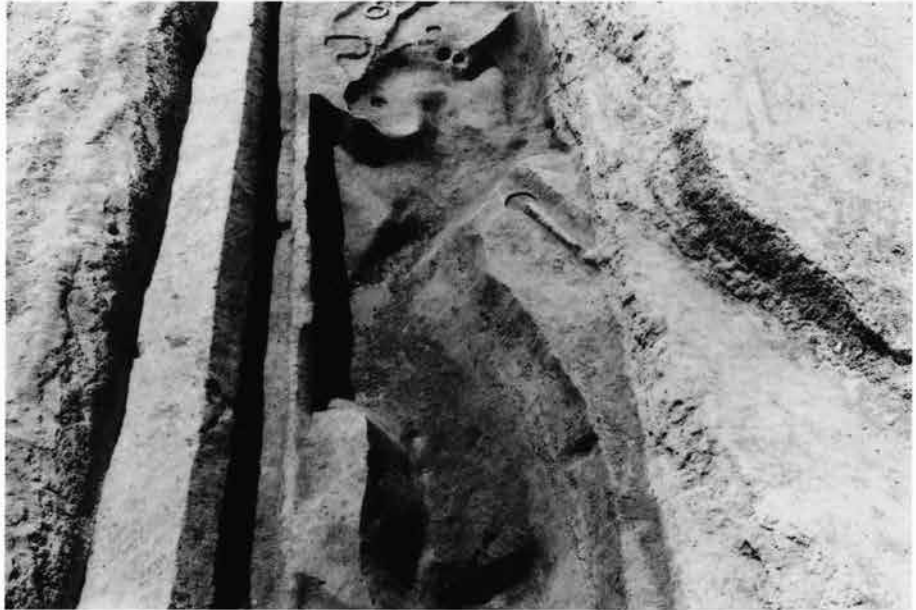


(3) 5次調査区2区全景(周溝墓北
東隅部拡張前、南東から)

(1) 5次調査区1区SD38・40
検出状況（北東から）

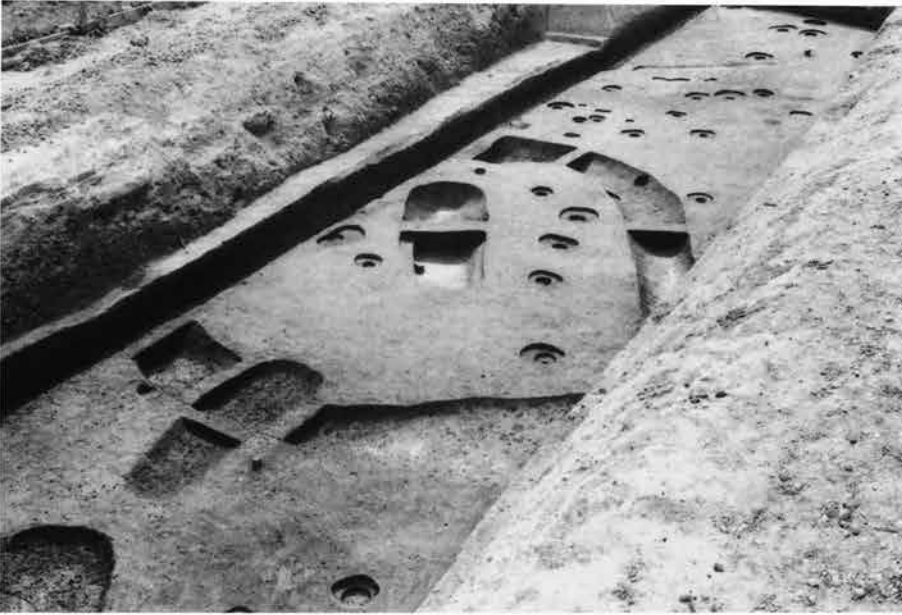


(2) 5次調査区1区SD81・SR
214検出状況（南東から）



(3) 5次調査区1区SD81遺物
出土状況（北東から）





(1) 5次調査区2区S X01 (方形周溝墓) 検出状況 (東から)



(2) 5次調査区4区全景 (上層遺構検出面、南東から)



(3) 5次調査区4区北西半部遺構検出状況 (南東から)

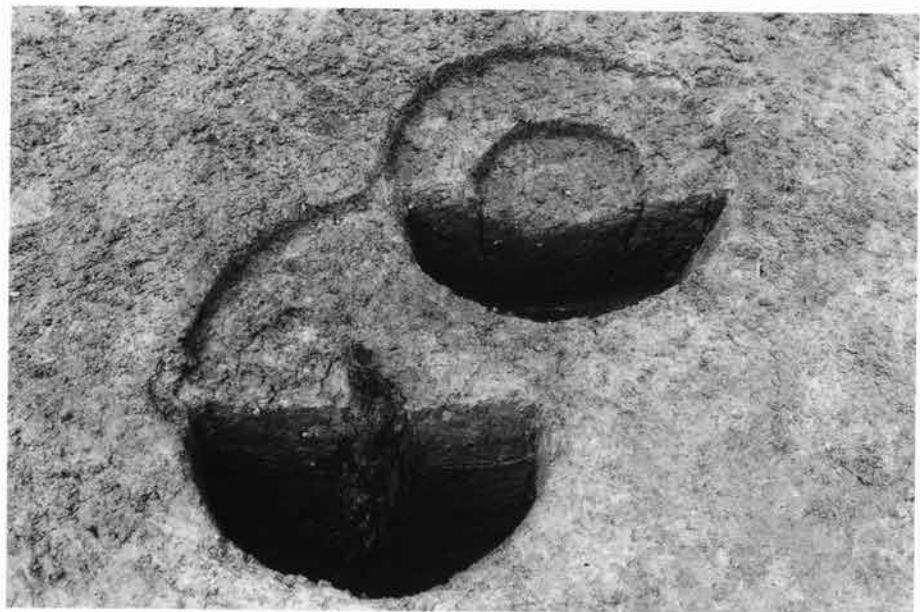
(1) 5次調査区4区S X211 (土器棺) 検出状況 (南から)



(2) 5次調査区4区S X211 (土器棺) 検出状況 (原位置を失う破片を取り除いた段階、南から)



(3) 5次調査区2区柱穴検出状況 (SB11北西隅柱、南東から)





22



30



29



34



38



35



36



39



4次調査出土遺物（番号は実測図番号と対応）



40



41



43



88



58



100



64



84



74



102



109



76



110



112



77



83



61

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第96冊							
編著者名	中島史子・森島康雄・小池 寛・村田和弘・伊賀高弘							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2001 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
はしきばやし いせき 橋木林遺跡	まいづるしおおざ たもんいんこあざは しきばやし 舞鶴市大字多聞院 小字橋木林	202		35° 32' 51"	135° 20' 13"	20000516 ～ 20000728	700	道路建設
いなばいせき だいろくじ 稲葉遺跡第 6次	きょうたなべしたな べくど 京田辺市田辺久戸	342	83	34° 49' 3"	135° 46' 17"	20000418 ～ 20000804	565	駅舎改築
もりがいと いせきだ いよん・ ごじ 森垣外遺跡 第4・5次	そうらくぐんせい かちょうおおざ みなみいなやづま こあざ もりがいと 相楽郡精華町大字 南稲八妻小字森垣 外	366	26	34° 45' 17"	135° 47' 21"	19990510 ～ 20000114 20000602 ～ 20000811	2,600	道路建設
おおは たいせ きだ いよん・ ごじ 大島遺跡第 4・5次	そうらくぐん きづち しょうさが なかきし まどう 相楽郡木津町相 楽岸間堂	362	36	34° 43' 22"	135° 48' 16"	20000124 ～ 20000307 20000427 ～ 20000629	600	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
橋木林遺跡	経塚	中世		経塚・土坑		須恵器・土師器・銭 貨・灯明皿		
稲葉遺跡第 6次	集落	弥生 中世 近世		土坑 溝		土器 瓦器 陶磁器・銭貨		
森垣外遺跡 第4・5次	集落	古墳 奈良		掘立柱建物跡・竪穴式住居跡 掘立柱建物跡		土師器・須恵器・製 塩土器		
大島遺跡第 4・5次	集落・墳墓	弥生 古墳		溝・土坑・流路 掘立柱建物跡		土器・石器 土師器・須恵器		

京都府遺跡調査概報 第96冊

平成13年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)